

る牛ヶ沢式の標識資料を出土した牛ヶ沢(3)遺跡が所在する。また、葦窪遺跡では県重宝に指定された狩獵文土器が出土している。弥生時代の遺跡は新井田川流域に多く、是川遺跡や樋館遺跡では前期の砂沢式期の遺構や遺物がまとまり、後続する前期後葉には牛ヶ沢(4)遺跡、風張(1)遺跡、弥次郎窪遺跡、田向冷水遺跡、田面木平(1)遺跡、八戸城跡など多くの遺跡で竪穴住居跡が調査されている。中期になると風張(1)遺跡で2軒の竪穴住居跡が調査されている程度で遺跡数は減少する。また、後期の土器は多くの遺跡で出土するが、根城跡や弥次郎窪遺跡で比較的まとまっている。中居林遺跡内の天満宮には、かつて根城南部氏の家臣であった中居林氏が江戸時代前期に遠野に移るまで当地を居城としていたという伝承を記した石碑が建立されている。根城南部氏に関わる城館は、新田川流域に新井田古館遺跡、館平遺跡、樋館遺跡などが知られている。

県道八戸環状線道路建設事業予定地内に所在する遺跡では、今回調査した3遺跡を挟み、東の田向遺跡、西の糠塚大開(2)遺跡の発掘調査が既に行われており、田向遺跡で縄文時代と古代の集落跡、糠塚大開(2)遺跡で縄文時代前期の集落跡が発見されている。このほか近隣では、長久保(1)遺跡と狐森遺跡で縄文時代中期の土器が出土しており、狐平遺跡で古代の竪穴住居跡が発見されている。

3 基本層序

長久保(2)遺跡、糠塚小沢遺跡及び中居林遺跡は、地質的には白銀平段丘とその開析地に立地するため概ね類似した堆積環境にある。遺物の取り上げ及び遺構確認の基準となる基本層序は、上位から順にローマ数字で番号を付け、3遺跡共通とした。各層が細分される場合は上位からアルファベットの小文字を付し、Ⅲ a、V bなどと表記した。場所によっては水性堆積などによる間層が存在する。先行する各遺跡の報告書とは、主に無遺物層について表記の違いがある。なお、各層に混入する火山灰については、第5章第2節に掲載した分析結果を基に記載している。

I層：表土層である黒色土又は黒褐色土。

II層：十和田b降下火山灰(To-b)を含む黒色土。

III層：中摺浮石(To-Cu)を含む黒色土または黒褐色土。土壤化が進行したⅢ a層と、その下位にある色調の明るいⅢ b層に分かれる。

IV層：中摺浮石層。旧地形の窪みには厚く堆積する。

V層：南部浮石(To-Nb)を含む黒褐色土。土壤化の進行したV a層と、その下位にある色調の明るいV b・V c層に分かれる。

VI層：八戸火山灰(To-H)の風成堆積を主とするローム質黄褐色土。ローム層またはロームと記した場合がある。

VII層：二ノ倉火山灰(To-N k)を含む黒褐色土。中居林遺跡で部分的に存在する。

VIII層：八戸火山灰層。(VIII a層：八戸火山灰VI層相当の軽石層。VIII b層：八戸火山灰V層相当の白色粘質土。VIII c層：八戸火山灰IV層相当の軽石層。VIII d層：八戸火山灰III層相当の粘質土。VIII e層：八戸火山灰II層相当の軽石層。VIII f層：八戸火山灰I層相当の粘質土。)

IX層：高館火山灰層。

以上を基本に、含有物など細かな堆積の違いは必要に応じて細別した。IV・VII層は旧地表の窪地に堆積したものと思われ、調査区全体には広がらない。各層の堆積状況は調査区内において一様ではない

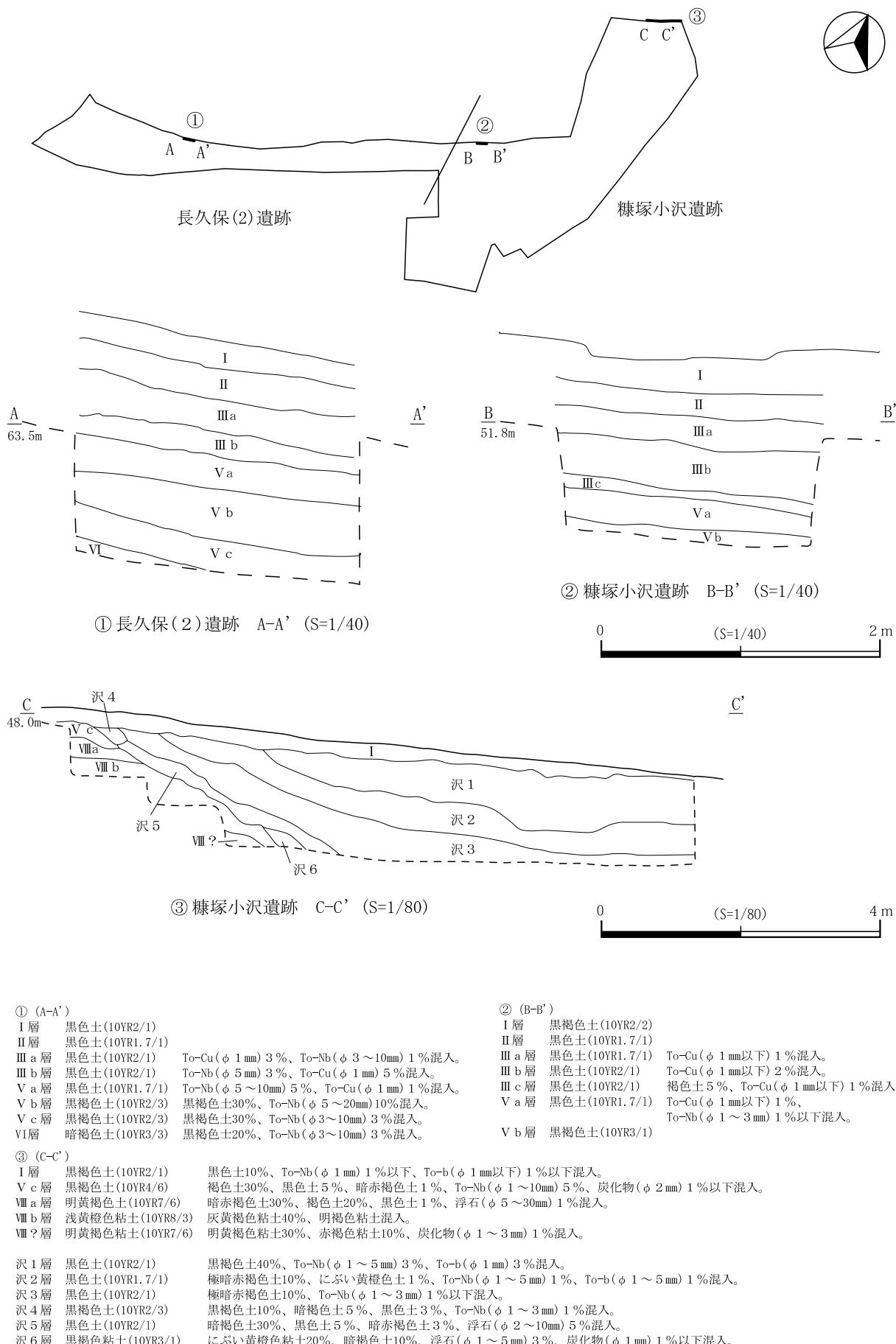


図4 長久保(2)遺跡・糠塚小沢遺跡基本層序

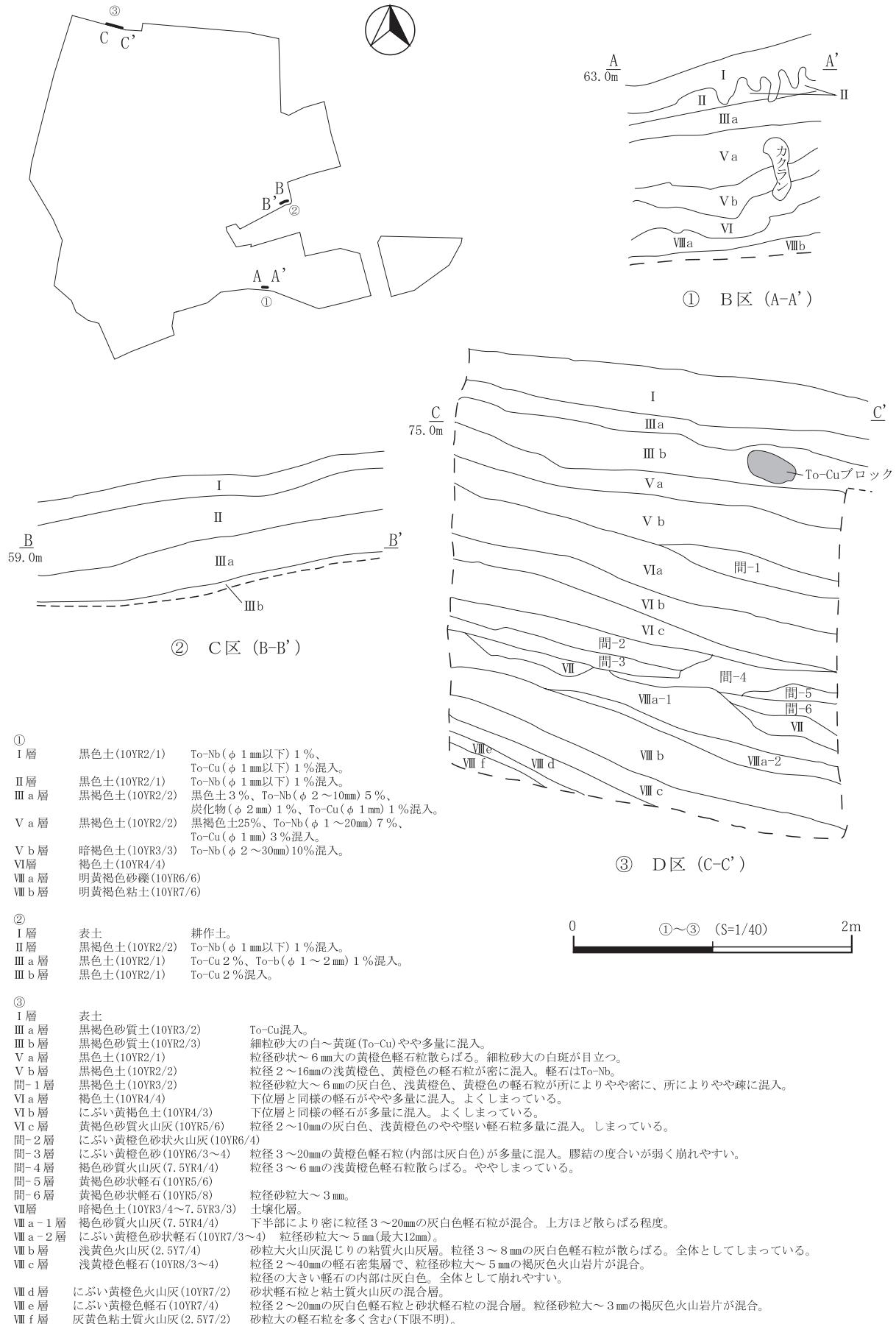


図5 中居林遺跡基本層序

く、層境の変化も漸移的な場合が多い。いずれの遺跡でもⅡ・Ⅲ層で各時期の遺物が混在して出土する傾向にある。

長久保(2)遺跡は、斜面中位の北壁で堆積状況を記録した（図4-①）。遺跡全体でⅣ層を欠くがⅠ～Ⅵ層までは整然とした堆積を示す。層厚はⅠ・Ⅱ・Ⅲa・Ⅲb・Ⅴc層が各20cm、Ⅲb層が35cm程である。遺物は縄文時代中期のものを主体にⅡ～Ⅲa層に含まれ、Ⅴ層以下では出土していない。斜面上部ではⅢ層の堆積が薄い。

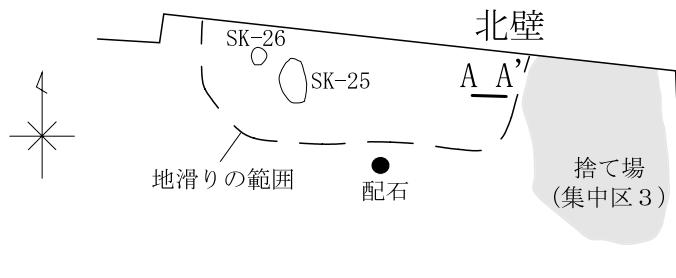
糠塚小沢遺跡は堅穴住居跡が検出された緩斜面地（図4-②）と沢地（③）の堆積状況を記録した。②でみるように北壁際では長久保(2)遺跡と同じくⅣ層を欠くものの、Ⅰ～Ⅴ層が整然とした堆積を示すのに対し、沢地及びそれに近い部分では③のように欠層が増え、表土直下でⅤ層が露出することが多い。層厚は場所によって異なり、遺構検出面も一定でない。③の沢1～6層は沢地に堆積したⅡ～Ⅲa相当層である。水性堆積であるため異なる土質・色調の土をラミナ状あるいはブロック状に含む。遺物量は沢3層で多く、沢5層までは縄文時代各期のものが混在するため集落が営まれた中期末葉は水が流れる沢で、その後黒色土が堆積するような環境になったと推定される。

中居林遺跡は、B区（図5-①）、C区（②）、D区（③）の堆積状況を記録した。B・C両区では10～30cmほどのⅡ層が認められ、同層がある範囲では弥生土器が多く出土している。Ⅲa・Ⅲb層も安定した堆積を示す。D区ではⅡ層を欠くが、Ⅲa・Ⅲb・Ⅴa・Ⅴb層は安定して堆積し、Ⅴa層で縄文時代早期の土器・石器が出土している。Ⅴb層以下では遺物は出土していない。なお、斜面及び窪地には部分的にⅣ・Ⅶ層の堆積が認められる。

4 地滑りの痕跡

中居林遺跡ではやや規模の大きな地滑りの痕跡が確認された（図6）。D区北壁付近の標高74～64mにかけて、中摺浮石層（基本層序第Ⅳ層）が長さ30m、幅10mの範囲で斜面下方に滑り落ち、最も厚い部分では1mほどの厚さに堆積している。同層中に認められる、厚さ1cm程の黒褐色土が滑走面と考えられ、その上下に中摺浮石があることから地滑りは同層内部発生したと考えられる。図6-③では中摺浮石の堆積が連続しない部分が少なくとも2箇所認められるため、その発生は複数回であった可能性もある。地滑りの発生年代は、第25・26号土坑が再堆積した中摺浮石層の下で検出されたことから、同遺構が営まれた縄文時代後期初頭以降に求められる。

また、第1・2・10・13・19・22・26号土坑は、八戸火山灰層の中で発生した地滑りの影響で掘方に歪みを生じている。中摺浮石・八戸火山灰両層中の地滑りが互いに関連しているかどうか、現段階では不明と言わざるを得ない。なお、中摺浮石中の地滑りは牛ヶ沢（3）遺跡で、八戸火山灰中の地滑りは本遺跡の第一次調査を初め多数の斜面に立地する遺跡で確認されており、その発生年代は概ね縄文時代後期から晩期の間と推定されている。(岡本)



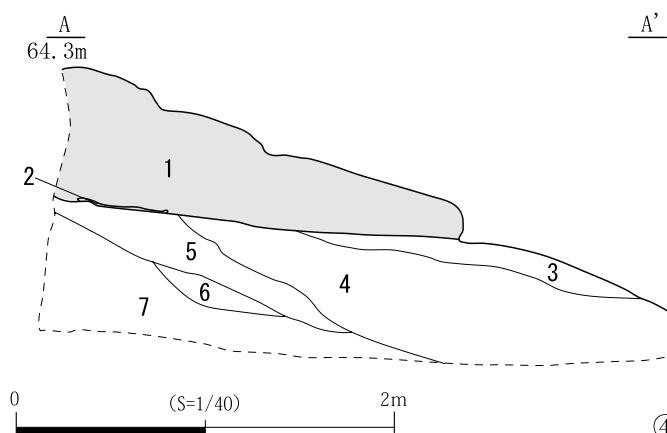
① 地滑り確認位置(中居林遺跡D区)



② 北壁の土層堆積状況



③ 同左 拡大



④ A-A'の土層堆積状況



⑤ A-A'の土層堆積状況写真

図6 地滑りの状況

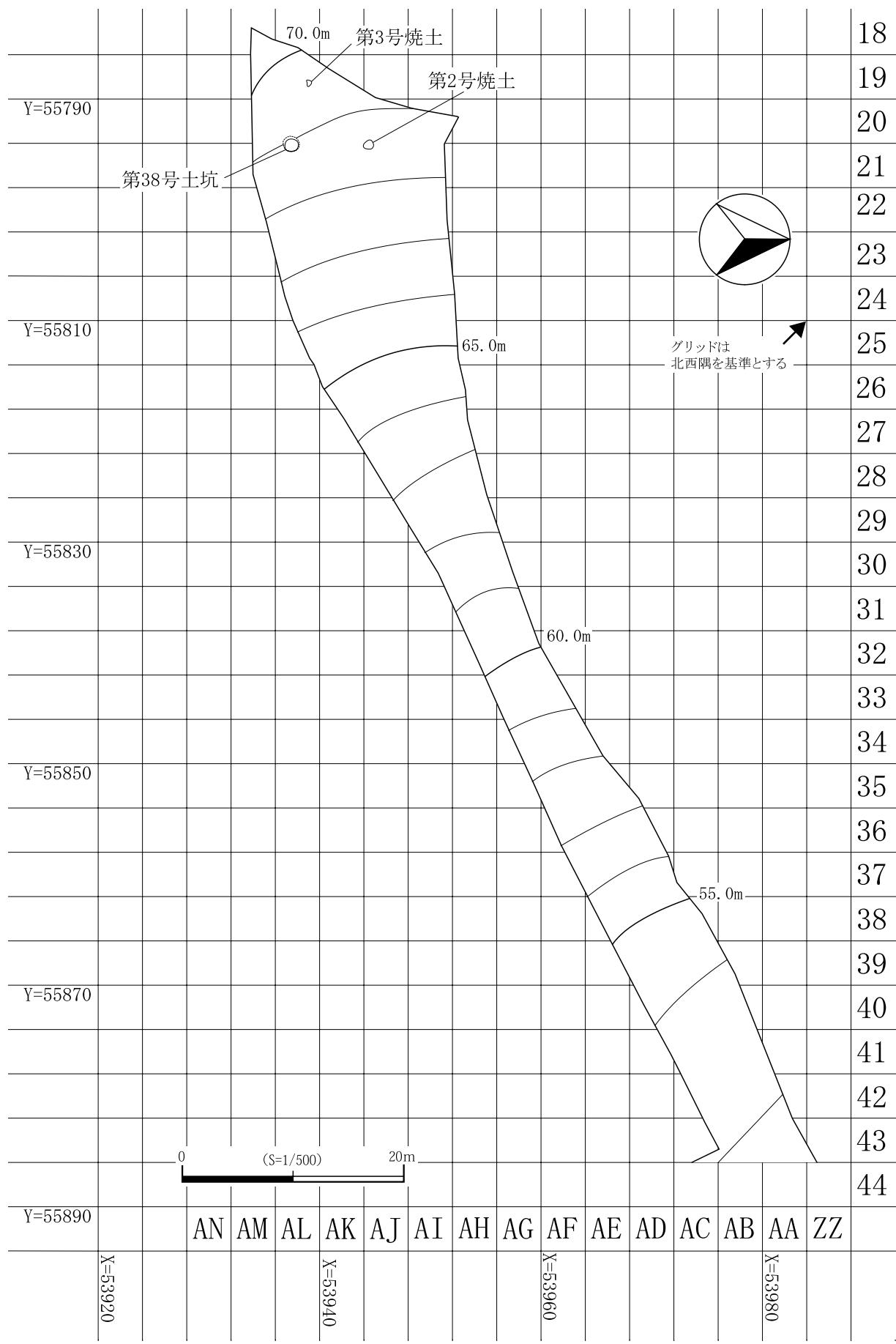


図7 長久保(2)遺跡遺構配置図

第2章 長久保(2)遺跡Ⅲ

第1節 既往の調査

平成14年度に行われた第一次調査では、竪穴住居跡4軒・フラスコ状土坑8基からなる縄文時代中期後半の集落が発見され、本遺跡の主体となる時期が明らかになった。このほか、縄文時代早期～前期初頭の落とし穴状遺構や、平安時代の可能性がある炭窯跡も検出されている。調査面積は4,040m²である（青森県教育委員会2004a）。

平成18年度の第二次調査では、縄文時代の竪穴住居跡2軒、土坑5基、落とし穴状遺構1基を新たに検出した。丘陵西斜面への中期集落の広がりと、早期～前期初頭における同区域の狩猟場としての使用が確認できた。調査面積は750m²である（青森県教育委員会2008）。

以上を受けて、平成19年度に1,000m²の発掘調査が実施された。

第2節 検出遺構と出土遺物

1 土坑

第38号土坑／旧表記：07長久保SK-11（図8）

[位置・確認] 東向きの緩斜面、AL-21グリッドに位置する。Ⅲ b層で確認した。**[規模・形状]** 開口部は1.15×1.25m、底面は1.35×1.5mでそれぞれ円形を呈する。確認面からの深さは1.35mを測る。底面に近い部分以外は、地滑りによって15cm程度斜面下方に移動している。**[堆積土]** 黒褐色または黒色土が15層に細分された。Ⅲ・V層を主体とするが、上位はレンズ状、下位は水平堆積を示し、壁際にはローム混じりの土が多く含まれる。開口部や壁面が崩落を繰り返し、自然埋没したものと考えられる。**[壁・底面]** 底面は八戸火山灰層中にあり、ほぼ平坦に作られる。壁は内傾して立ち上がった後、開口部付近で外傾するフラスコ状土坑である。壁面の立ち上がり途中にある段差は、八戸火山灰中の地滑りの痕跡である。**[出土遺物]** 縄文土器の小片が出土した。図8-1は底部から直線的に外反し、2が曲線的に外反して立ち上がる。1は無文で胴部は底部付近まで単節LRを縦回転に施文し、2は底部に一本越え一本潜りの網代痕があり、胴部下半は無文である。**[時期]** 縄文時代に属する。出土した土器や遺跡内のフラスコ状土坑の帰属年代から、本土坑も中期に属するものと考えられる。

2 焼土遺構

第2号焼土／旧表記：07長久保SN-2（図9）

[位置・確認] 東向きの緩斜面、AJ-13グリッドに位置する。Ⅲ b層で確認した。**[規模・形状]** 95×80cmの不整円形に焼土の範囲が広がる。**[堆積土]** 掘り込みは持たず、15cmの深さでⅢ b層が被熱したものとみられる。焼土の色調は明褐色である。**[出土遺物]** なし。**[時期]** 周辺で出土している土器から縄文時代に属する可能性はあるが、詳細は不明である。

第3号焼土／旧表記：07長久保SN-3（図9）

[位置・確認] 東向きの緩斜面、AL-19グリッドに位置する。V a層上面で確認した。焼土範囲外側で炭化物小片が出土している。**[規模・形状]** 60×40cmの不整形に焼土が広がる。**[堆積土]** 掘り込みは持たず、5～10cmの深さでV a層が被熱している。**[出土遺物]** なし。**[時期]** Ⅲ層の堆積が

第38号土坑

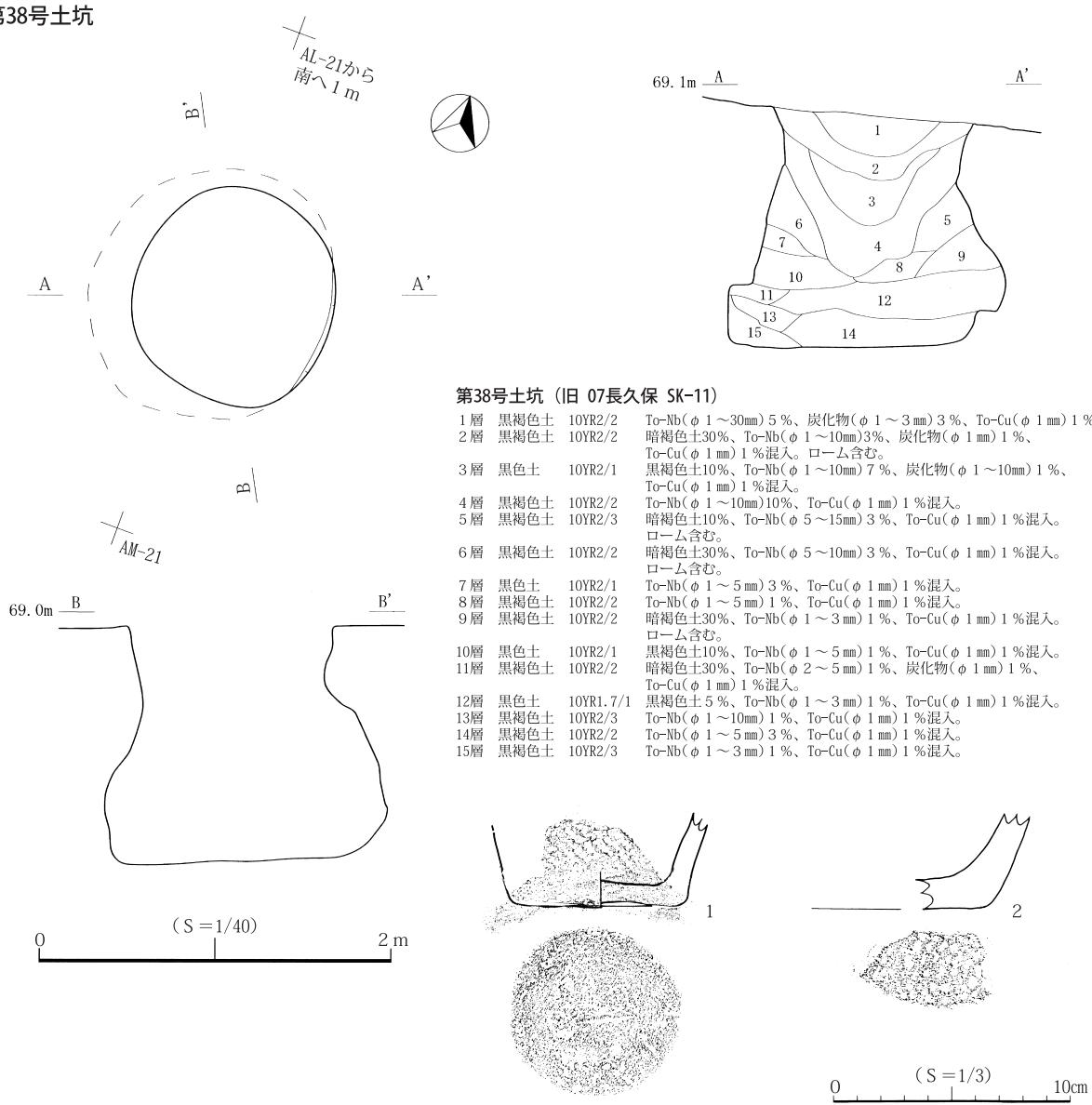


図8 土坑

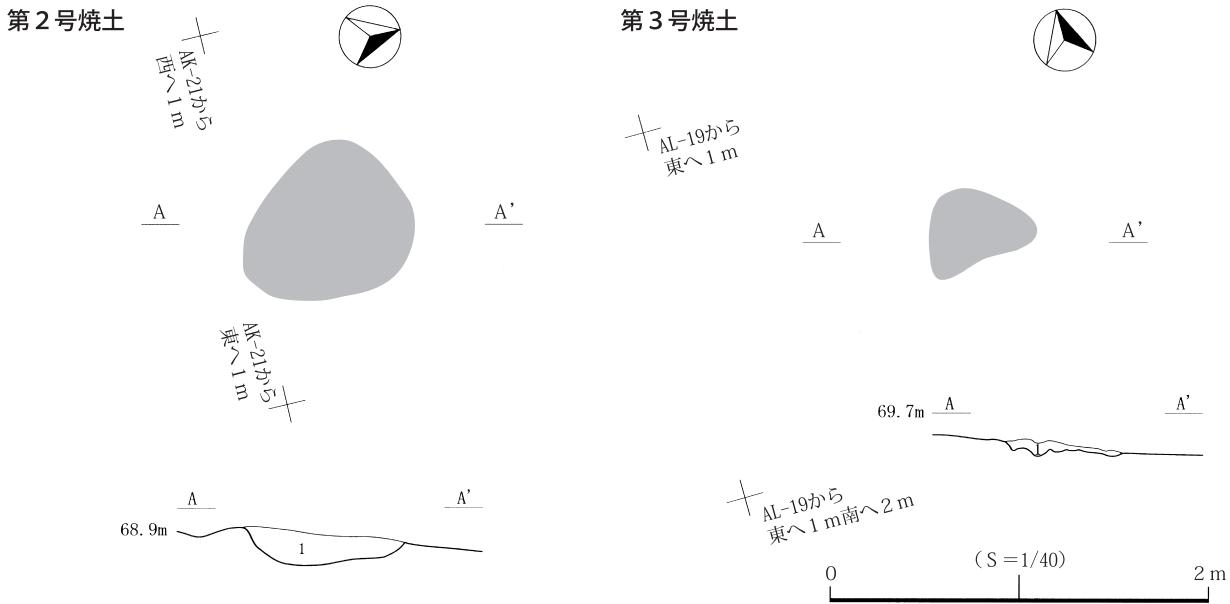
薄い場所であるため、時期は特定できない。周辺では縄文土器が出土している。

3 包含層出土遺物

遺物は平箱（59×36×16cm）で20箱である。重量計測は行っていない。

1) 土器（図10～16）

東西に伸びる調査区で東から西へ標高を上げる。出土遺物の多くが第一次調査で検出された遺物包含層の北に隣接する位置（29グリッドライン以西）での出土であり、調査区の西側で出土量が多い。遺物の時期は縄文時代前期から後期で、主体は中期中葉～末葉である。全体的に破片は大きめだが、摩耗した土器が目立ち、器形を復元できたものは少なく、復元に至らない土器が多い。掲載にあたり



第2号焼土 (旧 07長久保 SN-2)

1層 明褐色燒土 7.5YR5/8 褐色土3%、To-Nb(φ 3~10mm)3%、To-Cu(φ 1mm)1%混入。

第3号焼土 (旧 07長久保 SN-3)

1層 暗褐色土 10YR3/3 明褐色燒土40%、To-Nb(φ 1~5mm)3%、To-Cu(φ 1mm)1%混入。

図9 焼土遺構

対象とした遺物は、ある程度接合復元でき実測可能なものや、文様を持つもの、口縁部、底部と時期判断が期待できる遺物を中心に抽出し、時期別の出土量に見合った遺物を掲載するよう心がけ、時期ごとに提示した。特徴として、主体をなす中期中葉～末葉の土器は褐色から橙色の色調を呈し、胎土には海面骨針を含むものがある。

縄文時代中期の土器 (図10～図14-30)

中期前葉の土器 (円筒上層a式土器相当) (図10-1～6)

1～3は同一個体と思われ、1は口縁波頂部、2の口唇部は肥厚する。口縁部は外反し、口縁部文様帶は隆帶と3条の縄文原体の側面圧痕と馬蹄状の側面圧痕によるもので、隆帶上にも側面圧痕が施される。2の口唇部には波状の隆帶が付く。4・5は同一個体で、外反する口縁部の文様は隆帶と3条の側面圧痕によるもので、断面四角形の隆帶の上に縄文RLを回転施文する。6は肥厚した口縁波頂部で縦位に2本の隆帶が貼り付き、V字状になると思われる。

中期中葉の土器 (円筒上層d～e式土器相当) (図10-7～図12)

隆帶が施文される土器 (図10-7～図11-6・8～10) 7～9は口縁波頂部で7の口唇部は縄文圧痕が施文され、口縁部文様帶は縦位の沈線と横位に弧状の細い粘土紐が貼り付く。9～11は粘土紐の貼り付け後、縄文が施文される。9の貼り付けは波状口縁部のみで口縁部は地文のみで、10の口唇部は肥厚し縄文原体の側面圧痕が施され、11の口唇部も側面圧痕が施文される。12は口縁波頂部で内面まで粘土紐がめぐる。13も波状口縁で文様帶が広い。11～9は付加条縄文が横回転に施文され、ボタン状と縦位に波状の粘土紐が貼付される。いずれの土器も地文施文後に隆帶の貼り付け

がされる。

隆帯+沈線が施文される土器（図11-11・12~15、17~図12-2~7） 11・17は横位に沈線を施文後、縦位に波状の隆帯が施文される。13~15は同一個体で緩やかに外反する深鉢形土器で、口唇部には波状の隆帯が貼り付けられる。広く文様帶を持ち口縁部から胴部にかけてはしご状の隆帯が貼付される。2は口縁部が大きく外反し、隆帯は波状部のみで弧線文が重層する。3~7も波状口縁部である。

沈線が施文される土器（図11-7・16・図12-1・8~25） 図12-8は口縁波頂部で9~12は同一個体で、沈線は口縁部のみで縄文L Rが横回転施文されている。12は幾何学文の沈線が入る。13~16・19~25はいずれも口縁部で口唇部直下に横位に2~3本を単位とした沈線が入る。15の文様帶は口縁部のみで胴部までは及ばない。また口唇部が肥厚し14・18・19は口唇部に刻みが施される。

中期後葉の土器（榎木林式相当）（図13-1~3）

1は縦位の垂下沈線文と渦巻き文が施文され、2は沈線が曲線的で、3は沈線の中心に刺突が入る。

中期後葉～末葉の土器（図13-4～図14-30）（最花式・大木9式・大木10式相当）

連続刺突が施される土器（最花式相当）（図13-4・5・7~21） 5は折り返し状口縁部直下に横位に刺突が施され、○字状文の沈線が施文される。7の口縁部は広い無文帶があり、斜位と横位に刺突が入る。8・9も深鉢形土器で、胴部に最大径を持つ深鉢形の胴部上半～頸部にあたる。11・12は刺突と平行して沈線がめぐり、13・14は2重の刺突と沈線を持つ。21は04年度報告遺物62と同一個体である。波状口縁の深鉢で広く無文帶を有し、胴部に最大径を持つ。縦走縄文施文後、幅広で浅い○字状文の沈線と横位にS字状の沈線が施文される。刺突はやや右斜方向からの刺突である。

沈線を有する土器（最花式・大木9式・大木10式相当）（図13-6・15~20・図14-1~15）

6・15~20は2本～3本の懸垂文で、沈線間は擦り消ししているものもある。15には円形の沈線が入る。14-1~15は○字状または曲線的に沈線が施され、沈線内部ないし外部を擦り消すものがあり最花式相当すると思われる。1~3の口唇部形態は丸口唇で、9は櫛歯状の沈線を用い渦巻き状文を施文する。14・15の沈線内部には刺突文が施されている。この一群は大木9式・大木10式に相当すると思われる。

隆帯を有する土器（大木9式・大木10式相当）（図14-16~30） 17~19の口唇部形態は平口唇で、17・18は頸部が括れ、口縁部が外反する深鉢形あるいは鉢形土器と思われる。19の隆帯内は撲り糸1類（LRのR巻き）により施文されている。20~24は波状口縁部で20~22は同一個体で隆帯内に縄文RLを充填施文する。25~30は胴部片で隆帯の断面形は三角形状を呈する。

縄文時代後期前葉の土器（十腰内Ia式相当）（図14-31~34）

31・32は同一個体の深鉢形土器で底部は平底で頸部が括れる。平口縁で口唇部は面とりがなされ、縦横に弧状沈線文が施文されており、無文部はミガキ調整がなされている。33は浅鉢と思われ、口縁部波状部で外反する。波状部に沿った沈線と、円形・方形文系の沈線が施文される。34は頸部で、横位に沈線が施文され段を形成する。口縁部へは大きく外反すると思われる。

縄文時代中期～後期の土器（図15～図16）

図35-1~3は胴部が膨らむ。1は略完形の深鉢形土器で、底部はミガキ調整され、縄文R Lが

施文されている。2は口唇部が面取り調整されている。3は口縁部に段を持つ浅鉢形土器である。4と5は同一個体の壺形土器で球胴形を呈し、横位に結束2種により施文される。4は把手の一部が残る。6～図16-2は口縁部に段を持つ折り返し口縁で、16-3は口縁部に貼り付け文を持つ。4～8は口縁部片で9～14は胴部片、15～25は底部片で、底部にはほぼ直立し、外反するもの（15・16・19・20）と曲線的に外反するもの（17・21・22・24）が存在する。19・23は笹葉痕、24は網代痕があり、18・25は上げ底である。

2) 石器

剥片石器（図17）

石鏸（未製品含む）（図17-1～4）①鏸にふさわしい尖頭部と柄部など細部調整がなされているもの。②側縁全周に細部調整が加えられ正面形が整えられているもの。③側面からみて身部の軸が直線的なもの（反りがないもの）。①～③すべてがあてはまるものを石鏸とし、1つでもあてはまらないものを未製品とし、計4点出土した。1～3は有茎で1は菱形状、2はやや棒状で3は凸基有茎鏸である。
両極石器（図17-5・6）両極剥離痕のあるものとし、2点出土した。5・6とも二辺一対の刃部と両極剥離痕を持つもので、5は横長剥片素材を使用している。

不定形石器（Rフレーク）（図17-7・8）各種製品にはあてはまらないもので、連続した押圧剥離により刃部形成がなされているものとする。18点出土し2点掲載した。8は尖頭の削器である。

礫石器（図17）

磨製石斧（図17-9～13）刃部と柄部を持つ斧状の形態をなし、研磨により作り出されたもの。7点出土し、5点掲載した。完形のものは9のみである。基部の形態は12がやや丸みを持ち、9と13は尖るもの、平らな面を持つ。刃部の形態は、11が丸みを持ち、9と10はやや扁平である。

磨石類（図17-14～16）磨痕・敲痕・凹痕があるので、片手で持つことが可能なものとし、一個体に複数の使用痕跡が見られることから磨石類としてまとめた（使用目的が一様ではないため）。4点出土し実測可能な3点掲載した。14～16はいずれも磨り痕のみで、14は側縁部四面すべてを使用する。15は二面、16は一面が使用される。

石冠（図17-17）1点出土した。敲痕が縁辺部を全周するもので、磨り面一面からなる。いわゆる北海道式石冠である。

砥石（図17-18・19）作業面に研磨面の形成がなされ、直線的な線状痕があるものとし、2点出土した。18は線状の凹みがあり、砂岩を使用している。19は側縁部も使用されており、時期は近世以降と思われる。

3) 土製品 1点出土した。灰黄褐色を呈し粘土紐状のものである。図化は行っていない。

4) 陶磁器・錢貸ほか

陶磁器 AD-36・37グリッドを中心に44点出土しているが、遺構に伴うものはない。写真図版52に一部を掲載した。1は二重網目文が施された肥前産の染付磁器碗、2は同じく輪花皿でともに17世紀後半の製品である。3は灰釉が施された端反りの陶器碗で、内外面に貫入が顕著にみられる。4

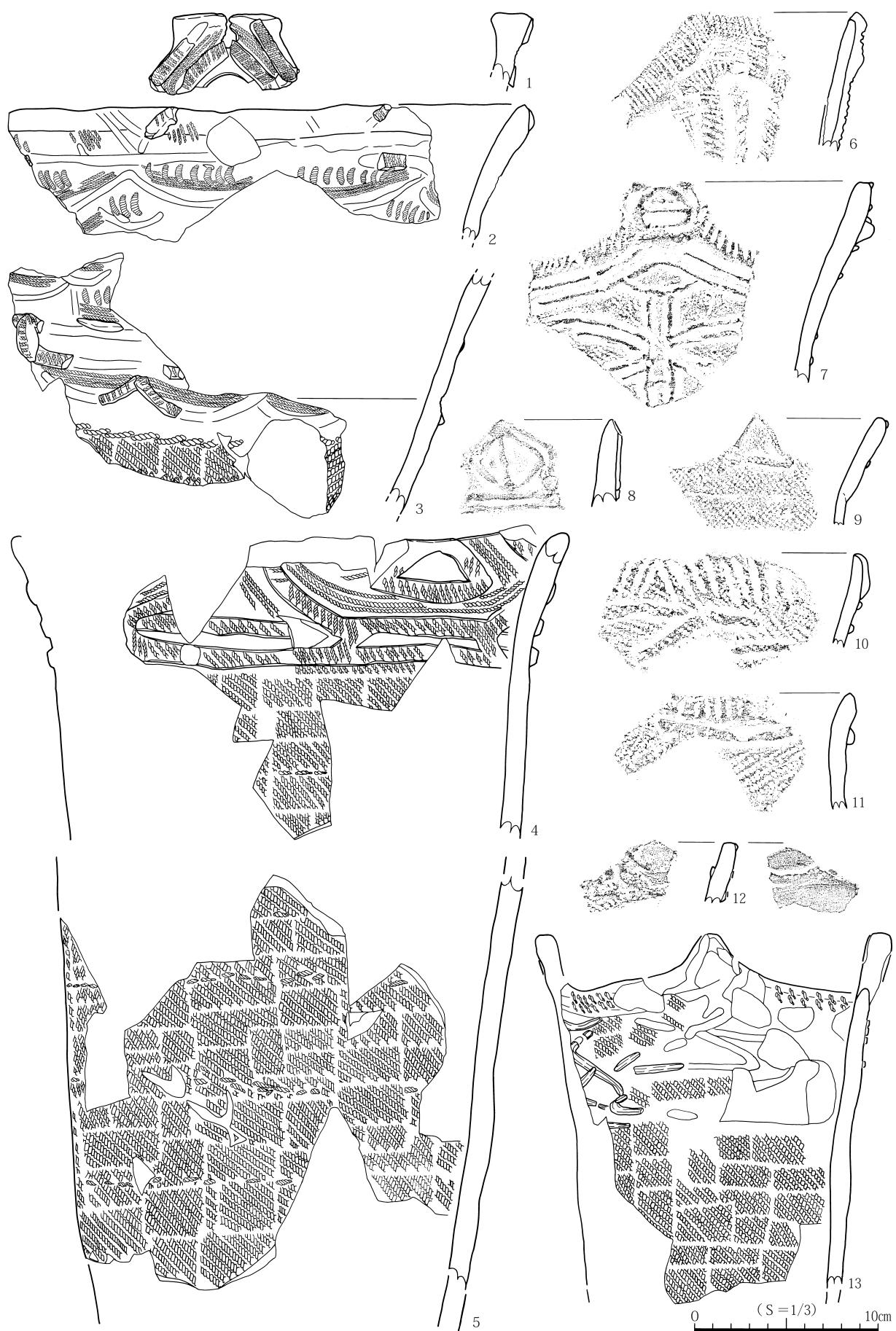


図10 包含層出土土器①

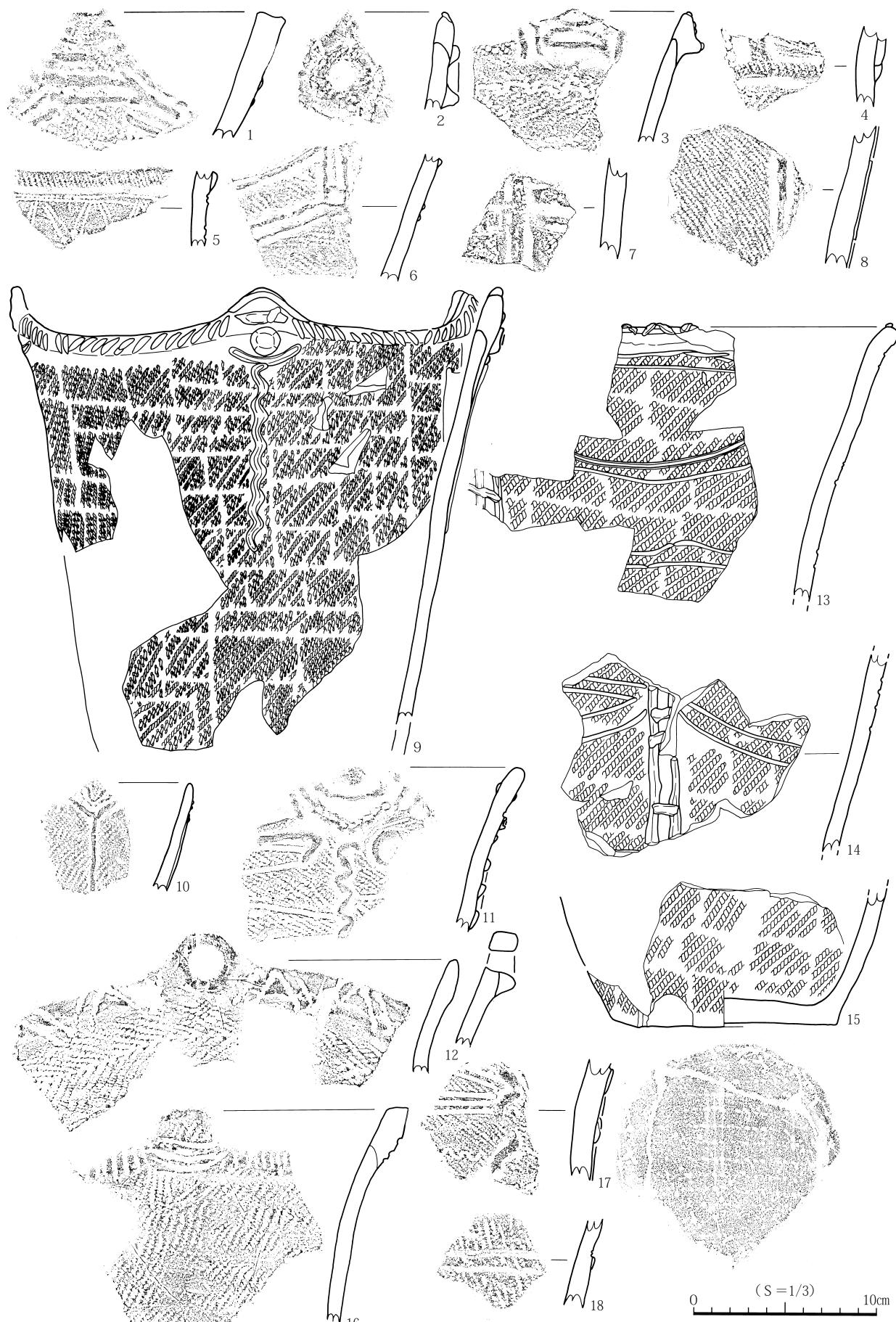


図11 包含層出土土器②



図12 包含層出土土器③

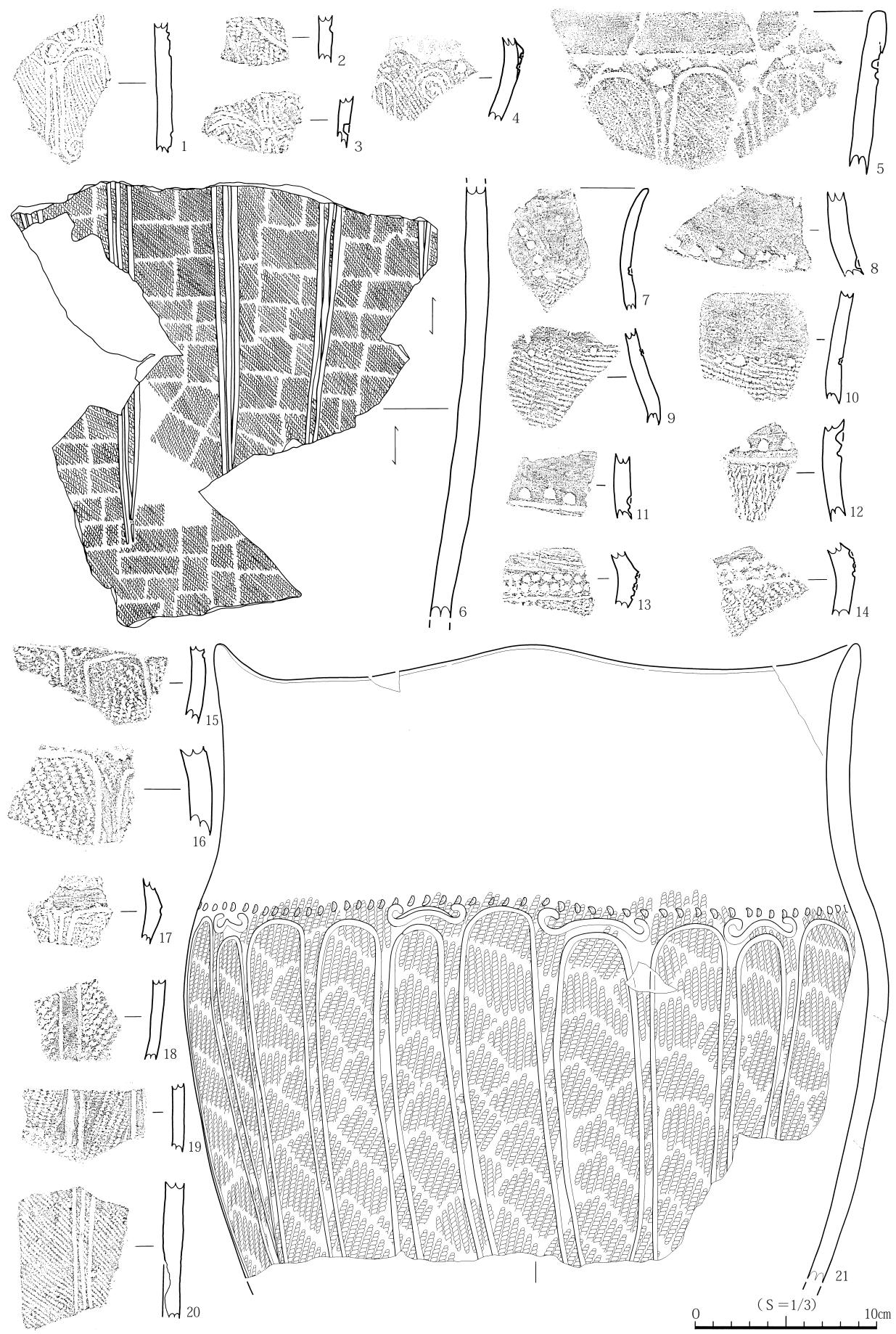


図13 包含層出土土器④

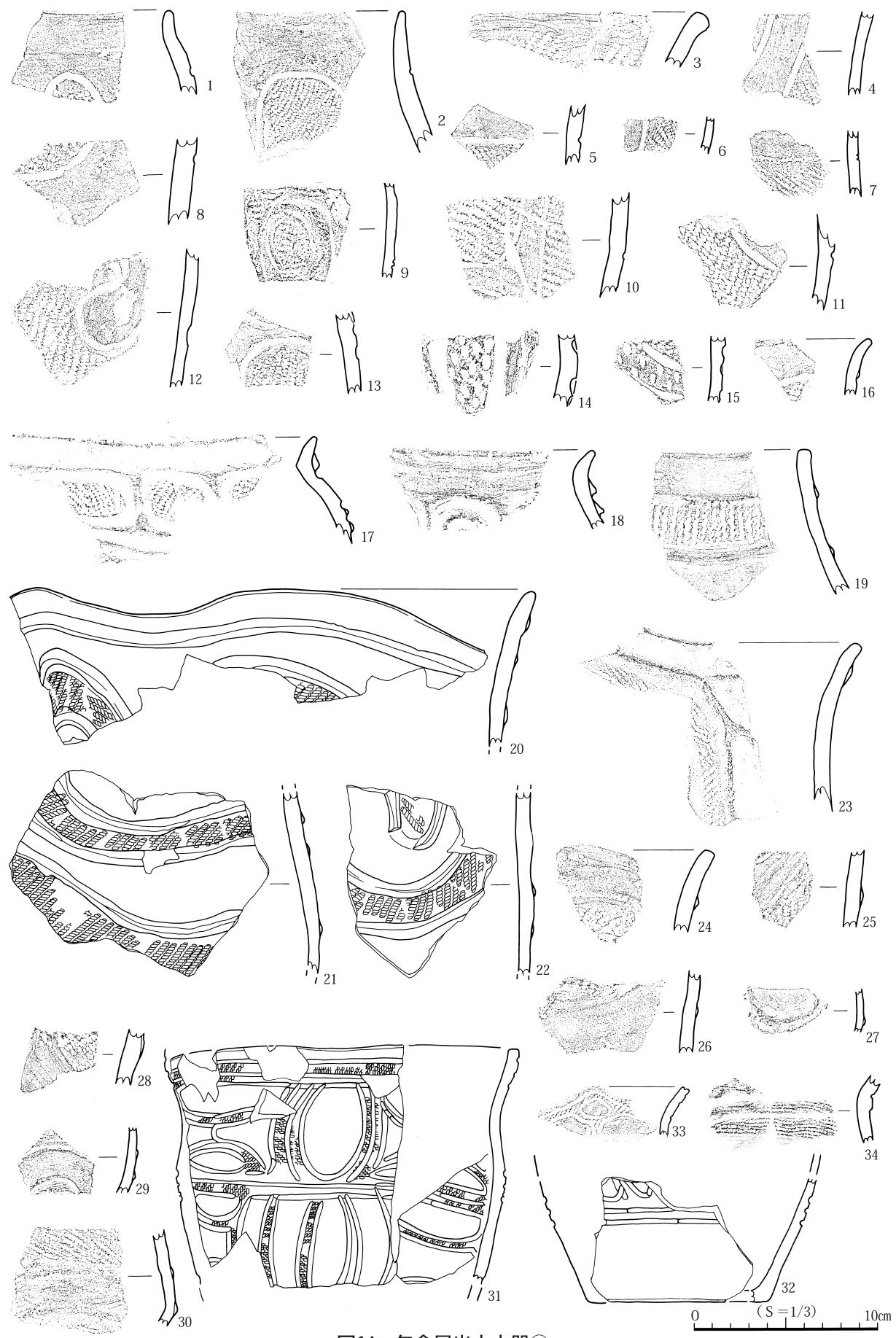


図14 包含層出土土器⑤



図15 包含層出土土器⑥

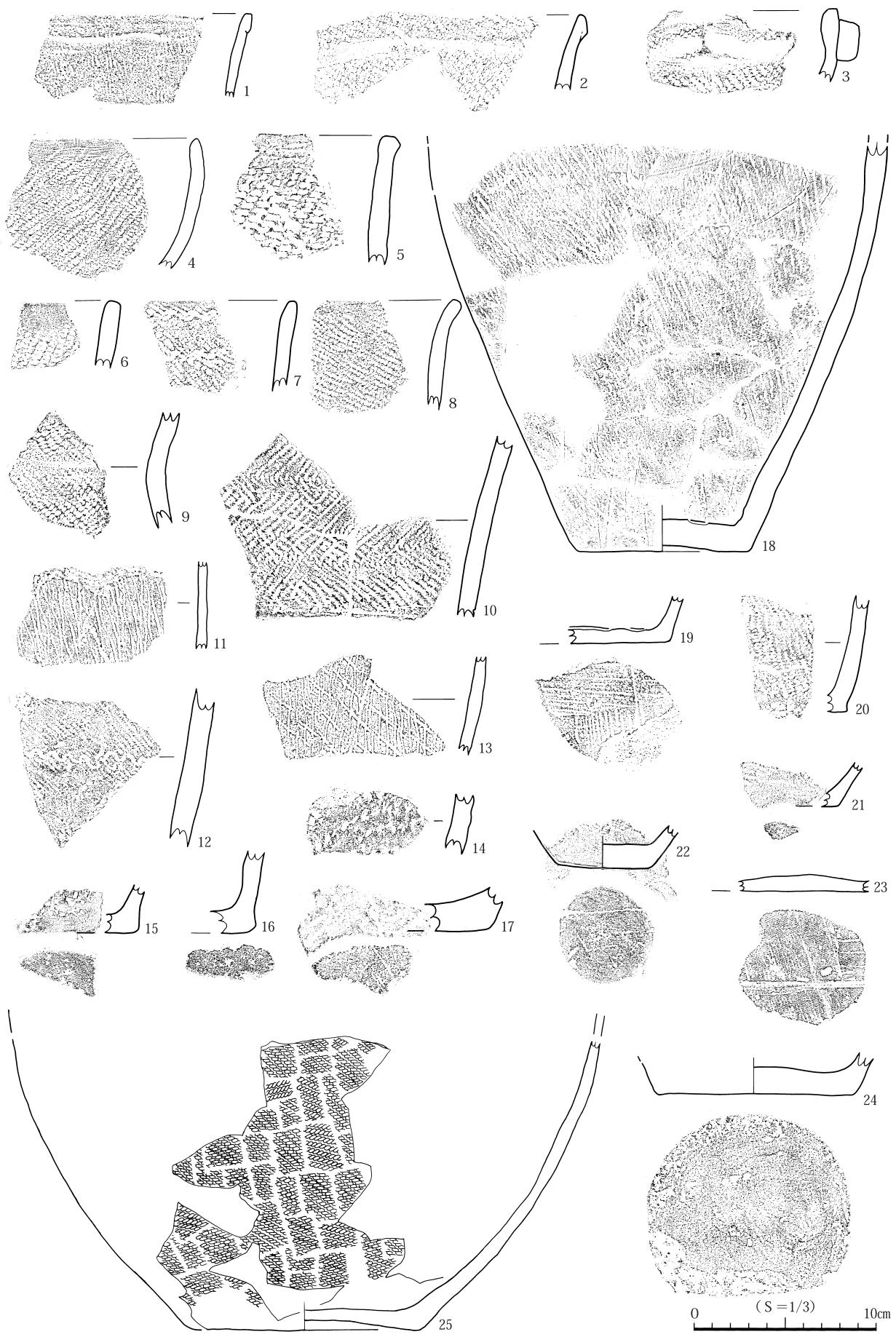


図16 包含層出土土器⑦



図17 包含層出土石器

は灰黒色の胎土を持つ陶器碗で、灰色の釉がかけられ口縁は玉縁状に作られている。3・4の時期・産地は不明である。5は見込に菊花文が描かれた肥前産の染付磁器皿で、蛇の目凹形高台を持つ18世紀後半の製品である。

銭貨 遺構外Ⅲ層から3点出土した。孔形は四角形で、いずれも劣化が著しく銭種の判別は不可能で、帰属時期も不明である。図化は行っていない。

埴堀 1点出土した。取堀の一部と思われる。図化は行っていない。

鉄滓 6点出土した。板状のものが1点で用途は不明。他は鉄滓の小破片でAI-23グリッドで3点出土したが、特に出土地点にまとまりは見られない。いずれも図化は行っていない。

第3節 調査のまとめ

長久保(2)遺跡では第一次・第二次調査の隣接地、1,000m²の発掘調査を行った。この結果、縄文時代の土坑1基と時代不明の焼土遺構2基が新たに発見されたほか、包含層からは縄文時代中期の土器が主体をなして出土し、出土位置から遺物包含層の広がりの一部範囲を確認するに至った。

県道八戸環状線道路建設事業に伴う長久保(2)遺跡の発掘調査は今回報告分で完了し、三次にわたる調査面積は合計5,790m²である。検出された遺構をまとめると、縄文時代早期～前期初頭の落し穴状遺構5基、縄文時代中期の竪穴住居跡6軒、同時期の土坑16基、詳細な時期は不明だが縄文時代のものと考えられる土坑7基、平安時代の炭窯跡4基、時代不明の土坑2基、焼土跡3基である。また、近世～近代の遺構は確認されなかったが、陶磁器片が散布していることから当該時期にも何らかの土地利用がなされたと考えられる。図18は長久保(2)遺跡及び糠塚小沢遺跡における、これまでの調査成果をまとめた全体図である。

(平野)

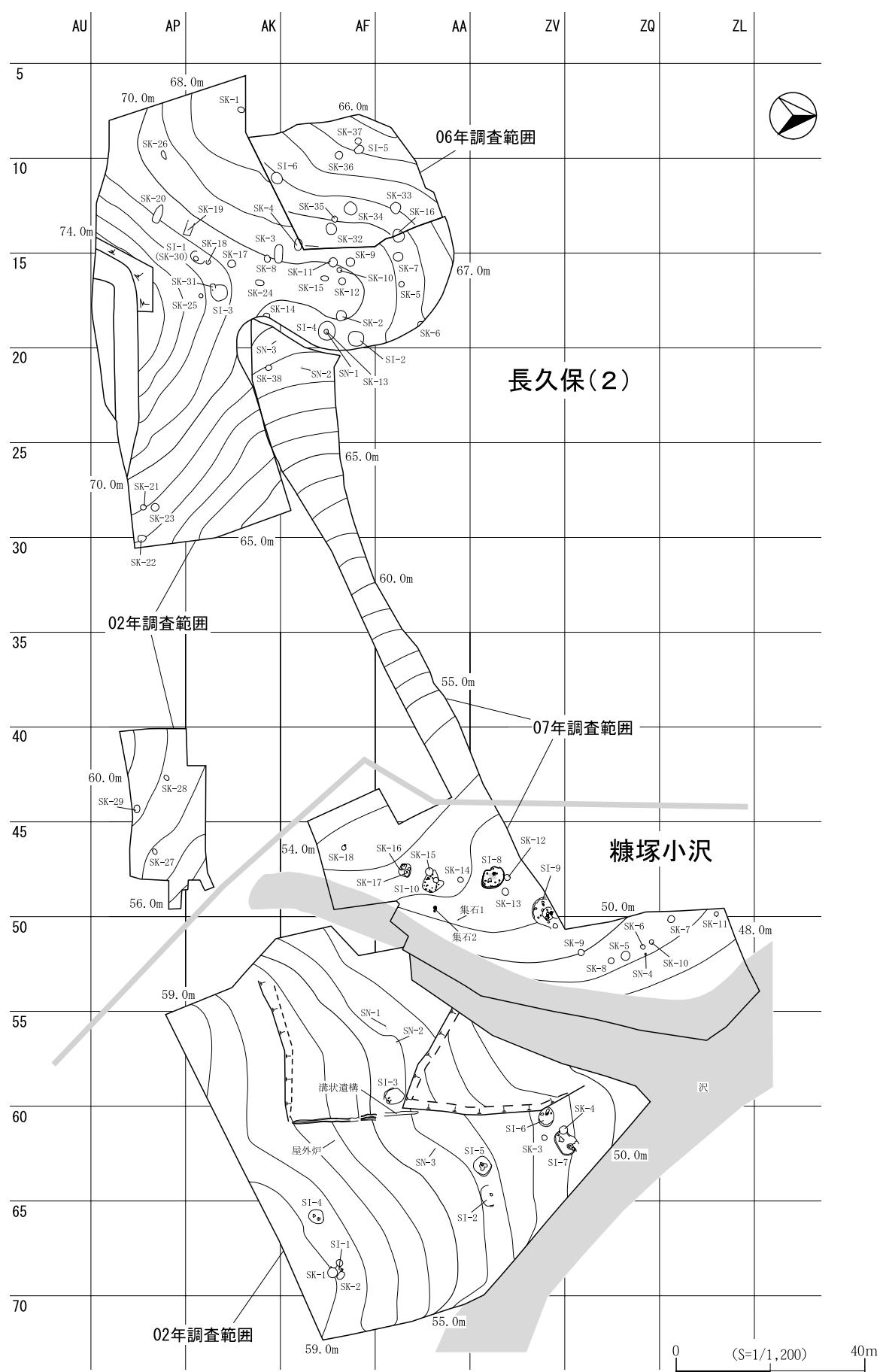


図18 長久保(2)・糠塚小沢遺跡全体図

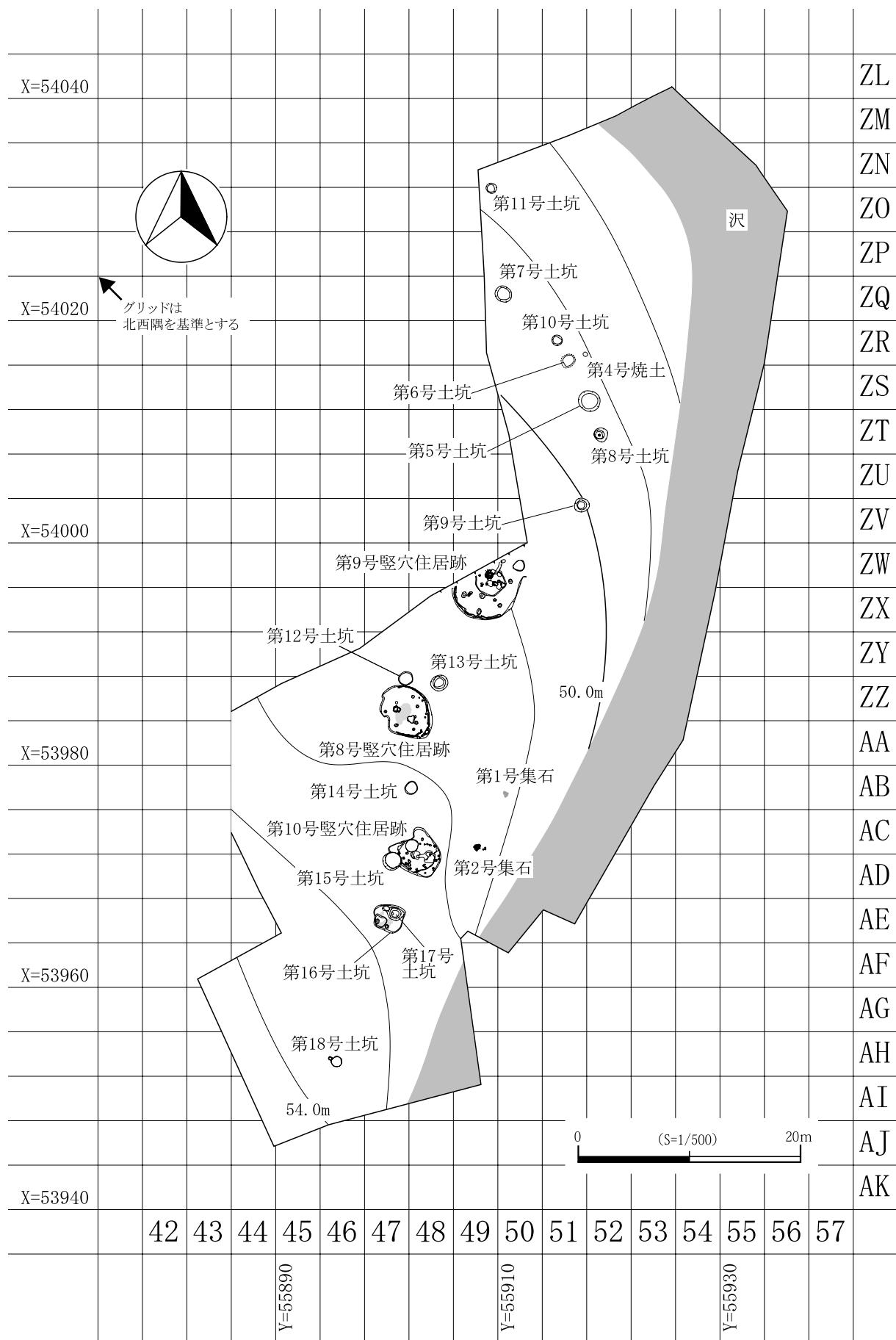


図19 糠塚小沢遺跡遺構配置図

第3章 糜塚小沢遺跡II

第1節 既往の調査

平成14年度に行われた第一次調査では、竪穴住居跡7軒・土坑4基をはじめとする縄文時代の集落跡が発見された。このほか、弥生時代と考えられる地床炉も検出されている。調査面積は5,040m²である（青森県教育委員会2004b）。平成19年度は、平成18年度調査区と小さな沢で隔てられた北側で1,500m²の発掘調査が実施された。

第2節 検出遺構と出土遺物

1 竪穴住居跡

第8号竪穴住居跡／旧表記：07長久保SI-1（図20～23）

[位置・確認] 沢地西側の平坦面、AA・ZZ-47・48グリッドに位置する。Ⅲ層の堆積が薄くなる場所に位置し、Ⅲb～Vb層で確認した。

[規模・形状] 長軸5.5m、短軸4.4mである。長軸南東端はやや尖り、反対の北西側は緩い弧を描いており平面は卵形に近い。南西側の壁にはやや歪みがある。床面積は約17m²である。

[堆積土] 黒または黒褐色土が10層に細分された。レンズ状の堆積土を示し、自然埋没したものと考えられる。堆積の過程で2・5層のような焼土がみられる。焼土は床面に接しておらず、炭化物をやや多く含み、黒褐色土との混合層として存在する。

[壁・床面] Vb～Vc層を床面としている。貼床はなく、掘方の窪みに黒褐色土が充填されている程度でやや起伏のある床面となっている。壁は高さ20～30cm程で、外傾して立ち上がる。

[炉] 住居中央からやや西側に外れたところに、石組と埋設土器を備えた炉が1基作られている。石組内・土器内ともに顕著な焼土は認められなかったが、位置的に炉と考えた。住居長軸と炉の長軸はやや異なっている。住居中央寄りに、口縁および底部を欠く粗製深鉢を斜めに埋設し、その土器から張り出すようにコの字形に礫が配置されている。石組長辺は60cm、短辺40cmで、石組内は床面から10cmほど窪んでおり、石を据えるための掘方も認められる。石組に用いられた礫は、長径10～40cmのチャート・砂岩主体の亜角礫で、使用痕は認められない。

[柱穴・施設] 炉を中心に、直径20～30cm、深さ30～50cm程のピットがあり、Pit 1～4・6・8はその配置から柱穴の可能性がある。また、壁際には全体を半周するように、一部で途切れながら幅10～20cm、深さ5～15cmの小溝が巡る。

[出土遺物] 炉に用いられた埋設土器のほかは、覆土に含まれた破片が多く、床面出土資料は少ない。遺物は150点以上点上げを行った。炉の周辺での出土が多い。この他、不定形石器14点出土、磨石類1点、土製品4点、石製品1点が出土した。22-1～7は床面で出土した。1は炉体深鉢形土器で器厚は厚く、縄文LRを縦回転施文する。2・3は沈線が懸垂状に伸び、3は住居内の離れた位置から出土したものが接合した。縄文LRを縦回転施文後、磨り消されている。最花式相当と思われる。4は磨石、5・6は土器片を利用した円盤状土製品である。7は軽石製品で擦痕がある。8～図23-10は覆土出土である。23-1は折り返し口縁で、横位に波状の沈線が、胴部に網目状の沈線が施される。23-6・7は底部で、6は曲線的に外反して立ち上がる。9は不定形石器

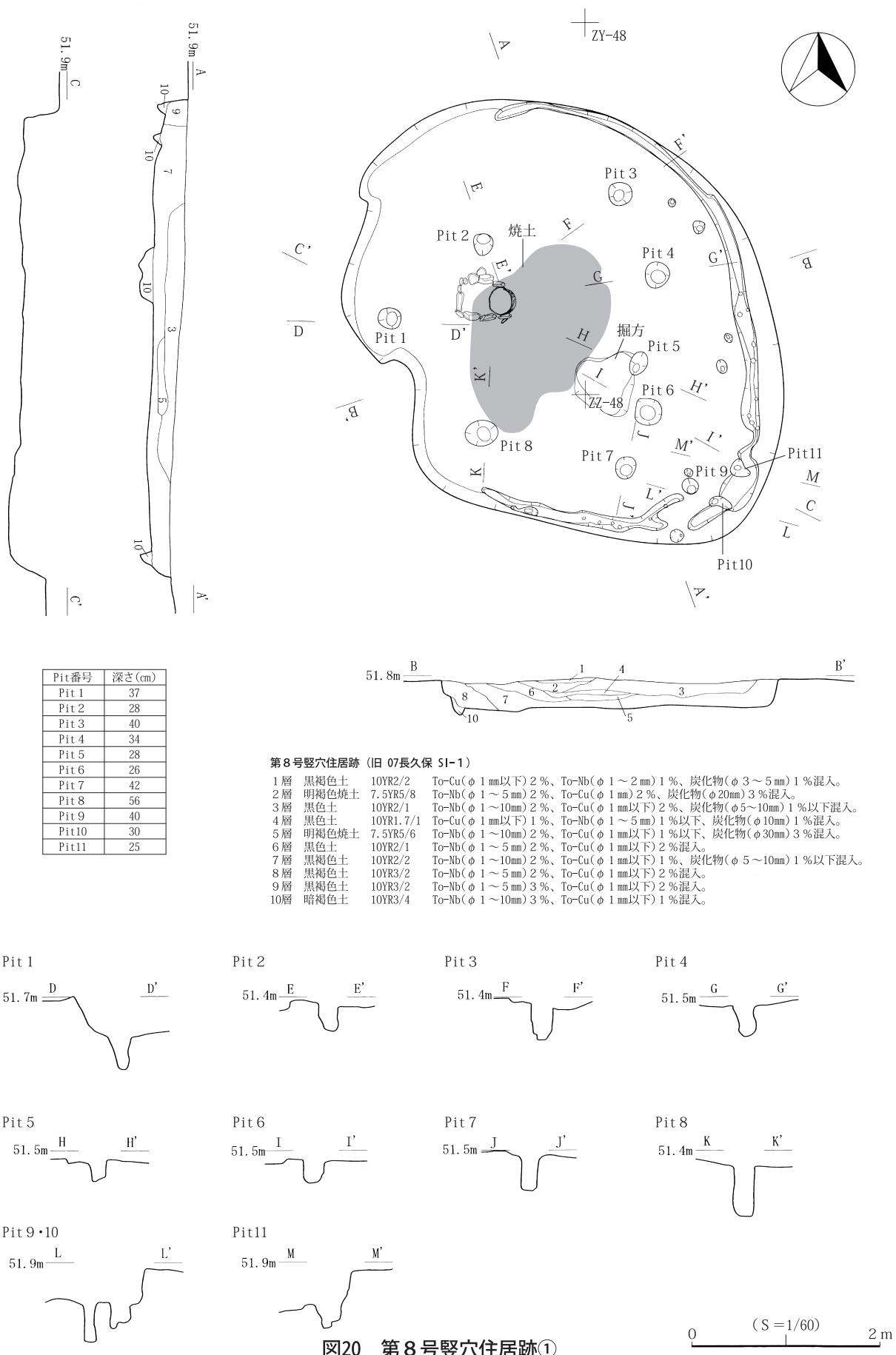


図20 第8号竪穴住居跡①

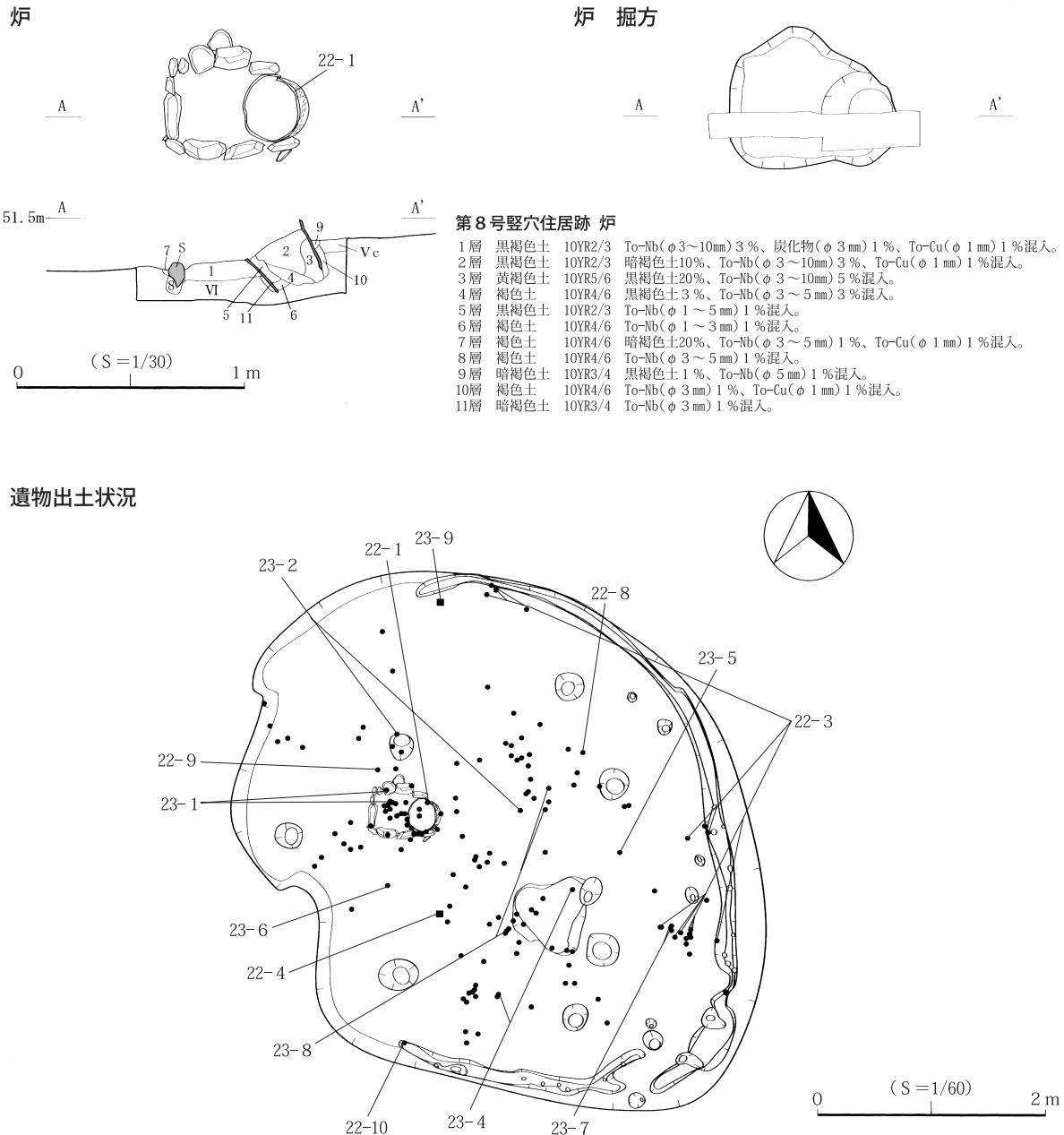


図21 第8号竪穴住居跡②

で1点掲載した。10は無文の土器片を利用した円盤状土製品である。

[時期] 炉体土器の特徴から、縄文時代中期末葉に属する。

第9号竪穴住居跡／旧表記：07長久保SI-2（図24～28）

[位置・確認] 沢地西側の平坦面、ZX・ZW-49・50グリッドに位置する。表土直下で半円状の落ち込みとして確認した。

[規模・形状] 北西隅は調査区外であるが、平面は橢円形と推定される。長軸・短軸とも5m以上を

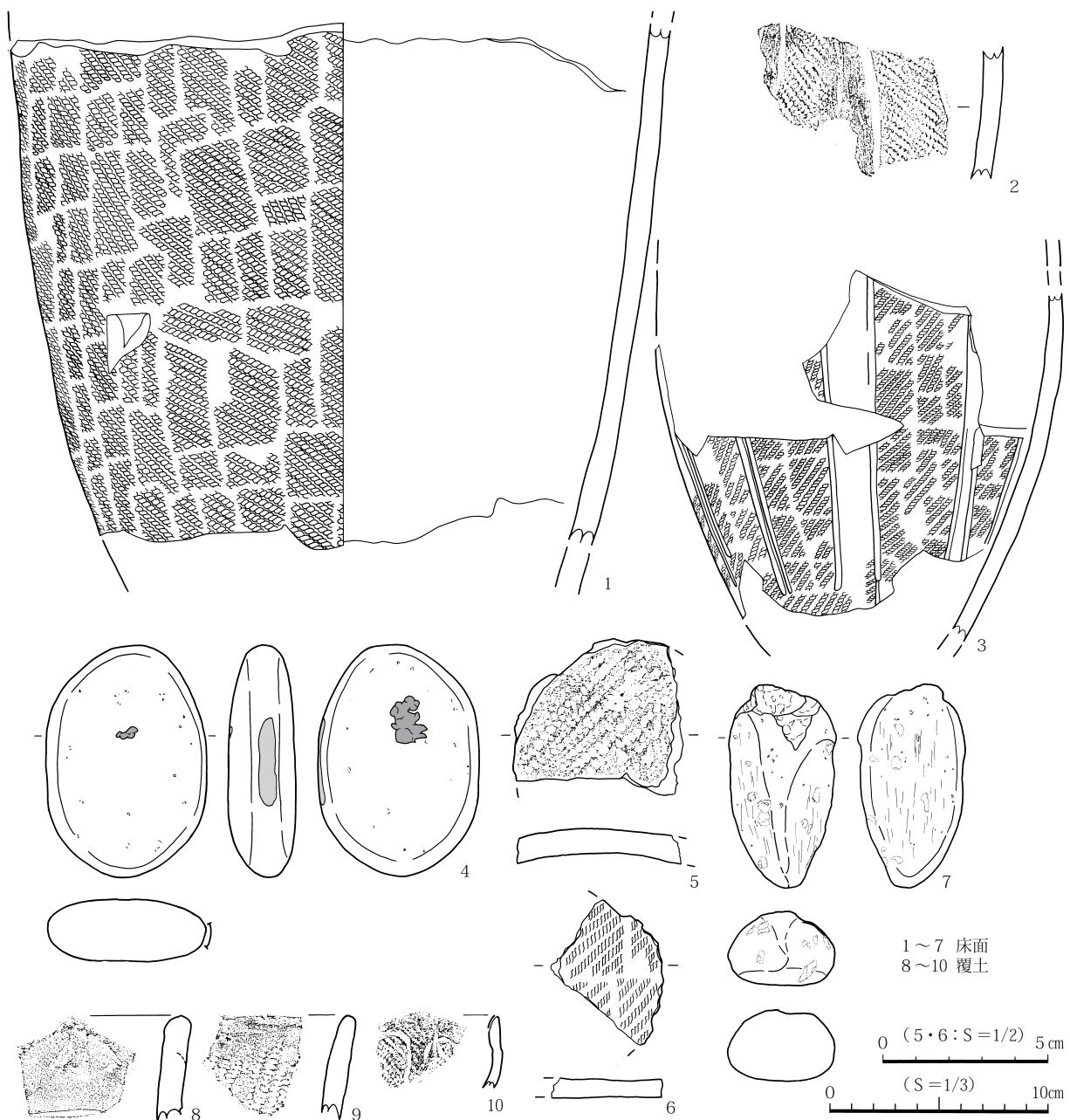


図22 第8号竪穴住居跡出土遺物①

測るが、調査した範囲は南北5.2m、東西5.6m、床面積約26m²についてである。

[堆積土] 黒色土または黒褐色土を主体とし、部分的に焼土が含まれる。レンズ状の堆積であることから自然埋没したものと考えられる。

[壁・床面] 壁は外傾またはほぼ垂直に立ち上がり、残存する壁高は10~40cmである。床面は貼床とせず、掘方底面をそのまま床としており、ほぼ平坦に作られる。炉の付近はそのほかの床面より5~10cm程度低くなっている。

[炉] 住居中央付近で2基確認された。炉1は口縁および底部を欠く粗製深鉢を正位に埋設した後、

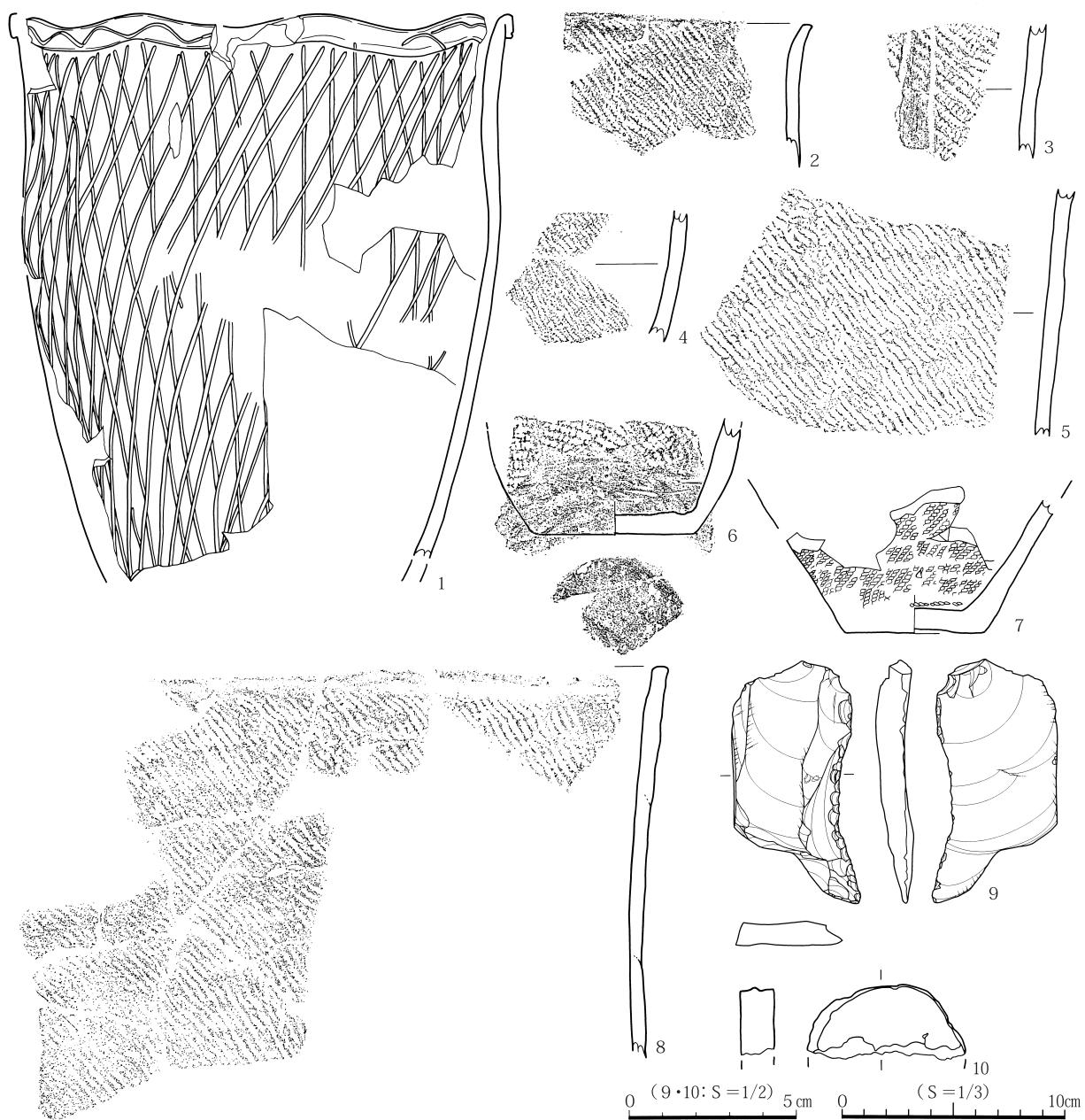


図23 第8号竪穴住居跡出土遺物②

周囲を礫で囲っている。石組は長軸65cm、短軸58cmで、埋設土器に接した部分に最も大きな礫用い、全体では楕円形の石組としている。機能時は残存する土器の上部あたりまで埋め戻されていたようである。炉2は床面を10cm程掘り窪めた後、掘方周囲にコの字状に礫を配置している。配置された礫の各辺は30cmで、石組を挟んだ両側にそれぞれ $50 \times 60\text{cm}$ 、 $40 \times 80\text{cm}$ の硬化範囲が認められる。炉1・2の前後関係は把握できなかった。

【柱穴・施設】床面のピットは13基、住居内土坑2基を検出した。深い筒状の掘方を持ち、柱穴の可能性があるのは、Pit 1・2・4・6・7である。土坑は断面形が皿形となる。壁の残存が良好な

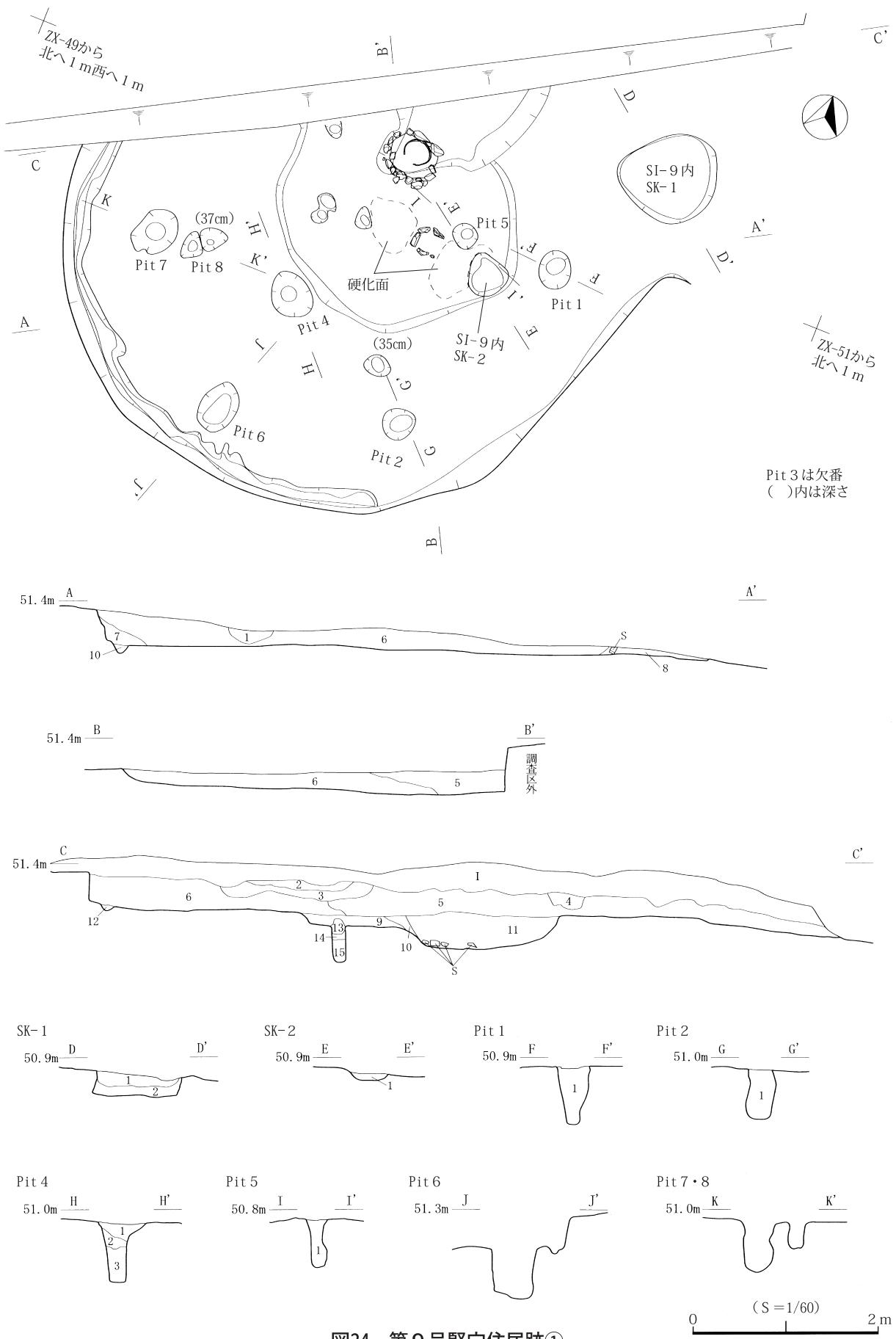
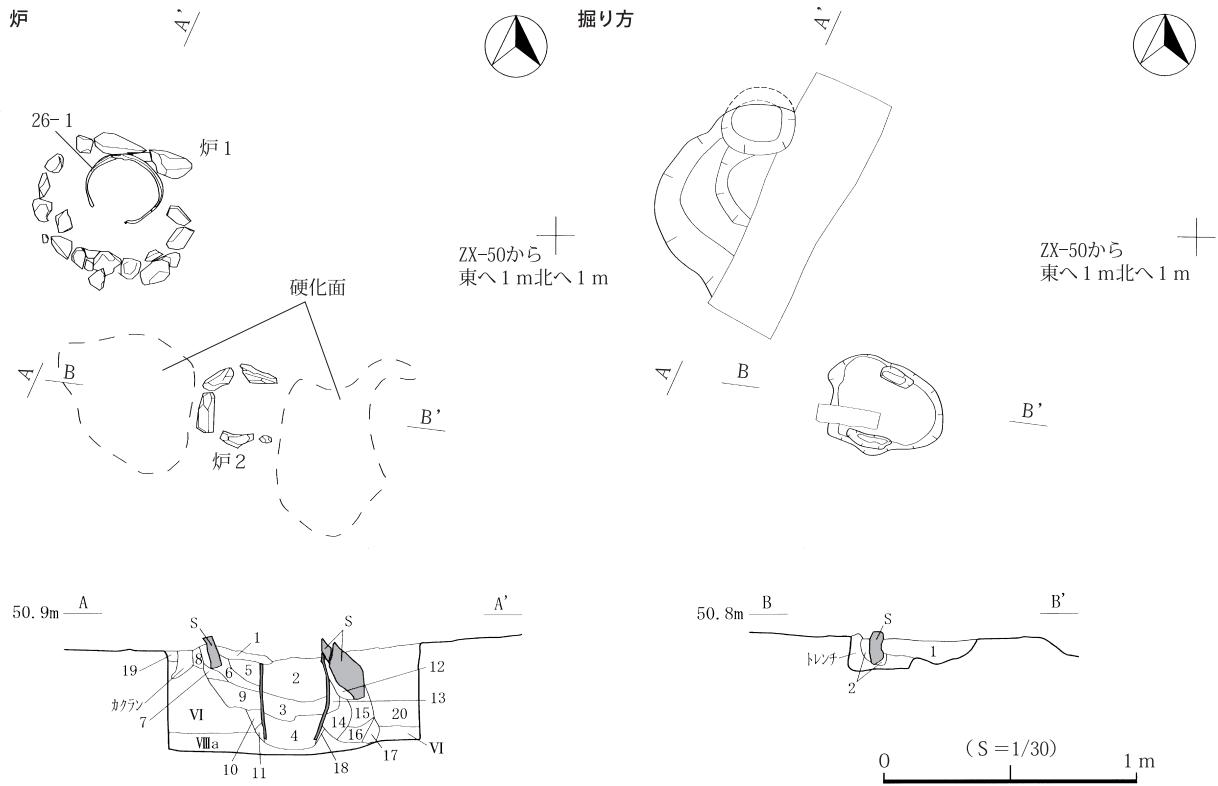


図24 第9号竪穴住居跡①



第9号竪穴住居跡 (旧 07長久保 SI-2)

1層 黒褐色土	10YR2/2	To-Cu(φ 1~2mm) 3%混入。
2層 黒褐色土	10YR1.7/1	To-Nb(φ 1~5mm) 1%、To-Cu(φ 1mm) 1%混入。
3層 黒褐色土	10YR2/1	To-Nb(φ 1~3mm) 1%混入。
4層 明黄褐色粘土	10YR6/6	
5層 黒褐色土	10YR1.7/1	To-Cu(φ 1mm) 3%、To-Nb(φ 2~10mm) 1%混入。
6層 黒褐色土	10YR2/2	To-Nb(φ 1~5mm) 3%、To-Cu(φ 1mm) 1%混入。
7層 黒褐色土	10YR2/2	褐色土15%混入、To-Nb(φ 1~5mm) 2%混入。
8層 黒褐色土	10YR2/2	To-Nb(φ 1~5mm) 1%以下混入。
9層 黒褐色土	10YR2/2	暗褐色土30%、To-Nb(φ 1~5mm) 10%塊状で混入。To-Cu(φ 1mm) 3%、To-Nb(φ 1~2mm) 2%混入。
10層 黒褐色土	10YR4/4	褐色土30%、To-Nb(φ 1~5mm) 5%、To-Cu(φ 1mm) 3%混入。
11層 黒褐色土	10YR2/2	褐色土10%、To-Nb(φ 2~5mm) 5%、黃褐色土3%、To-Cu(φ 1mm) 3%混入。
12層 暗褐色土	10YR3/4	To-Nb(φ 1mm) 2%、To-Cu(φ 1mm) 1%以下混入。
13層 暗褐色土	10YR3/4	褐色土20%、浮石(φ 2~10mm) 15%混入。
14層 黑褐色土	10YR2/3	褐色土20%、浮石(φ 1~3mm) 1%混入。
15層 褐色土	10YR4/6	褐色土30%、浮石(φ 1~5mm) 1%以下混入。
1層 黒褐色土	10YR2/1	To-Cu(φ 1mm) 3%混入。

炉1

1層 暗褐色土	10YR3/4	To-Nb(φ 3~5mm) 1%、To-Cu(φ 1mm) 1%混入。
2層 黒褐色土	10YR2/3	褐色土10%、To-Nb(φ 1~5mm) 1%、To-Cu(φ 1mm) 1%以下混入。
3層 褐色燒土	7.5IR4/4	黑色土3%、To-Nb(φ 1mm) 1%混入。
4層 黒褐色土	10YR1.7/1	To-Cu(φ 1mm) 1%以下混入。
5層 褐色燒土	7.5YR4/6	To-Nb(φ 1~3mm) 1%混入。
6層 黒褐色土	7.5YR3/2	褐色土10%、To-Nb(φ 1~3mm) 1%、To-Cu(φ 1mm) 1%以下混入。
7層 黒褐色土	10YR4/4	黒褐色土5%、To-Nb(φ 1~3mm) 1%以下混入。
8層 暗褐色土	10YR3/4	褐色土20%、To-Nb(φ 1mm) 1%以下混入。
9層 暗褐色土	10YR3/4	黃褐色土20%、To-Nb(φ 2~10mm) 3%、炭化物(φ 2~5mm) 1%、To-Cu(φ 1mm) 1%以下混入。
10層 褐色土	10YR4/4	To-Nb(φ 2mm) 1%以下混入。
11層 黒褐色土	10YR1.7/1	
12層 暗褐色土	10YR3/4	To-Nb(φ 2~15mm) 1%混入。
13層 暗褐色土	10YR3/4	To-Nb(φ 1~3mm) 1%、To-Cu(φ 1mm) 1%以下混入。
14層 暗褐色土	10YR3/4	To-Nb(φ 1~3mm) 1%、炭化物(φ 5mm) 1%以下混入。
15層 黒褐色土	10YR2/3	褐色土30%混入。
16層 暗褐色土	10YR4/6	黑色土5%、To-Nb(φ 1mm) 1%以下混入。
17層 暗褐色土	10YR3/3	To-Nb(φ 1~3mm) 1%以下混入。
18層 褐色土	10YR4/6	明黃褐色土3%、黒褐色土1%、To-Nb(φ 3~10mm) 5%、To-Cu(φ 1mm) 1%混入。
19層 黒褐色土	10YR2/3	To-Nb(φ 1mm) 1%以下、To-Cu(φ 1mm) 1%以下混入。
20層 黒褐色土	10YR2/2	暗褐色土、To-Nb(φ 1~3mm) 1%、To-Cu(φ 1mm) 1%以下混入。

炉2

1層 黒褐色土	10YR3/3	褐色土20%、To-Nb(φ 1~10mm) 5%、To-Cu(φ 1mm) 3%混入。
2層 褐色土	10YR4/4	黒褐色土5%、To-Nb(φ 1~2mm) 1%、To-Cu(φ 1mm) 1%以下混入。

SK-1

1層 黒褐色土	10YR2/3	黒褐色土30%、To-Nb(φ 3~5mm) 3%、To-Cu(φ 1mm) 1%混入。
2層 黒褐色土	10YR2/3	黒褐色土20%、To-Nb(φ 5~10mm) 5%、To-Cu(φ 1mm) 1%混入。

SK-2

1層 黒褐色土	10YR2/3	暗褐色土7%、To-Nb(φ 2~10mm) 5%、To-Cu(φ 1mm) 1%混入。
---------	---------	--

Pit1	1層 黒褐色土	10YR2/2 黒褐色土10%、To-Nb(φ 1~5mm) 3%、To-Cu(φ 1mm) 3%混入。
Pit2	1層 黒褐色土	10YR2/3 To-Nb(φ 1~5mm) 5%、To-Cu(φ 1mm) 3%混入。
Pit3	1層 黒褐色土	10YR2/2 黄褐色砂7%、To-Nb(φ 1~10mm) 5%、To-Cu(φ 1mm) 3%混入。
Pit4	1層 黒褐色土	10YR2/3 暗褐色土10%、To-Nb(φ 2~10mm) 3%、To-Cu(φ 1mm) 1%、炭化物(φ 1mm以下) 1%以下混入。
Pit5	1層 黒褐色土	10YR2/1 黑褐色土10%、To-Nb(φ 3~10mm) 3%、To-Cu(φ 1mm) 1%混入。

図25 第9号竪穴住居跡②

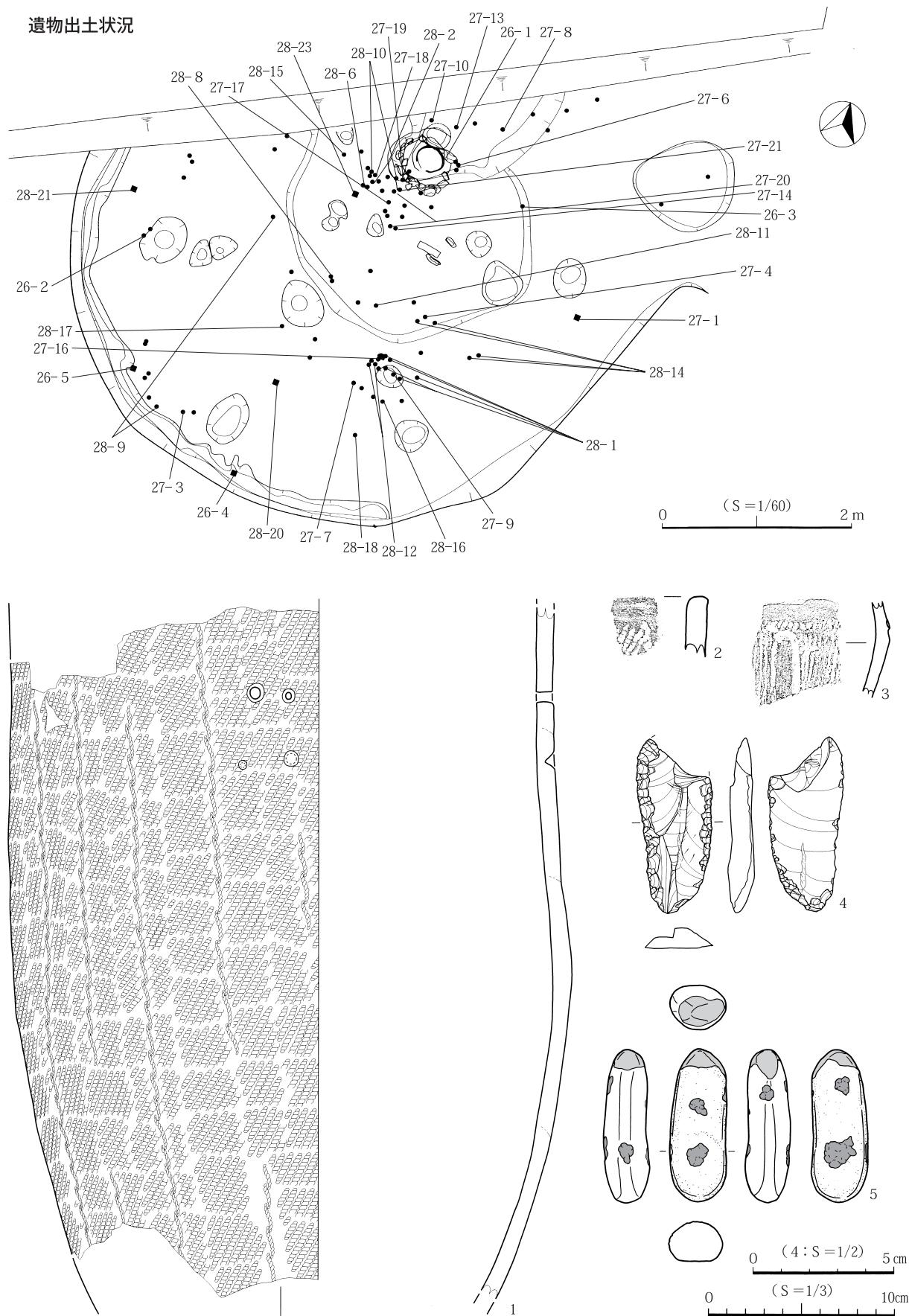


図26 第9号竪穴住居跡出土遺物①

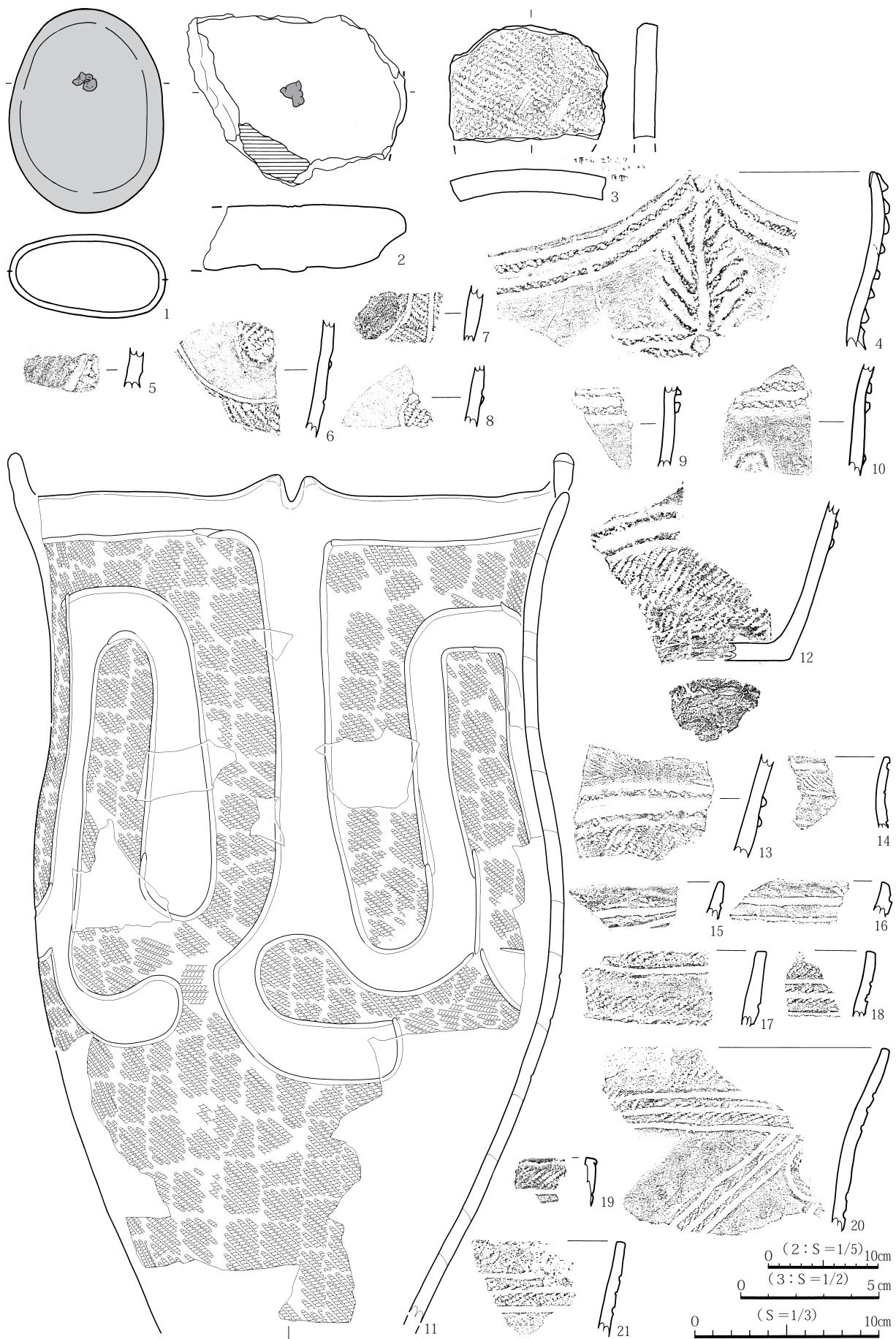


図27 第9号竪穴住居跡出土遺物(2)

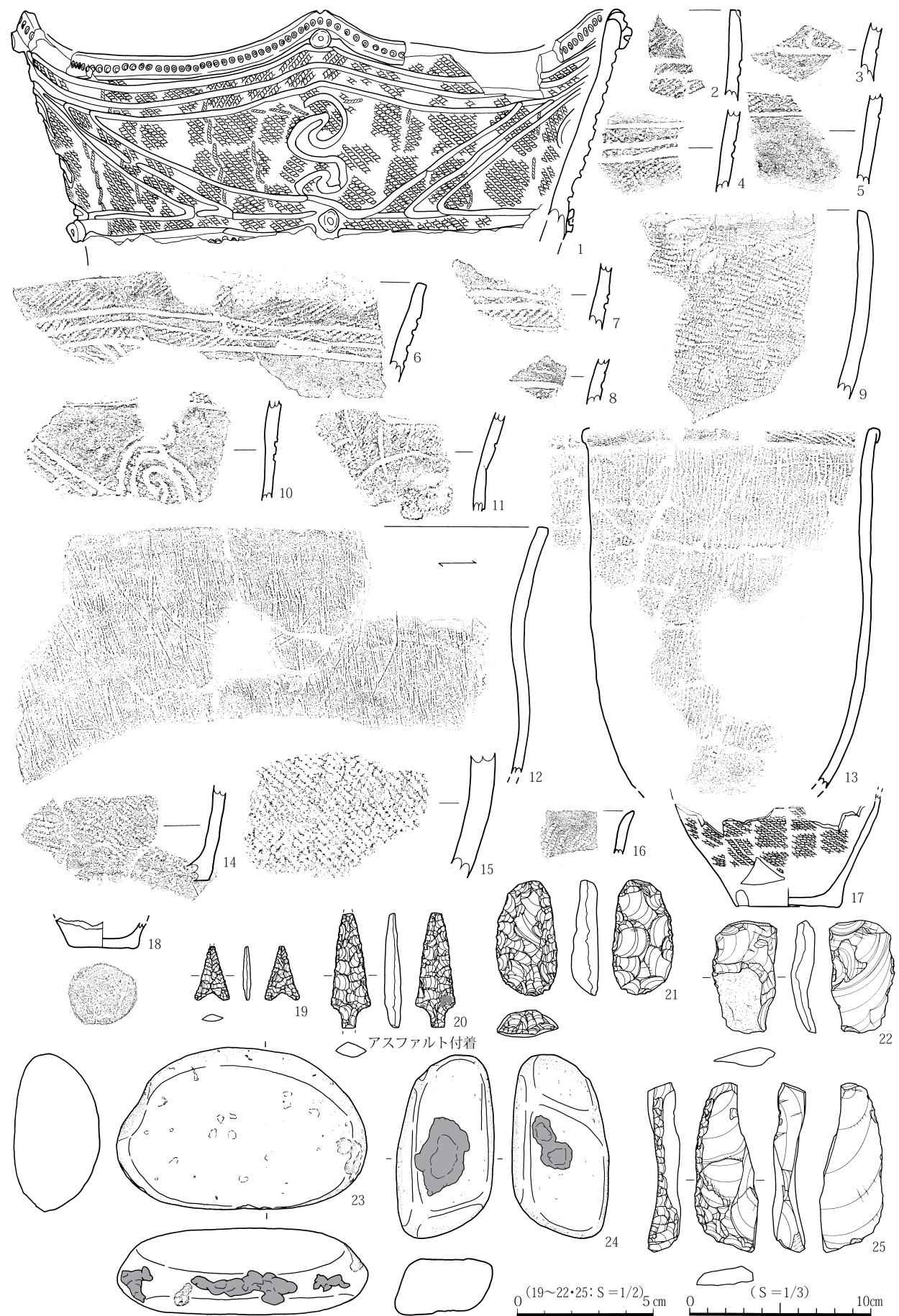


図28 第9号竪穴住居跡出土遺物③

住居跡の西側に最大幅20cm、深さ3~15cmの小溝がある。

[出土遺物] 点上げした遺物は130点以上で、炉の周辺を中心に広がり、近い位置での接合が目立つ。石鏸4点出土、石竈1点、不定形石器9点出土、磨石類4点、石皿1点、土製品1点が出土している。図26-1~図27-3が床面出土遺物で1は炉体深鉢形土器で胴部下半に膨らみを持ち、縄文RLが縦に施文され原体末端の圧痕が縦位にめぐる。孔が二箇所あり、その下方に二箇所の刺突痕がある。いずれも焼成後のものである。26-3は最花式と思われ、横位に連続刺突を持ち△字状の沈線を持つ。27-1は磨石で全体が磨かれている。2は石皿で全体形は不明である。3は土器片を利用した円盤状土製品である。図27-4~図28-25は覆土出土である。27-11は中期末葉の大木10式相当で磨り消しの無文帶がL字・U字にめぐる。27-4・9・10・12・13は隆帯が貼り付けられ、4は粘土紐貼付けによる樹木文が施文され、色調は赤褐色を呈する。27-4~28-11は2~3条の沈線が施される。28-1は三角文とS字状入組文が施文され、ボタン状の貼り付けを持つ。後期初頭の所産と思われる。28-9~17は地文のみの施文である。12・13は単軸絡条体2類による施文で器形は胴部に膨らみを持つ。石鏸は2点掲載した。28-20は基部にアスファルトが付着する。22の石竈は縦長剥片を素材としている。不定形石器は床面出土1点と22・25の3点掲載した。28-23・24は敲き石で23は一面、24は二面使用している。

[時期] 炉体土器の特徴から、縄文時代中期末葉に属する。

第10号竪穴住居跡／旧表記：07長久保SI-3（図29~31）

[位置・確認・重複] 沢地西側の平坦面、AC・AD-47・48に位置する。Ⅲ b層で確認した。第15号土坑と重複し、本遺構が古い。

[規模・形状] 平面形は歪みが大きく不整形であるが、隅丸方形を基調としている可能性もある。長辺4.5m、短辺3mで、床面積は約13m²である。

[堆積土] 黒褐色土を主体とし、11層に細分された。全体にレンズ状の堆積のため、自然埋没したものと考えられる。堆積土中位に焼土を検出している。

[壁・床面] 外傾またはほぼ垂直に立ち上がる壁が全周し、残存する高さは15~30cmである。床面は全体にほぼ平坦であるが、東側の壁際に幅30~40cm、高さ10cmのテラス部をもつ。

[炉] 明瞭な被熱範囲をもつ炉は確認できなかったが、床面中央付近に長軸90cm、短軸50cm、深さ10cmの不整な橢円形をした窪みがあり、位置および脇に硬化面を伴うことから炉と考えた。窪みを挟むように形成された硬化面は、それぞれ70×80cm、90cm×1mの範囲に広がる。また、窪みの中央付近では礫が2点出土しており、他の住居跡に伴う炉と同様に、石囲炉であった可能性がある。

[柱穴・施設] 大小23基のピットが床面で確認された。規模にばらつきが大きく、柱穴は特定できないが、壁際に存在するものが多いため、壁に沿うように小規模な柱があった可能性がある。

[出土遺物] 点上げを行った遺物は10点もなく、出土量も9・10号住居に比べると少ない。土器の他石鏸3点が出土した。図31-1は床面出土遺物で沈線と無文帶を有し、中期後葉~末葉に相当すると思われる。31-2~18・図48-12は覆土中の出土である。2は波状口縁部で、3は△字状の沈線内に刺突文と縄文が入れ違いで施文されている。5~7は隆帯を貼付け、8・9は浅い沈線が施される。10と11は同一個体と思われ、10は第15号土坑から出土した破片とも接合した。色調は赤褐

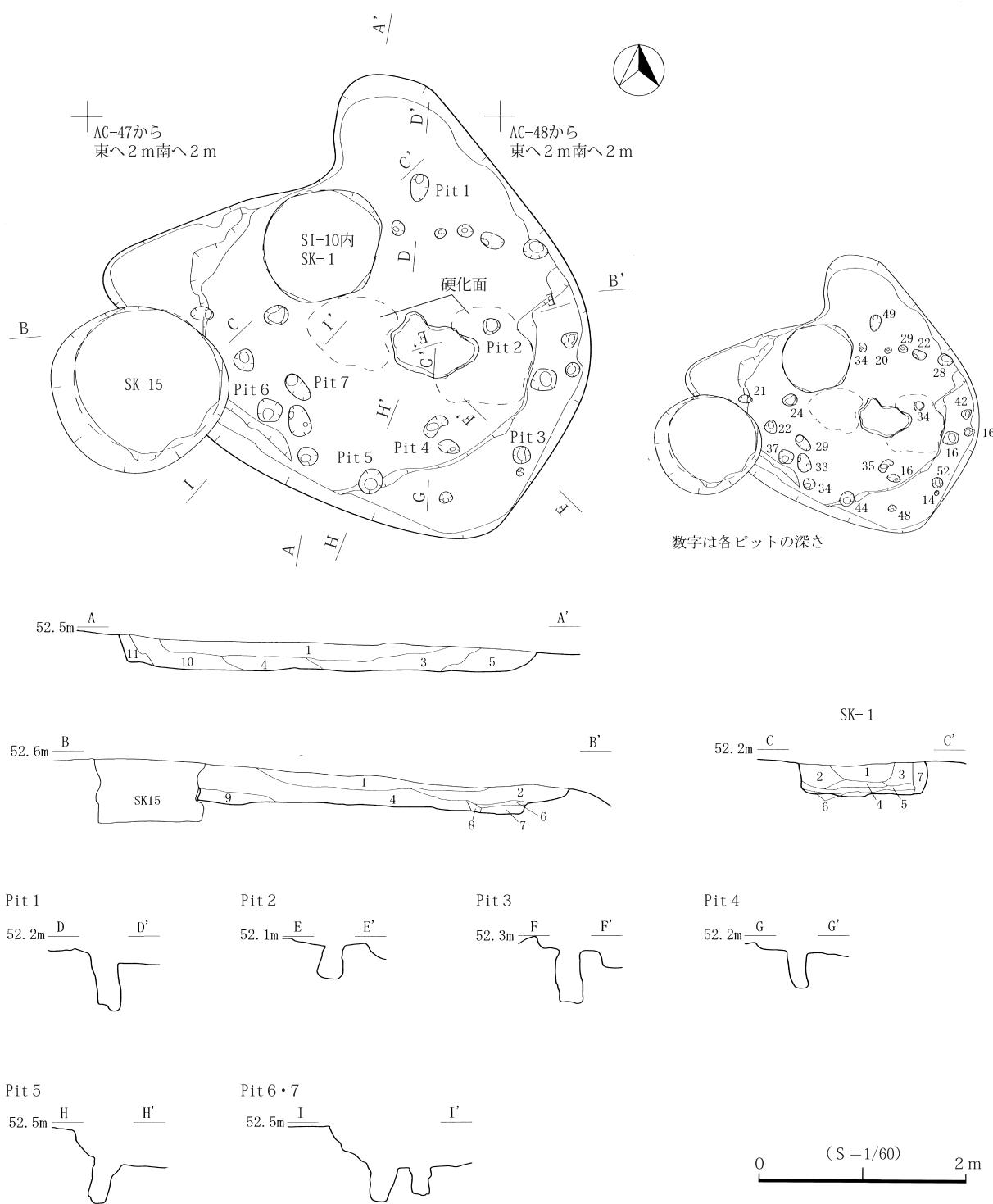


図29 第10号竪穴住居跡①

炉



第10号竪穴住居跡 (旧 07長久保 SI-3)

- 1層 黒褐色土 10YR2/3 To-Nb(φ 1~10mm) 3%、炭化物(φ 2~5mm) 1%、To-Cu(φ 1mm) 1%混入。
 2層 暗褐色土 10YR3/4 黒褐色土 5%、To-Nb(φ 2~15mm) 3%、炭化物(φ 2~10mm) 1%、To-Cu(φ 1mm)以下混入。
 3層 黒褐色土 10YR2/3 暗褐色土30%、To-Nb(φ 1~10mm) 5%、炭化物(φ 2mm) 1%以下、To-Cu(φ 1mm) 1%以下混入。
 4層 黒褐色土 10YR2/2 To-Nb(φ 3~15mm) 1%、炭化物(φ 2~15mm) 1%、To-Cu(φ 1mm) 1%以下混入。
 5層 黒褐色土 10YR2/3 黒色土30%、To-Nb(φ 2~15mm) 1%、To-Cu(φ 1mm) 1%以下混入。
 6層 黒褐色土 10YR2/3 To-Nb(φ 1mm以下) 1%混入。
 7層 黒褐色土 10YR2/2 暗褐色土10%、To-Nb(φ 1~5mm) 1%、To-Cu(φ 1mm以下) 1%混入。
 8層 褐色土 10YR4/6 黒色土 5%、To-Nb(φ 1~3mm) 1%以下、炭化物(φ 2mm) 1%以下混入。
 9層 黒色土 10YR2/1 To-Nb(φ 3~10mm) 1%、To-Cu(φ 1mm) 1%混入。
 10層 黒褐色土 10YR2/2 褐色土20%、To-Nb(φ 1~10mm) 5%、To-Cu(φ 1mm以下) 1%混入。
 11層 黒褐色土 10YR2/3 暗褐色土30%、褐色土20%、To-Nb(φ 1~5mm) 3%、To-Cu(φ 1mm) 1%混入。
 Vc層 暗褐色土 10YR3/4 To-Nb(φ 1~2mm) 1%以下混入。

炉

- 1層 明赤褐色燒土 5YR5/8 黒褐色土40%、To-Nb(φ 2~5mm) 3%、To-Cu(φ 1mm) 2%混入。
 2層 黑褐色土 7.5YR2/2 暗褐色土30%、To-Nb(φ 1~2mm) 2%、To-Cu(φ 1mm) 1%混入。
 3層 褐色土 10YR4/4 To-Nb(φ 1mm) 1%、To-Cu(φ 1mm) 1%以下混入。

SK 1

- 1層 暗褐色土 10YR3/4 黒褐色土20%、To-Nb(φ 2~10mm) 3%、炭化物(φ 5mm) 1%以下混入。
 2層 黑褐色土 10YR2/2 To-Nb(φ 1~5mm) 3%、To-Cu(φ 1mm) 1%混入。
 3層 黑褐色土 10YR2/3 To-Nb(φ 1~3mm) 1%、To-Cu(φ 1mm以下) 1%混入。
 4層 暗褐色土 10YR3/3 黒褐色土10%、To-Nb(φ 1~10mm) 3%、To-Cu(φ 1mm) 1%以下混入。
 5層 褐色土 10YR4/4 To-Nb(φ 2~5mm) 1%、To-Cu(φ 1mm以下) 1%混入。
 6層 褐色土 10YR4/6 To-Nb(φ 1~3mm) 1%以下、To-Cu(φ 1mm) 1%以下混入。
 7層 黑褐色土 10YR2/3 褐色土30%、To-Nb(φ 1~10mm) 3%、To-Cu(φ 1mm以下) 1%混入。

遺物出土状況

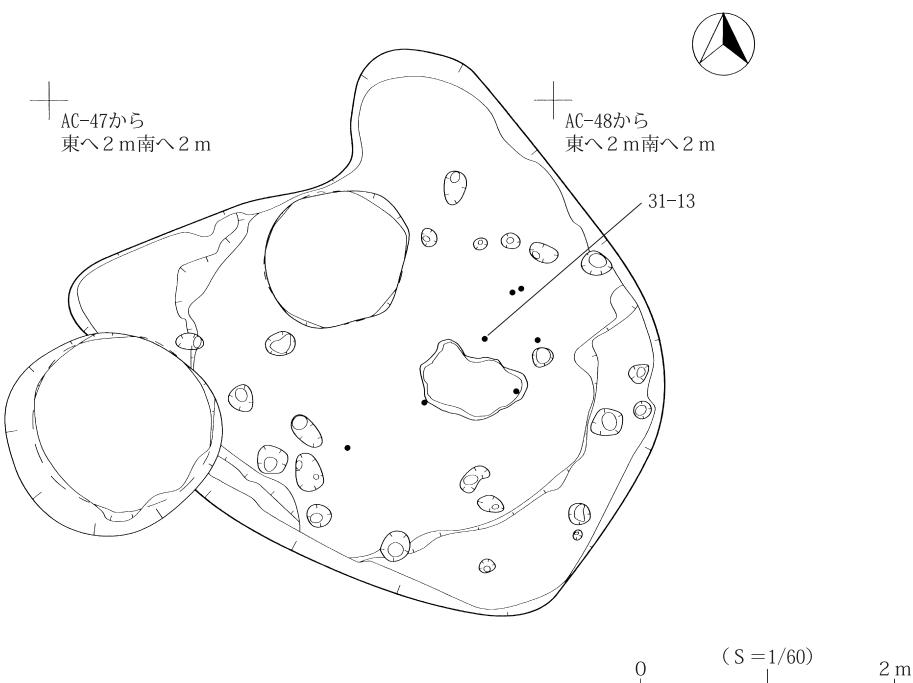


図30 第10号竪穴住居跡②

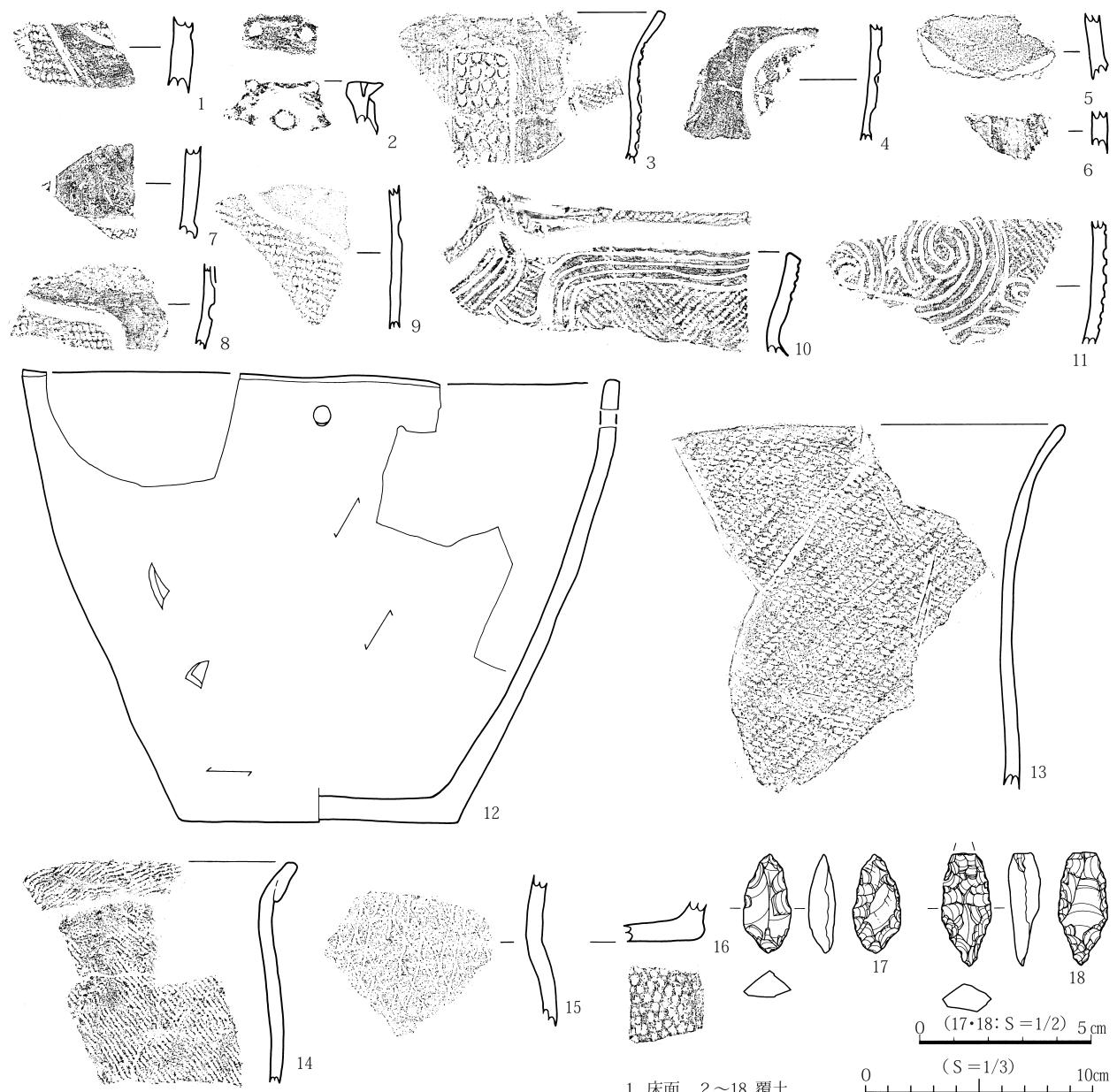


図31 第10号竪穴住居跡出土遺物

色を呈し、胴部には櫛歯状工具による沈線が横位に施文され、口唇部に縄文R Lを回転施文している。11は渦巻き状の文様を呈し、後期初頭の所産と思われる。12は無文で内外面にミガキ調整がなされ、口縁部には穿孔が2箇所ある。13・14は外反する口縁部片で14は折り返し状口縁である。16は底部に一本越え・一本送りの網代痕がある。17・18は有茎の石鏃で、17は未製品と思われる。図48-12は誤って遺構外に掲載したが、本住居跡の出土遺物である。尖基鏃もしくは有茎鏃の未製品と思われる。

[時期] 炉体土器など機能時を明確に示す遺物は出土していないが、堆積土出土土器や第8・9号竪穴住居跡との位置関係から、縄文時代中期末葉に属するものと推定する。

2 土坑

第5号土坑／旧表記：07長久保SK-1（図32）

[位置・確認] 東向きの緩斜面、ZS-52グリッドに位置する。Ⅲ b層で確認した。**[規模・形状]** 平面は $1.8 \times 1.9\text{m}$ のほぼ円形で、確認面からの深さは約70cmである。**[堆積土]** Ⅲ層に由来する黒褐色土が11層に細分された。中央に黒色土とローム混じりの土からなる落込み（1～4層）があるが、層界が不明瞭な部分があるため別遺構とはしなかった。根による搅乱とも考えられる。1～3層には炭化物を多く含む。6～11層は混入物がわずかに異なる黒褐色または黒色土が互層を成しており、自然堆積とみられる。**[壁・底面]** 底面はやや傾斜をもち、壁は緩やかに外傾して立ち上がる。**[出土遺物]** 少量の土器が出土した。図38-1は11層中からの出土で、第16号土坑出土遺物とも接合した。口縁波頂部が3単位の深鉢形土器で、口縁部に沿って横位の隆帯が貼付けられている。胴部は縄文LRが縦回転に施文され、底部付近まで懸垂文が伸び、沈線の内部は一部磨り消されている。中期後葉の楓木林式相当の所産と思われる。2は覆土出土で沈線の幅が広めで浅い。後期初頭～前葉の所産と思われる。**[時期]** 出土遺物には縄文時代後期の土器も含まれるが、最下層で出土した復元可能な深鉢（図38-1）から縄文時代中期後葉と考えられる。

第6号土坑／旧表記：07長久保SK-2（図32）

[位置・確認] 東向きの緩斜面、ZR-51グリッドに位置する。Ⅲ b層で確認した。**[規模・形状]** 開口部は $0.9 \times 1.1\text{m}$ の不整橜円形、底面は $1.3 \times 1.1\text{m}$ の橜円形で、深さは約1mである。**[堆積土]** 黒～暗褐色土の堆積土で、6層に分けられた。3・4層にはV層由來のブロックをやや多く含む。全体にレンズ状の堆積であるため、自然埋没したものと考えられる。**[壁・底面]** 底面には若干の凹凸があるもののほぼ平坦で、壁が内傾して立ち上がるフラスコ状土坑である。**[出土遺物]** 少量の土器と石皿1点が出土した。図38-6の石皿は床面出土で浅い敲き痕がある。3～5は覆土出土である。3は無文の口縁部片で口唇を丸く仕上げている。4の沈線は3本を基本単位とし後期初頭～前葉のものと思われる。5は無文の胴部で黄褐色の色調を呈する。**[時期]** 出土遺物は少量だが縄文時代後期の土器片がまとまっており、本遺構の帰属時期も縄文時代後期前葉と考えられる。

第7号土坑／旧表記：07長久保SK-3（図32）

[位置・確認] 東向きの緩斜面、ZQ-50グリッドに位置する。Ⅲ b層で確認した。**[規模・形状]** 平面は $1.35 \times 1.55\text{m}$ の不整円形で、確認面からの深さは30cmである。**[堆積土]** 黒～暗褐色の堆積土で、6層に分けられた。中央に黒色土と黒褐色土を主体とする堆積土（1・2層）があり、第5号土坑の堆積状況に類似する。本土坑の場合も層界は明瞭でないため、根による搅乱の可能性がある。全体としてレンズ状の堆積のため、自然埋没したものと考えられる。**[壁・底面]** 底面は中央でやや深くなり、壁は緩やかに外傾して立ち上がる。**[出土遺物]** 覆土中から摩耗した土器片1点が出土した。縄文LRを縦回転に施文している（図38-7）。**[時期]** 縄文時代と考えられるが、出土遺物が少なく詳細な時期は不明である。

第8号土坑／旧表記：07長久保SK-4（図33）

[位置・確認] 東向きの緩斜面、ZT-52グリッドに位置する。Va層で確認した。**[規模・形状]** 開口部は $1.2 \times 1.3\text{m}$ の不整円形、底面は $50 \times 60\text{cm}$ の歪んだ隅丸方形である。確認面からの深さは1.1mである。**[堆積土]** 黒または暗褐色土主体の堆積土で、5層に分けられた。各層には中摺浮石は含ま

れていない。2層にはV b層由来の土を斑状に、3層以下には八戸火山灰が含まれている。3・5層に含まれる暗褐色土は鉄分を多く含み、硬化している。底面にみられる小穴を埋めるのは5層と同じ黒褐色土で、やや締まった土である。**[壁・底面]** 底面は平坦で、中央に小穴が5箇所あり、それらが円形に回る。小穴は逆茂木痕とみられ、太さ10cm弱、深さは5~10cmで先端がやや細くなっている。壁は急角度で立ち上がるが、途中から開口部にかけてやや緩やかに開く部分がある。**[出土遺物]** 出土していない。**[時期]** 中摺浮石降下以前に埋没している。形状から、縄文時代早期~前期初頭に特徴的な落とし穴状遺構と考えられる。

第9号土坑／旧表記：07長久保SK-5（図33）

[位置・確認] 東向きの緩斜面、ZV-51グリッドに位置する。V a層で確認した。**[規模・形状]** 開口部は直径1.35mの不整円形、底面は1辺60cmの隅丸方形で、確認面からの深さは1.15mである。**[堆積土]** 黒~暗褐色土を主体とする堆積土で、9層に細分された。各層に中摺浮石は含まれない。3層以下では地山由来の崩落土、すなわち3・4層にはV b層由来の褐色土が、5層以下には八戸火山灰が含まれる。5~8層は鉄分を多く含み全体が硬化する。9層の砂礫は八戸火山灰の軽石と考えられる。**[壁・底面]** 底面はほぼ平坦で、壁は開口部に向かって直線的に開く。**[出土遺物]** 出土していない。**[時期]** 中摺浮石降下以前に埋没している。形状から、縄文時代早期~前期初頭に特徴的な落とし穴状遺構と考えられる。

第10号土坑／旧表記：07長久保SK-6（図34）

[位置・確認] 東向きの緩斜面、ZR-51グリッドに位置する。III b層で確認した。**[規模・形状]** 平面は直径95cmの円形で、深さは25cmである。**[堆積土]** 黒褐色土が2層に分けられた。自然埋没したと考えられる。**[壁・底面]** 底面は中央がやや窪み、壁は外傾して立ち上がる。**[出土遺物]** 1層から土器片1点が出土した。胴部と思われ、縄文RLが横回転に施文されている（図38-8）。**[時期]** 堆積土の状況から縄文時代の遺構と考えられるが、帰属時期は不明である。

第11号土坑／旧表記：07長久保SK-7（図34）

[位置・確認] 東向きの緩斜面、ZO-49グリッドに位置する。III層の堆積が薄く、V b層で確認した。**[規模・形状]** 平面は直径95cmの円形で、深さは20cmである。**[堆積土]** 黒褐色土の単層である。地山ブロックを含むが、色調が漸移的に変化する堆積のため、自然埋没したものと考えられる。**[壁・底面]** 底面は中央がやや窪み、壁は外傾して立ち上がる。**[出土遺物]** 出土していない。**[時期]** 堆積土の状況から縄文時代の遺構と考えられるが、帰属時期は不明である。

第12号土坑／旧表記：07長久保SK-8（図34）

[位置・確認] 沢地西側の平坦面、ZZ-47グリッドに位置する。III層の堆積が薄く、V b層で確認した。**[規模・形状]** 開口部は1.2×1.3m、底面は直径1.3mのともに円形で、確認面からの深さは65cmである。**[堆積土]** 黒~黒褐色土主体を主体とし、12層に細分された。壁際の堆積には褐色土が含まれており、壁面の崩落土と考えられる。レンズ状の堆積を示すため、自然埋没したものと考えられる。**[壁・底面]** 底面はほぼ平坦で、壁際がやや高い。壁は内傾して立ち上がった後開口部に向けて広がるフラスコ状土坑である。一部の壁の立ち上がり途中にある段差は、崩落によるものとみられる。**[出土遺物]** 出土していない。**[時期]** 縄文時代に属するが、詳細な時期は不明である。

第13号土坑／旧表記：07長久保SK-9（図34）

[位置・確認] 沢地西側の平坦面、ZZ-48グリッドに位置する。Ⅲ層の堆積が薄く、V b層で確認した。

[規模・形状] 開口部は1.35×1.5m、底面は75×90cmの橢円形で、確認面からの深さは65cmである。

[堆積土] 7層に分けられ、上部は黒または暗褐色土、下部は褐色または黄褐色土が主体である。また、壁際には崩落土とみられる地山ブロックが混じる。**[壁・底面]** 八戸火山灰層まで掘り込まれており、底面は平坦である。壁は急角度で立ち上がった後、開口部に向けて大きく広がる。壁側の堆積土に地山ブロックを多く含むことから、本来はフ拉斯コ状土坑であったものと推定できる。**[出土遺物]** 出土していない。**[時期]** 繩文時代に属するが、詳細な時期は不明である。

第14号土坑／旧表記：07長久保SK-10（図35）

[位置・確認] 沢地西側の平坦面、AB-48グリッドに位置する。Ⅲ層の堆積が薄く、V b層で確認した。

[規模・形状] 平面は1.25×1.1mの橢円形で、確認面からの深さは15cmである。**[堆積土]** 黒褐色土の単層である。Ⅲ a・V a層に由来し、浮石を多く含む。**[壁・底面]** 底面はやや起伏があり、壁は緩やかに外傾して立ち上がる。**[出土遺物]** 出土していない。**[時期]** 繩文時代に属するが、詳細な時期は不明である。

第15号土坑／旧表記：07長久保SK-12（図35）

[位置・確認・重複] 沢地西側の平坦面、ZZ-47グリッドに位置する。Ⅲ b層で確認した。第10号竪穴住居跡と重複し、本遺構が新しい。**[規模・形状]** 開口部は1.7×1.6mの歪んだ円形、底面は1.3×1.4mの円形で、確認面からの深さは60cmである。**[堆積土]** 10層に細分された。黒色または黒褐色土がレンズ状に堆積しており、自然埋没したものと考えられる。**[壁・底面]** 底面はほぼ平坦である。壁は内傾して立ち上がった後開口部に向けて広がるため、本来はフ拉斯コ状土坑と考えられる。

[出土遺物] 少量の土器と、不掲載であるが不定形石器1点が出土した。いずれも覆土中からの出土で、図38-9は懸垂文で沈線の内部は擦り消されていない。12は曲線に幅広の沈線と無文帯が施されており中期末葉の大木10式相当と思われる。10の深鉢形土器は色調が黄褐色で下部に黒班があり、0段多条の繩文RLが横回転施文されている。口唇部が面取り調整されており、後期前葉～中葉の所産と思われる。13は底部で底部から直立し外反する。11は第18号土坑出土遺物であるが、誤ってここに掲載した。**[時期]** 繩文時代に属する。出土遺物から繩文時代後期と考えられる。

第16号土坑／旧表記：07長久保SK-13（図36）

[位置・確認・重複] 沢地西側の平坦面、AE-47グリッドに位置する。Ⅲ層とV a層の堆積が薄い場所にあり、Ⅲ b層またはV b層で確認した。底面で第17号土坑と切り合っており、本遺構が新しい。**[規模・形状・壁・底面]** 平面は長軸2.75m、短軸2.4mの隅丸方形である。確認面から15cmのところで平らな底面となるが、南西隅に平面が1×1.2mの不整な円形を呈し、底面からの深さ20cmを測る落ち込み（SK-1）をもつ。3箇所のピットは堆積状況から本土坑の埋没後に新たに掘られたもので、直接本土坑との関連は窺えない。**[堆積土]** ピットの部分を除くと4層に分けられる。各層界は漸移的に変化しており、自然堆積と考えられる。10層に明赤褐色の焼土を含んでいる。焼土は炭化物とともにブロック状に含まれる箇所が多く、廃棄されたものと考えられる。最大径1.3mの範囲に馬蹄形に広がっている。SK-1の堆積土（4層）には黒色土や焼土ブロックが含まれることから人為堆積と考えられる。**[出土遺物]** 少量の土器と磨石類2点、石皿1点が出土した。図39-1～4は床面から出土した。1は口縁部を欠く深鉢形土器である。胴部はやや丸みを持ち、繩文L Rが

横回転に施文される。胎土や色調はやや赤みを帯びており、全体として縄文時代中期の土器の特徴を示す。2は敲石で四面が使用されている。3は一面が使用されている磨石で、4は石皿で同一個体のものが2片出土しているが4のみ図化し、もう1点は写真図版に掲載した。5～9は覆土出土である。5は横位に連続刺突が入る中期後葉の最花式、6は中期末葉の大木10式、7は後期前葉の十腰内I式に相当すると思われる。【時期】遺物は縄文時代中～後期の土器が混在している。底面を中心に出土した復元可能な深鉢から、縄文時代中期と考えられる。

第17号土坑／旧表記：07長久保SK-14（図36）

【位置・確認・重複】沢地西側の平坦面、AE-47グリッドに位置する。第16号土坑底面で円形の落ち込みとして確認した。第16号土坑より本遺構が古い。【規模・形状】開口部は $1.1 \times 1.45\text{m}$ の不整な楕円形、底面は最大径65cmの円形で、確認面からの深さは70cmである。【堆積土】確認後、堆積土をかなり掘り下げた後断面を記録したため上部は不明である。下半部の堆積土は暗褐色土を主体とし、褐色土・黒色土がブロック状に混じり、炭化物の混入がみられる。人為的に埋め戻されたものと考えられる。【壁・底面】底面はほぼ平らで、壁は一部オーバーハングする部分をもつが、多くの場所では急角度で立ち上がった後開口部に向けて広がる。プラスコ状土坑とみられる。【出土遺物】地文のみの土器片がほとんどで、1点のみ図化した。縄文RLを縦回転施文後、縦位に3本の沈線が施文されている（図39-10）。中期後葉の所産と思われる。【時期】少量ながら縄文時代中期の土器が出土しているため、当該期に属するものとしておく。

第18号土坑／旧表記：07長久保SK-15（図35）

【位置・確認】沢地西側の平坦面、AH-46グリッドに位置する。Ⅲ b層で確認した。【規模・形状】開口部、底面とも直径約1mの不整な円形で、確認面からの深さは70cmである。軟質な地盤を掘り込んでいるため崩落の可能性もあるが、確認した断面形は筒形である。脇に直径約30cm、深さ10cmの円形をした落ち込みを伴い、落ち込み内の堆積はⅣ層を主体としている。【堆積土】黒褐色土主体の堆積土が3層に分けられた。最上部には焼土や炭化物を、その他の層も炭化物を多く含む。人為堆積の可能性がある。【壁・底面】底面は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる箇所が多く、一部でオーバーハングする。沢に近いため底面付近で湧水が認められる。【出土遺物】地文のみの土器片がほとんどで、3点図化した。いずれも覆土からの出土である。図38-11は誤って第15号出土遺物の項に掲載したものである。深鉢形土器の口縁部で口縁部は大きく外反している。口縁部から胴部には断面が三角状の微隆起線を持ち、隆起線文内部に縄文L Rが充填されており、中期末葉の大木10式相当と思われる。図39-11・12は地文のみで、12は横位に沈線が入る。【時期】第10号竪穴住居跡より新しいが、周囲の遺構の状況から近接した時期の中期末葉頃と考えられる。

3 焼土遺構

第4号焼土／旧表記：07長久保SN-1（図37）

【位置・確認】東向きの緩斜面、ZR-51グリッドに位置する。Ⅲ b層で確認した。【規模・形状】35×40cmの円形に焼土範囲が広がる。【堆積土】掘り込みは持たず、5cmの厚さでⅢ層が被熱している。焼土の色調は褐色である。【出土遺物】なし。【時期】Ⅲ b層で検出されたため縄文時代の可能性が高いが、詳細な時期は不明である。

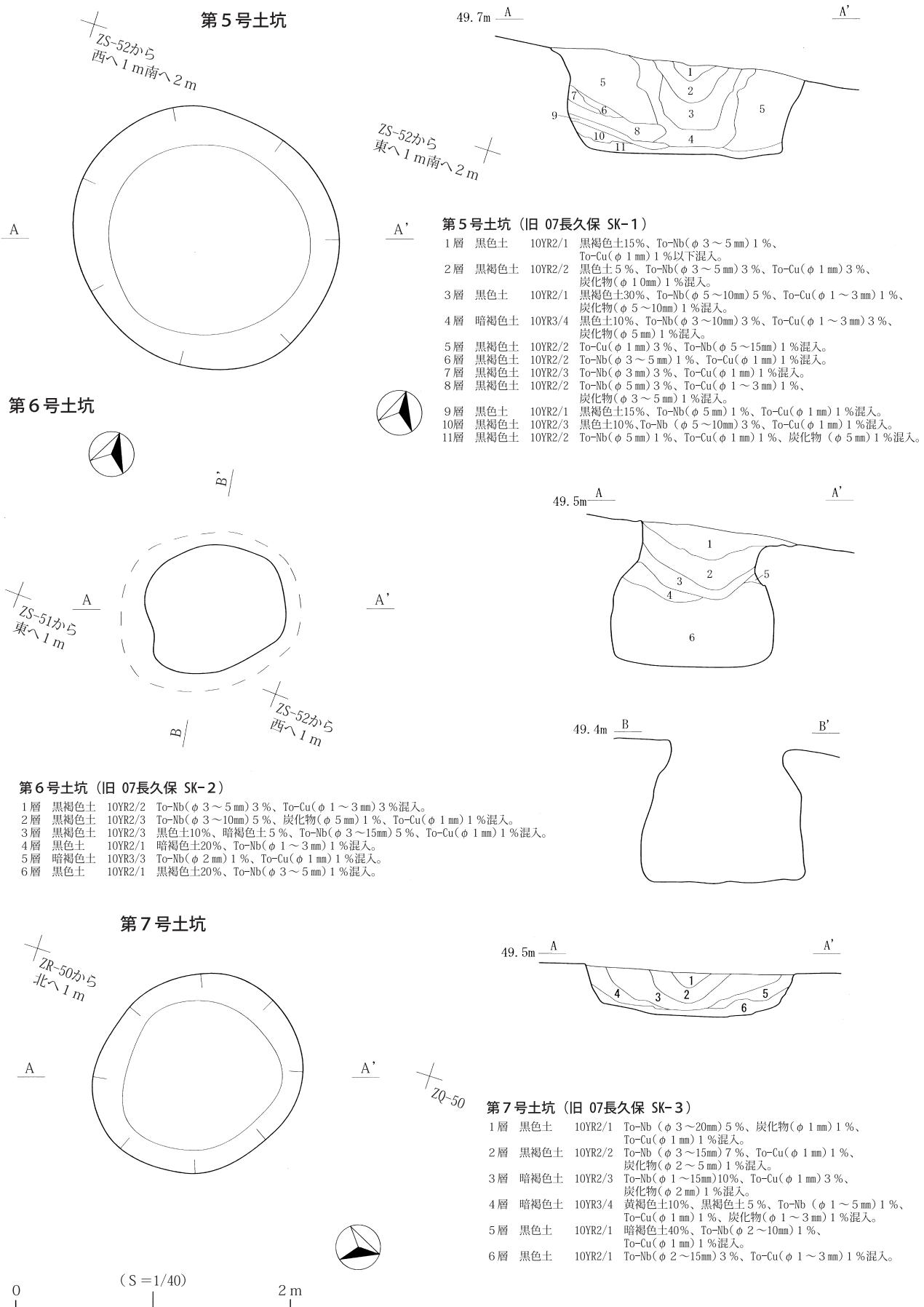


図32 土坑①

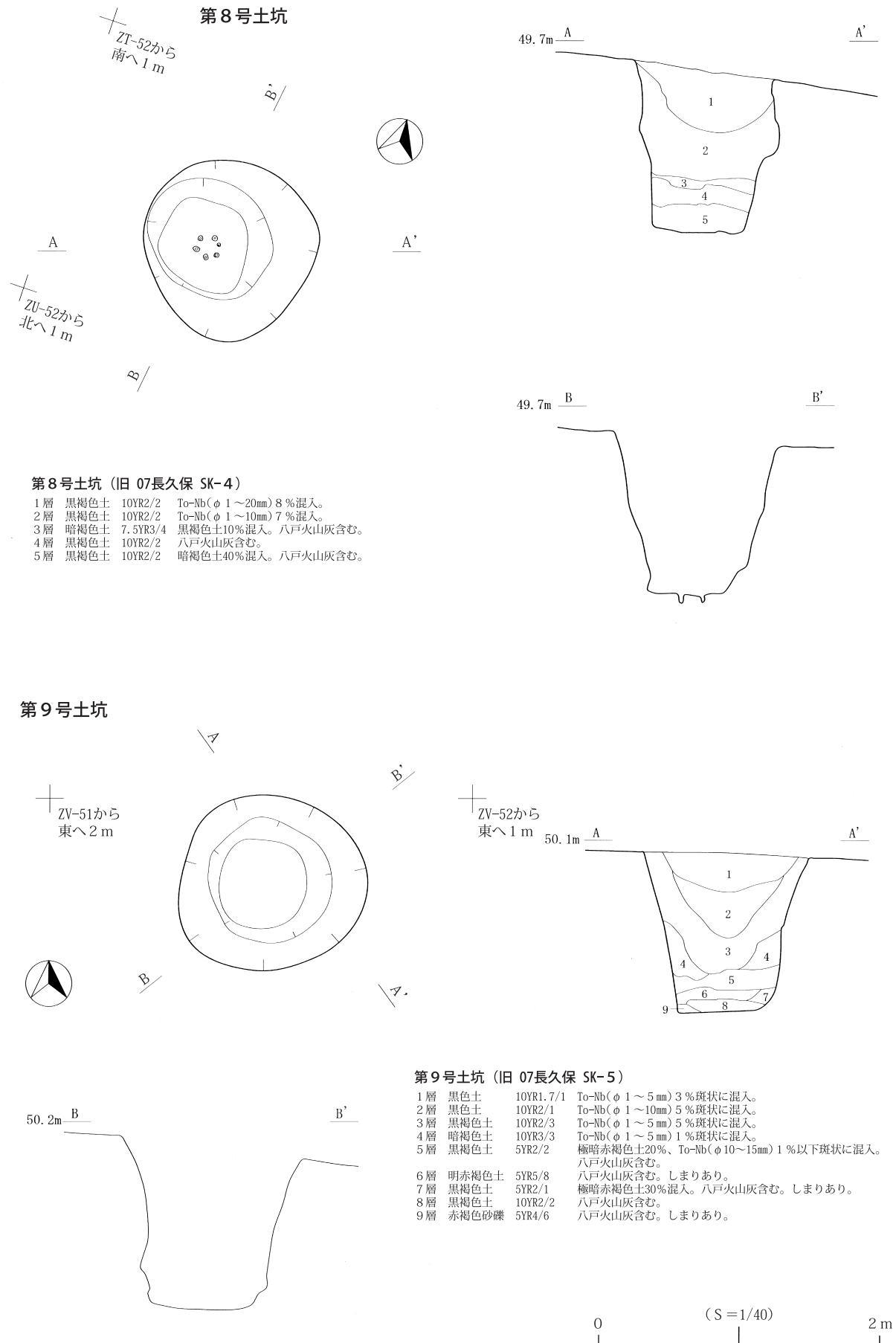


図33 土坑②

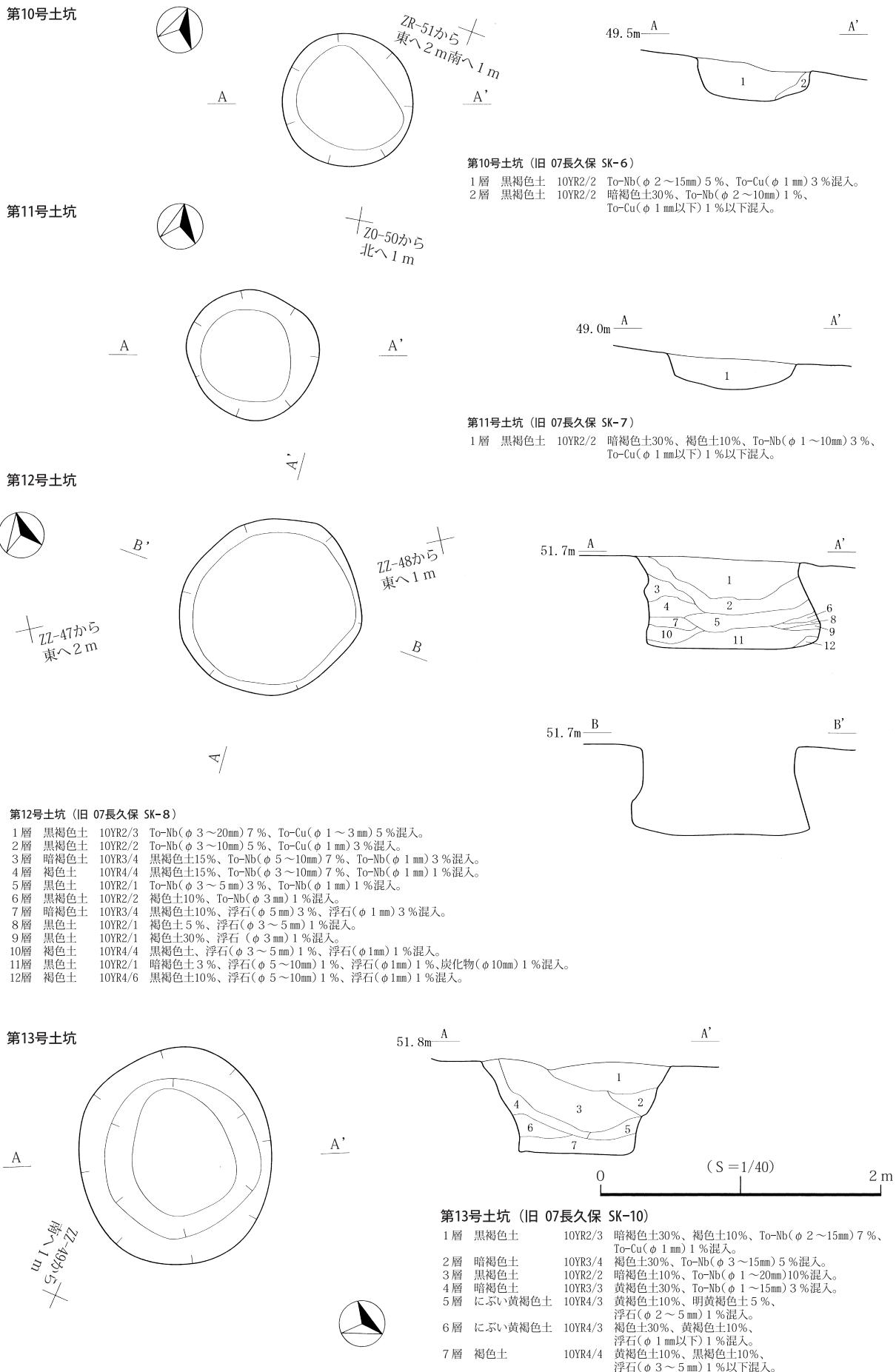
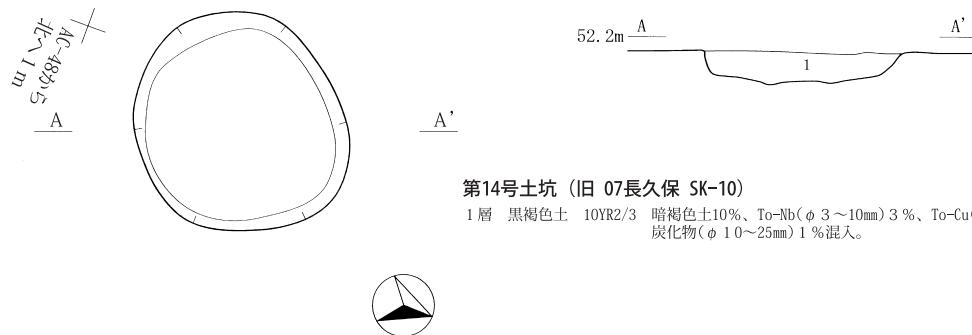


図34 土坑③

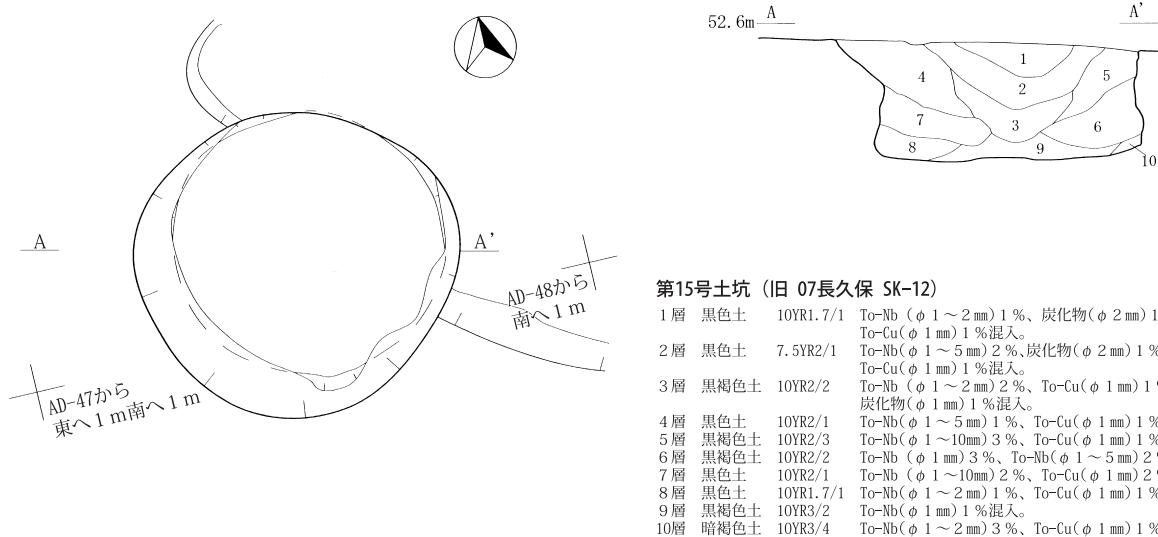
第14号土坑



第14号土坑 (旧 07長久保 SK-10)

1層 黒褐色土 10YR2/3 暗褐色土10%、To-Nb(ϕ 3~10mm) 3%、To-Cu(ϕ 1mm) 1%、炭化物(ϕ 10~25mm) 1%混入。

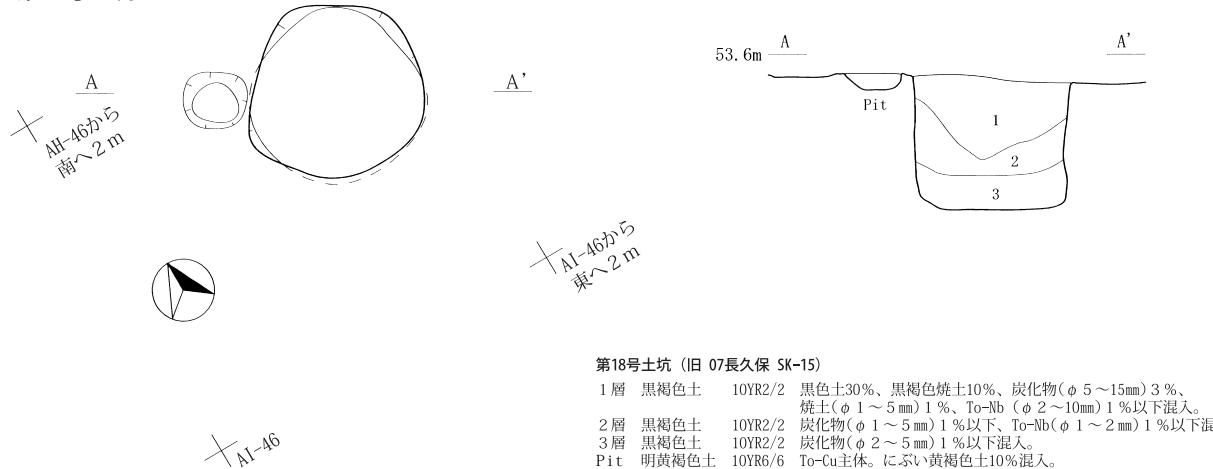
第15号土坑



第15号土坑 (旧 07長久保 SK-12)

1層 黒色土 10YR1.7/1 To-Nb (ϕ 1~2mm) 1%、炭化物(ϕ 2mm) 1%、To-Cu(ϕ 1mm) 1%混入。
2層 黒色土 7.5YR2/1 To-Nb(ϕ 1~5mm) 2%、炭化物(ϕ 2mm) 1%、To-Cu(ϕ 1mm) 1%混入。
3層 黒褐色土 10YR2/2 To-Nb (ϕ 1~2mm) 2%、To-Cu(ϕ 1mm) 1%、炭化物(ϕ 1mm) 1%混入。
4層 黒色土 10YR2/1 To-Nb(ϕ 1~5mm) 1%、To-Cu(ϕ 1mm) 1%混入。
5層 黒褐色土 10YR2/3 To-Nb(ϕ 1~10mm) 3%、To-Cu(ϕ 1mm) 1%混入。
6層 黒褐色土 10YR2/2 To-Nb (ϕ 1mm) 3%、To-Nb(ϕ 1~5mm) 2%混入。
7層 黒色土 10YR2/1 To-Nb (ϕ 1~10mm) 2%、To-Cu(ϕ 1mm) 2%混入。
8層 黒色土 10YR1.7/1 To-Nb(ϕ 1~2mm) 1%、To-Cu(ϕ 1mm) 1%混入。
9層 黒褐色土 10YR3/2 To-Nb(ϕ 1mm) 1%混入。
10層 暗褐色土 10YR3/4 To-Nb(ϕ 1~2mm) 3%、To-Cu(ϕ 1mm) 1%混入。

第18号土坑



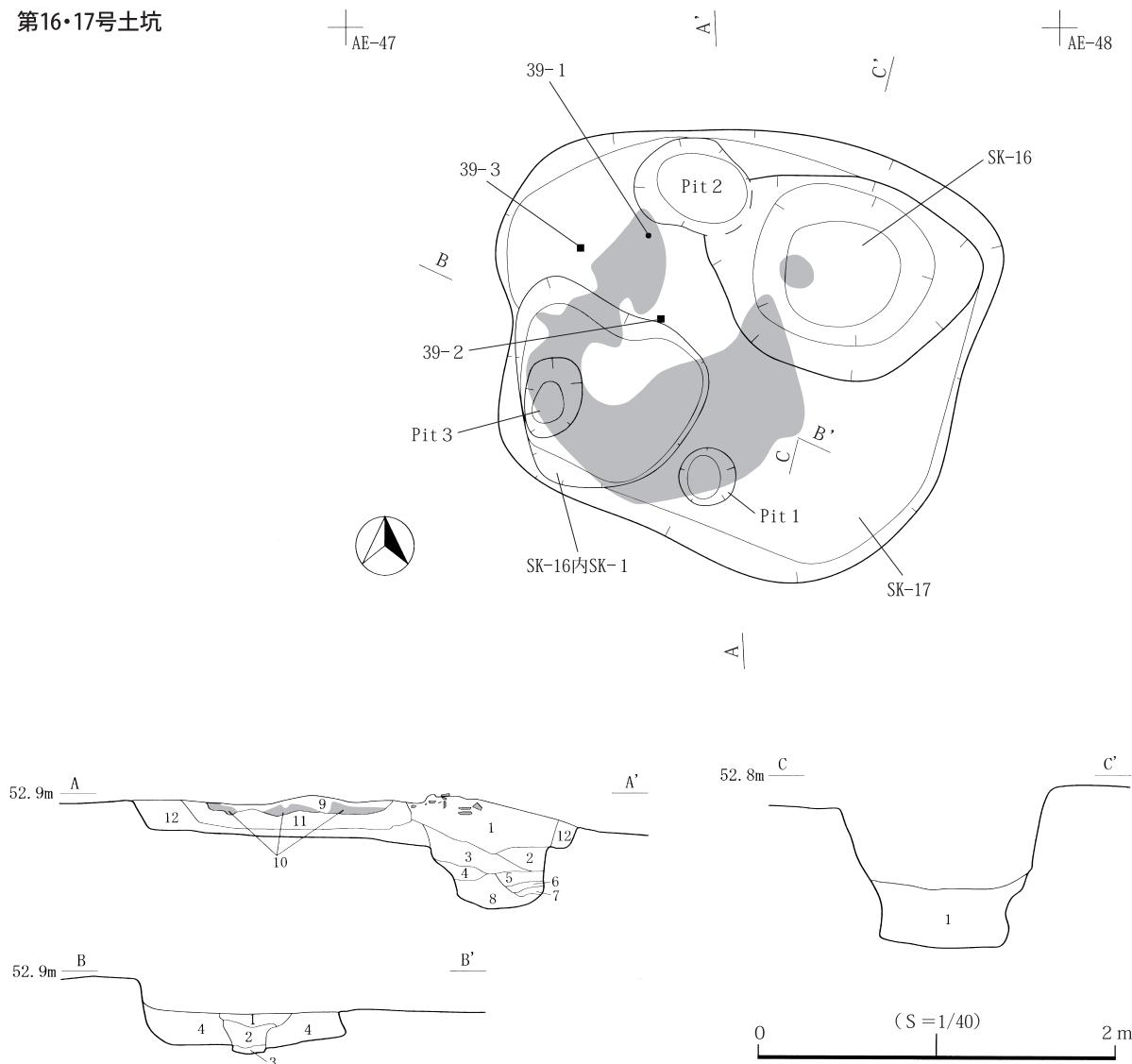
第18号土坑 (旧 07長久保 SK-15)

1層 黒褐色土 10YR2/2 黒色土30%、黒褐色土10%、炭化物(ϕ 5~15mm) 3%、粘土(ϕ 1~5mm) 1%、To-Nb (ϕ 2~10mm) 1%以下混入。
2層 黒褐色土 10YR2/2 炭化物(ϕ 1~5mm) 1%以下、To-Nb(ϕ 1~2mm) 1%以下混入。
3層 黒褐色土 10YR2/2 炭化物(ϕ 2~5mm) 1%以下混入。
Pit 明黄褐色土 10YR6/6 To-Cu主体。にぶい黄褐色土10%混入。

0 (S = 1/40) 2 m

図35 土坑④

第16・17号土坑



第16号土坑 (旧 07長久保 SK-13)

1層 黒色土	10YR2/1	To-Nb(φ 1 ~ 5 mm) 3%、To-Cu(φ 1 mm) 3%、炭化物(φ 2 ~ 5 mm) 1%混入。
2層 黒褐色土	10YR2/3	To-Nb(φ 1 ~ 5 mm) 3%、To-Cu(φ 1 mm) 1%、炭化物(φ 1 ~ 3 mm) 1%以下混入。
3層 黒褐色土	10YR2/2	To-Nb(φ 1 ~ 3 mm) 1%、To-Cu(φ 1 mm) 1%、炭化物(φ 2 ~ 10 mm) 1%混入。
4層 暗褐色土	10YR3/3	黒褐色土20%、To-Nb(φ 1 ~ 3 mm) 1%、炭化物(φ 2 mm) 1%以下、To-Cu(φ 1 mm) 1%以下混入。
5層 黒色土	10YR2/1	黒褐色土10%、To-Nb(φ 1 ~ 3 mm) 1%、To-Cu(φ 1 mm) 1%混入。
6層 黒褐色土	10YR2/2	To-Nb(φ 1 ~ 3 mm) 1%以下、To-Cu(φ 1 mm以下) 1%以下混入。
7層 黒褐色土	10YR2/3	To-Nb(φ 1 mm) 1%以下混入。
8層 黒褐色土	10YR2/3	黒褐色土10%、To-Nb(φ 1 ~ 5 mm) 1%、To-Cu(φ 1 mm) 1%以下混入。
9層 黒色土	10YR1.7/1	黒褐色土30%、To-Nb(φ 1 mm) 1%以下、To-Cu(φ 1 mm以下) 1%以下混入。
10層 明赤褐色焼土	5YR5/8	黒褐色土30%、To-Nb(φ 1 ~ 3 mm) 1%、To-Cu(φ 1 mm) 1%混入。
11層 暗褐色土	10YR3/4	黒褐色土10%、To-Nb(φ 2 ~ 10 mm) 3%、To-Cu(φ 1 mm) 1%混入。
12層 褐色土	10YR4/4	暗褐色土20%、黒褐色土10%、To-Nb(φ 1 ~ 3 mm) 3%、To-Cu(φ 1 mm以下) 1%混入。

SK-16内SK-1

1層 黒褐色土	10YR2/2	To-Cu(φ 1 mm以下) 2%、To-Nb(φ 1 ~ 5 mm) 1%混入。
2層 黒色土	10YR2/1	黒褐色土(10YR2/3)20%、黒褐色土(10YR2/2)10%、 To-Cu(φ 1 mm以下) 1%、焼土(φ 1 ~ 2 mm) 1%以下、To-Nb(φ 1 mm) 1%以下混入。
3層 暗褐色土	10YR3/3	To-Cu(φ 1 mm以下) 1%、To-Nb(φ 1 mm) 1%以下混入。
4層 黒褐色土	10YR2/3	黒褐色土30%、To-Nb(φ 1 ~ 10 mm) 5%、焼土(φ 20 ~ 30 mm) 3%、To-Cu(φ 1 mm) 2%混入。

第17号土坑 (旧 07長久保 SK-14)

1層 暗褐色土	10YR3/4	褐色土20%、黒褐色土10%、To-Nb(φ 3 ~ 15 mm) 5%、To-Cu(φ 1 mm) 1%混入。
---------	---------	--

図36 土坑(5)

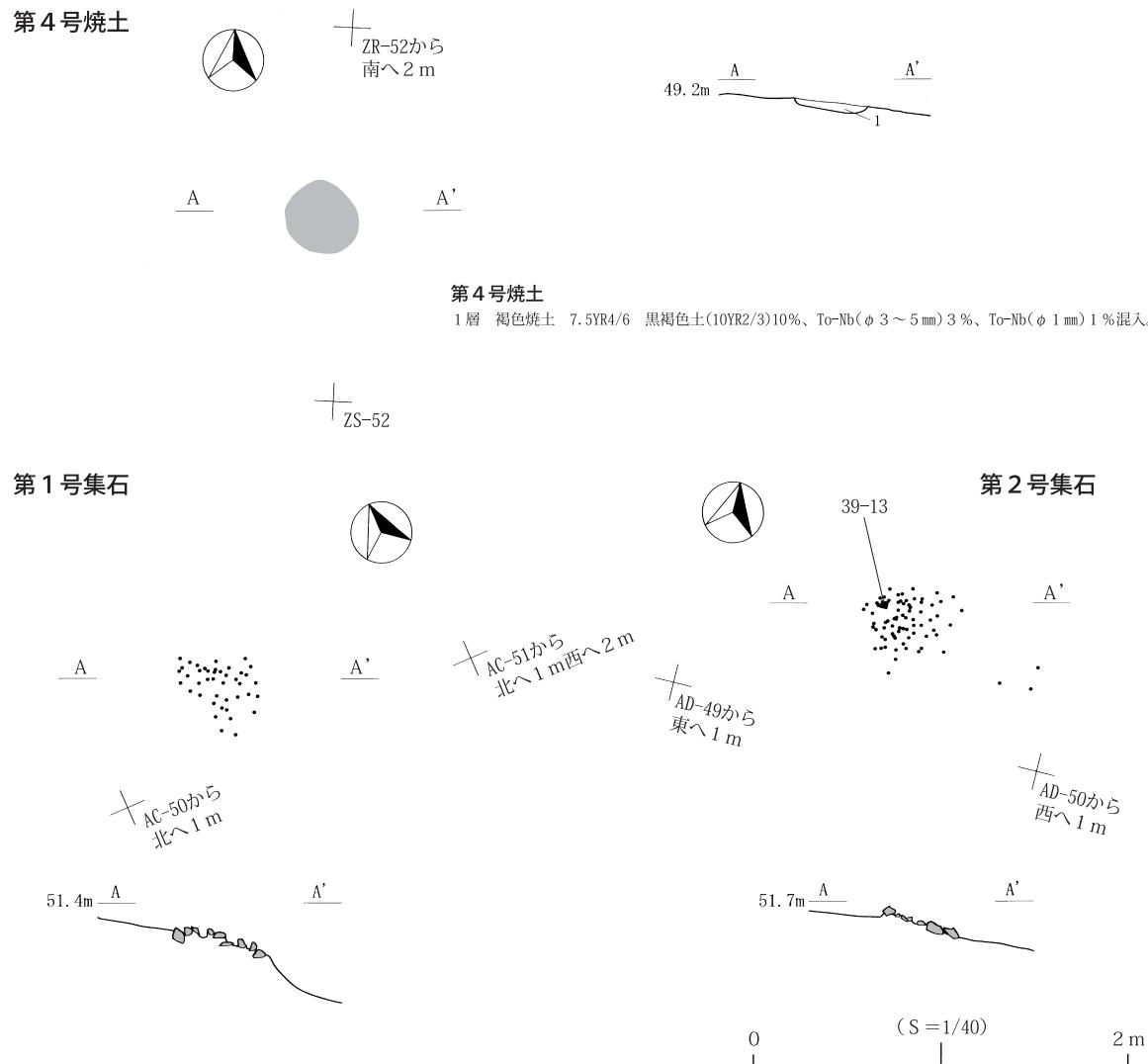


図37 焼土遺構・集石遺構

4 集石遺構

第1号集石／旧表記：07長久保集石－1（図37）

[位置・確認] 沢地に下る緩斜面、AB-50グリッドに位置する。III b層で確認した。**[規模・形状]** 40×55cmの範囲に、こぶし大を主体とする礫が30個ほど集中していた。**[堆積土]** 掘り込みは認められず、III層中に礫が置かれたような状況である。配置された礫の下面はやや傾斜している。**[出土遺物]** 矽はすべて自然矽で、チャートの亜角矽を主体としている。**[時期]** 顯著な出土遺物がなく不明であるが2号集石と類似しており、縄文時代に属する可能性がある。

第2号集石／旧表記：07長久保集石－2（図37）

[位置・確認] 沢地に下る緩斜面の、AC-49グリッドに位置する。III b層で確認した。**[規模・形状]** 55×50cmの範囲に、こぶし大を主体とする礫が50個ほど集中していた。**[堆積土]** 掘り込みは認められず、III層中に礫が置かれたような状況である。配置された礫の下面はやや傾斜している。**[出土**

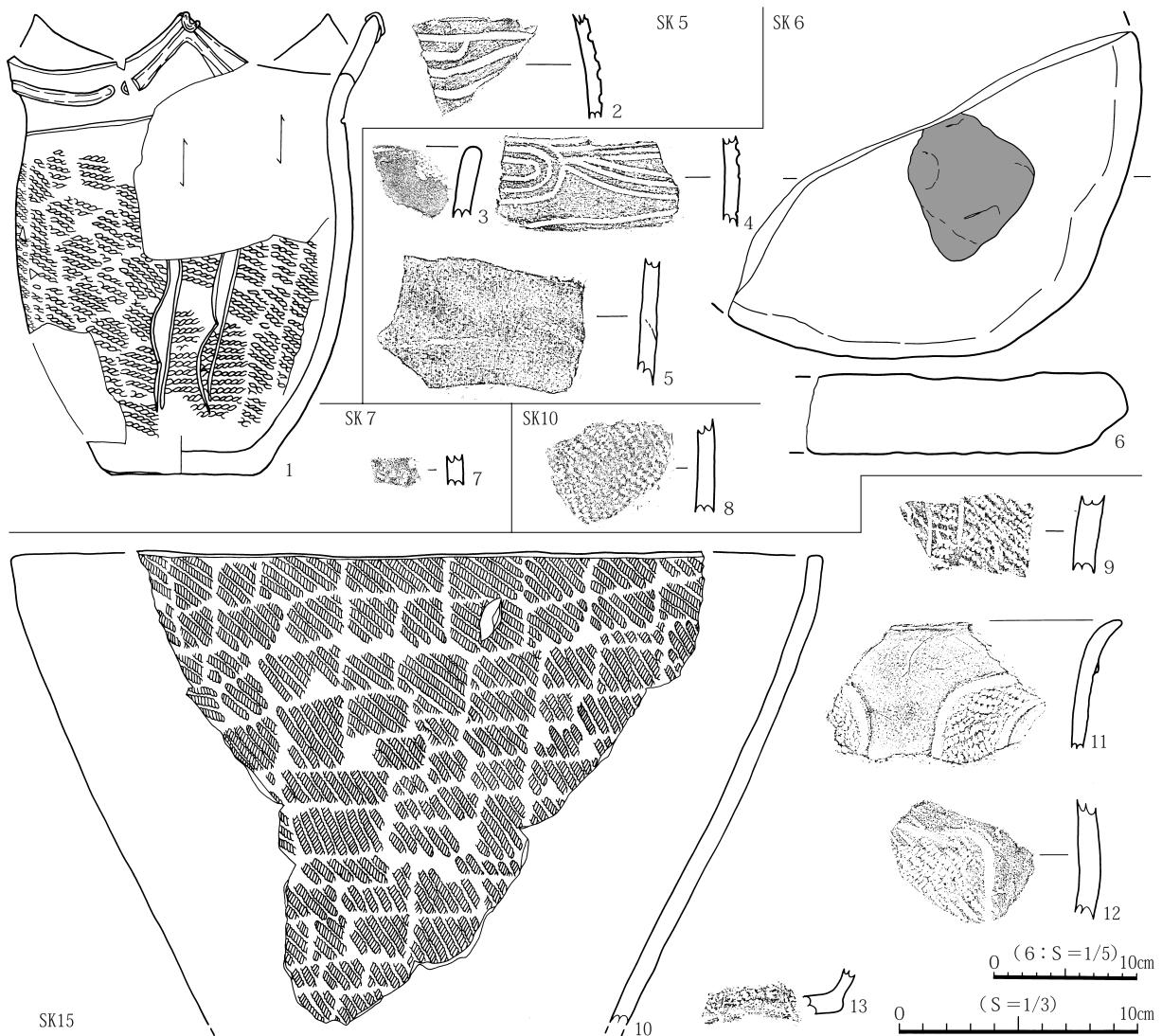


図38 土坑出土遺物①

遺物】土器の出土はわずかで破片も細かく図化に耐えうるものはなかった。礫は1点を除き自然礫で、チャートの亜角礫が主体である。一部被熱したものを含む。磨石類に含めた敲石は、砂岩を素材とし、使用面は一面である(図39-13)。【時期】敲石が1点出土しており、縄文時代の可能性がある。

5 包含層出土遺物

遺物は平箱(59×36×16cm)で16箱である。重量計測は行っていない。

1) 土器(図40~48)

縄文時代早期から後期、弥生時代後期と幅広い時期が出土し、縄文時代中期後葉から後期前葉の出土が主体をなす。全体的にやや大きめの破片で、まとまった出土状態のものも多く、個体になるもの、ある程度器形がわかるものがいくつかある。掲載基準に関しては長久保(2)遺跡に準ずる。特徴として、縄文時代中期は褐色から橙色、後期は褐色から黒褐色が大半を占め、胎土の含有物の海面骨針は

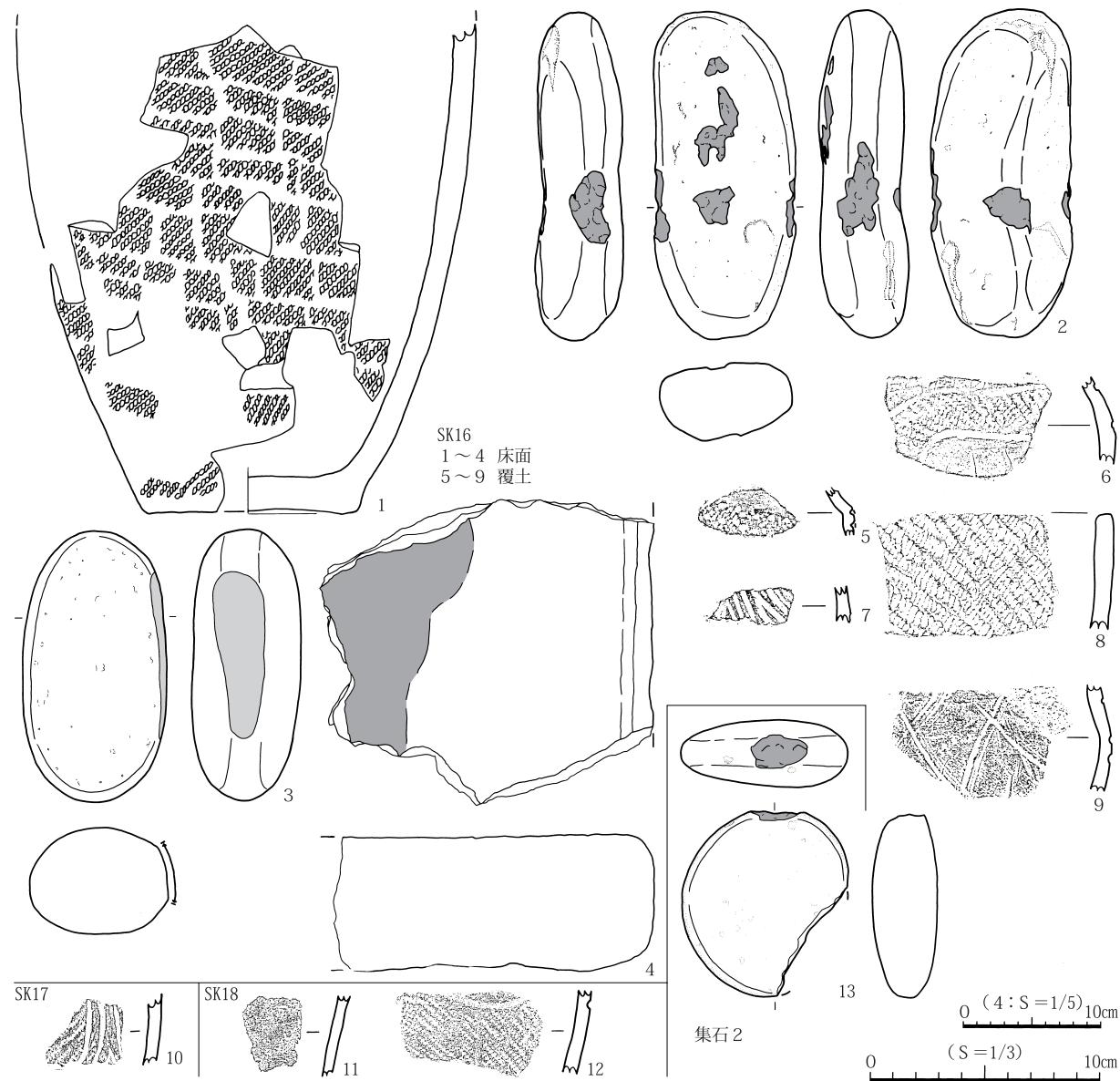


図39 土坑出土遺物②・集石遺構出土遺物

中期の土器のみに含み、色調や胎土に時期で差が認められた。また後期の土器は口唇部が平らに面調整されているものがほとんどで、中期と後期を分ける判断基準ともした。調査区の東側に位置する旧河道の遺物に関しては、層位ごとの時期差が追えなかったため、包含層遺物に含め掲載することとし、観察表で出土層位を算用数字記載することで、ローマ数字記載の包含層出土遺物と異とした。

縄文時代早期の土器（図40－1～9）（物見台式・赤御堂式相当）

1・2・5～7は同一個体と思われる。内外面ともに丁寧にミガキ調整され、沈線文と貝殻復縁文が並行に施文されている。8と9は同一個体、内外面に節の細長い同一原体での縄文が施文され、8の内面には縄文の末端痕が残る。平口唇で微量に纖維を含むことから赤御堂式新段階相当と思われる。

縄文時代前期の土器（図40－10・11）（円筒下層d式相当）

10・11の破片のみの出土で、ともに纖維を含む。10は横位に微隆起線の上から連続刺突文され、11は多軸絡条体が施文されている。

縄文時代中期の土器（図40-12～図42-13）**中期中葉から後葉の土器（図40-12～図41-3）（円筒上層e式・榎木林式相当）**

全体として焼きの良い印象を受けた。沈線文を主体とする一群である。12～21・23は口縁部で、突起を持つ波状口縁と思われる。12、13、17は口縁部波頂部で隆帯を持つ。14・15は口唇部が貼付により肥厚し共に凹線が入る。19の口唇部にはキザミが入り、21は原体圧痕されている。14～16、18～22は2～3条の横位または弧状の沈線文が施文されている。渦巻き状の文様の12・14・15や、図42-1～3は榎木林式に含まれると思われる。

中期後葉から末葉の土器（図41-4～図42-13）（最花式・大木9式～大木10式相当）

器形がわかるものではなく、破片が目立つ。4～13は口縁部片で4・5は幅広の無文、6～8は口縁部直下で湾曲する。10～13は口縁部下に沈線が匁字状に伸び、41-14～30、42-1～3の胴部片についても匁字状文と橈円（円形）ないし方形の区画文を持ち、擦り消しによる無文帯が存在する。沈線には浅く幅広い皿状の断面のもの（19・20・28）、細く断面形がV字に近いものの2種の存在が確認できる（25・29・30）。14・16は横位に連続刺突文が施文されている。30には無文帯端に耳状の貼り付けがある。4～6・14～18は最花式、28～30・42-1～3は大木10式相当あるいは後期初頭（牛ヶ沢式相当）まで下がる可能性もあると思われる。図42-4～13は隆帯を持つ一群であり、大木9・10式に相当すると思われる。

縄文時代後期の土器（図42-14～図45-15）**後期初頭～前葉の土器（図42-14～図44-5）（十腰内I式に相当する土器群）**

沈線文を主体とする土器群である。14は口縁部に断面三角形の隆帯を持つ。15・16は同一個体で口縁部は直立て、三角文状と入り組み状の隆沈線を持つ。17～43-8は口唇直下に沈線がめぐる。11・13は浅鉢形土器、12は切断壺形土器で11～16は同一の胎土・焼成と思われる。19・図44-5は壺形土器で施文範囲が底部までは及ばないことから十腰内式の新しい段階に含まれると思われる。

後期前葉～中葉の土器（図44-6～図45-15）（十腰内II式～III式、丹後平式相当）

縄文原体は単節施文と擦り消し縄文を基本とし、非結束羽状文の施文数が多い。6～8は浮き彫り状で9・10は同一個体と思われる。口縁部は無文帯のもの（13・15・3）、連続刺突されるものがある（1・2）。

縄文時代中期～後期の粗製土器（図45-16～図48-8）

口唇部形態は丸口唇と平口唇で、後期は平口唇が主体である。16～22は胴部に最大径があり、頸部～口縁下部は曲線的に括れる。図46-10～図47-1は口縁部に横位に沈線や縄文圧痕が施文されるもの、折り返し状に肥厚し段を有するものもあり後期に属するものと思われる。21・図48-1～8は底部でミガキ調整された無文が主体をなす。6・8は網代痕で8は一本越え一本送りの網代痕が残る。

弥生時代中期末葉～後期の土器（図48-9・10）（天王山式相当）

9の口縁部は受け口状で、多条の横走沈線と波状沈線の交互を主文様とする。10の口縁部形態は弱い波状を呈し、口縁部の傾きから弥生時代に含まれると思われる。

2) 石器

分類基準は長久保(2)遺跡に準ずる。糠塚小沢遺跡のみ出土のものは記載した。

剥片石器（図48）

石槍（図48-11） 石鏃の条件の中から長さが5cm以上のもので、棒状で身部に厚さを持つものとした。11は棒状で厚手の形態である。石鏃の剥離面と比べ、剥離面の厚みもある。

石鏃（図48-13～15） 凸基有茎鏃が3点出土した。4・15は基部にアスファルトが付着する。

両極石器（図48-17） 1点出土した。17は円礫素材で二極一対の刃部と両極剥離痕を持つ。

不定形石器（Rフレーク）（図48-16・18～22） 48点出土し5点掲載した。16は横長剥片素材で、18は縦長剥片を素材とする。22は縦長剥片の末端部に搔器状の刃部である。

礫石器（図48・49）

磨製石斧（図48-23・24、図49-1～3） 5点出土した。完形のものは1のみである。基部が残るものは1と2で共に尖る。刃部の形態は1と23が丸みを持ち、4はやや扁平の様相を示す。

磨石類（図49-4～8） 5点出土した。4は円礫を使用。5は側面が擦り面で6～8は敲き痕がある。

砥石（図49-9） 1点出土した。形状は四角形で、研ぎ面は三面で、帰属時期は中近世と思われる。

石錐（図49-10） 剥離調整により縁辺部に対となる凹辺部を有するもの。1点出土した。石材はデイサイトで、形態は扁平で中央部に敲き痕がある。

石皿類（図49-11・12） 磨石類を除いたもの、作業面が広く大きいもので、台石を含む。2点出土した。11は側縁を敲き調整している。12は残存部から四角形状を呈し、磨り面は緩やかに凹み形成する。

3) 土製品（図49-13）ミニチュア土器1点、粘土塊2点の出土である。粘土塊は写真のみ掲載した（図版41）。

4) 陶磁器・鉄製品

陶磁器 ZN-54・55など沢の上層を中心に64点出土したが、遺構に伴うものはない。写真図版52に一部を掲載した。6は肥前産の染付磁器猪口である。口径は7.0cm、器高は5.6cmで18世紀後半の製品である。7は京・信楽系の小杉碗で、18世紀の製品であろう。8は肥前産の染付磁器碗で、17世紀後半の製品である。

鉄製品 4点出土した。口縁部の小破片が1片出土している。器種・時期ともに不明である。

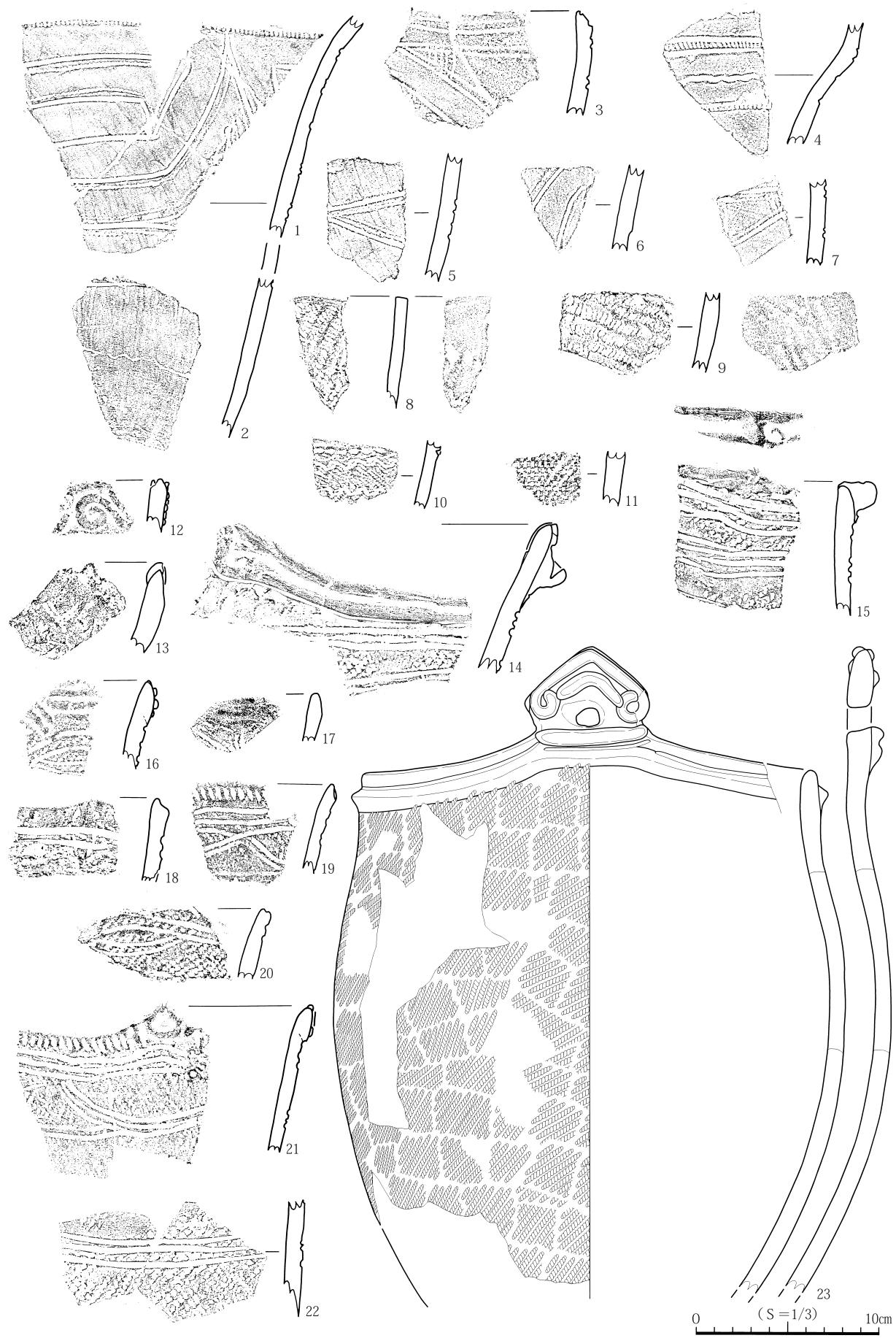


図40 包含層出土土器①

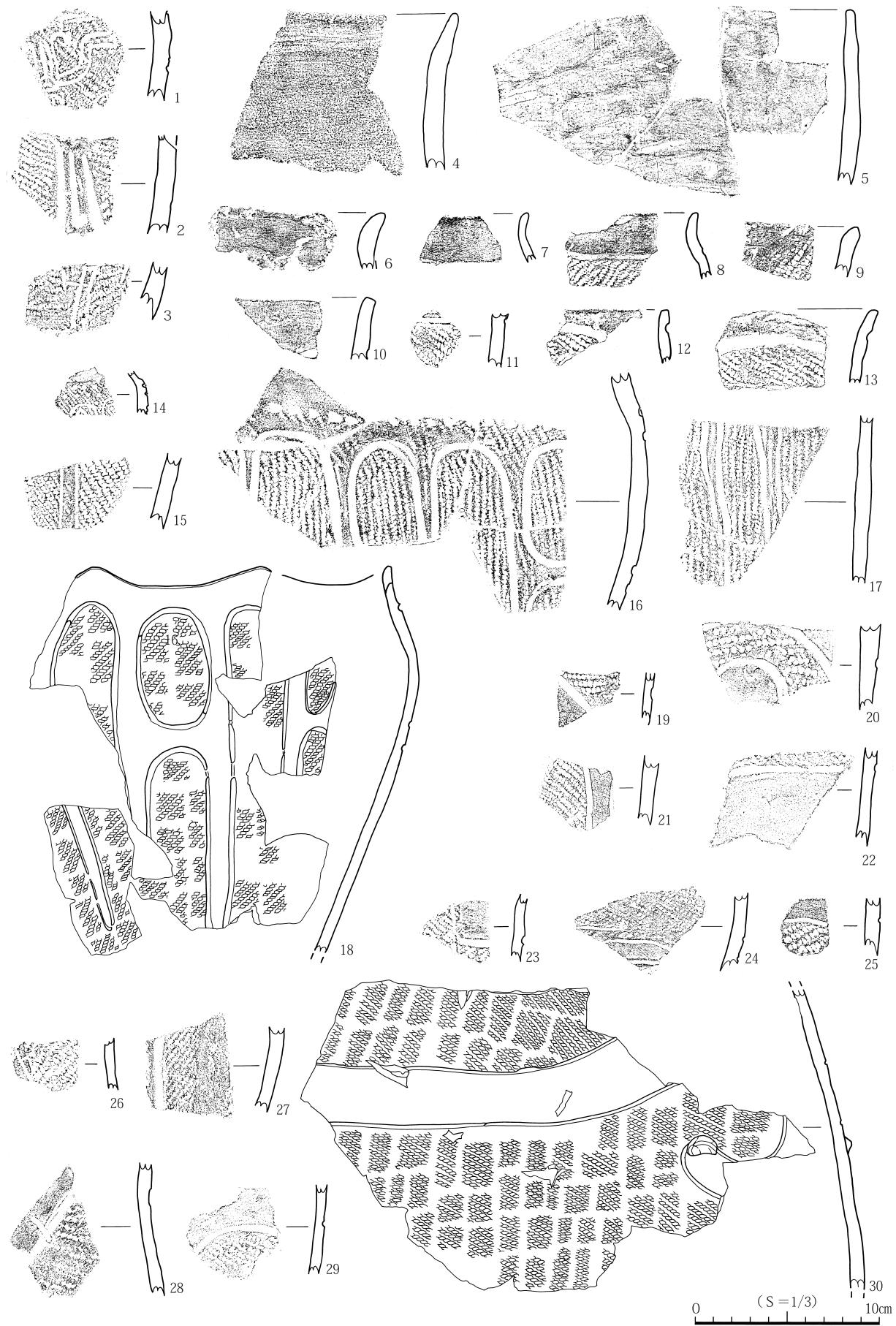


図41 包含層出土土器②

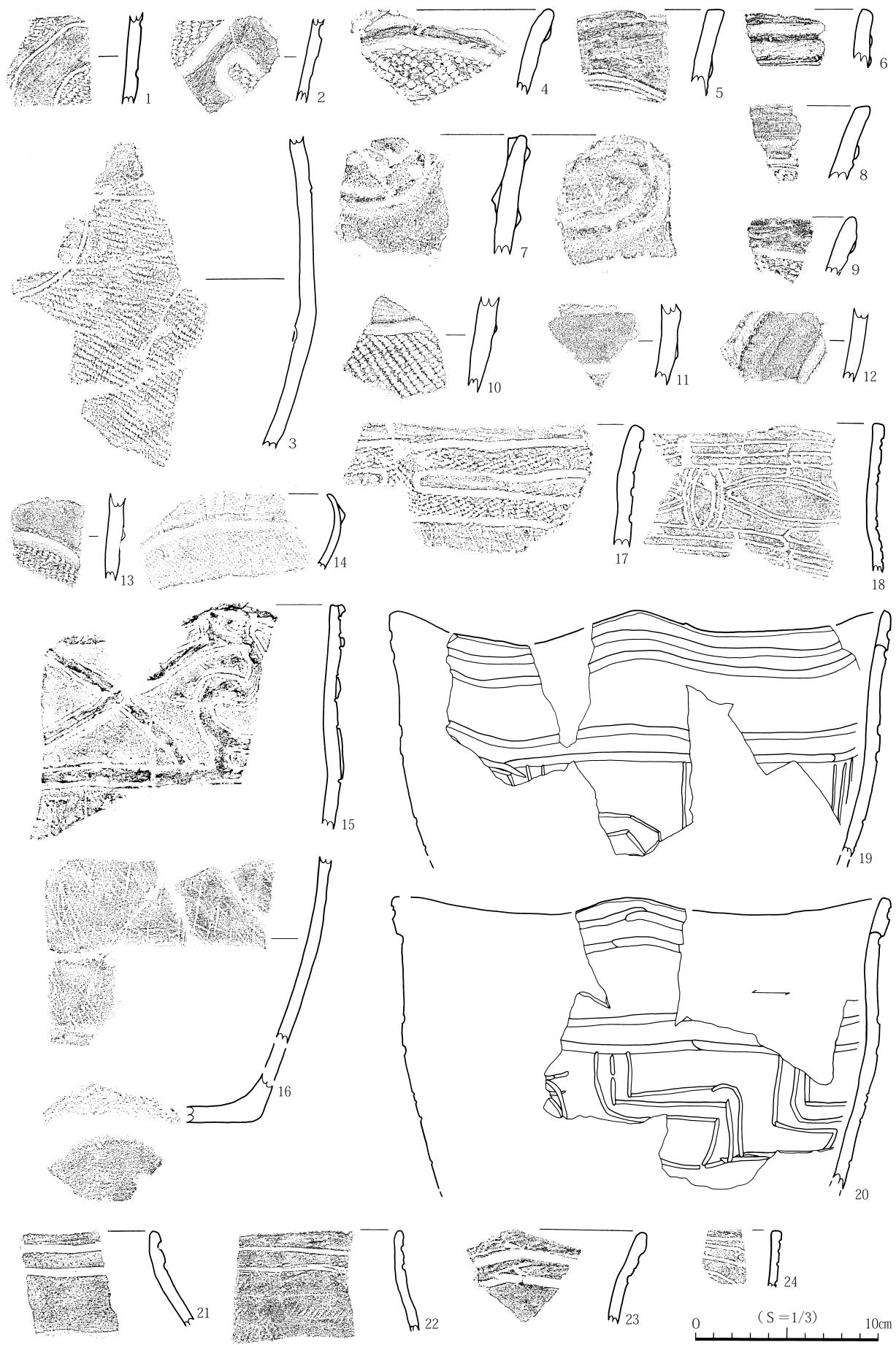


図42 包含層出土土器③

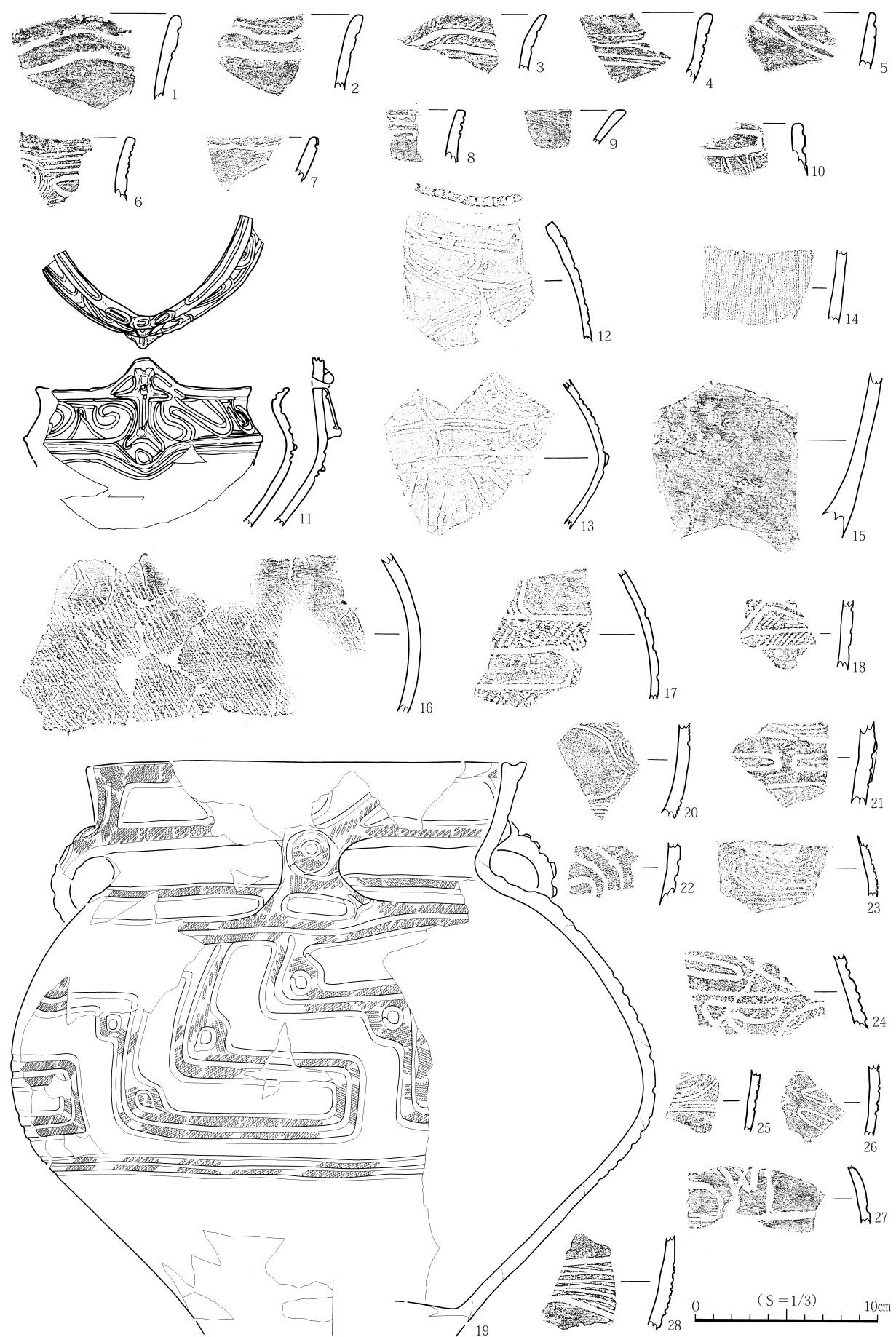


図43 包含層出土土器④

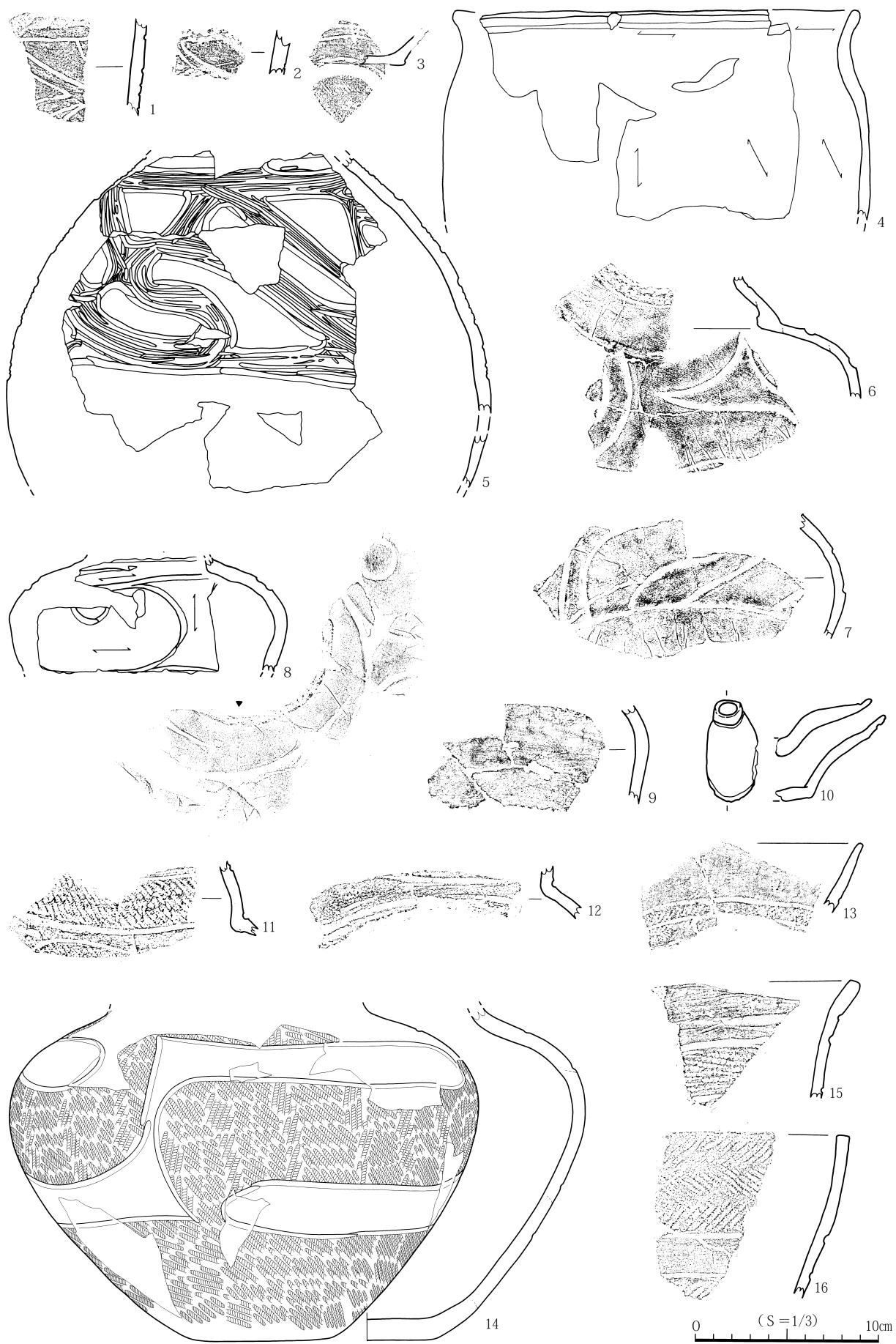


図44 包含層出土土器(5)

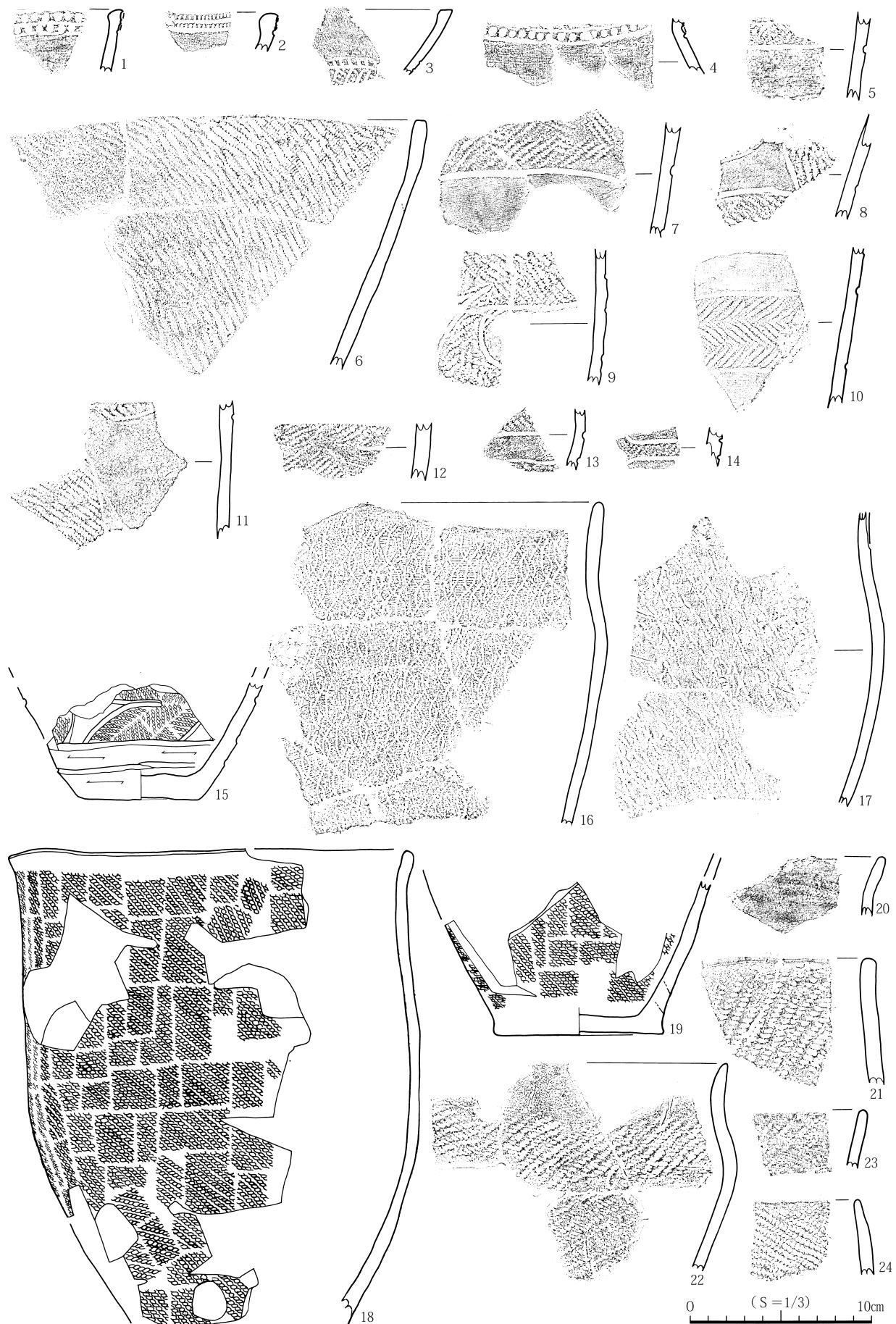


図45 包含層出土土器⑥

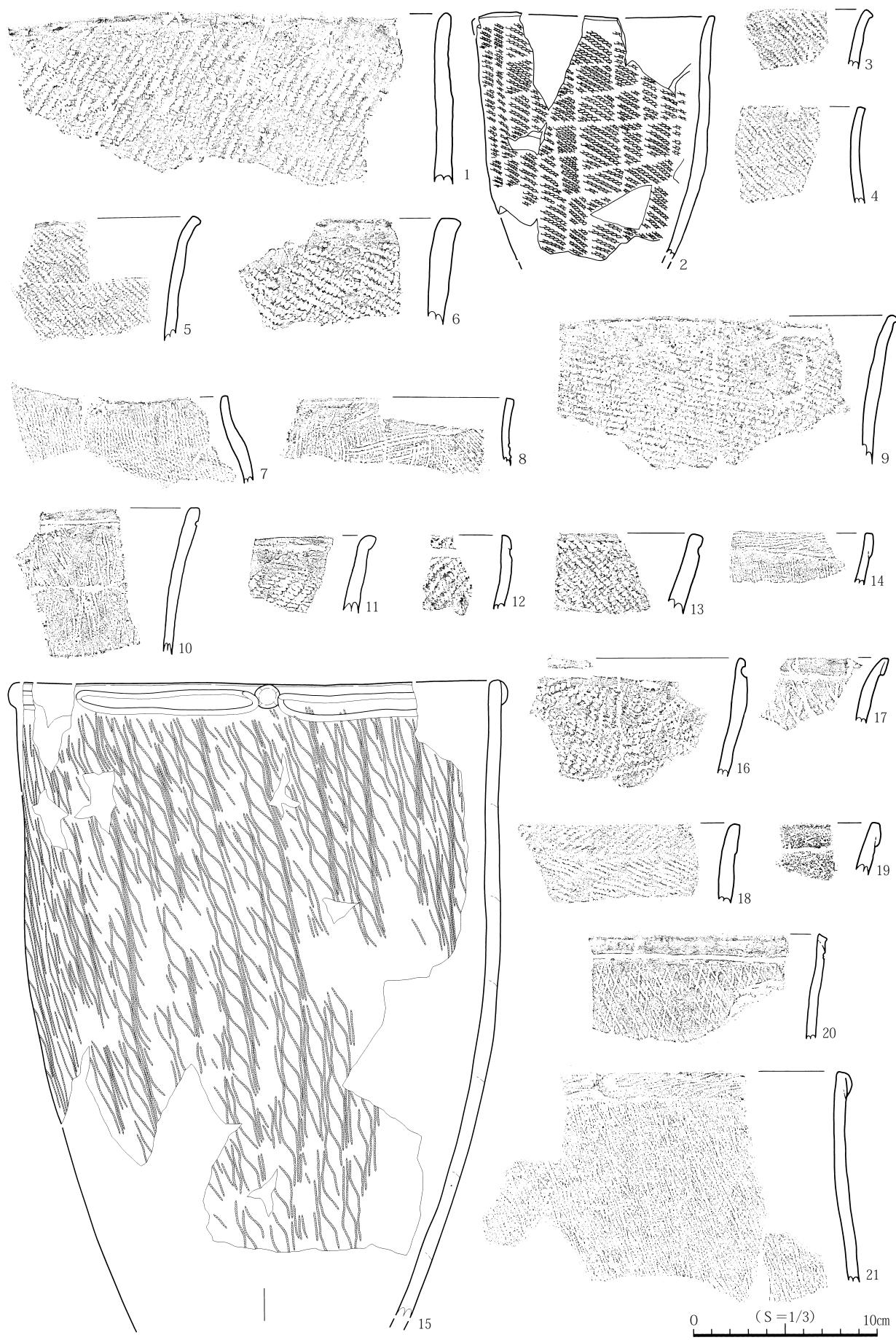


図46 包含層出土土器⑦

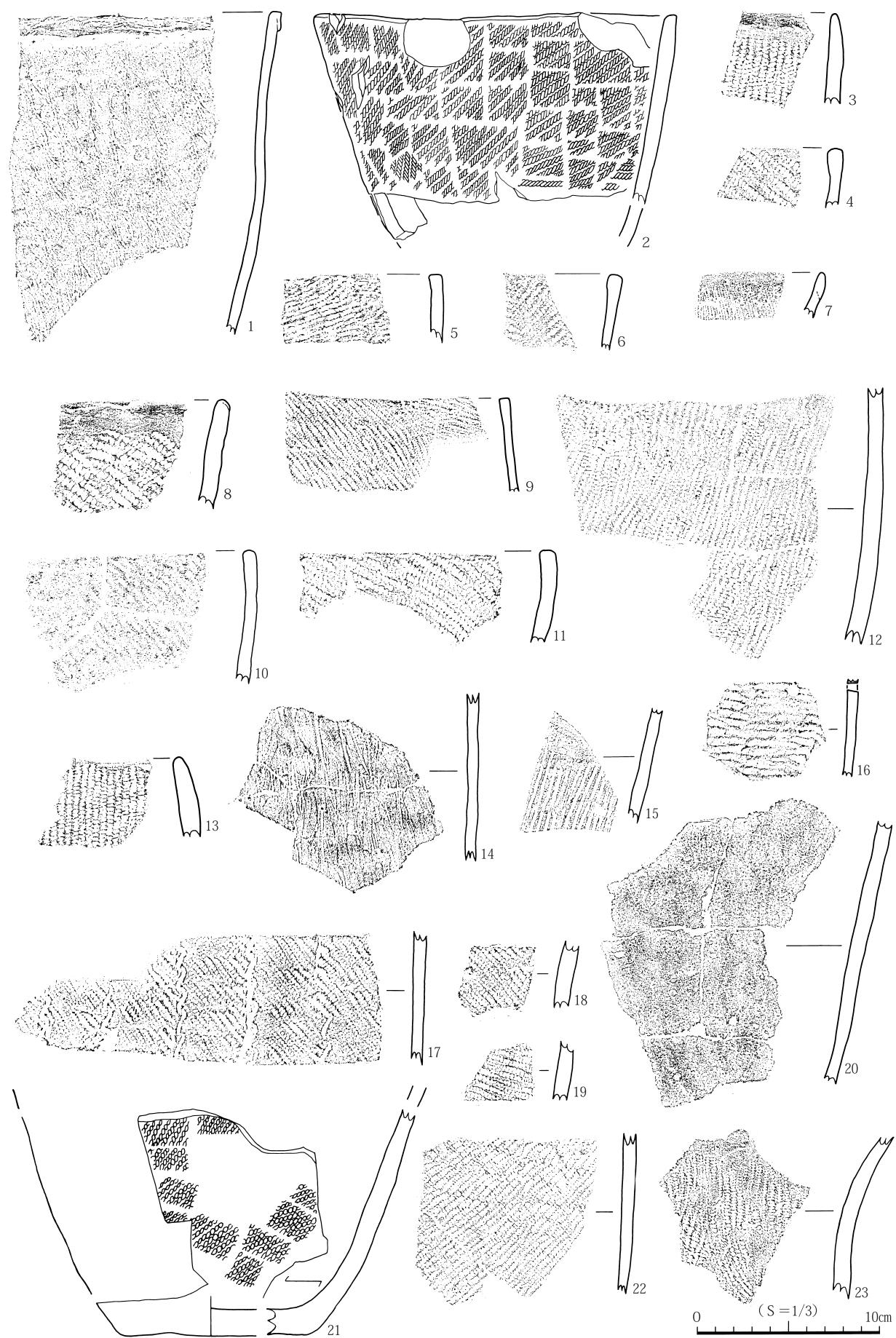


図47 包含層出土土器⑧

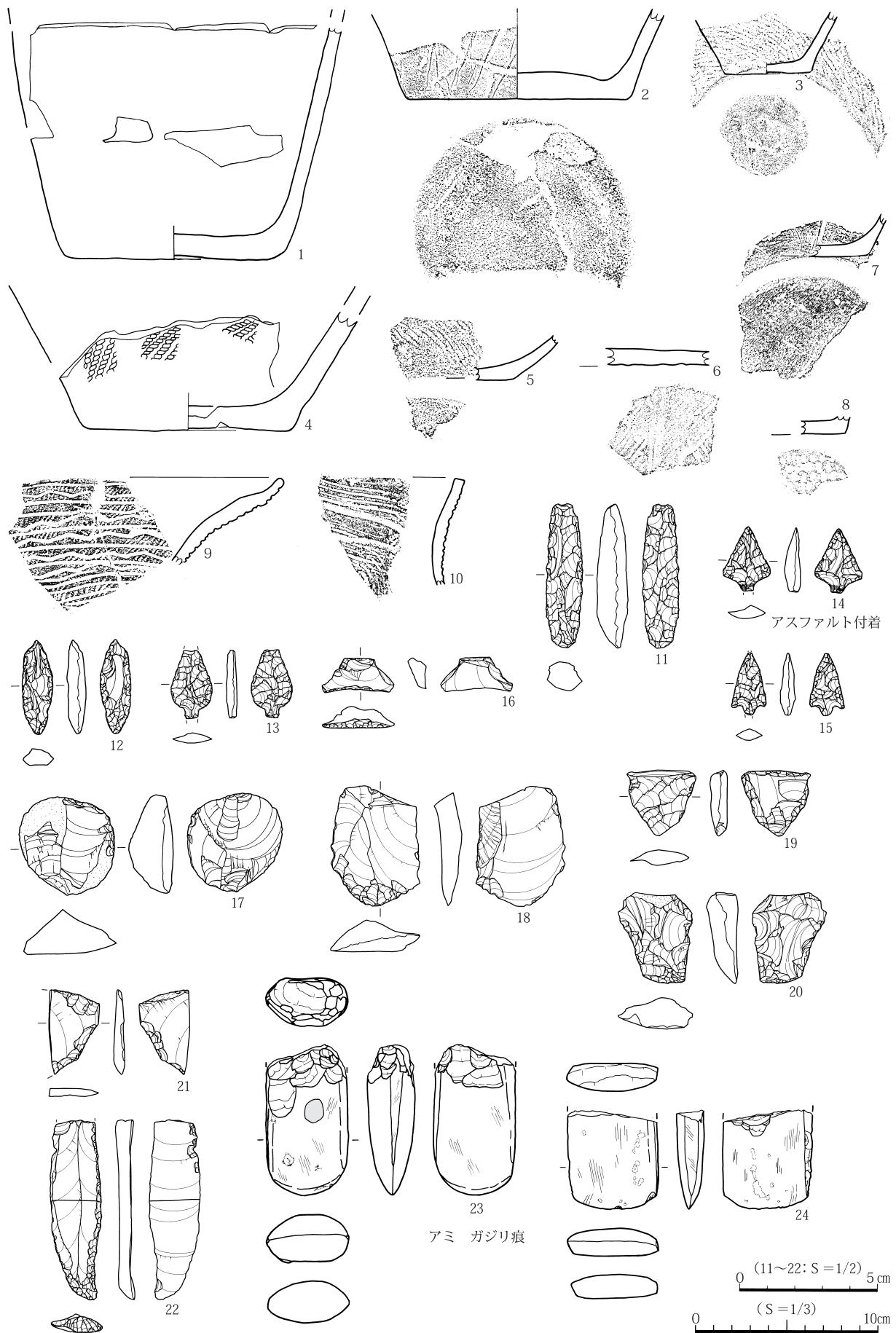


図48 包含層出土土器⑨・石器①

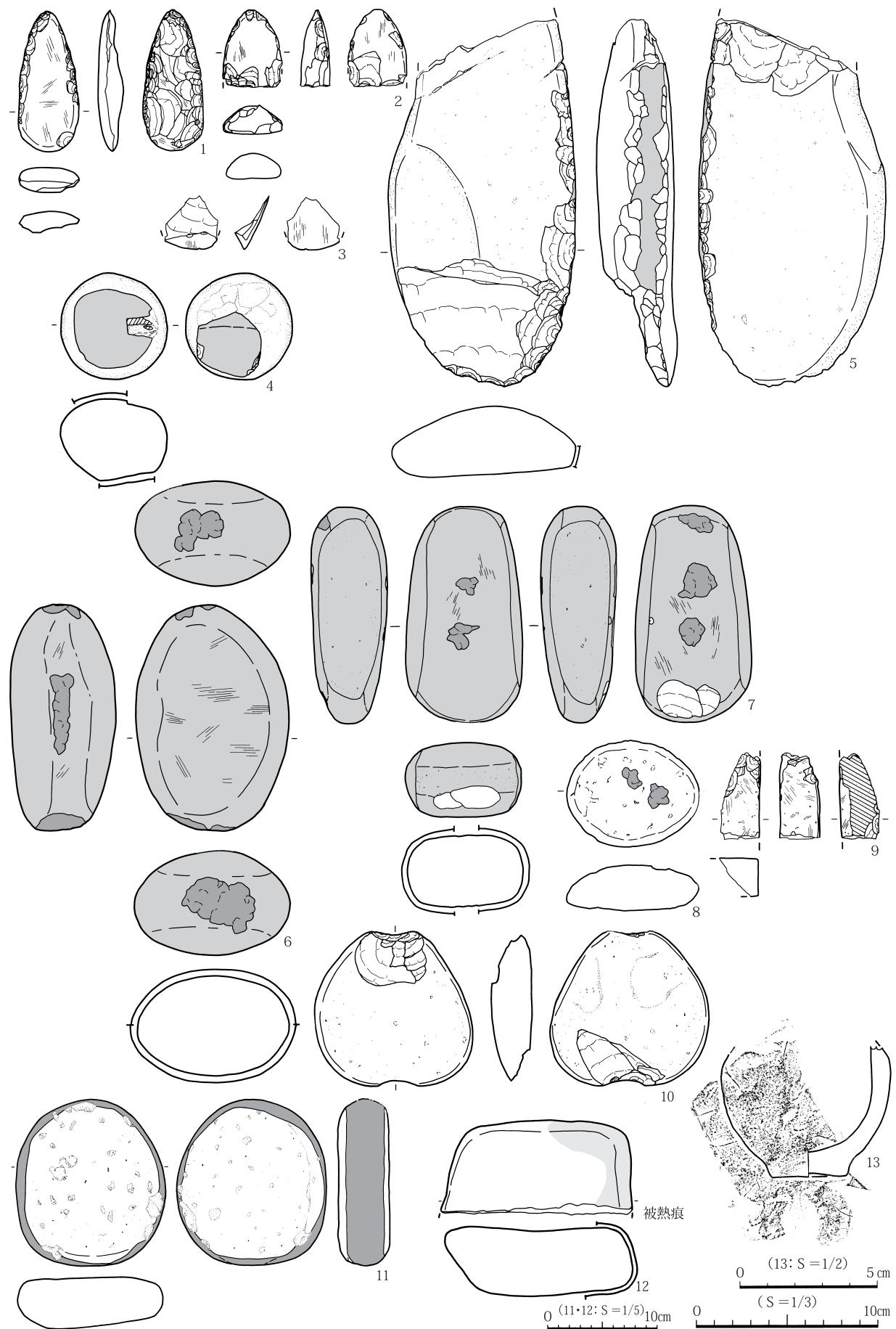


図49 包含層出土石器②・土製品

第3節 調査のまとめ

1 調査成果の概要（図18）

糠塚小沢遺跡では第一次調査の隣接地で1,500m²の発掘調査を行った。この結果、縄文時代早期～前期初頭の落とし穴状遺構2基（SK-8・9）、縄文時代中期の竪穴住居跡3軒・土坑4基（SK-5・16・17・18）、縄文時代後期の土坑2基（SK-6・15）、詳細な時期は不明だが縄文時代のものと考えられる土坑6基（SK-7・10・11・12・13・14）・焼土遺構1基・集石遺構2基が新たに発見されたほか、包含層からは縄文時代早期から晩期、弥生時代の土器及び近世～近代の陶磁器や錢貨が出土した。遺物の主体をなす時期は縄文時代中期後葉から後期前葉で遺構の時期とおおむね重なるほか、縄文時代の各時期にわたる遺物が出土しているのが特徴として挙げられる。

県道八戸環状線道路建設事業に伴う糠塚小沢遺跡の発掘調査は今回報告分で完了し、調査面積は合計6,540m²である。検出された遺構は縄文時代早期～前期初頭の落とし穴状遺構2基、縄文時代中期末～後期初頭の竪穴住居跡7軒・土坑4基、縄文時代後期の竪穴住居跡2軒・土坑5基・屋外炉1基、縄文時代晩期の竪穴住居跡1軒、詳細な時期は不明だが縄文時代のものと考えられる土坑7基・焼土遺構1基・集石遺構2基、弥生時代の地床炉1基、時代不明の土坑1基・溝跡1条・焼土遺構3基である。また、遺構は確認されなかったが近世～近代の陶磁器・錢貨が出土しているため、当該期にも何らかの土地利用があったものと考えられる。なお、図18には第一次調査分を含めた遺構配置図を掲載した。

2 十腰内Ia式期の動物形貼付土器について（図50）

今回の調査で出土した土器（図43-11）について若干の補足を加える。同遺物はAC-49・50グリッドの旧河道内（沢3層・5層）で出土し、層位ごとの時期差が捉えられることから包含層出土遺物として掲載した。周囲の遺構として縄文時代中期末葉に属する第10号竪穴住居跡が約6m離れた場所に位置するが、同遺物は十腰内式期であり当該期の遺構は近くには所在しないこと、また旧河道内の出土のため、遺構との関係を述べるには至らない。

土器の器形は胴部上位が張り出し、頸部が鋭く湾曲したのち直線的に外傾する浅鉢形である。粘土紐貼付と沈線で施文がなされ、口縁部内面にも口唇部に沿った沈線が施されている。外面は入組文沈線で文様が構成されることから、縄文時代後期前葉（十腰内Ia式）の所産と思われる。貼付文は同時期に見られる8の字状の貼付とは異なり、四肢が表現された動物形をなし、尾と思われる箇所は膨らみを有する。口縁部文様単位は2単位と思われ、貼付に沿って周りに沈線がめぐっている。貼付は口縁部の入組文の文様の間に沿って四肢状の貼付がなされていることから、作成段階で動物の形を意識していたと思われる。貼付後、胴部背面と思われる箇所に沈線と2箇所の刺突が施され、頭頂部にあたる部分にも刺突が施されている。また貼付の上から焼成前穿孔がなされている。胎土は通常の深鉢形土器と同質であることから特質性は窺えない。

後期前葉（十腰内Ia式期）の動物形貼付文土器の類例として青森県上北郡六ヶ所村の大石平遺跡と上尾駒（2）遺跡出土の浅鉢形土器を掲載した（図50-2・3）。2は沈線ではあるが、1の四肢を彷彿させるようなX字状の沈線を施すものであり、また1と同様に口縁頂部下での穿孔が確認できる。3では動物形とも見える貼付が確認できる。頭部にあたる箇所は欠損しているが、四肢が表現された

動物形の貼付を持ち、貼付の上から縄文が施文されている。また貼付に沿って沈線が施されているのも1と同様の施文手法である。1・3の貼付は土器施文の構成要素の一つをなしていることから、動物であるならば、表現としての重要度は低い。また後期初頭の所産ではあるが、青森県八戸市樋館遺跡出土の壺形土器の胴部下半（図50-4）では、地文の上から動物形の貼付が施されている。後期初頭の一般的な狩猟文土器に見られるような、無文の上に動物形の貼付が施されるものとは異なる。同様の類例は岩手県二戸市米沢遺跡にも見られ、同時期の動物形の貼付の手法として注目される。

今回出土した1の所産は後期前葉(十腰内Ia式期)であり、狩猟文土器の衰退時期とされている(斎野2008)。器形の半分が欠損しているため、全体の文様構成は不明で、動物とここで評価にするは至らないが、3・4の存在から動物形と思われる貼付が、土器施文の一要素に含まれていることから、1についても土器施文の一部として、動物形の貼付が施されたことが指摘できる。動物主体の施文から文様の中の一要素にすぎない施文へと、動物形貼付の衰退期の施文方法が窺える資料と言える。

(平野)

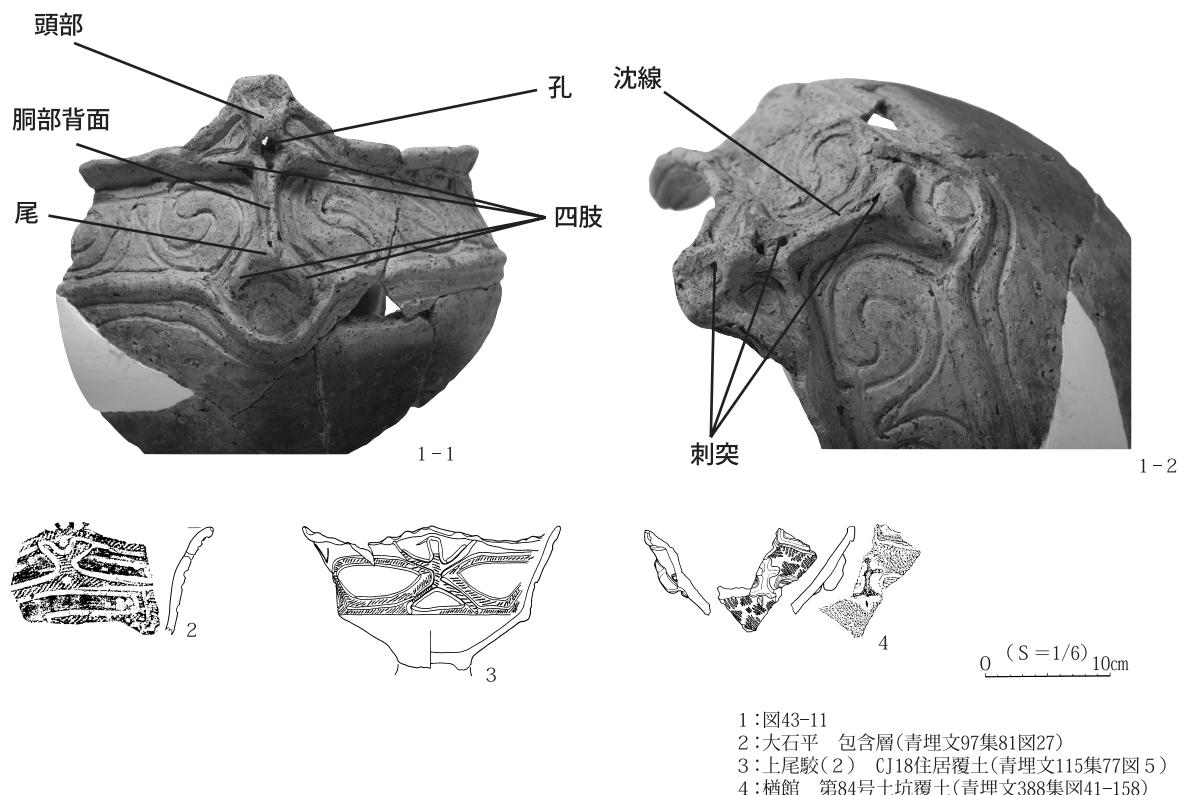


図50 動物形貼付土器類例

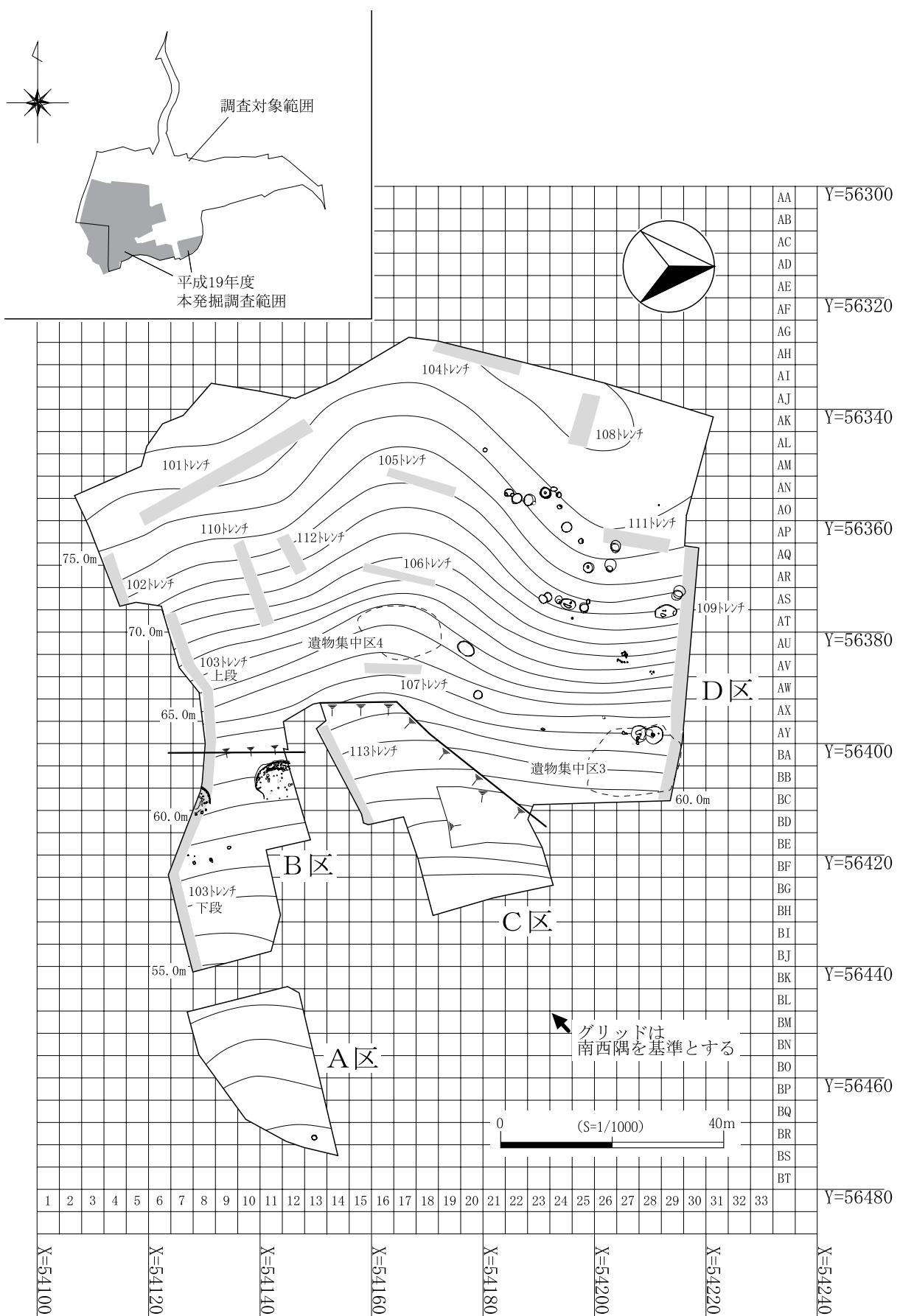


図51 中居林遺跡調査区全図

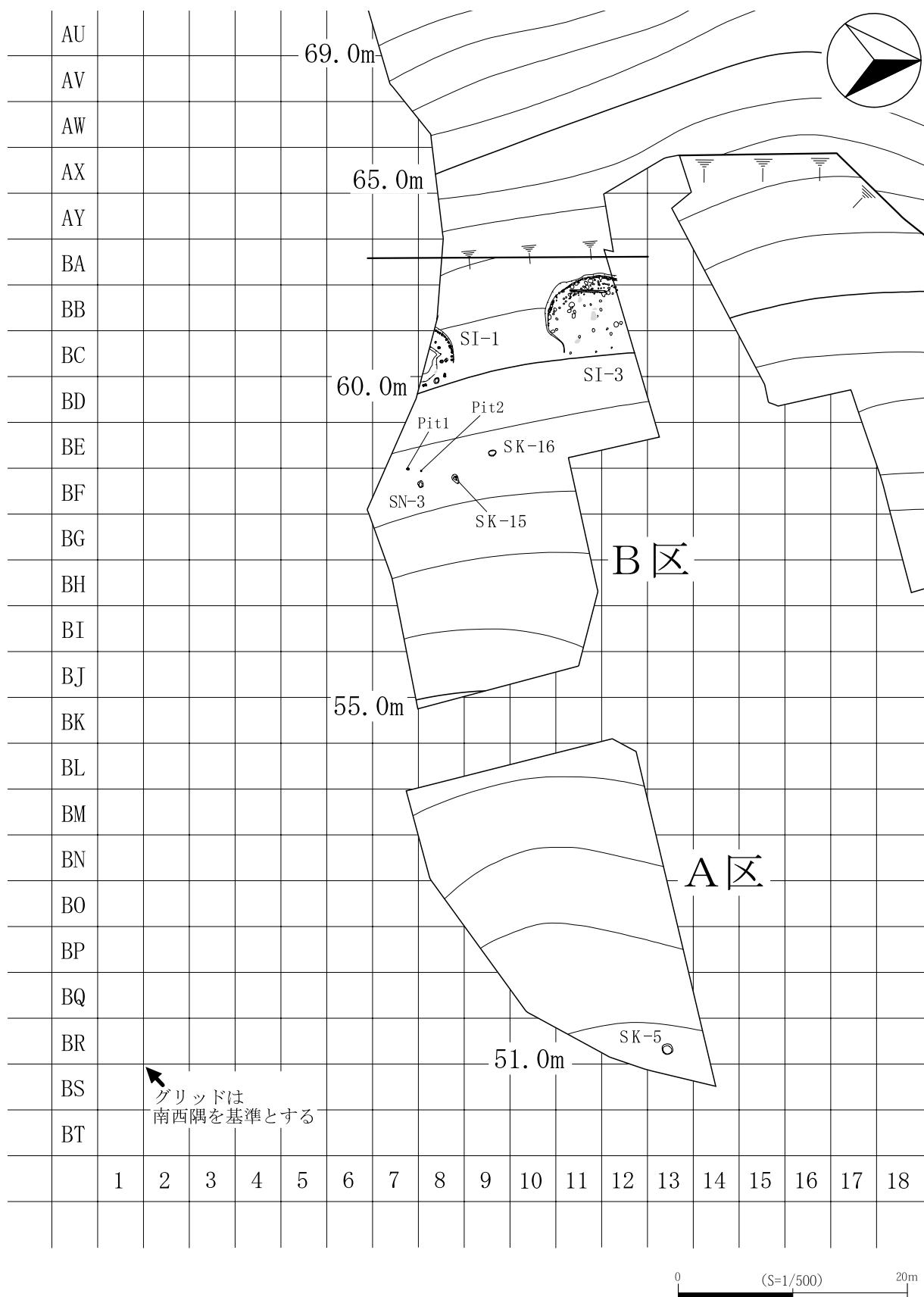


図52 A・B区遺構配置図

第4章 中居林遺跡II

第1節 既往の調査

本遺跡は南北に延びる丘陵上に立地している。平成18年度の第一次調査はその西斜面を対象として行われ、2,800m²について本発掘調査が実施された。検出遺構は、縄文時代早期～前期初頭の落とし穴状遺構4基、縄文時代中期～後期と推定されるフ拉斯コ状土坑22基のほか、縄文時代の掘立柱跡の可能性がある土坑群である。竪穴住居跡は未発見であるが、縄文時代には丘陵西斜面が集落の縁辺として、狩猟場や貯蔵穴の構築場所として使用されていたことが分かった。また、第30号土坑(06SK-30)は、底面で入れ子になった2個体の深鉢が伏せられて出土し内部にはアスファルト塊と珪質頁岩の剥片が納められていたことから、縄文時代後期初頭のフ拉斯コ状土坑転用墓と考えられた。同時に行われた東斜面の確認調査では縄文～弥生時代にかけての遺物包含層が発見されたため、今回報告する第二次調査が平成19年度に行われることとなった。

第2節 A～C区の検出遺構と出土遺物

標高51～62mに位置する緩斜面で、D区とは切土による段で区切られる。未買収地等の関係で全面の調査ができなかったため、A～Cの3地区に分けて調査を行った。地形は連続しており出土遺物の様相も似通っているため、本節でまとめて記載する。

1 竪穴住居跡

第1号竪穴住居跡（図53～55）

[位置・確認] 東向きの緩斜面、B区のBC-8グリッドに位置する。Ⅲa層上面で黒褐色土の落ち込みとして確認した。

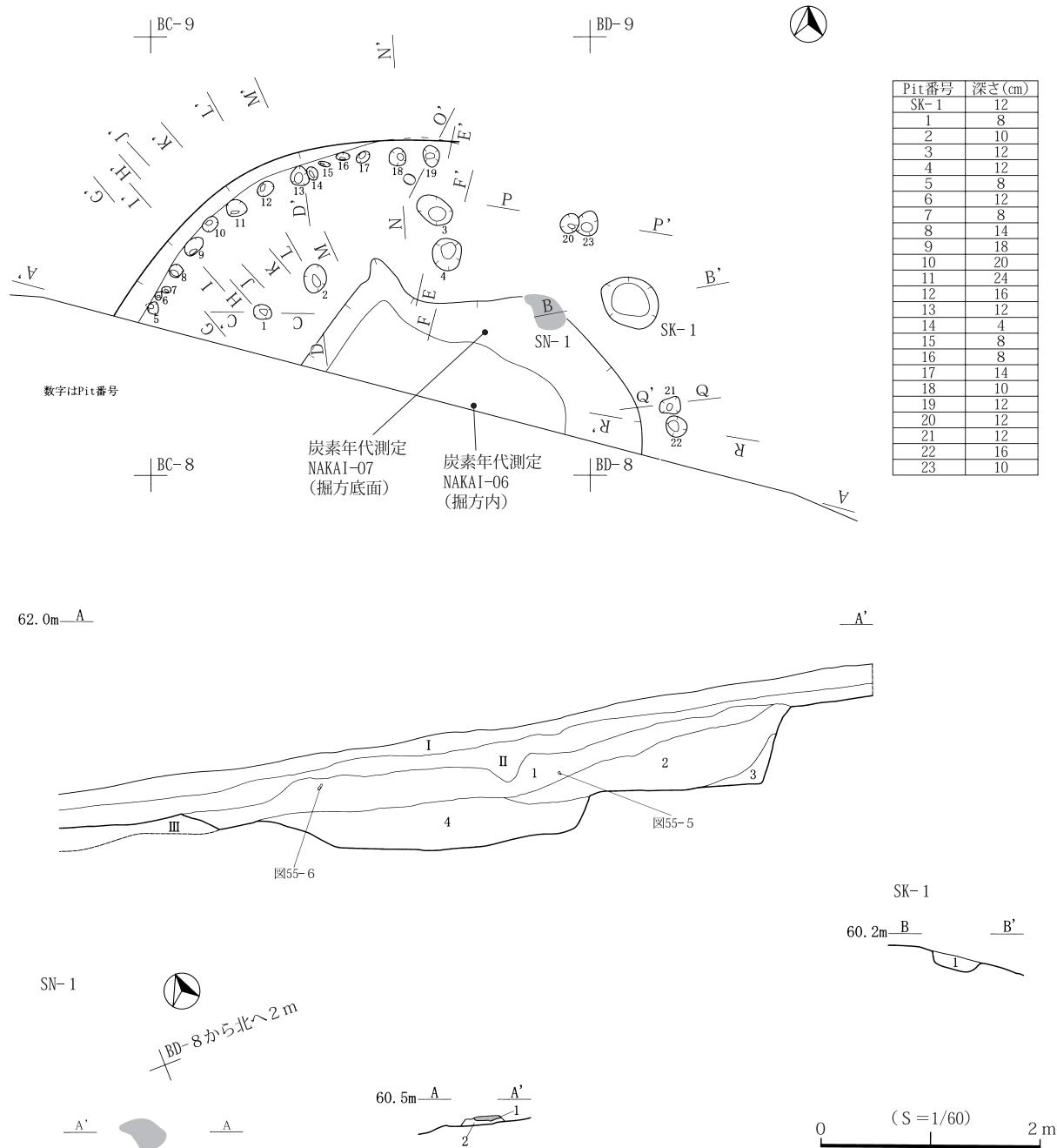
[規模・形状] 斜面下方の壁は確認できなかったため推定の部分を含むが、東西5.8m、南北2.4m、床面積9.9m²の範囲を調査した。未調査部分が多いため全体の形状は不明であるが、平面は円形または橢円形と推定している。

[堆積土] 4層に分けられた。1～3層は層界の不明瞭な黒色土または黒褐色土で、自然堆積とみられる。4層は掘方覆土である。

[壁・床面] Ⅲb層または掘方覆土の上面を床面とする。壁は斜面上方にあたる西側では平坦であるが、掘方部分ではその中央付近でやや盛り上がった後、東側では斜面に従って傾斜をもつ。床面の標高は、斜面上方のピット5付近と斜面下方のピット22付近とでは30cm近くの比高差がある。顕著な硬化面は確認できなかったが、掘方覆土上面およびその縁に沿う部分の床は他に比べてやや締まりがあった。壁は外傾して立ち上がり斜面上方では壁高70cmを測るが次第に高さを減じ、ピット9付近では40cm、ピット13付近では15cmとなり、ピット19より東では壁そのものが確認できなくなる。セクションラインA-A'では斜面下方でも15cmほどの立ち上がりが確認できるが、壁が全周していたかどうかは定かでない。

[炉] 確認できなかった。SN-1は床面から浮いた部分に溜まった焼土である。ブロック状の褐色焼土が20×40cmの範囲に広がっている。

[柱穴・施設] 壁際には最大径10～20cm、深さ4～24cmの小規模なピットが並び、これらは壁柱



第1号竪穴住居跡

- I層 黒色土 10YR2/1 To-Cu(ϕ 1mm以下) 2%、To-b(ϕ 1~2mm) 1%、To-Nb (ϕ 1mm) 1%混入。
 II層 黒色土 10YR1.7/1 To-b(ϕ 1~2mm) 5%、To-Nb(ϕ 1~2mm) 1%、To-Cu(ϕ 1mm以下) 1%混入。
 III層 黒褐色土 10YR3/1 To-Cu(ϕ 1mm) 10%混入。
 1層 黒褐色土 10YR2/2 To-Nb(ϕ 1~2mm) 2%、To-b(ϕ 1mm) 2%、To-Cu(ϕ 1mm以下) 2%混入。
 2層 黒色土 10YR2/1 To-Nb(ϕ 1~5mm) 3%、To-Cu(ϕ 1mm以下) 2%混入。
 3層 黒色土 10YR1.7/1 黑褐色土30%、To-Nb(ϕ 1~5mm) 2%、To-Cu(ϕ 1mm以下) 2%混入。
 4層 暗褐色土 10YR3/3 黒色土10%、橙色燒土 3% (筋状)、To-Nb(ϕ 3~10mm) 5%、To-Cu(ϕ 1mm) 1%混入。

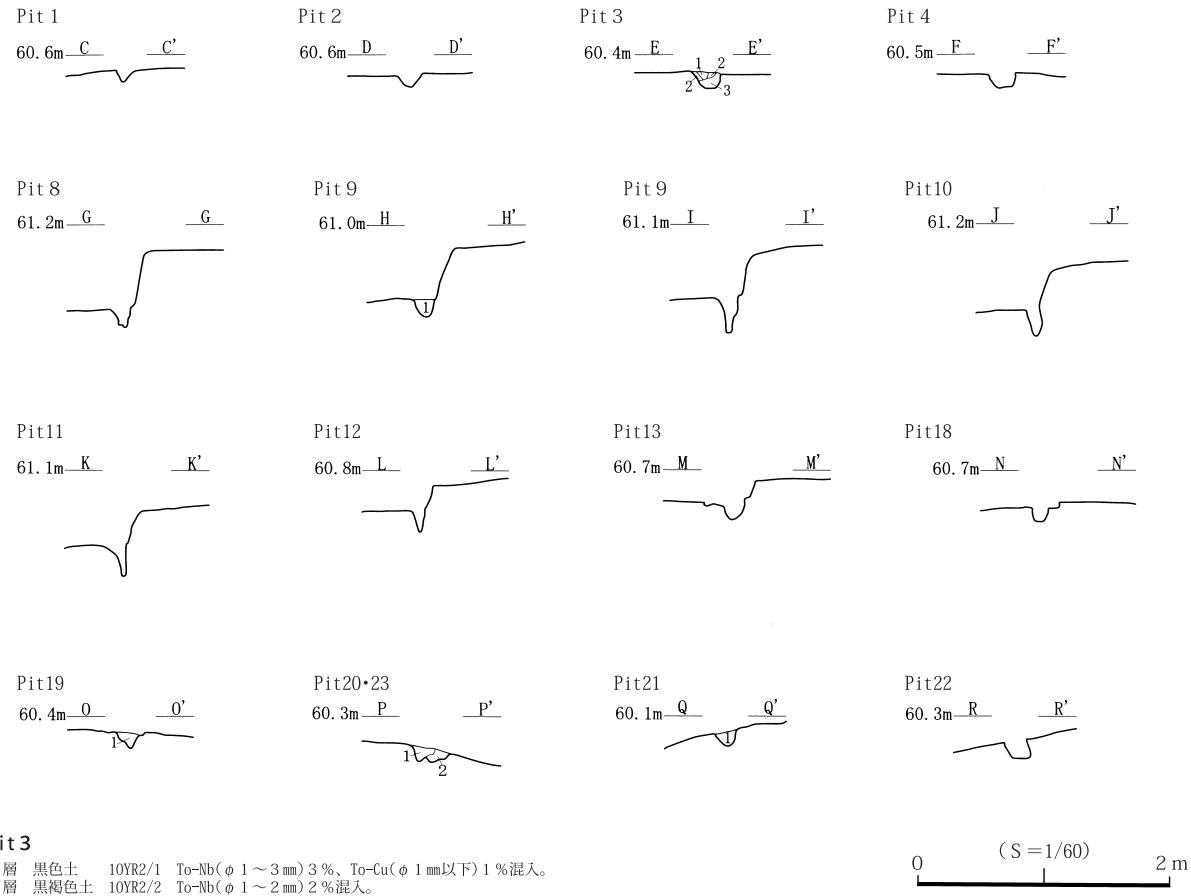
SK-1

- 1層 黒褐色土 10YR2/2 To-Nb(ϕ 1~5mm) 5%、To-Cu(ϕ 1mm以下) 2%、白色バニス少量混入。

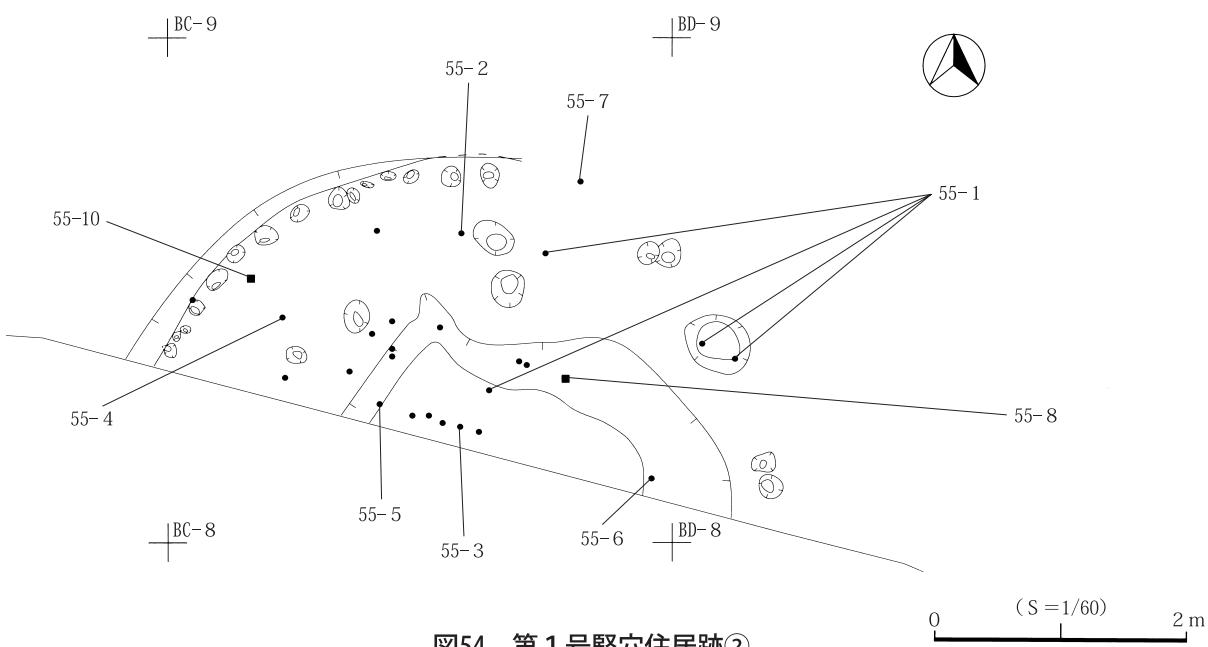
SN-1

- 1層 褐色燒土 7.5YR4/4 黑褐色土10%、To-Nb(ϕ 1mm以下) 2%混入。
 2層 黒褐色土 10YR2/2 褐色燒土 3%、To-Cu(ϕ 1mm以下) 2%、To-Nb(ϕ 1~2mm) 1%混入。

図53 第1号竪穴住居跡①



遺物出土状況



穴と考えられる。壁柱穴は壁の残存範囲以外では検出できなかった。壁から50cmないし1m内側には最大径20~30cmのピット1~4・20~23が2基1組となって1.3~2mの間隔で並んでおり、深さは8~16cmと浅いものの、配置から主柱穴となる可能性がある。また、ピット1・2・3・4・20・21・22・23がそれぞれ近接した場所にあって2基1対をなすことから、柱の建て替えが想定される。各ピットの堆積土は黒色土または黒褐色土を主体とする単層であるものが多く、明瞭な柱痕を確認したものはない。中央の窪みは掘方で、床面機能時には埋められていたものである。直径3.2m以上、深さ40cmを測る。また、床面の東側に40×55cmの楕円形で、深さ12cmの住居内土坑(SK-1)を確認した。堆積土は黒褐色土の単層で、南部浮石・中摺浮石に加えて白色パミスが少量混入している。白色パミスの分析は行っていないが、十和田b降下火山灰の可能性もある。SK-1からは鉢の破片(図55-1)などが出土した。

[出土遺物] 遺物は主に2層から出土しているが量は少ない。弥生土器を主体とし若干の縄文土器を含む。掲載土器は弥生時代に属すると判断したものである(図55)。1は口縁部に4単位の突起が付く鉢で、口縁直下と肩部に複数条の沈線を有し、頸部は縦方向の条痕調整の後ミガキを施す。口縁内部には沈線と縄文L Rが、体部には縄文L Rが施文される。2は波頂部にキザミが施された甕である。3は壺で底部付近まで縄文L Rが施されている。4は小波状口縁の台付浅鉢で波頂部に刻みが、口縁内面に沈線が施される。沈線で画された口縁部に縄文帯が巡り、体部には王字文に類した磨消縄文が施される。器面は黒色で、外面は赤色顔料で塗彩されている。5は浅鉢で半円状に区画された部位に縄文RLによる磨消縄文が施される。6は台付浅鉢の台部である。7は蓋で沈線や刺突の溝底にわずかに残る赤色顔料から、外面赤色塗彩が窺われる。

礫石器は敲石が1点出土した(8)。両方の端部と1側面に軽度の使用痕がある。剥片石器は製品のみ掲載しており、9は玉髓質珪質頁岩製の有茎石鏃、10はチャート製の二次加工のある剥片である。出土遺物に縄文土器が含まれているため、石器の帰属時期は不明である。

また、4層出土炭化材のうち2点について放射性炭素年代測定を行い、それぞれ 2160 ± 30 ・ 2150 ± 30 yrBPの年代値を得た(NAKAI-06・07: 第5章第1節)。

[時期] SK-1から出土した鉢の特徴から、弥生時代中期と考えられる。出土炭化材の放射性炭素年代測定結果もこれと矛盾しない。

第3号竪穴住居跡(図56~62)

[位置・確認] 東向きの緩斜面、B区のBB・BC-11・12グリッドに位置する。III a層上面で黒褐色土の落ち込みとして確認した。

[規模・形状] 北側は調査区外のため未調査である(平成20年度に調査済み・平成21年度に報告予定)。平面は長径7m以上、短径6mの楕円形を呈し、南東隅で斜面下方に向け50cm程の張り出しをもつ。本年度は床面積35m²の範囲を調査した。

[堆積土] 9層に分けられた。1a層は新しい時期の掘り込み、7層は壁面上部の崩落土、9層はピット122の堆積土である。その他はレンズ状の堆積を示すことから、自然堆積の可能性が高い。調査では、堆積土を掘り下げ始めた直後に灰白色の火山灰が検出された。検出範囲は斜面上方にあたる部分に多く(図58)、検出された深さは斜面上方の壁際では住居跡確認面直下、ピット3周辺や張り出し部で

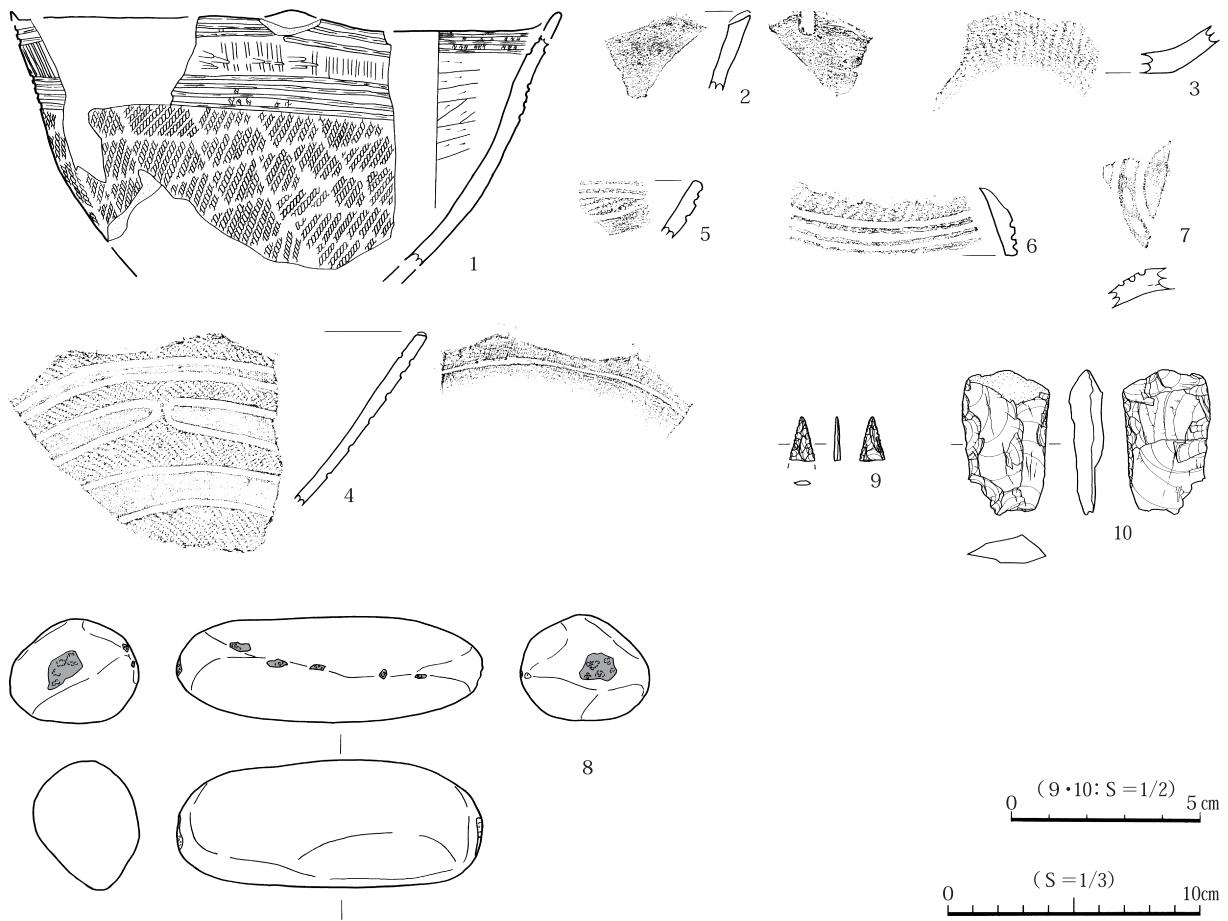


図55 第1号竪穴住居跡出土遺物

は床面直上と高低差がある。火山灰は黒褐色土に混じっているが所々で濃集しており、住居跡が埋まりかけた窪地への再堆積と考えられる。これらの火山灰サンプルを採取し8点について分析した結果、いずれも十和田b降下火山灰(To-b)であることが分かった(第5章第2節)。3層の黒色土中では、床面から5~10cm上に焼土や炭化材が多く含まれる。炭化材はピットが集中する壁寄りの部分やピットの直上で多く(図58)、住居の構築材であった可能性が高いため本住居は火災によって焼失したものと考えられる。各ピットの堆積土は黒色土または黒褐色土を主体とする。

[壁・床面] 壁は概ね外傾して立ち上がる。壁高は斜面上方にあたる南西隅(ピット17)付近で最大1mを測り、セクションB・Cライン付近では約80cmである。斜面に従って高さを減じ、ピット2付近では50cm、ピット4付近で15cmとなる。ピット18~20が検出された東側の壁は平面的に検出できず、セクションB・Cラインでも2~5cmのごくわずかな立ち上がりの気配を示すに過ぎないため、壁が全周していたかどうか定かではない。床面は掘方底面をそのまま床としており、斜面上方にあたる西側ではVI層、斜面下方にあたる東側ではⅢb層が床面となる。掘方底面の小さな凹凸には黒褐色土が充填されている。床面自体に顕著な起伏はなく平らにならされているが、斜面に従って幾分傾斜しており、セクションBラインでは西側の壁と東側の住居端部で20cm程の比高差を持つ。

[炉] 床面中央部で土器の埋設土器と、その周囲に被熱範囲を検出した。土器埋設炉とみられる。被

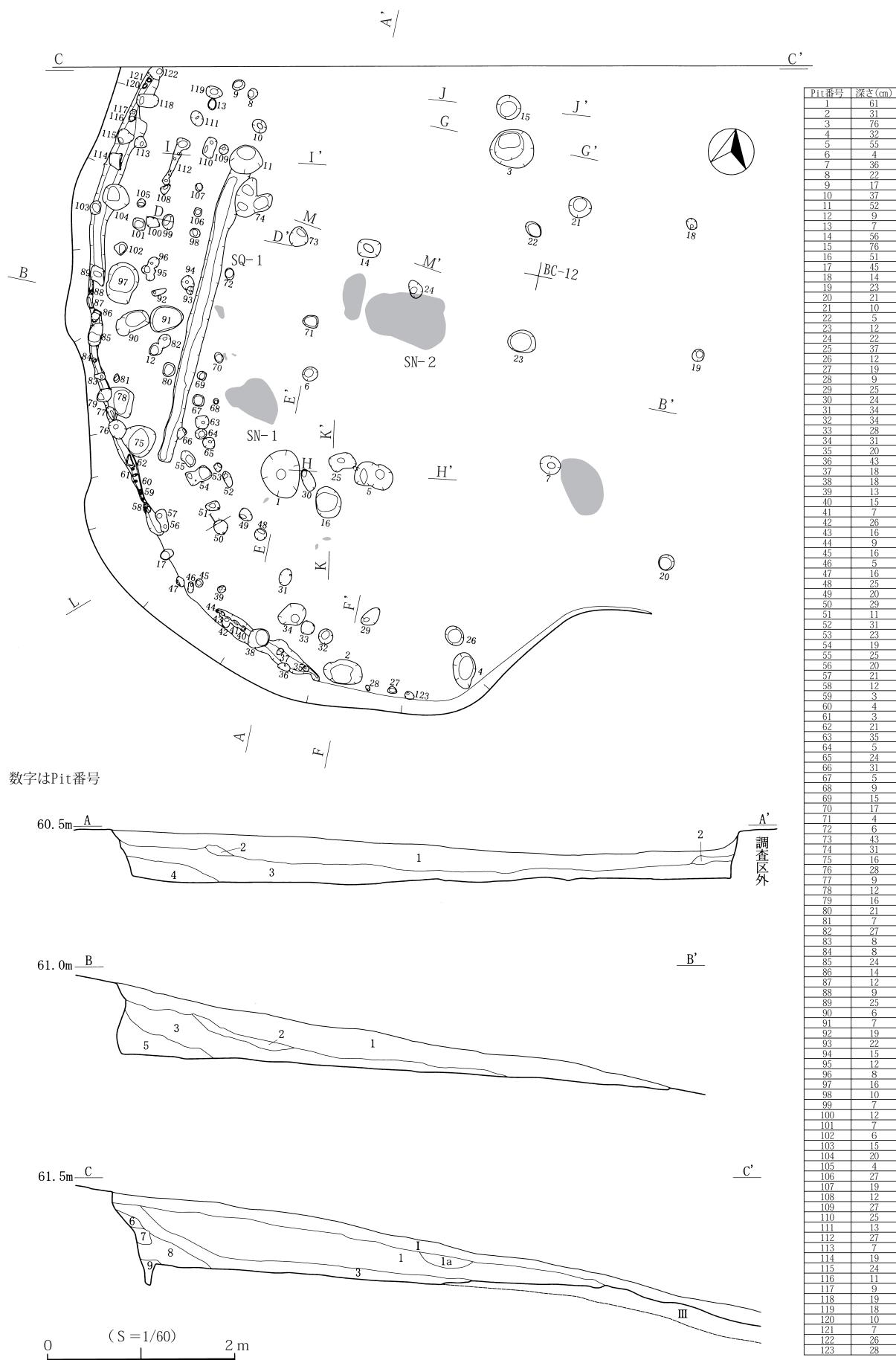
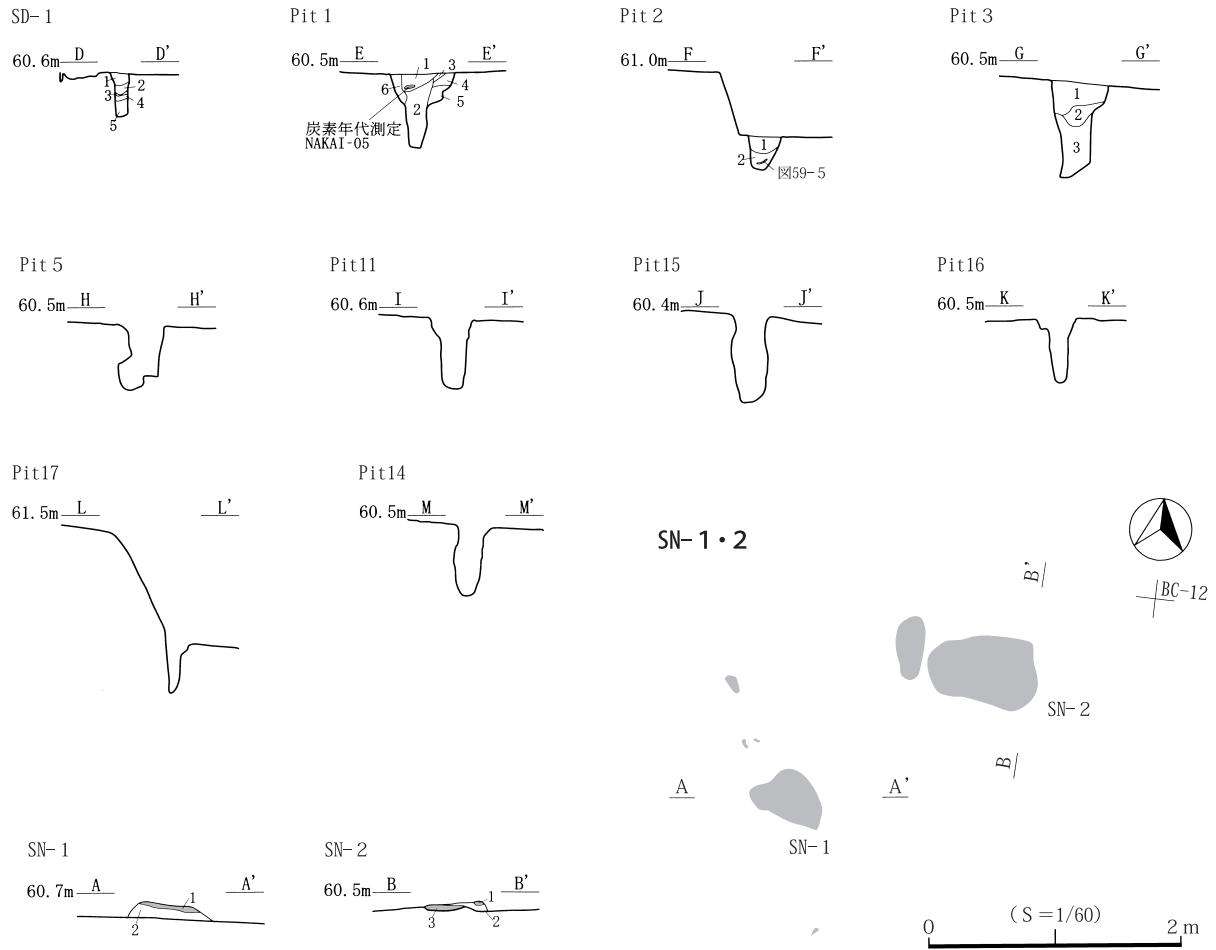


図56 第3号竪穴住居跡①



第3号竪穴住居跡

1層 黒褐色土	10YR2/2	To-Nb(φ 1~5mm) 3%、浮石(φ 1~3mm) 1%混入。
III層 黒褐色土	10YR2/3	暗褐色土30%、To-Nb(φ 2~15mm) 3%、To-Cu(φ 1mm) 1%混入。
1層 黒色土	10YR2/1	黒褐色土40%、To-Nb(φ 1~10mm) 5%、浮石(φ 1~5mm) 3%、炭化物(φ 3~5mm) 1%、To-Cu(φ 1mm以下) 1%混入。
1a層 黒色土	10YR2/1	To-Nb(φ 1~3mm) 1%以下、浮石(φ 1~3mm) 1%混入。
2層 黒褐色土	10YR2/2	にぶい黄橙色火山灰15%(To-b)、To-Nb(φ 3mm) 3%、浮石(φ 1~3mm) 1%、To-Cu(φ 1mm) 1%混入。
3層 黒色土	10YR1.7/1	黒褐色土20%、To-Nb(φ 3~10mm) 3%、炭化物(φ 1~3mm) 1%、To-Cu(φ 1mm以下) 1%混入。
4層 黒色土	10YR2/1	暗褐色土5%、To-Nb(φ 3~5mm) 5%、炭化物(φ 2~5mm) 1%、To-Cu(φ 1mm) 1%混入。
5層 黑褐色土	10YR1.7/1	黒褐色土5%、To-Nb(φ 1~5mm) 3%、To-Cu(φ 1mm) 1%混入。
6層 黑褐色土	10YR2/2	To-Nb(φ 1~5mm) 1%、To-Cu(φ 1mm) 1%混入。
7層 黑褐色土	10YR2/2	黑色土5%、To-Nb(φ 1~3mm) 1%混入。
8層 黑褐色土	10YR2/2	黑色土10%、To-Nb(φ 1~10mm) 5%、To-Cu(φ 1mm) 1%以下混入。
9層 黄褐色土	10YR5/6	黑色土30%混入。

SD-1

1層 黒褐色土	10YR2/2	黑色土20%、暗褐色土1%、To-Nb(φ 3mm) 1%混入。
2層 黒褐色土	10YR2/3	暗褐色土3%、To-Nb(φ 5mm) 1%混入。
3層 暗褐色土	10YR3/4	
4層 黒褐色土	10YR2/2	暗褐色土1%混入。
5層 黑褐色土	10YR2/2	

SN-1

1層 明褐色焼土	7.5YR5/6	黒褐色土15%、To-Nb(φ 1~5mm) 1%以下、To-Cu(φ 1mm以下) 1%以下混入。
2層 黑褐色土	10YR2/1	炭化物(φ 5~20mm) 1%、To-Nb(φ 1~5mm) 1%、To-Cu(φ 1mm以下) 1%以下混入。

SN-2

1層 赤褐色焼土	5YR4/8	To-Nb(φ 1mm) 1%以下、To-Cu(φ 1mm以下) 1%以下混入。
2層 黑褐色土	10YR2/2	To-Cu(φ 1mm以下) 2%、To-Nb(φ 1~2mm) 1%以下混入。
3層 暗赤褐色焼土	5YR3/6	黑褐色土10%、To-Nb(φ 1~5mm) 1%、To-Cu(φ 1mm以下) 1%混入。

Pit 1

1層 黑褐色土	10YR2/1	To-Nb(φ 1~10mm) 3%、炭化物(φ 2~10mm) 2%、To-Cu(φ 1mm以下) 1%混入。
2層 黑褐色土	10YR2/2	To-Nb(φ 2~5mm) 5%、To-Cu(φ 1mm以下) 1%混入。
3層 黑褐色土	10YR2/3	To-Nb(φ 1~3mm) 1%、炭化物(φ 3mm) 1%以下混入。
4層 黑褐色土	10YR2/1	To-Nb(φ 1~3mm) 1%、炭化物(φ 5mm) 1%以下、To-Cu(φ 1mm以下) 1%以下混入。
5層 黑褐色土	10YR2/3	暗褐色土5%、To-Nb(φ 3~10mm) 1%混入。
6層 褐色土	10YR4/4	黑褐色土10%、To-Nb(φ 2~15mm) 5%、炭化物(φ 2mm) 1%混入。

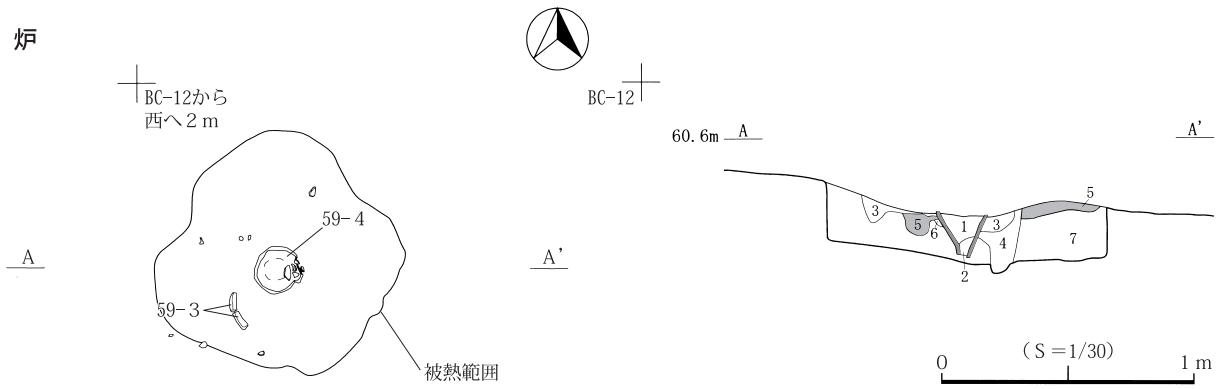
Pit 2

1層 黑褐色土	10YR2/1	黑褐色土10%、To-Nb(φ 1~5mm) 2%混入。
2層 黑褐色土	10YR2/2	To-Nb(φ 1~5mm) 1%混入。

Pit 3

1層 黑褐色土	10YR2/2	黑色土5%、To-Nb(φ 1~10mm) 3%、To-Cu(φ 1mm以下) 1%混入。
2層 黑褐色土	10YR2/3	黄褐色土30%、To-Nb(φ 2mm) 1%以下混入。
3層 黑褐色土	10YR2/3	褐色土5%、To-Nb(φ 1~5mm) 1%混入。

図57 第3号竪穴住居跡②



炉

1層	黒褐色土	10YR2/2	褐色燒土1%、To-Nb(φ 5mm) 1%、To-Cu(φ 1mm) 1%混入。
2層	黒色土	10YR2/1	褐色土30%、To-Nb(φ 5mm) 5%混入。
3層	黒褐色土	10YR2/2	暗褐色土20%、To-Nb(φ 3~5mm) 1%、To-Cu(φ 1mm) 1%混入。
4層	黒褐色土	10YR2/2	To-Nb(φ 3~10mm) 3%混入。
5層	黒褐色燒土	10YR2/3	暗褐色燒土15%、黒褐色土(10YR2/2) 3%、To-Nb(φ 3~5mm) 1%混入。
6層	黑色土	10YR1.7/1	暗褐色燒土10%混入。
7層	黒褐色土	10YR2/3	暗褐色土20%、To-Nb(φ 3~10mm) 5%、To-Cu(φ 1mm) 1%混入。

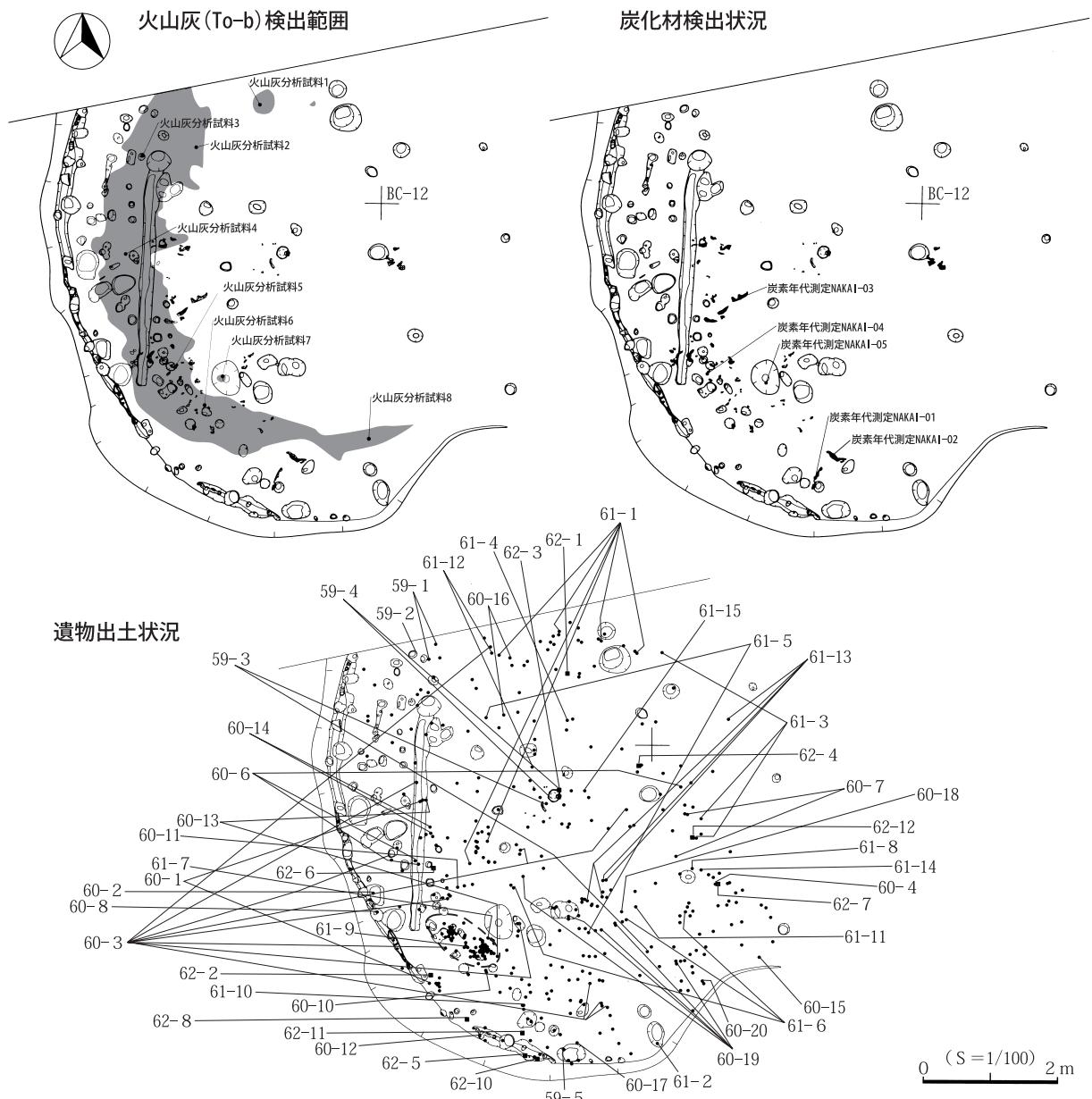


図58 第3号竪穴住居跡③

熱範囲は直径1mの不整な円形で、床面から5~10cm程の深さで窪み、中央部が最も深くなる。底面はやや起伏をもち、被熱の程度は強い。図58上段で示したセクション3層のように被熱面を切るように黒褐色土の窪みがあり、これらを抜き取り痕とみれば炉に石が用いられていた可能性もある。被熱面の中央には、口頸部を欠く甕（図59-4）が底部を下にして正位に埋設されていた。土器内の堆積土には少量の焼土が混入するが被熱面はない。炉の南西側では、中央の埋設土器とは別個体の甕の破片（図59-3）が火床面に突き刺さるように出土した。これもほぼ正位に埋められていたようで、土器埋設炉の作り替えが想定される。

[柱穴・施設] ピットは大小合わせて123基が検出された。中央の炉跡を囲むように、最大径30~50cm、深さ52~76cmと他のピットより規模の大きいピット1・3・11が確認されており、これらが主柱穴とみられる。南東隅の主柱穴は床面で確認できなかったが、最終的に掘り下げた段階でピット7を検出した。位置的にはこれも主柱穴の一つと考えられるが、規模が小さく確定し難い。なお、ピット1の脇の16、3の脇の15のように、主柱穴に近接して直径は小さいものの深さのあるピットがあり、柱の建て替えがあった可能性もある。また、西壁際にみられる小規模なピットは、壁沿いの北側から①ピット122-118-104などを結び38に至る壁溝内の列、②ピット119-111-112-100などを結び50に至る列、③ピット9-110-107-94-67-49-31-32などを結ぶ列と、少なくとも3条のピット列が認められることから住居の拡張が想定できる。ピット18~20の3基は斜面下方の壁が確認できない部分で検出されており、このあたりが住居跡の東端と考えられる。西壁際で確認されたSD-1は、先述の②・③のピット列を横断するように長さ3.2m、幅20cmで直線に掘られ、深さは35cmである。本住居跡の最終段階における住居内部の区画施設と考えられる。SN-1は、3層中で確認された炭化材を含む焼土よりも床面に近い部分で検出された。下部に住居跡堆積土の3層が入るため、炉とは考えられない。SN-2は炉跡を覆うように検出された焼土であるため、炉と関連する可能性がある。

[出土遺物] 遺物は1・3層で多く出土した。1層では小片が多く、3層では復元率の高い個体がみられる。2層を欠く範囲では1層と3層の境界が不明瞭な部分があったためか、1-3層間で接合する遺物も少量あり、火山灰（To-b）の上下で明瞭に遺物相が分かれる状態ではない。

床面やピットに伴う遺物は極めて少ないが、図59に示したものは概ね本住居の時期を示すものと考えられる。3は作り替え前の炉に用いられた埋設土器で、外面に縦走縄文（縄文RL）が施される。4は胴部上半に最大径をもつ甕で、最終的な炉の埋設土器として用いられた。胴部には縄文LRが横・斜回転で施される。1・2はピット8・9出土の鉢で同一個体である。縄文RLを地文とし、沈線で工字状文が施される。5はピット2出土の鉢で、長方形の区画文が3単位施される。6は掘方覆土に含まれていた台付浅鉢で、体部文様は変形工字文、下半には縄文LRが施される。図60・61は堆積土出土土器である。図60・61-1は弥生時代前～中期の甕である。3のように地文のみのものや、14のように口縁部と頸部に沈線を施すもの、15のように頸部に沈線を施すものが多い中で、2・9・10は縦走縄文を地文とし胴部上半に沈線による工字状文が施され、二枚橋式との関連が窺われる。胴部の縄文は斜縄文または縦走縄文が多いが、3・61-1は縄文LRの斜回転による横走縄文となっている。3の口縁には連続したキザミが施されている。図61-2～5は壺である。2・3は丸底に近い平底を呈す。5は胎土の色調が暗褐色で脆く、本住居跡出土の多くの土器とは焼成の特徴が異なる。

る。頸部に沈線間の縦キザミ、胴部に連繋菱形文に類似した文様が施される。6～9は浅鉢である。10は蓋で、天井部に沈線と刺突によって施文される。11～14は弥生時代中期後葉の念仏間式に相当し、11・12の口唇にみられる細かいキザミや、13・14の胴部にみられる細沈線による弧状の文様が特徴的である。15は縄文時代後期の鉢とみられる。

図62には石器を示した。出土土器が弥生時代中期に属するものを主体としているため、石器もその多くは弥生時代の所産と考えられる。剥片石器は製品のみ掲載しており、1～3は有茎石鏃、4はその未成品と考えられる。いずれも珪質頁岩製である。5・6は楔形石器である。7はスクレーパーである。礫石器は大型蛤刃石斧1点（8）と敲石4点（9～12）が出土した。大型蛤刃石斧は玄武岩製で全面を敲打成形した後、刃部周辺を強く研磨する。刃部は一部欠損しており、基部には縦長の剥離が多くみられる。敲石は表裏面・側面・端部に軽度の使用痕がある。

3層中では焼土に混じって多量の炭化材が出土した。残存状態はそれほど良好とはいえないが、出土位置から本住居跡の構築材と考えられるため、9点について樹種同定を行い、コナラ属コナラ節7点、クワ属2点と同定された（第5章第3節）。また、コナラ属コナラ節と同定された炭化材のうち5点について放射性炭素年代測定を行い、 $2280\sim2180\pm20\text{yrBP}$ の年代値を得た（NAKAI-01～05：第5章第1節）。このほか、VIまたはIII b層からなる床面を5cmほど削って採取した土壤（掘方の窪みに溜まっていた黒褐色土も含まれる）を水洗選別したところ、多量の未炭化種実と複数の炭化種実を回収した。同定された炭化種実は、イネ・オオムギ・キビ・イネ科各1点、アワ3点であった（第5章第4節）。イネ及びオオムギについては放射性炭素年代測定を行い、イネは $560\pm20\text{yrBP}$ 、オオムギは $125\pm20\text{yrBP}$ の年代値を得た（第5章第5節）。穀物類は年代測定の結果から後世の混入と判断されるが、特に搅乱を受けた住居跡ではないため床面に後世の穀物が混入した理由は不明である。

[時期] ピット3から出土した鉢の文様から、弥生時代中期と考えられる。出土炭化材の放射性炭素年代測定結果もこれと矛盾しない。

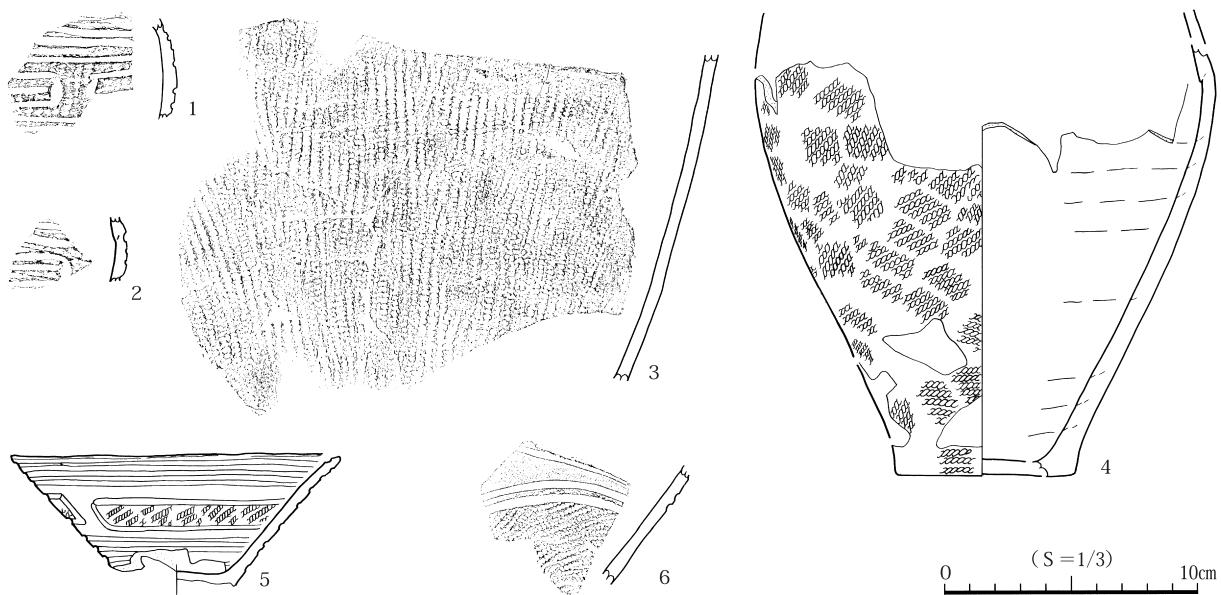


図59 第3号竪穴住居跡出土土器①



図60 第3号竪穴住居跡出土土器②

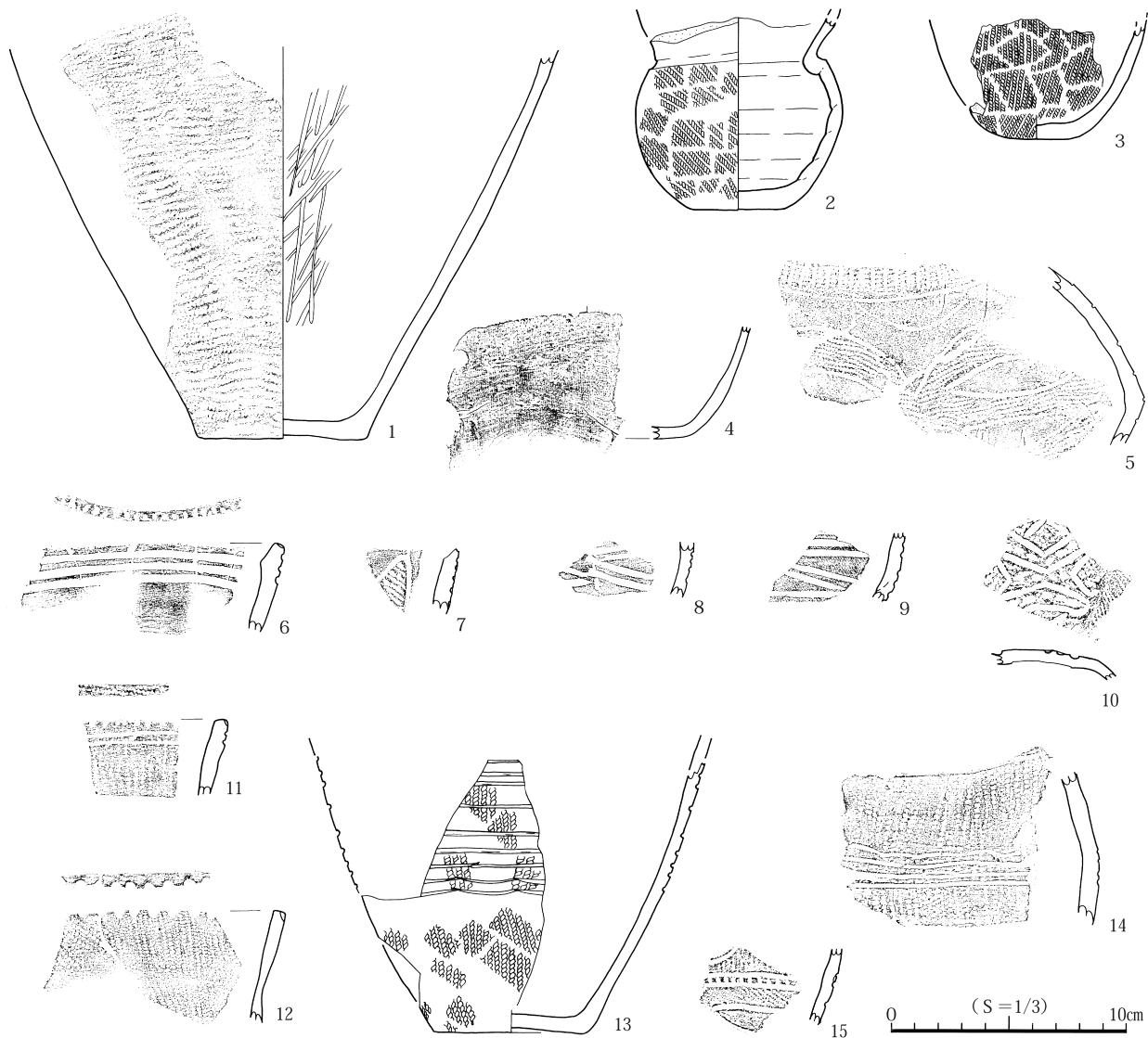


図61 第3号竪穴住居跡出土土器③

2 土坑

第5号土坑（図63）

[位置・確認] 東向きの緩斜面、A区のBR-13グリッドに位置する。III b層で円形の落ち込みを確認した。**[規模・形状]** 開口部は直径70cmのやや歪んだ円形、底面は直径1mの円形で、確認面からの深さは45cmである。**[堆積土]** 5層に分けられた。浮石を多く含む黒褐色土が主体である。堆積層は下部ほど薄く、整然とした堆積のため自然埋没したものと考えられる。**[壁・底面]** 底面はほぼ平坦で、壁が内傾して立ち上がる小規模なフラスコ状土坑である。**[出土遺物]** 出土していない。**[時期]** 遺物が出土しておらず詳細は不明だが、フラスコ状土坑であることから縄文時代と考えられる。また、規模が小さいため後期以降の可能性が高い。

第15号土坑（図63）

[位置・確認] 東向きの緩斜面、B区のBF-8グリッドに位置する。III a層上面で検出した。**[規模・形状]** 平面は55×85cmの不整な橢円形で、中央より西に寄った部分に最深部がある。最も深い部分は確認

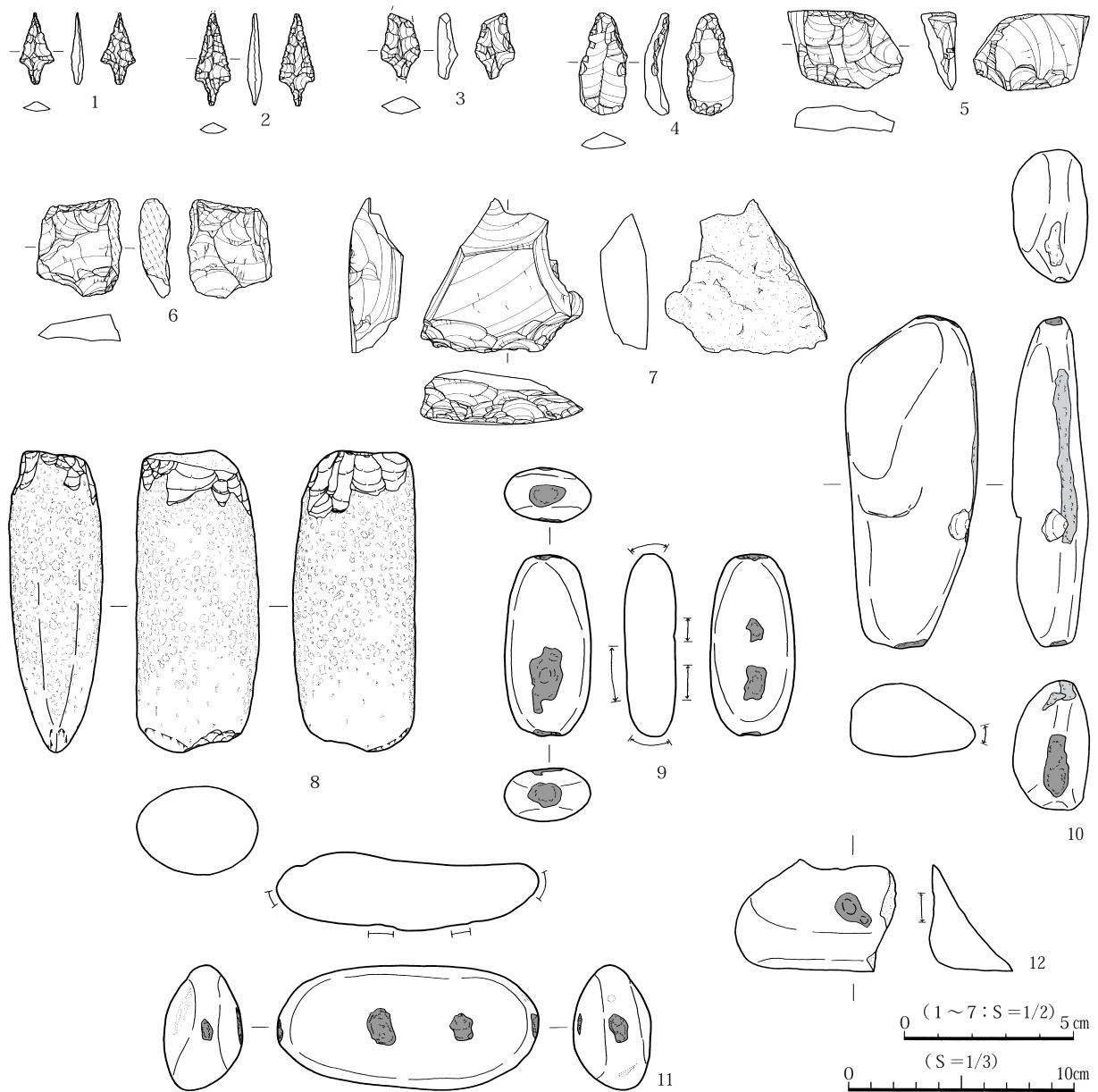


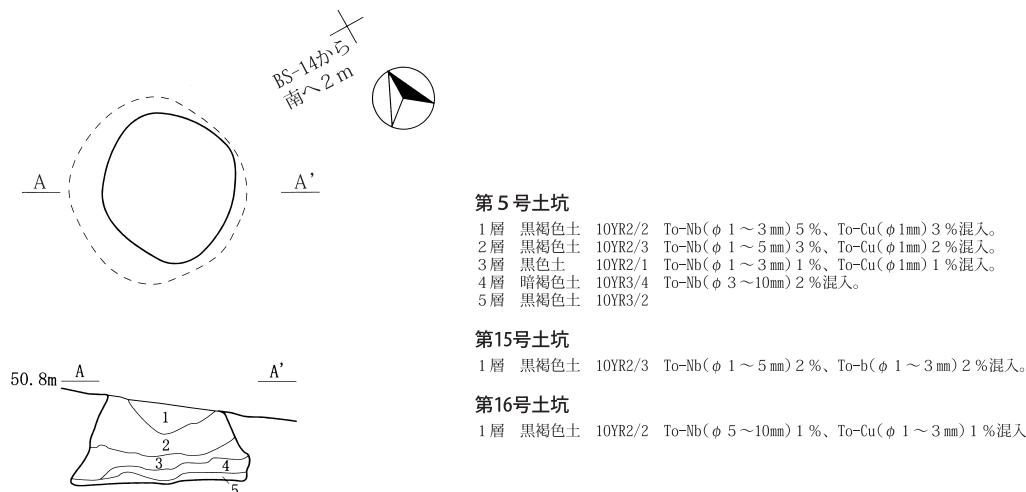
図62 第3号竪穴住居跡出土石器

面から20cmである。[堆積土] To-bを含む黒褐色土の単層である。[壁・底面] 底面は起伏が大きく、壁は外傾して立ち上がる。[出土遺物] 出土していない。[時期] 出土遺物がなく詳細は不明である。堆積土にTo-bを含むため弥生時代以降と推定される。

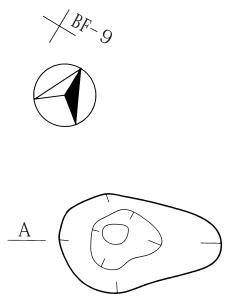
第16号土坑（図63）

[位置・確認] 東向きの緩斜面、B区のBE-9グリッドに位置する。Ⅲa層上面で、Ⅱ層類似の黒褐色土の落ち込みを確認した。[規模・形状] 平面は50×65cmの楕円形で、確認面からの深さは20cmである。[堆積土] Ⅱ層に類似した黒褐色土の単層である。[壁・底面] 浅い皿状の掘方を持ち、底面はほぼ平らになっている。壁は外傾して立ち上がる。[出土遺物] 出土していない。[時期] 出土遺物がなく詳細は不明である。堆積土がⅡ層に類似するため、弥生時代以降の可能性がある。

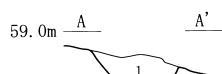
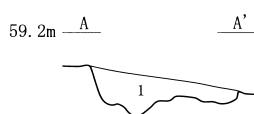
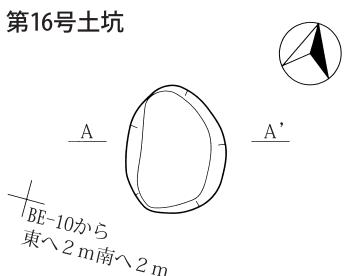
第5号土坑



第15号土坑



第16号土坑



0 (S = 1/40) 2 m

図63 A・B区 土坑

3 燃土遺構

第3号燃土（図64）

[位置・確認] 東向きの緩斜面B区のBF-8グリッドに位置し、Ⅲa層で不整形な焦土の広がりが確認された。**[規模・形状]** 平面は45×60cmの不整形な掘方を持ち、深さは10cmである。**[壁・底面]** 底面はやや凹凸があり、壁は外傾して立ち上がる。**[堆積土]** 2層に分けられた。1層はⅢ層の黒褐色土をベースに橙色焼土が多く含まれ、2層は褐色焼土である。**[出土遺物]** 繩文土器片が1点出土した。繩文L Rが施され、焼成は良好で後期の可能性がある。**[時期]** 時代は不明である。Ⅲ層で検出しているため、繩文時代の可能性もある。

4 ピット (図65)

東向きの緩斜面、B区BF-8・9グリッドで2基検出された。ピット1と2の中心は、1.15m離れている。規模や堆積土の混入物が異なることから、掘立柱建物を構成する柱穴ではないと考えられる。遺物が出土していないため時代は不明だが、ピット1については堆積土にTo-bが含まれるため、弥生時代以降と考えられる。

ピット1

[規模・形状] 平面は $20 \times 25\text{cm}$ の不整な橢円形で、深さは10cmである。底面は丸みを帯びる。**[堆積土]** 黒色土の単層である。

ピット2

[規模・形状] 平面は $12 \times 15\text{cm}$ の不整な円形で、深さは6cmである。底面は丸みを帯びる。**[堆積土]** 黒色土の単層である。

第3号焼土

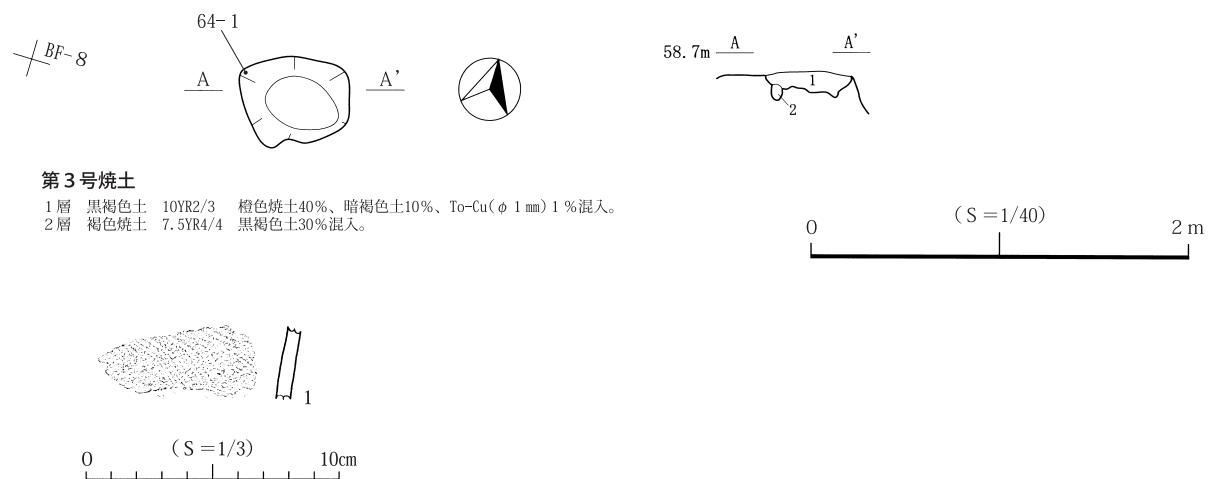


図64 B区 焼土遺構

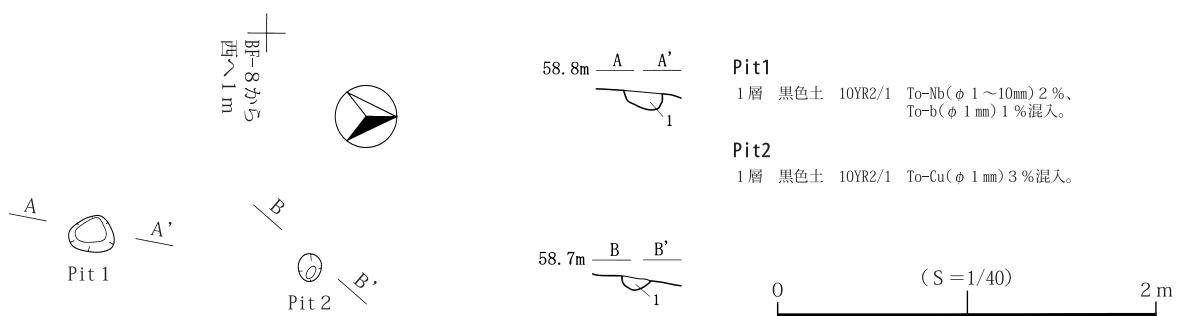


図65 B区 ピット

5 包含層出土遺物

1) A区 (図66・67)

土器は縄文土器と弥生土器が少量出土した。図66-1・2は頸部に沈線が施された縄文時代晚期の鉢である。スヌ・コゲがよく付着している。

剥片石器は製品のみ掲載した。4は凹基の無茎石鏃、5は有茎石鏃、6・7はその未成品、8は二次加工のある剥片である。礫石器は磨石、敲石各1点、台石・石皿類2点が出土している。3は流紋岩製の台石で、加撃によって生じた窪みが2箇所確認できる。

2) B区 (図68~75)

図68には縄文土器を掲載した。1・2・5・6は中期、3・4・7~11は後期、12・13は晩期と考えられる。

弥生土器は小片が主体であるが、竪穴住居跡出土土器との関連からできるだけ多く掲載した(図70~72)。図70、71-1~12、72-13・14は中期の甕である。口縁部が無文のもの(70-1)、複数条の沈線が施されたもの(70-2~11・21・25・31~33)、縄文帯と沈線が施されたもの(70-12~20・22・24・26・27・34)、縄文帯が施されたもの(70-29・30)などがあり、口縁内面に沈線を有するものや、波状口縁となるものもある。71-13~30は中期の鉢または浅鉢である。沈線のみ施されたもの、刺突が施されたもの、磨消縄文が施されたものなど多様である。16・22・23は山形文が、25の頸部には押引の刺突が施されている。29の底部には網代痕が残る。71-31・32は中期の蓋で、32は外面が赤彩されている。72-1~12は中期の壺である。頸部に沈線を有するものが多い。12の体部には錨形文が3単位施され、外面は赤彩されている。72-15~26は中期後葉の念仏間式に相当する。口唇の細かいキザミや細沈線による施文が特徴的である。15・16は同一個体で外面には円形刺突が、口唇と口縁内部に縄文R Lが回転施文される。27・28は沈線間に交互刺突文が施される後期の天王山式に相当する。

本区では縄文・弥生双方の土器が混在して出土しているため、石器の時期決定は困難である。剥片石器は製品のみ掲載した(図74)。1は凹基無茎石鏃、2~14は有茎石鏃、15は石鏃の破損品である。12は茎部の摩滅が著しい。16~20は石錐で、20はつまみが作出される。21・22は縦型の石匙である。23~29は二次加工のある剥片、30は加工及び使用痕のない黒曜石の剥片である。31・32は黄褐色の頁岩を両極技法で半割している。33・34は石核である。34はチャート製で、全体が摩滅している。同品の出土地点(BF-9グリッド)ではチャートと珪質頁岩の剥片が集中して218片出土しており、34は剥片を取った後の残核と考えられる。剥片の一部は写真図版51下段左に掲載している。両極剥片が一定量含まれるが製品は出土していない。

礫石器は磨製石斧、磨石、凹石、砥石、台石・石皿類各1点が出土している(図75)。1は緑色凝灰岩製の磨製石斧である。基部が半円状にすぼまる変わった形状をしている。側面に細かな段を残しており、擦切技法によって作られたものである。2の磨石は礫側面に使用痕を有する。3は細粒凝灰岩製の砥石で2面を主に使用しており、金属を加工したような細く鋭い使用痕が認められる。

土製品は土器片利用の土製円盤が3点出土した(75-5~7)。石製品は2点出土した。75-4は流紋岩製の石冠で、敲打成形によって段を作り出した後全面を研磨しており、表面に細かな擦痕が残る。8は軽石製石製品の破片で、表面を平滑に仕上げている。土製品・石製品はいずれも縄文時代の所産と考えられる。

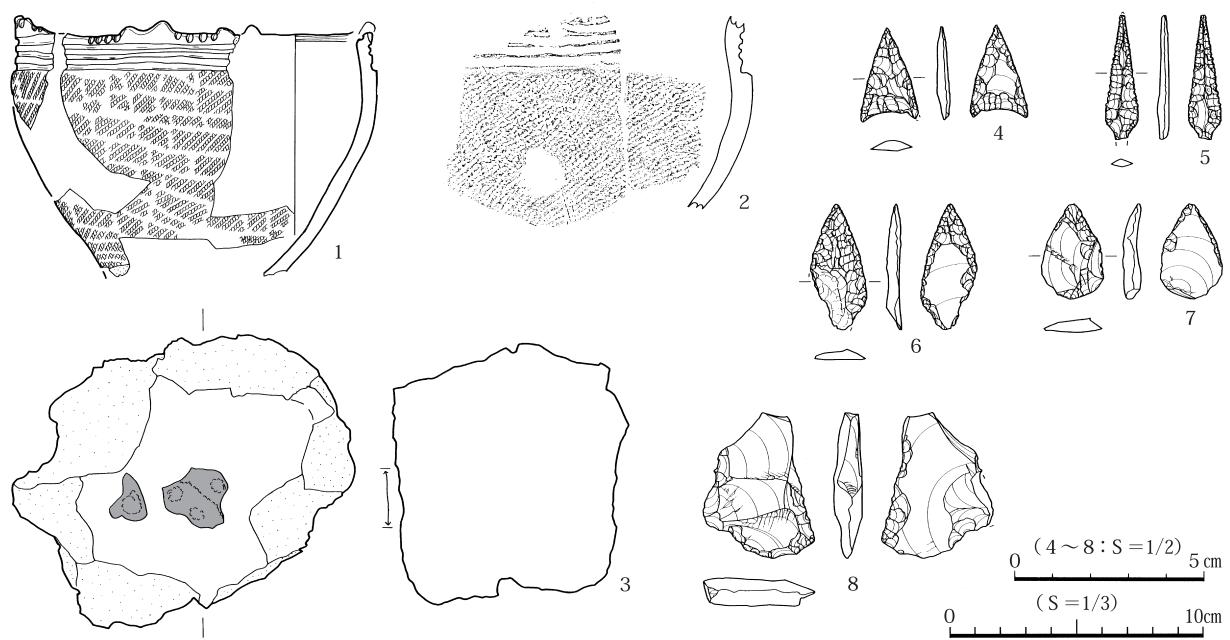


図66 A区出土遺物

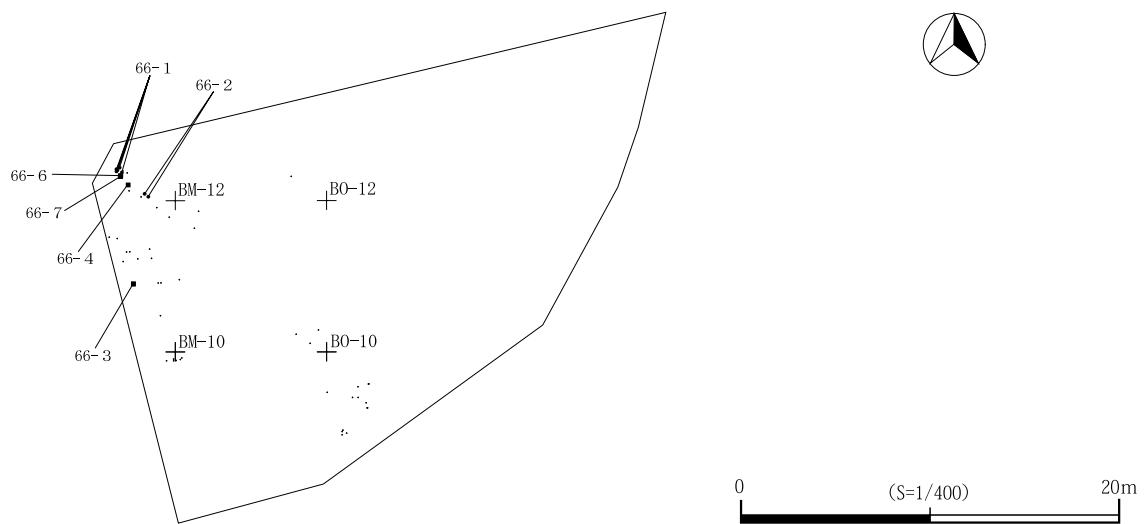


図67 A区遺物出土状況

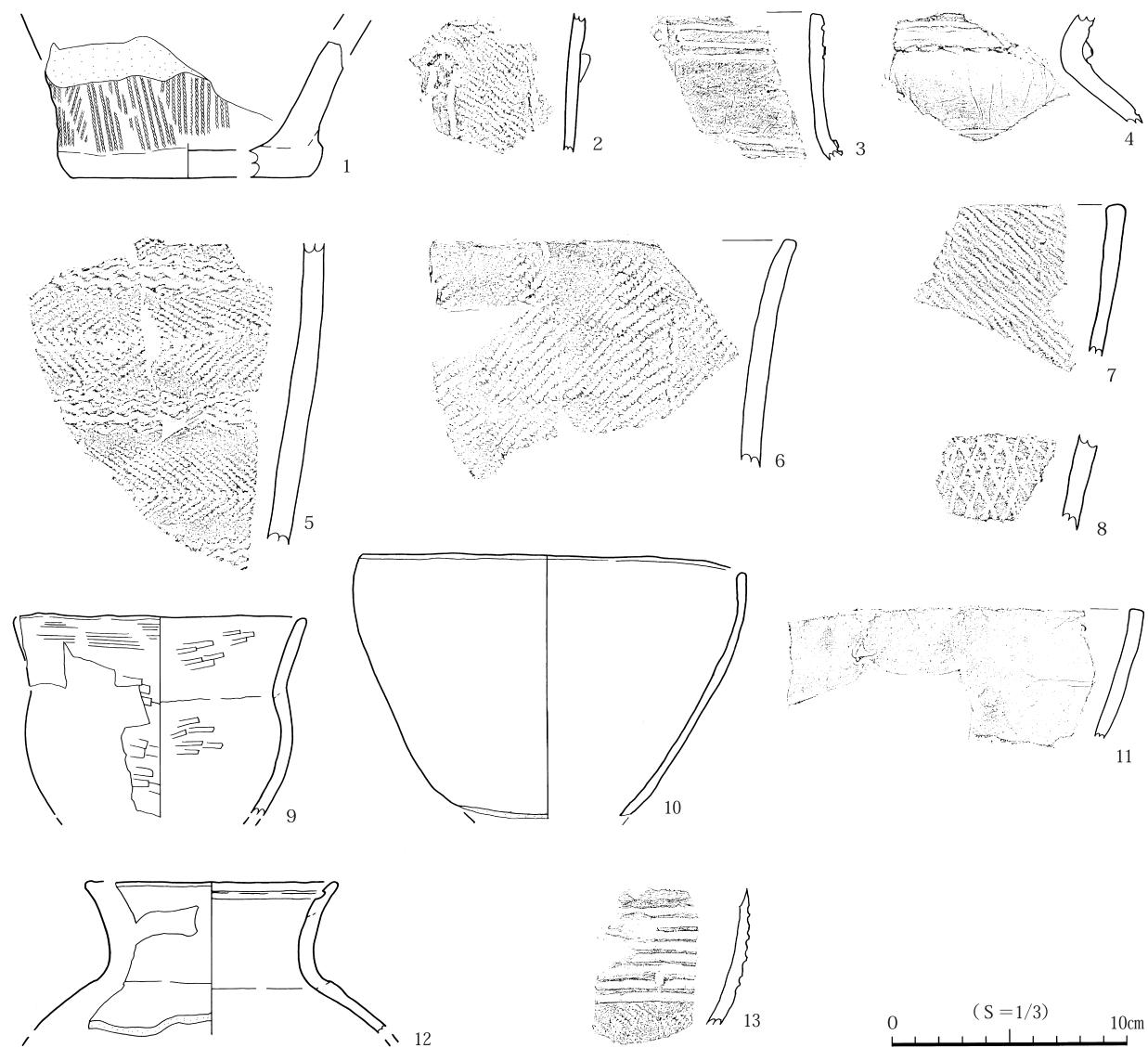


図68 B区出土縄文土器

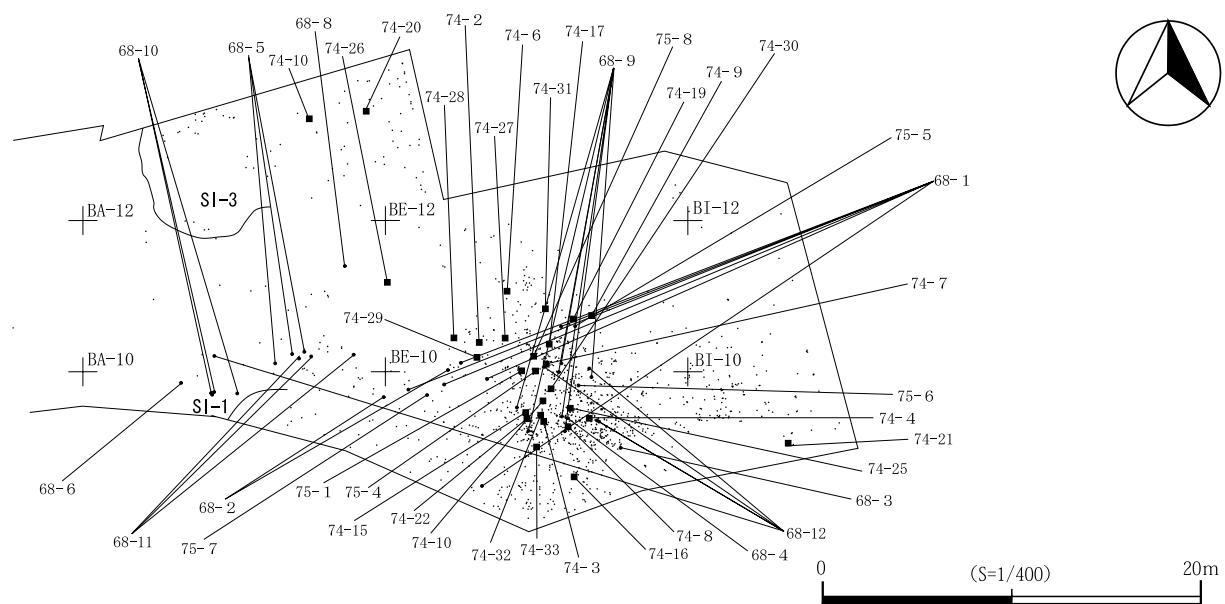


図69 B区遺物出土状況（弥生土器を除く）



図70 B区出土弥生土器①

0 (S = 1/3) 10cm

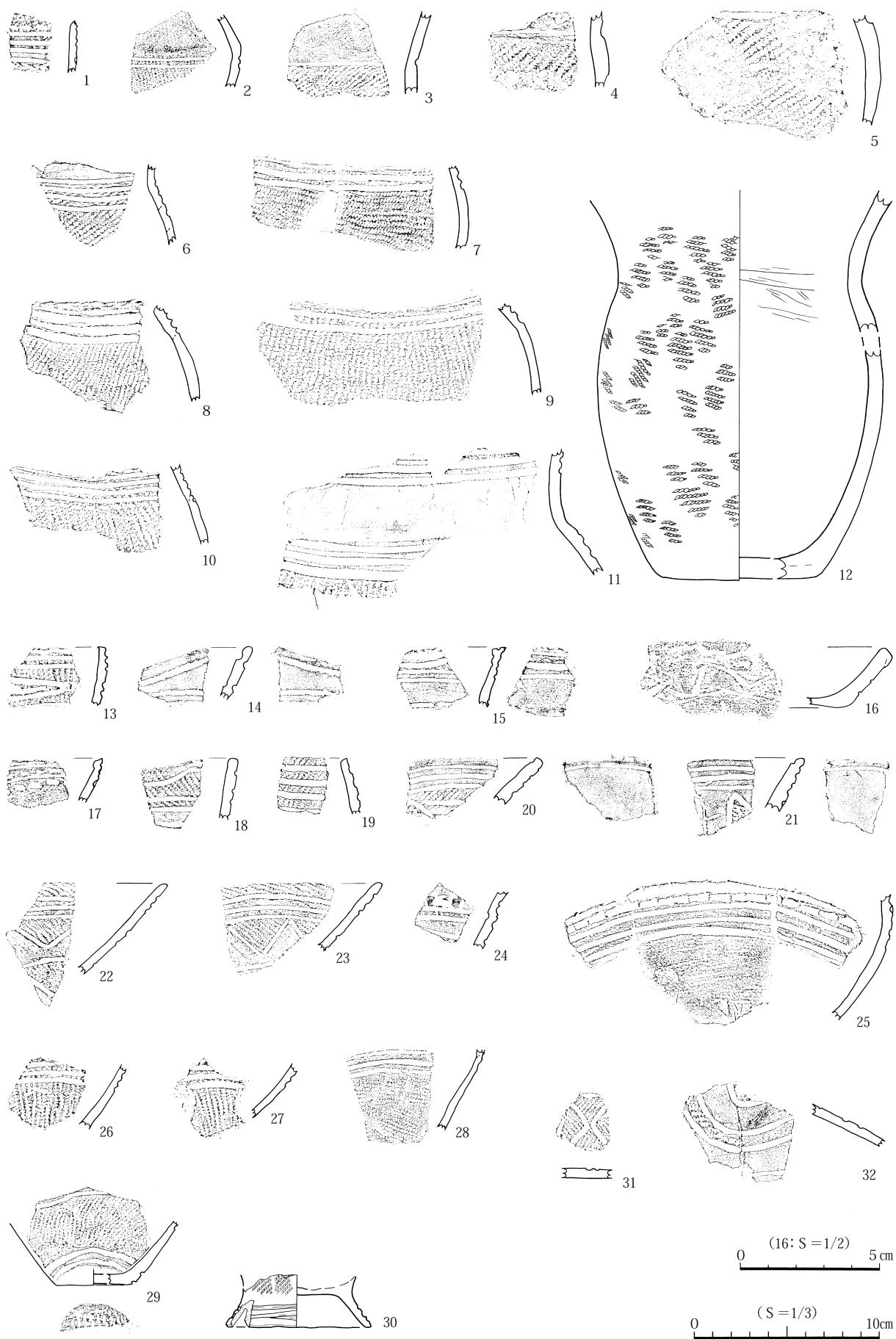


図71 B区出土弥生土器②



図72 B区出土弥生土器③

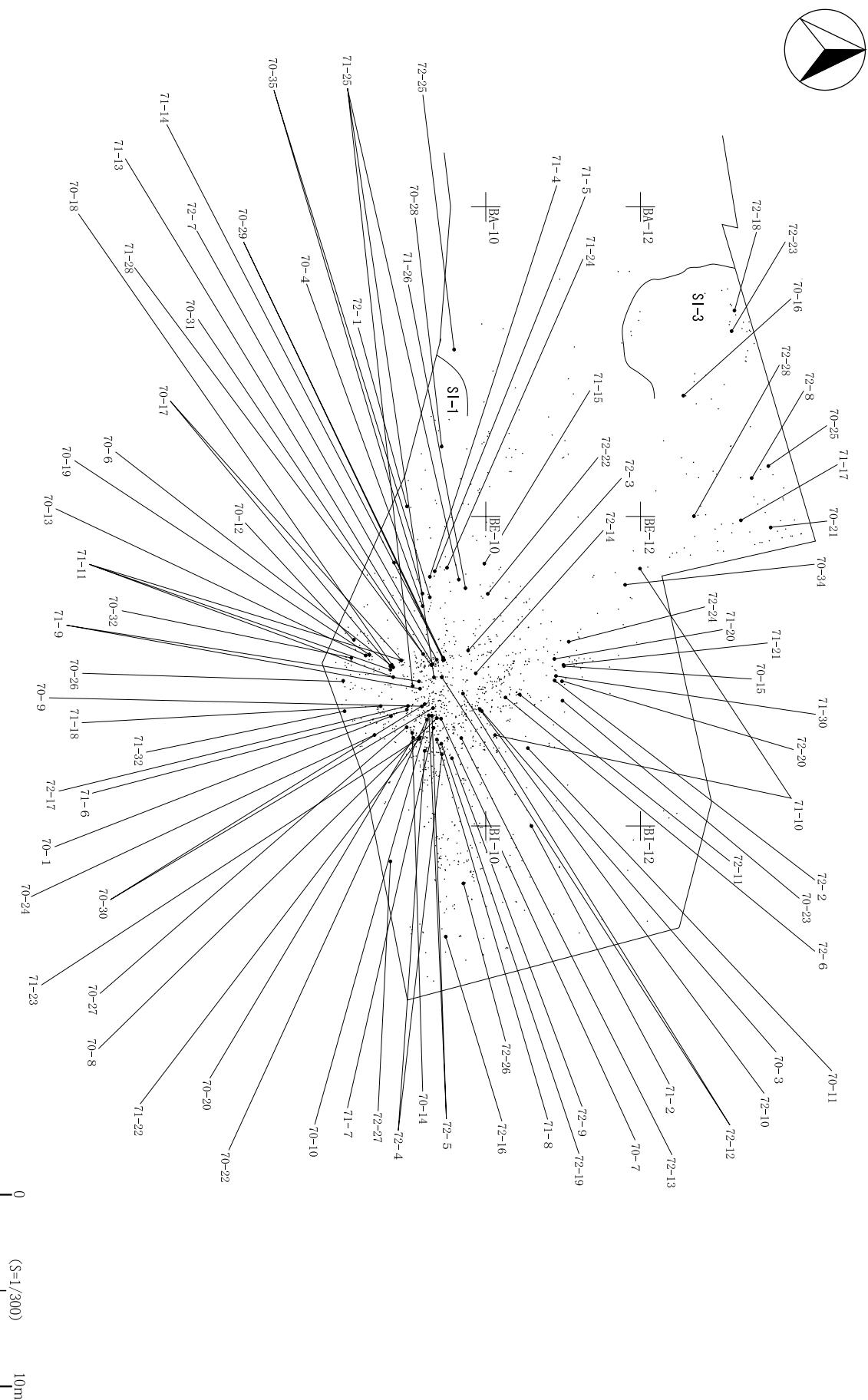


図73 B区弥生土器出土状況



図74 B区出土石器①

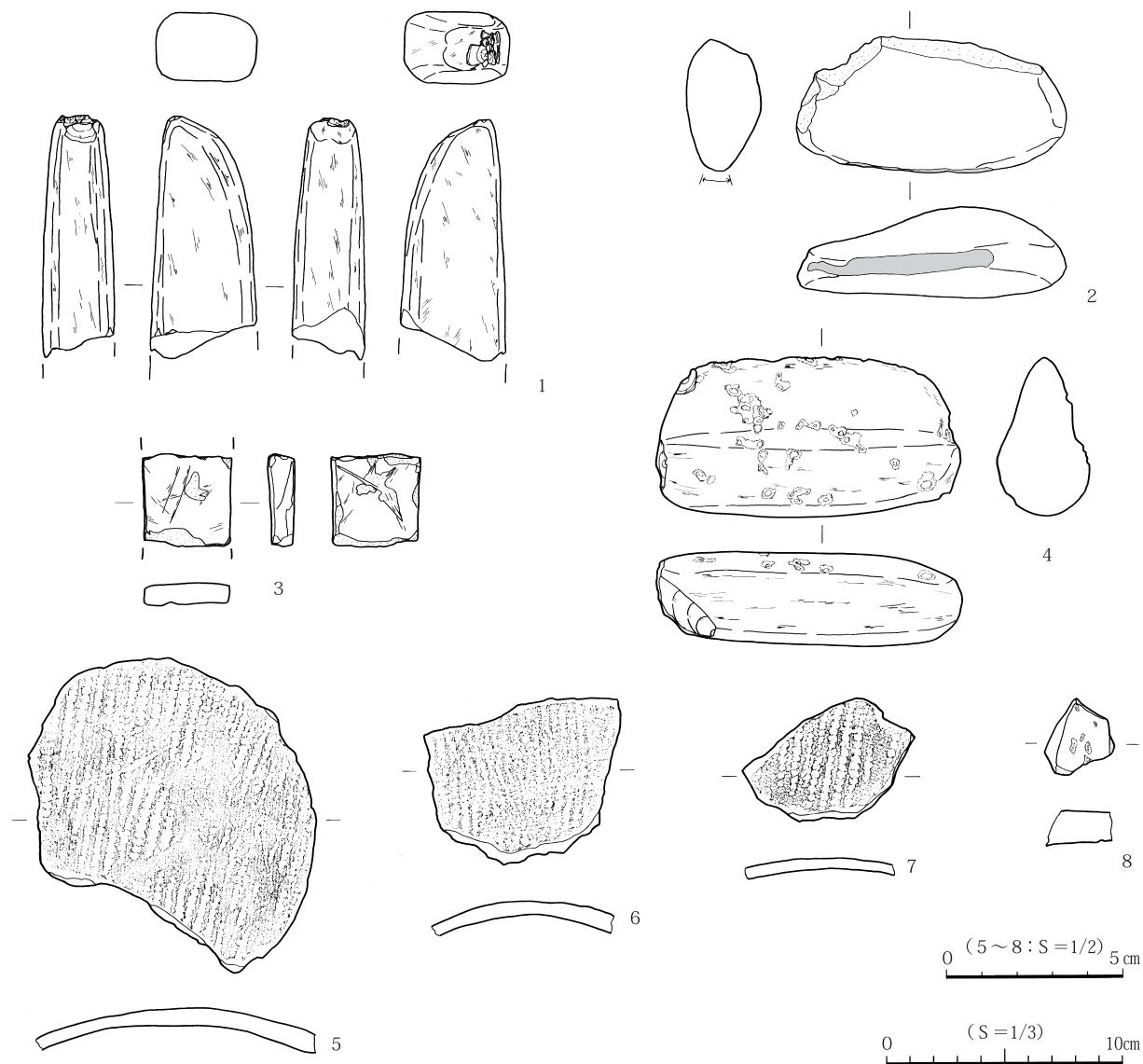


図75 B区出土石器②・土製品・石製品

陶磁器はB区を中心に100点程出土しており、一部を写真図版52に掲載した。多くは破損後二次被熱している。17世紀後半から19世紀半ばの製品が主体である。9は肥前産の染付青磁皿で蛇の目凹形高台を有し、高台に砂が付着している。18世紀後半の製品である。10は肥前産の染付磁器碗、11は同鉢、12は同八角鉢で、これらは17世紀後半から18世紀前半の製品である。14・15は瀬戸・美濃産の染付端反碗で、外面は捻子花状の帯文で区画されている。19世紀半ば頃の製品である。16は肥前産の染付磁器碗で、18世紀代の製品である。17は馬の目文が描かれた瀬戸・美濃産の陶器皿で、18世紀代の製品である。19は小久慈焼で、見込にロクロ目を残し高台は削出しによるところから徳利と考えられる（底径6.3cm）。19世紀後半以降の製品である。20は肥前産の染付磁器碗で、18世紀後半の製品である。21は肥前産の染付磁器碗で、17世紀後半から18世紀前半の製品である。22は二重網目文が描かれた肥前産の染付磁器碗で、17世紀後半の製品である。23～25は同一個体となる瀬戸・美濃産灰釉陶器の菊花皿で、16世紀末頃の製品と考えられる。

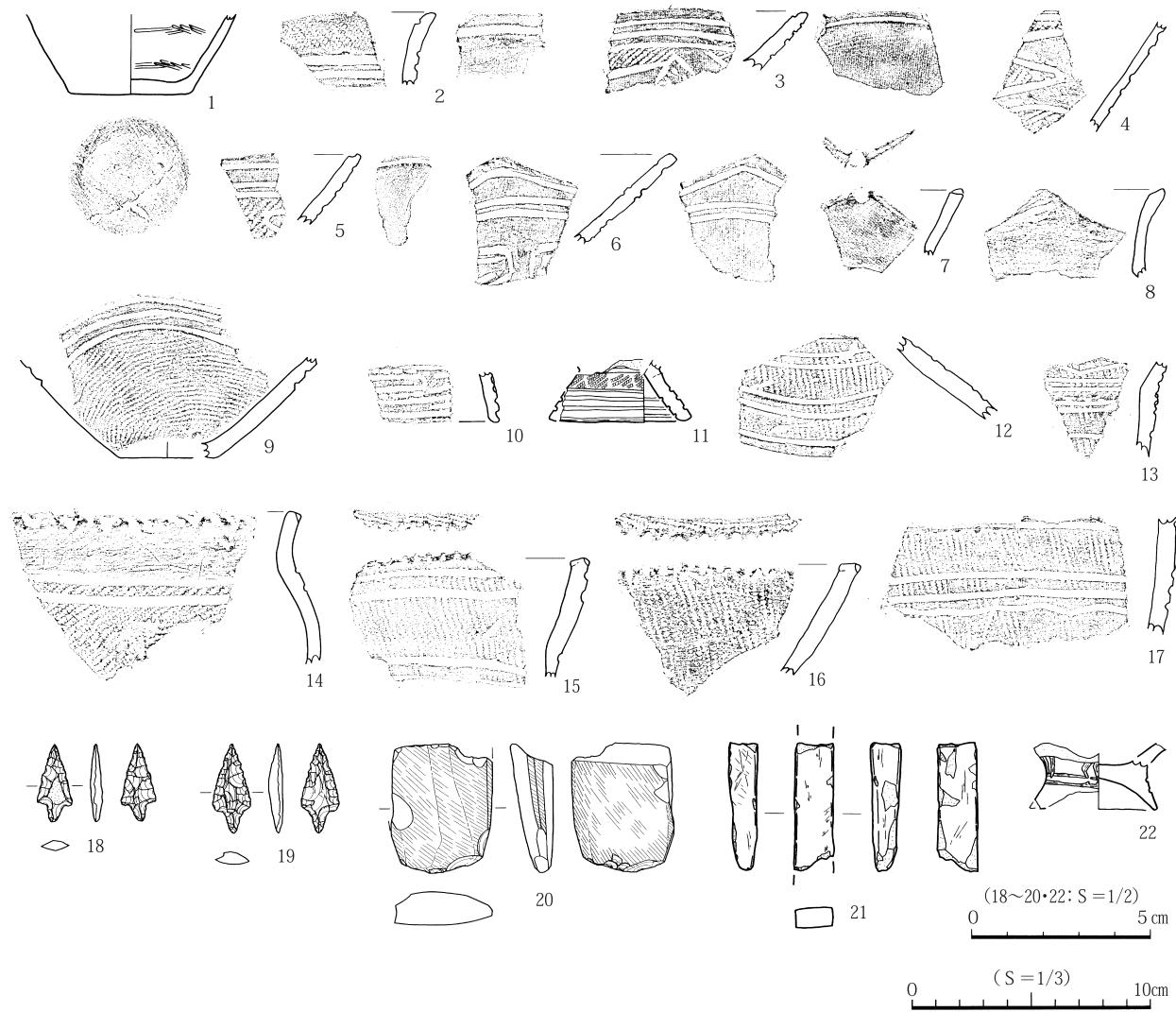


図76 C区出土遺物

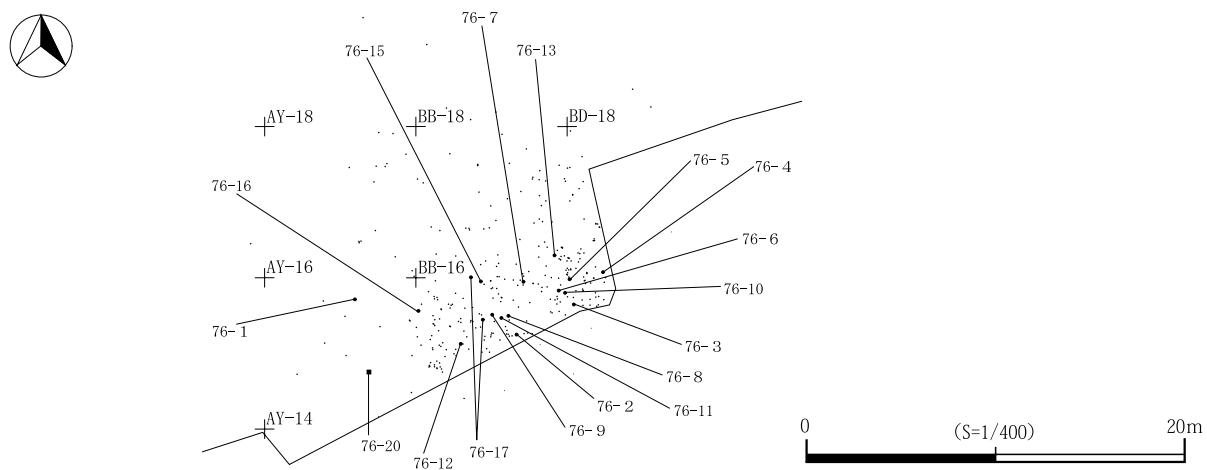


図77 C区遺物出土状況

銭貨は一部を写真図版51に掲載した。銭4は表採された永樂通寶である。外径23mm、内径20mm、重量1.5gで、孔内にバリが残る。寛永通寶は背文のない新寛永が3点出土した。銭5の計測値は外径23mm、内径19mm、重量1.9gである。銭1の計測値は内径22mm、内径18.5mm、重量2.2gである。銭3は背面の波文が11波の真鑑四文銭で、外径28mm、内径20.5mm、重量4.0gである。鉄銭は3点出土したが、残存状態が悪く図化・計測はしていない。

煙管は雁首(BG-8グリッド)、吸口(BD-11グリッド)が各1点出土した(写真図版51)。いずれも銅製である。

3) C区(図76・77)

遺物は主にⅡ層から出土しており、弥生土器の小片が多い。76-1は縄文時代後期の壺である。2~13は弥生時代中期の土器で、2・7・8・13は甕、3~6は浅鉢、9~11は鉢、12は蓋である。14~17は中期後葉の念仏間式に相当する甕と考えられる。弥生土器の様相はB区と同様である。

剥片石器は18・19の石鏃2点が出土した。礫石器は磨製石斧、磨石、砥石各1点が出土している。20は緑色凝灰岩製の小型磨製石斧で、全面に研磨の痕跡を残す。側面の稜は擦切技法の痕跡である。21は砂岩製の砥石で4側面に使用痕がある。B区出土の砥石(75-3)に類する使用痕であり、ともに鋭利な金属の研磨に使用されたと考えられる。

鉄銭は1点出土したが、残存状態が悪く図化・計測はしていない。

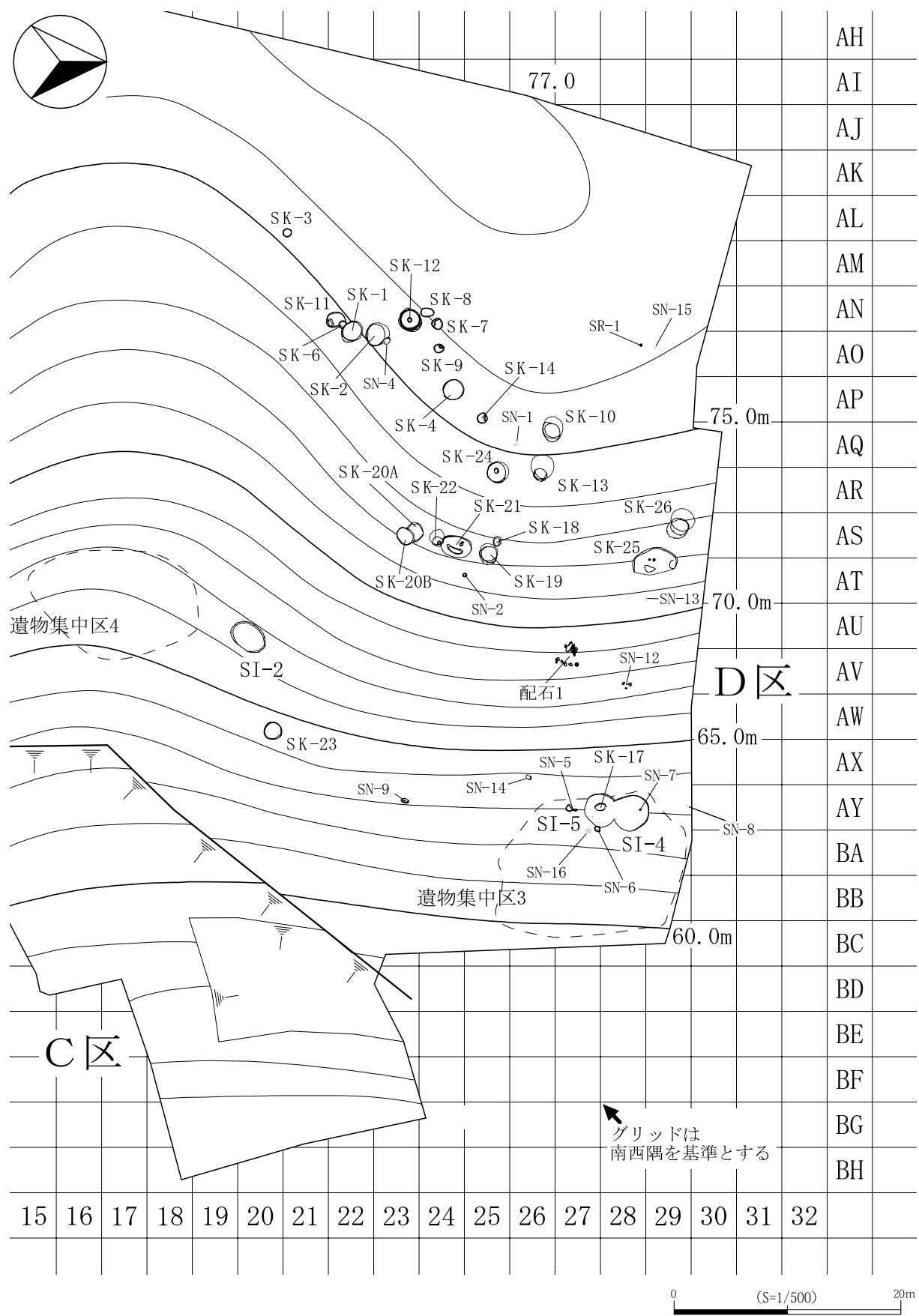


図78 D区遺構配置図

第3節 D区の検出遺構と出土遺物

丘陵頂部と頂部から下る概ね東向きの斜面地にあたり、標高は60～77mを測る。遺構および遺物の年代は縄文時代後期初頭を主体とする

1 竪穴住居跡

第2号竪穴住居跡／旧表記：07中居林SK-17（図79・80）

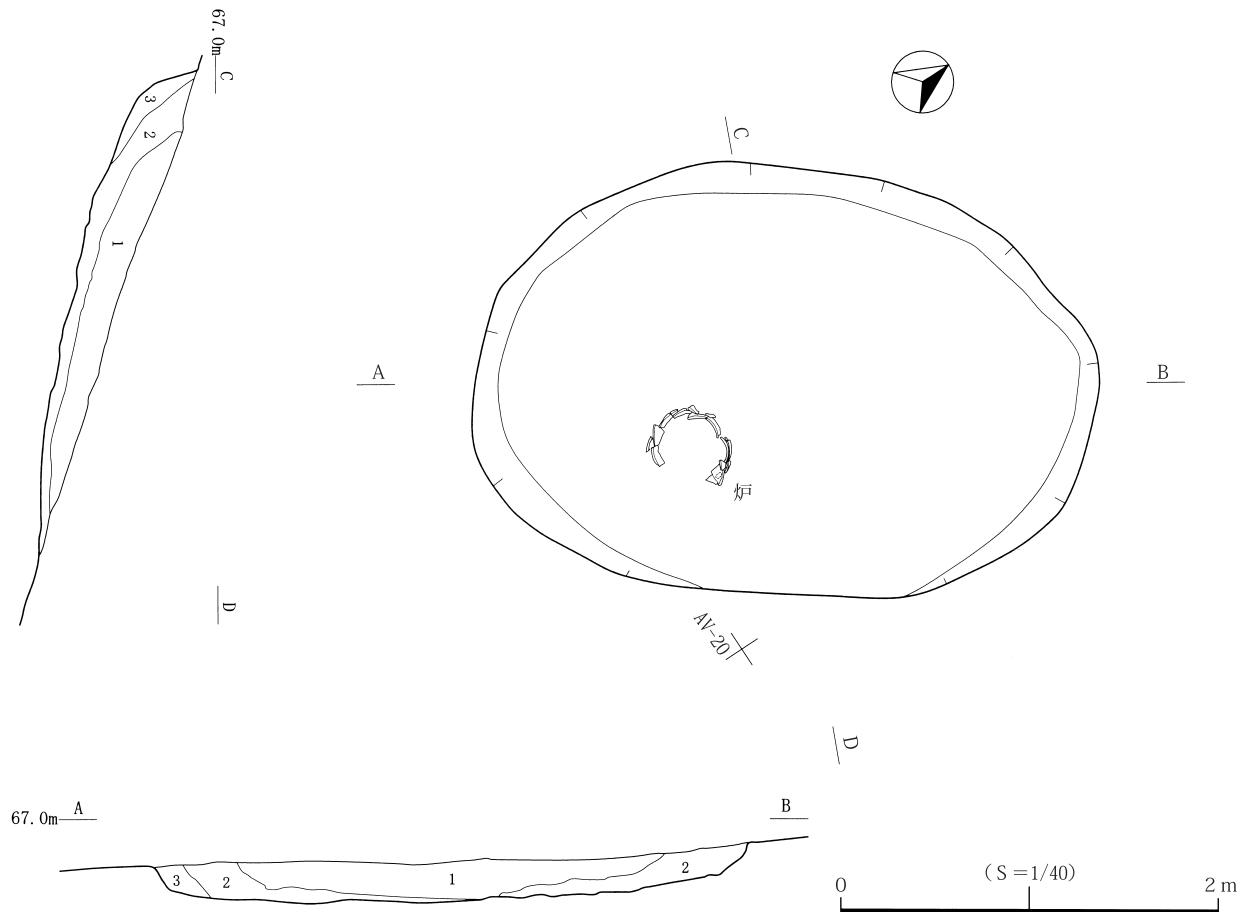
[位置・確認] 東向きの斜面、AU-20グリッドに位置する。Ⅲ b層で黒褐色土の落ち込みとして確認した。現場ではSK-17として調査しており、遺物の注記はそのように行っている。報告に当たつて遺構番号を振り替えた。

[規模・形状] 平面は2.25×3.3mの橿円形で、確認面からの深さは最大で30cmである。床面積は6m²である。

[堆積土] 3層に分けられた。

[壁・床面] 床面は斜面に従って傾斜しており、平坦部を持たない。セクションC-Dラインでは、斜面上部と斜面下部での床面の比高差は60cmになる。貼床や硬化面ではなく、Ⅲ層下部を床面としている。壁は緩やかに外傾して立ち上がる。

[炉] 床面中央からやや南に外れたところで、底部を欠く1個体の土器が正位に埋設された状態で出



第2号竪穴住居跡(旧 07中居林 SK-17)

1層 黒褐色土 10YR2/1 To-Cu 3%、To-Nb 1%混入。
2層 褐色土 10YR3/3 To-Cu 3%、To-Nb 3%混入。
3層 暗褐色土 10YR3/4 黄褐色土ブロック10%、To-Cu 3%、To-Nb 3%混入。

図79 第2号竪穴住居跡①

土した。土器内の堆積土中に焼土層の存在が確認されたため、これを土器埋設炉と判断した。焼土層は埋設炉の掘方を埋め戻した4層の上面に、 $15 \times 20\text{cm}$ の不整な楕円形に形成される。土器は一部破壊された後に埋設されたようで、南側の土器片が検出されなかった部分は復元時も破片が足りず口縁部・胴部とともに全周しない。埋設当初から土器の一部は欠損していたと考えられる。また、土器埋設炉検出面から底面までの深さが 25cm なのに對し土器の復元高は 37cm を測るため、一部の破片は炉体の裏込めに用いられていたと考えられる。

[柱穴・施設] 確認できなかった。

[出土遺物] 1は炉体土器である。底部から直線的に立ち上がり、口縁部下でわずかにくびれる。口唇は面取りされ、胴部には縄文LRが縦回転で施される。外面には広い範囲で黒斑が残り、スス・コゲの付着はあるものの使用頻度は低い。2は深鉢胴部片である。1とは別個体であり住居跡確認面で出土した。縄文LRを縦回転により施文する。

[時期] 炉体土器の特徴から、縄文時代後期初頭と考えられる。

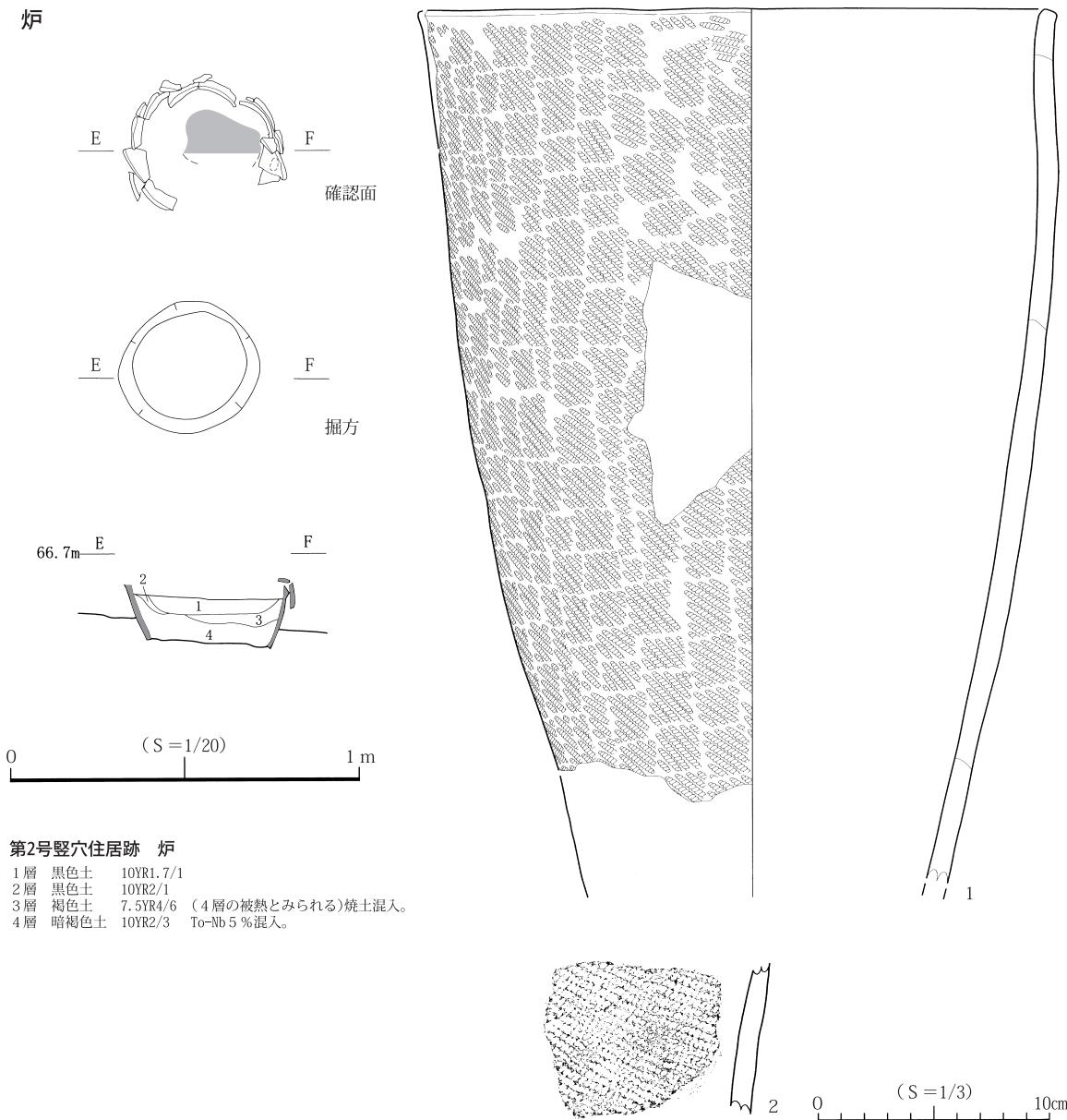


図80 第2号竪穴住居跡②

第4号竪穴住居跡（図81・82・84・85）

[位置・確認・重複] Ⅲ層がテラス状の平坦面となったAY-28グリッドに位置する。遺物集中区3と呼称した包含層を掘り下げた後に、炉跡及び硬化面を確認したため住居跡と判断した。第5号竪穴住居跡と重複し、出土土器の様相から本住居跡が古いと推定した。

[規模・形状] 図81で示した住居範囲は、掘方底面の範囲を示したものである。平面は直径3m程の円形と推定される。床面積は8m²である。

[壁・床面] 住居跡の掘り込みを見落としたまま掘り下げたため、壁及び堆積土の詳細は不明である。掘方底面をV a層とし、Ⅲ a層に近似した黒褐色土で厚さ10cm程掘方を埋め戻して床面としている。掘方覆土は第5号竪穴住居のものよりやや淡いが、層界は不明瞭で切り合いのラインは推定である。硬化面は炉の南側にあり、炉の脇から壁際にかけて1×1.2mの範囲で確認された。

[炉] 推定される床面範囲のほぼ中央で、平面形が花弁状となるように土器片の表面をそれぞれ内側に向けて組まれた土器組みを検出した。土器組みの内側に被熱面が確認されたため、これを本住居跡の炉跡と考えた。炉の構造は土器片圓炉で、土器片は少なくとも4個体から取られている（図85中段に接合状況）。床面を最大20cm掘り下げた後、掘方の外側に沿わせて土器片を埋置している。火床面は床面より5~10cm下がった場所に形成されている。本炉跡に用いられた土器の最大口径は24cmであるが、単純に土器を埋設せず、分割した破片の土器外面にあたる方を炉の内側になるように並べ直すことにより炉の径を大きくしようと企図したことが窺え、炉径は40×50cmとなっている。また、単体の土器では破片を貯えないことから、複数個の土器を用いたと考えられる。調査時は複数個体を用いていると考えなかったため、土器の取り上げ単位が大まかで、細かな接合状況を掴むことができなかった。

炉の検出面で出土した炭化材の放射性炭素年代測定を行い、3820±30yrBPの年代値を得た（NAKAI-08：第5章第1節）。また、炉内に堆積した焼土を採取し水洗選別した結果、炭化したアワ3点を回収した（第5章第4節）。なお、本炉跡は住居跡に伴う炉と判断するまでは、SN-10として調査していた。

[柱穴・施設] 確認できなかった。

[出土遺物] 図82は炉跡出土土器である。いずれも左下がりの縄文を縦回転で施している。1~5は炉体に用いられたもので、破片に分割された後、各々混在して使われている（接合状況は図85中段）。また、図85上段で示したように斜面下方の広い区域から出土した破片と接合する。1~3・5は口縁部が内湾し、4はわずかに外反する器形である。口縁部直下は初めから施文をしないか、ナデ消すことで無文としている。6は炉の検出面で出土している。7は炉の脇で出土した土製円盤である。土器片を用い、縁辺を研磨により整形する。図84には住居跡確認以前にⅢ層下位として取り上げた土器を示した。1・7・10・11は出土位置から本住居跡覆土の遺物と推定されるが、炉跡出土土器と同様に、住居跡より斜面下方で出土したものと接合する例もある。1は大型の壺で、沈線で区画された部分に充填縄文を施しており大木10式併行期のものとみられる。7・10・11は深鉢で、頸部がややくびれ口縁が外反する器形である。縄文はいずれも縦回転で施されている。

[時期] 出土遺物及び炭化物の放射性炭素年代測定結果から、縄文時代後期初頭と考えられる。1点出土した大木10式的な壺（84-1）は出土位置から本住居跡覆土の出土遺物と推定されるが、共伴

するものかどうかについては類例の増加を待ちたい。

第5号竪穴住居跡（図81・83～85）

[位置・確認・重複] III層がテラス状の平坦面となったAY-27・28グリッドに位置する。遺物集中区3と呼称した包含層を掘り下げた後に、炉及び硬化面を確認したため住居跡と判断した。第17号土坑及び第4号竪穴住居跡と重複している。本住居跡確認以前に調査した第17号土坑より古いのは明らかだが、第4号竪穴住居跡より新しいと考えた根拠は出土土器の様相によるもので、現地調査の時点では新旧を判断できなかった。

[規模・形状] 図81で示した住居範囲は、掘方底面の範囲を示したものである。平面は直径2.9m程の円形と推定され、床面積は7 m²である。

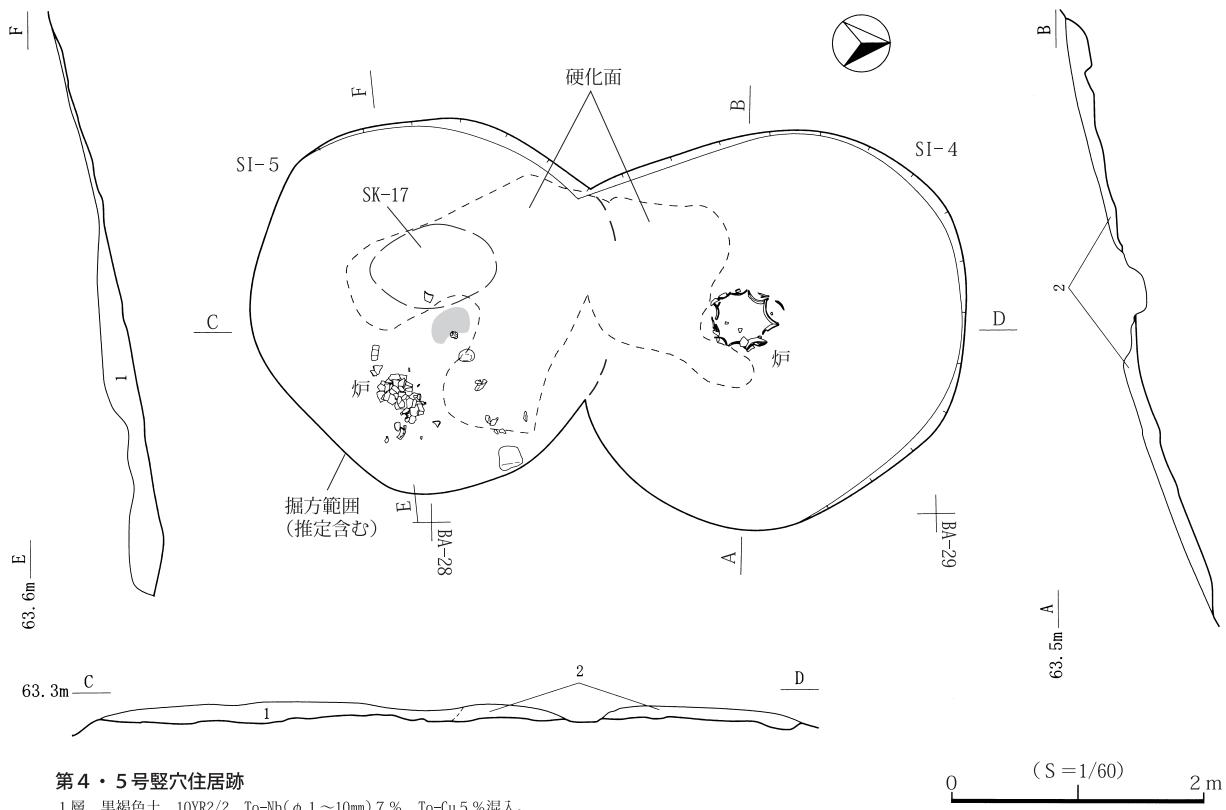
[壁・床面] 床面で竪穴住居跡であることを確認したため壁については不明であるが、本住居跡の床面と、上部にあった第17号土坑の確認面の比高差は40cm程で、住居としての掘り込みの深さはその程度であった可能性が高い。Va層を掘方底面とし、IIIa層に近似した黒褐色土で厚さ5～25cm程掘方を埋め戻して床面としている。掘方覆土は第4号竪穴住居のものよりやや濃い黒褐色土であるが、層界は不明瞭で立ち上がりのラインは推定である。炉の北側に最大幅2mの硬化面が不整形に形成される。

[炉] 中央で検出された焼土は明瞭な被熱面を形成しておらず、炉とは認定しなかった。南東の壁寄りにある土器片集中部分とその脇の被熱面が本住居跡の炉跡と考えられる。土器片は20×40cmの範囲で、1個体の土器（83-8）が折り重なるように出土した。原位置を留めていない破片もあるため、壊した土器を敷いたものと考えられる。土器敷きの上部では顕著な焼土溜まりは確認できなかった。敷かれた土器片の下部には焼けた粘土範囲が広がっている。また、敷かれた土器片の南東側に25×35cmの楕円形をした被熱範囲を確認した。焼粘土範囲及び楕円形の被熱範囲の下部には掘方があり、両者は一体となった炉と考えられる。土器片敷炉としておくが、敷かれた土器片の範囲外に火床面があり、構造については類例を集め検討することが必要である。なお、本炉跡は住居跡に伴う炉と判断するまではSN-11として調査していた。

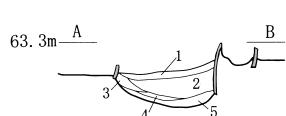
[柱穴・施設] 確認できなかった。

[出土遺物] 図83は床面及び掘方出土土器である。1は小型の鉢で、赤色塗彩されている。2～6・8～10は深鉢で、いずれも縄文LRが縦回転施文される。第4号竪穴住居跡とは、図84-10・11のように頸部がくびれる器形を伴わない点で明瞭な違いがある。8は炉体土器である。7は小型の切断壺形土器で、切断部は体部上方である。切断面は面取り状に丁寧になでられる。貫通孔を有する突起が体部に2箇所あり、体部下半には内面からの焼成後穿孔が1箇所施される。体部外面に沈線でコ字状の文様が4単位描かれているが、1単位（図中央）は突起の部分で線が途切れており完結していない。なお、赤色顔料の付着が文様沈線の内外で観察されるため、本来は体部全面に赤色顔料が塗布されていたものと考えられる。図84に示したIII層下位として取り上げた土器のうち2～6・8・9は、出土位置から本住居跡覆土の遺物と推定される。2～4は有文の深鉢、5・6・8は壺である。9は口縁部が内削ぎに面取りされ、器形から切断壺形土器の可能性がある。

[時期] 床面及び掘方出土土器から、縄文時代後期初頭と考えられる。



第4号竪穴住居跡 炉



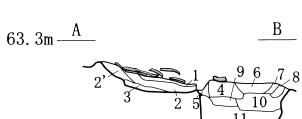
第4号竪穴住居跡 炉

1層 暗褐色土 10YR3/4 To-Nb(ϕ 1~5mm) 2%、To-Cu 1%、炭化物(ϕ 10~20mm) 3%斑状に混入。
2層 明褐色土 7.5YR5/6 焼土、黒褐色土(10YR2/3)20%混入。
3層 黒褐色土 10YR2/3 To-Nb(ϕ 1~5mm) 1%混入。
4層 明赤褐色土 5YR5/8 焼土、2層より強い焼け面。
5層 黒褐色土 10YR2/2 To-Nb(ϕ 1~10mm) 3%、To-Cu 1%混入。

第5号竪穴住居跡 炉



第5号竪穴住居跡 炉



1層 橙色焼粘土 5YR6/8 小石(ϕ 1~5mm)が少量混入。
2層 黄橙色焼粘土 7.5YR7/8 To-Nb(ϕ 2~5mm) 1%混入。
2'層 褐灰色土 7.5YR6/1 小石(ϕ 1cm未満)が多く混入。
3層 暗褐色土 10YR3/3
4層 にぶい黄橙色土 7.5YR7/2 2'層と同質、小石(ϕ 1cm未満)が多く混入。
5層 暗褐色土 10YR3/4 To-Cu(ϕ 1mm未満) 5%混入。
6層 にぶい黄橙色焼粘土 10YR6/3
7層 浅黄橙色焼粘土 7.5YR8/6
8層 灰黄褐色焼粘土 10YR4/2 小石(ϕ 1cm未満)が少量混入。
9層 黑褐色土 10YR3/2 To-Cu(ϕ 1mm未満) 5%、To-Nb(ϕ 1~2mm) 1%混入。
10層 橙色焼土 5YR6/6 To-Cu(ϕ 1mm未満) 5%、To-Nb(ϕ 1mm) 1%混入。
11層 黑褐色土 10YR2/3 To-Cu(ϕ 1mm未満) 5%、中央に焼土が少量混入。

(S = 1/30) 1 m

図81 第4・5号竪穴住居跡



図82 第4号竪穴住居跡床面出土遺物

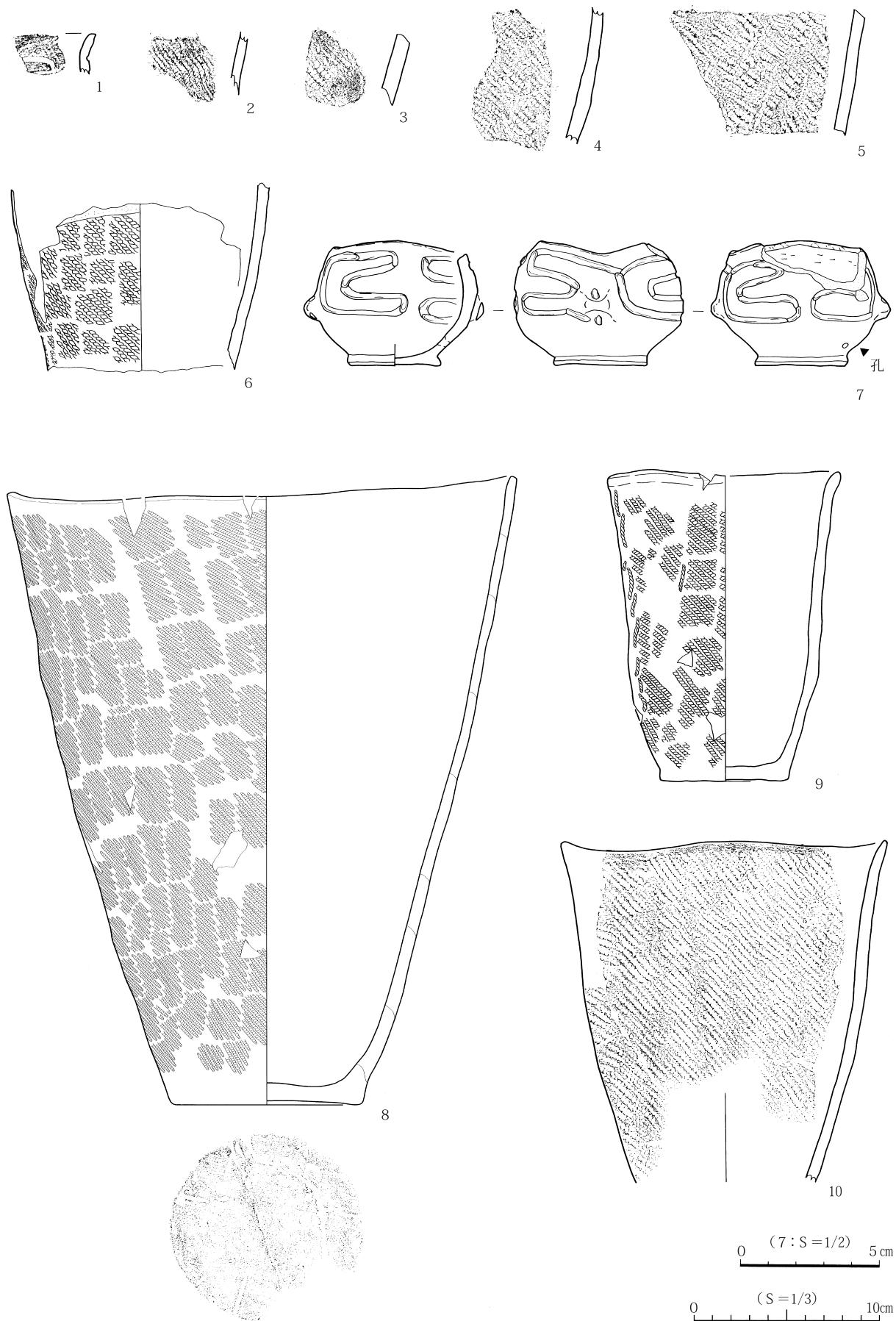


図83 第5号竪穴住居跡床面・掘方出土遺物

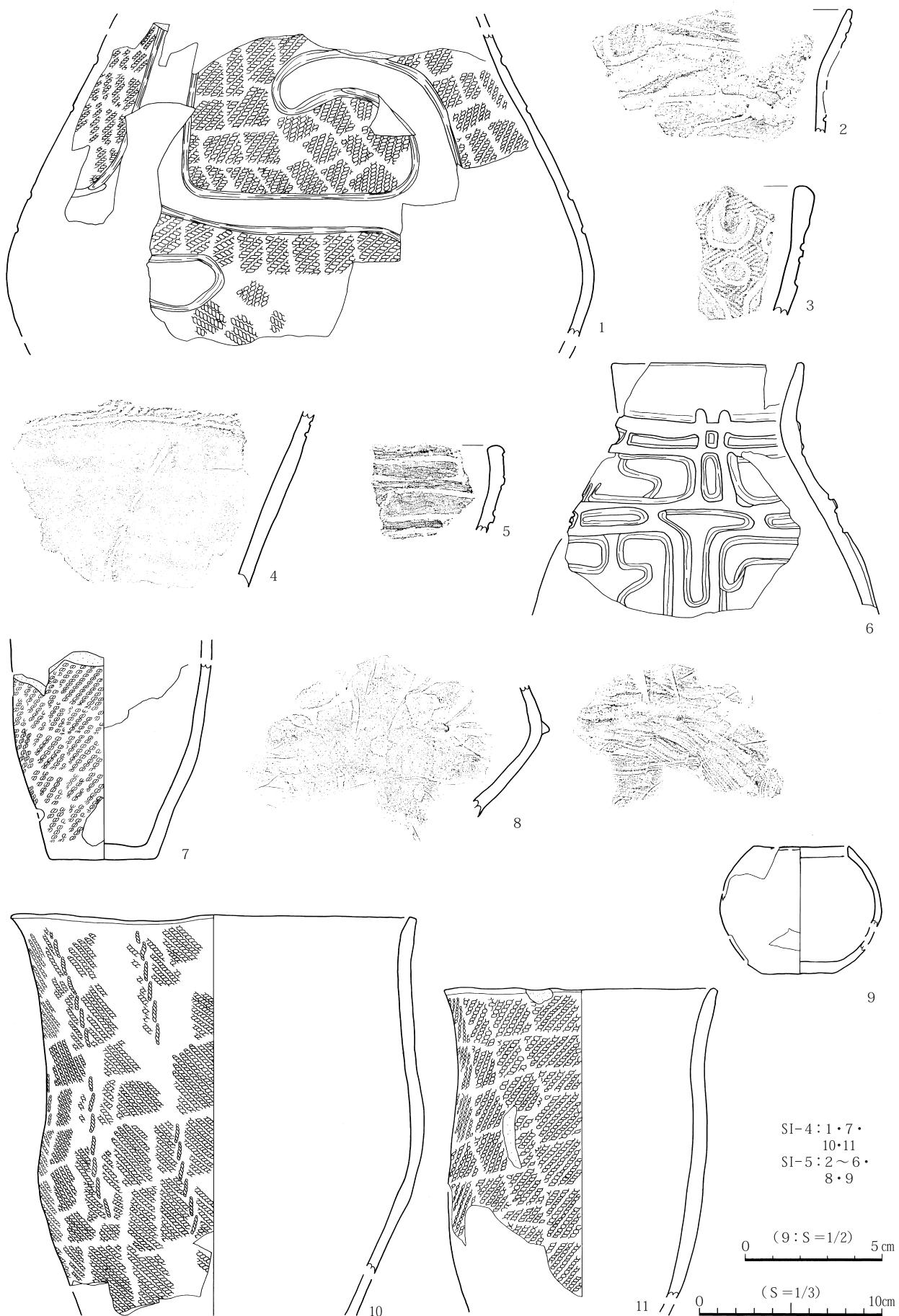
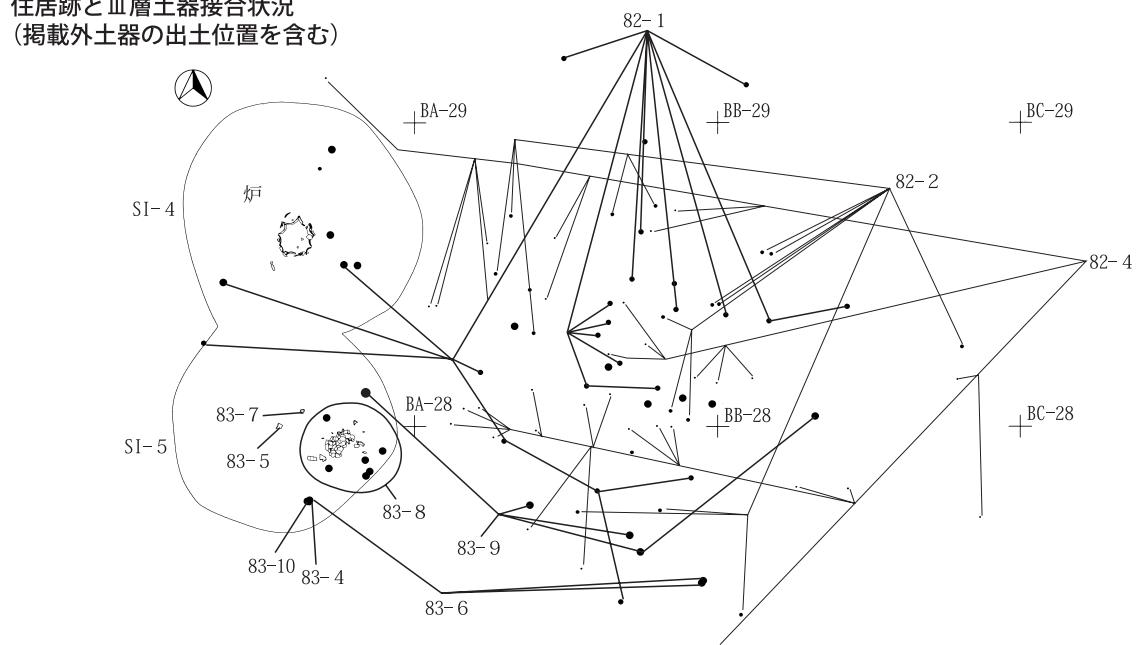
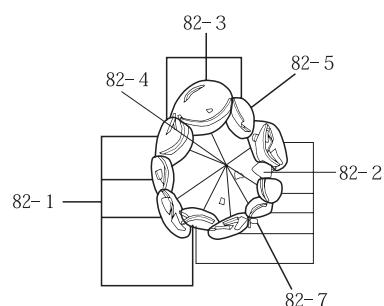


図84 第4・5号竪穴住居跡覆土出土遺物

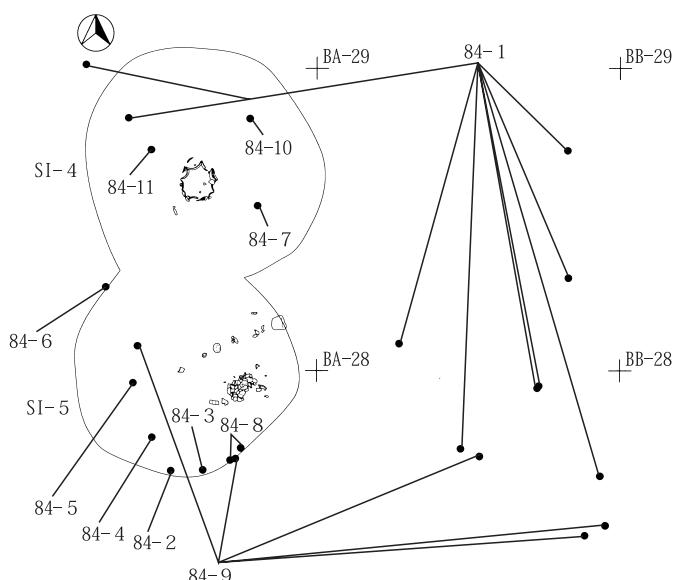
住居跡とⅢ層土器接合状況
(掲載外土器の出土位置を含む)



SI-4 炉(拡大)



住居跡覆土土器接合状況(掲載したもののみ示した)



(S = 1/100)

図85 第4・5号竪穴住居跡出土土器接合状況

2 土坑

第1号土坑（図86・93）

[位置・確認・重複] 南東向きの斜面、AO-22グリッドに位置する。Ⅲ b層上面で黒褐色土の落ち込みと、その中央に目玉状に堆積した八戸火山灰を確認した。第6号土坑と重複し、本土坑が古い。

[規模・形状] 開口部は $1.6 \times 2\text{ m}$ 、底面は $1.7 \times 1.8\text{m}$ のともに橈円形で、確認面からの深さは 1.1 m である。**[堆積土]** 13層に細分された。1層は八戸火山灰及びロームの再堆積である。壁際には崩落土とみられるローム混じりの堆積土があり、底面には中央が盛り上がった黄褐色土が堆積している。やや複雑な堆積であるが、最上部に八戸火山灰が堆積していることから、周辺土坑の掘削土で人為的に埋め戻されたと考えられる。**[壁・底面]** 八戸火山灰層中にある底面はほぼ平坦で、壁は内傾して立ち上がる部分を持つ。壁際に崩落土がみられることから、当初の形状を保ってはいないがフ拉斯コ状土坑と考えられる。**[出土遺物]** 繩文時代後期の土器が少量出土している。93-1は外面に磨消繩文が施される。**[時期]** 出土遺物から縄文時代後期と考えられる。

第2号土坑（図86・93）

[位置・確認] 南東向きの斜面、AO-23グリッドに位置する。Ⅲ b層上面で、黒褐色土の落ち込みを確認した。また、開口部周辺で薄い焼土を複数箇所確認している(SN-4を含む)。**[規模・形状]** 開口部は $1.6 \times 1.9\text{m}$ の橈円形、底面は $2 \times 2.1\text{m}$ のほぼ円形で、確認面からの深さは 1 m である。**[堆積土]** 8層に細分された。1・2層は自然堆積とみられ、最終的に自然埋没している。3層以下は地山をブロック状に含む土からなり、最初に人為的な埋め戻しを受けていると判断した。**[壁・底面]** 底面は八戸火山灰最下層まで掘り込んでおり、部分的に高館火山灰層が露出している。若干起伏を持つが、概ね平坦である。壁は崩落した部分が多いものの、内傾して立ち上がる部分があるためフ拉斯コ状土坑と判断できる。**[出土遺物]** 縄文時代後期の土器が少量出土している。93-2は磨消繩文が、3は沈線文と赤彩が施されている。**[時期]** 出土遺物から縄文時代後期と考えられる。

第3号土坑（図86）

[位置・確認] 南東向きの斜面、AL-21グリッドに位置する。Ⅲ層の堆積が薄い場所であり、表土直下のV a層で確認した。**[規模・形状]** 平面は直径80cmの円形で、確認面からの深さは40cmである。**[堆積土]** Ⅲ・V層に由来する堆積土が3層に分けられた。人為堆積と考えられる。**[壁・底面]** 底面はほぼ平坦で、壁は急角度で外傾して立ち上がる。**[出土遺物]** 縄文時代後期の土器が出土しているが、小片のため掲載していない。**[時期]** 堆積土の土質・色調から縄文時代の遺構と考えられるが、詳細な時期は不明である。

第4号土坑（図87・93）

[位置・確認] 南東向きの斜面、AP-24グリッドに位置する。Ⅲ層の堆積が薄い場所であり、表土直下のVI層で褐色土の落ち込みと、その中央に目玉状に堆積した八戸火山灰を確認した。**[規模・形状]** 開口部は直径 1.7 m 、底面は直径 1.8m のともに円形で、確認面からの深さは 1.2m である。**[堆積土]** 18層に細分された。各層の堆積単位は細かく、ブロック状のものが多い。壁際の堆積土はロームを多く含むため、壁面の崩落土と考えられる。中央部の堆積土はロームを含む黒褐色土が主体で、最上層は八戸火山灰であることから本土坑は人為的な埋め戻しを受けていると考えられる。**[壁・底面]** 底面は高館火山灰層まで掘り込まれており、ほぼ平坦で壁際がやや高まる。壁は概ね内傾して立ち上

がっておりフラスコ状土坑と判断できる。[出土遺物] 8・9層で、底部を欠くもののほぼ1個体に復元できる深鉢が出土している(93-4)。底部から口縁部にかけて直線的に立ち上がり、胴部に縄文LRが施されている。[時期] 出土土器から縄文時代後期初頭と考えられる。

第6号土坑(図87)

[位置・確認・重複] 南東向きの斜面、AN-22グリッドに位置する。第1・11号土坑と重複している。調査順が第1号土坑の後になってしまったが、いずれの遺構よりも本土坑が新しい。[規模・形状] 平面は直径70cmのほぼ円形で、確認面からの深さは15cmである。[堆積土] 黒褐色土の単層である。堆積状況は自然堆積と考えられる。[壁・底面] 底面は緩やかに窪み、壁は外傾して立ち上がる。断面形は浅い皿状である。[出土遺物] 縄文時代後期と思われる土器小片が出土したが図化していない。埋没時に混入した可能性がある。[時期] 堆積土の状況から縄文時代の遺構と考えられるが、明確に伴う遺物はなく詳細は不明である。

第7号土坑(図87)

[位置・確認] 南東向きの緩斜面、AN-24グリッドに位置する。表土直下のVI層で確認した。[規模・形状] 平面は直径1mの歪んだ円形で、確認面からの深さは15cmである。[堆積土] にぶい黄褐色土の単層である。ブロック状のロームを多く含むため、人為的に埋め戻されていると考えられる。[壁・底面] 底面はほぼ平坦であるが、西側の壁際10~20cmの間に、高さ5cmほどのテラス状の高まりがある。壁は外傾して立ち上がる。[出土遺物] 出土していない。[時期] 堆積土の状況から縄文時代と考えられるが、出土遺物がなく時期は不明である。

第8号土坑(図87)

[位置・確認] 南東向きの緩斜面、AN-24グリッドに位置する。表土直下のVI層で確認した。[規模・形状] 平面は長径1.2m、短径80cmの楕円形で、確認面からの深さは10cmである。[堆積土] III層に由来する暗褐色土の単層である。V層に由来する浮石やロームブロックを多く含んでおり、人為的に埋め戻されていると考えられる。[壁・底面] 底面には細かな凹凸が多くみられ、壁は緩く外傾して立ち上がる。断面形は浅い皿状である。[出土遺物] 出土していない。[時期] 堆積土の状況から縄文時代の遺構と考えられるが、出土遺物がなく時期は不明である。

第9号土坑(図87・93)

[位置・確認] ほぼ平坦地であるAO-24グリッドに位置する。III層の堆積が薄く、表土直下のVI層で円形の落ち込みと、折り重なるように出土した土器片を確認した。[規模・形状] 平面は75×90cmの楕円形で、確認面からの深さは10cmである。[堆積土] 浮石やローム粒を含む褐色土の単層である。人為的に埋め戻されたものと考えられる。柱穴状のピット内の堆積土はやや浮石を多く含む褐色土である。柱痕は確認できなかった。[壁・底面] 底面は概ね中央が窪み、壁は外傾して立ち上がる。断面形は浅い皿状である。北側の壁寄りに平面30×40cmの楕円形で、深さ20cmの柱穴状のピットを有する。[出土遺物] 確認面及び1層で縄文時代後期初頭の有文深鉢と剥片が出土した(93-5~7)。5は珪質頁岩の剥片で小型の石核から両極技法で剥離しており、片方の縁辺に微細な剥離が認められる。6・7は同一個体の深鉢で、上部に方形基調の区画文が、下部に曲線的な磨消縄文が施される。[時期] 出土遺物から縄文時代後期初頭と考えられる。

第10号土坑（図88）

[位置・確認] ほぼ平坦地であるAQ-26グリッドに位置する。土坑の上全体を南側にある第1号焼土付近から続くⅢ層が薄く覆っており、遺物の散布も見られた。そのため、これを遺物集中区1として調査した後Ⅲ層を除去し、VI層で黒褐色土の落ち込みを確認した。**[規模・形状]** 開口部は 1.4×1.9 m、底面は 1.8×2.1 mのともに楕円形である。確認面からの深さは1mである。**[堆積土]** 17層に細分された。壁際の堆積土はロームと黒褐色土の互層となっており、崩落土と考えられる。中央部及び上面の堆積土は黒褐色ないし黒色土主体で、全体に自然堆積と考えられる。**[壁・底面]** 底面は八戸火山灰中にあり、ほぼ平坦であるが壁際がやや高くなっている。壁は内傾して立ち上がっており、フラスコ状土坑と判断できる。**[出土遺物]** 堆積土中で縄文時代後期の深鉢片が出土しており、そのうち数片が第1号焼土付近で出土した土器と接合した。接合した土器は第1号焼土の項に掲載した（図100-3）。**[時期]** 第1号焼土付近に形成された遺物溜りの土器と本土坑堆積土出土土器が接合しているため、両者は近接した時期の所産とみられるが、前後関係は不明である。縄文時代後期初頭と捉えておく。

第11号土坑（図88）

[位置・確認・重複] 南東向きの斜面、AN-22グリッドに位置する。第6号土坑と重複し、本土坑が古い。**[規模・形状]** 平面は 1.3×1.7 mの楕円形で、確認面からの深さは25cmである。**[堆積土]** Ⅲ層に由来する黒褐色土主体の堆積土で、6層に分けられた。自然堆積と考えられる。**[壁・底面]** 底面は平坦な部分が多く、南端で 50×70 cmの楕円形に窪む。壁は比較的急角度で立ち上がる。**[出土遺物]** 出土していない。**[時期]** 堆積土の状況から縄文時代と考えられる。遺物が出土していないため詳細は不明だが、隣接または重複する土坑と同じく、縄文時代後期に属するものと考えられる。

第12号土坑（図88・94）

[位置・確認] 南東向きの斜面、AN-23グリッドに位置する。Ⅲ層の堆積が薄く、表土直下のVI層で暗褐色土の落ち込みを確認した。**[規模・形状]** 開口部は 1.8×2.2 mの歪んだ楕円形、底面は直径1.9mのほぼ円形である。確認面からの深さは1.4mである。**[堆積土]** 8層に細分された。壁際の堆積土はローム主体で、崩落土と考えられる。中央部は黒褐色土を主体とし、2層はロームの再堆積のため人為的な埋め戻しを受けていると考えられる。また、5層を主体に縄文時代後期の土器が出土している。**[壁・底面]** 底面は高館火山灰まで掘り込まれており、ほぼ平坦である。底面の壁際には西側を除いて幅10~20cm、深さ5~10cmの溝が巡り、中央には深さ15cmのピットがある。壁は崩落部分が多いものの、内傾して立ち上がっておりフラスコ状土坑と判断できる。**[出土遺物]** 主に5層から縄文時代後期の土器が出土した（94-1~6）。1~4は無文または縄文のみが施された深鉢である。1は縄文L Rを口縁部に押圧し、胴部に回転施文している。2は無文、3は縄文L Rが縦回転で、4は縄文R Lが縦回転で施されている。5は磨消縄文で施文された有文深鉢、6は隆帶上に縄文が回転施文された有文深鉢である。**[時期]** 出土遺物から縄文時代後期初頭と考えられる。

第13号土坑（図89）

[位置・確認] 東向きの斜面、AQ・AR-26グリッドに位置する。Va層で黒色土の落ち込みと、その中央で目玉状に堆積したロームを確認した。**[規模・形状]** 開口部は 1×1.2 mの楕円形、底面は 2×2.1 mの円形で、確認面からの深さは1.1mである。**[堆積土]** 11層に細分された。黒色または黒褐

色土を主体とし、上部に明黄褐色ロームが再堆積していることや壁の崩落土がほとんど確認されないことから、廃絶にあたって人為的な埋め戻しを受けたものと考えられる。【壁・底面】底面はほぼ平坦で、壁は狭い開口部に向けて内傾して立ち上がる典型的なプラスコ状土坑である。壁の立ち上がり途中には段差（不整合な部分）がみられるが、これは埋没後に八戸火山灰の最上層を境界として地滑りが起きたためである。【出土遺物】出土していない。【時期】遺物が出土していないため詳細は不明であるが、周辺の土坑と同じく縄文時代後期に属すると考えられる。

第14号土坑（図89・94）

【位置・確認】南東向きの斜面、AP-25グリッドに位置する。表土直下のVI層で確認した。【規模・形状】平面は直径90cmの歪んだ円形で、確認面からの深さは35cmである。【堆積土】8層に細分された。ロームをブロック状に含み、人為的に埋め戻されたものと考えられる。【壁・底面】底面は平坦で、壁は急角度で外傾して立ち上がり、一部オーバーハングする部分がある。底面北側に35×45cmの楕円形をしたピット状の落ち込みが確認された。【出土遺物】1層で縄文土器が数点出土している（図94）。7は小型の深鉢で、口縁部がやや内湾し、胴部には縄文LRが横回転で施文されている。8は深鉢の小片で、縄文RLが縦回転で施文されている。このほか1層で珪質頁岩の剥片（2.8g）が1点出土したが図化していない。【時期】出土遺物から縄文時代後期に属すると考えられる。

第17号土坑／旧表記：07中居林SX-1（図89・94）

【位置・確認】III層中の平坦部、AY-27・28グリッドに位置する。IIIa層中で周囲より炭化物を多く含む範囲として確認した。調査時はSX-1と呼称しており、遺物への注記もそのように行っている。下部で第5号竪穴住居跡を検出しており、本土坑が新しい。【規模・形状】平面は1m×70cmの楕円形で、確認面からの深さは10cmである。【堆積土】黒褐色土の単層で、形状の不明瞭な炭化物を多く含む。焼土や被熱の痕跡は確認していないため、炭化物は外部からもたらされた可能性が高い。【壁・底面】断面形は底面中央がやや窪む浅い皿型で、壁は緩やかに外傾して立ち上がる。【出土遺物】土器小片が数点出土した（図94）。9・10は深鉢小片で、10には磨消縄文が施文されている。【時期】周辺の出土土器および重複する第5号竪穴住居跡との関係から、縄文時代後期初頭に属すると考えられる。

第18号土坑（図89）

【位置・確認】東向きの斜面、AS-25グリッドに位置する。IIIb層で確認した。【規模・形状】開口部は直径70cmの歪んだ円形、底面は50×85cmの歪んだ楕円形で、確認面からの深さは30cmである。【堆積土】5層に細分された。ブロック状にロームを含むため人為的な埋め戻しを受けていると考えられる。【壁・底面】底面中央が窪み、壁は内傾して立ち上がる部分がある。【出土遺物】出土していない。【時期】遺物がなく時期は不明であるが、堆積土の状況から縄文時代に属すると考えられる。

第19号土坑（図89・94）

【位置・確認】東向きの斜面、AS・AT-25グリッドに位置する。IIIb層で確認した。【規模・形状】開口部・底面共に直径1.5mの不整な円形で、確認面からの深さは1.5mである。【堆積土】16層に細分された。壁際にローム・八戸火山灰・高館火山灰を含む堆積土があり、壁の崩落土と考えられる。15層は黄褐色の粗砂で、厚さ15cm程の堆積である。同層中には直径10cm内外の扁平な半円礫を多量に含んでいた。出土した礫は合計215個、重量にして3.5kgあった。石質はチャートが8割、凝灰岩

2割で、新井田川及びその支流に典型的な礫質構成である。本層は河川で採取された川砂で、何らかの理由で土坑底部に敷き詰められたものと考えられる。小礫は川砂に元来含まれていたものであろう。川砂を主体とする15層は、16層が崩落した後に入れられた土であるため、機能時に敷かれていたものとは言い難い。堆積土は全体に、本土坑の廃絶に伴って人為的に埋め戻されたものと判断した。

[壁・底面] 底面は高館火山灰まで掘られており、平坦に作られている。壁は崩落した部分が多いため断面形は筒状に近いが、元来はフラスコ状土坑である。開口部が斜面下方に寄っているのは、土坑埋没後に起きた地滑りによるものである。

[出土遺物] 上層から土器が数点出土している（図94）。11・12は深鉢で、11は縄文Lが縦回転施文され、12は無文である。11の一部の破片は第1号焼土の炉内からも出土している。13は全面ナデによるミニチュア土器の胴部下半で、煮沸に用いられた痕跡がある。

[時期] 出土遺物から縄文時代後期初頭と考えられる。

第20号土坑（図90・95）

[位置・確認] 南東向きの斜面、AS-23グリッドに位置する。表土直下のV b層で確認した。2基重複しており、第20号土坑Aと第20号土坑Bに分離した。A土坑が新しく、B土坑が古い。

第20号土坑A

[規模・形状] 開口部・底面共に1.4×1.6mの楕円形で、確認面からの深さは50cmである。

[堆積土] 5層に分けられた。ロームと黒褐色土が互層で堆積しており、人為的に埋め戻されていると考えられる。

[壁・底面] 底面は八戸火山灰まで掘りこまれており、斜面に従ってやや傾斜を持つ。壁は内傾して立ち上がる部分があるため、フラスコ状土坑と判断できる。

[出土遺物] 確認面で縄文時代後期の土器が出土した（95-1）。磨消縄文が施文された深鉢である。

[時期] 出土土器は埋め戻し土に含まれていた可能性が高いが、周辺の遺構のあり方から縄文時代後期に属すると考えられる。

第20号土坑B

[規模・形状] 開口部・底面共に直径1.6mの不整な円形である。

[堆積土] 4層に分けられた。ロームをブロック状に含む堆積土で、人為的に埋め戻されていると考えられる。

[壁・底面] 底面は、斜面上方で高館火山灰、その他は八戸火山灰まで掘り込まれており、斜面に従ってやや傾斜をもつ。壁は内傾して立ち上がる部分があり、フラスコ状土坑と判断できる。

[出土遺物] 出土していない。

[時期] 出土遺物はないが、周辺の遺構の時期から縄文時代後期に属する可能性が高い。

第21号土坑（図91・95）

[位置・確認] 東向きの斜面、AS-24グリッドに位置する。土坑の上を覆うように薄くⅢ層の堆積がみられた。遺物を少量含むことからこれを遺物集中区2として調査した後Ⅲ層を除去し、V b層で黒褐色土の落ち込みを確認した。

[規模・形状] 平面は長径2.7m、短径1.9mの楕円形で、確認面からの深さは25cmである。

[堆積土] 6層に分けられた。所々にロームブロックを含む黒褐色土を主体としており、人為的に埋め戻されたものと考えられる。

[壁・底面] 底面はやや起伏があり、また斜面に従って若干傾斜をもつ。底面中央には長さ1.5m、幅45cm、深さ10cmの浅い楕円形の溝があり、西側の壁寄りには直径20cm・深さ10cmと直径30cm・深さ20cmの小さなピット2基がある。

[出土遺物] 出土遺物は堆積土上位で多い。また、遺物集中区2として調査した本遺構上部及び周辺のⅢ層出土遺物も一括して報告する（図95）。

2は内外面を粗いナデ調整した深鉢である。

3は折り返し状となる口縁部に縄文L Rが施されている。

4は4単位の波状口縁を持つ深鉢で、口縁部と頸部に隆帯が貼付

けられ、胴部に縄文LRが縦回転施文される。5は隆帯上に縄文が施文された深鉢で、6・7には磨消縄文が施される。8・9は無文の深鉢、10・11は縄文LRが施された深鉢である。12は無文のミニチュア土器で、底部は台状に作られている。13は石笛で表面の風化が著しい。写真図版51の焼成粘土塊は1層で出土した。最大長6.2cm、重量41.9gを測り、表面は無調整で色調は明黄褐色である。また、3層出土炭化材の放射性炭素年代測定を行い、 3780 ± 30 yrBPの年代値を得た（NAKAI-10：第5章第1節）。[時期] 出土遺物及び炭化物の放射性炭素年代測定結果から、縄文時代後期初頭と考えられる。

第22号土坑（図91・95）

[位置・確認・重複] 東向きの斜面、AS-24グリッドに位置する。第21号土坑に類似した土が堆積しており、その床面で確認した。同土坑の張り出し部のように見えた部分であるが、壁の膨らみが不自然なため調査したところ別土坑となった。第21号土坑と重複し、本土坑が新しい。[規模・形状] 開口部は80×85cmの歪んだ円形、底面は直径1.3mの円形で、確認面からの深さは80cmである。[堆積土] 黒褐色土を主体とする堆積土が5層に分けられた。比較的均質な堆積土であり、人為的な埋め戻しを受けていると考えられる。[壁・底面] 底面は平坦である。東端に1箇所、直径35cm、深さ20cmのピットがある。壁は内傾して立ち上がり、小型のフラスコ状土坑と判断できる。[出土遺物] 95-14は器面に細い隆帯を貼り付けた深鉢で、縄文時代後期初頭の所産である。このほか縄文施文のみの深鉢小片が数点出土しているが図化していない。[時期] 出土遺物から、重複する第21号土坑と同じく縄文時代後期初頭と考えられる。

第23号土坑（図90・95）

[位置・確認] 南東向きの斜面、AW-20グリッドに位置する。Ⅲb層で黒褐色土の落ち込みを確認した。[規模・形状] 開口部は直径1.6m、底面は直径1.4mとともに円形で、確認面からの深さは70cmである。[堆積土] 黒褐色土を主体とし、4層に分けられた。土層はレンズ状に堆積しており、層界は漸移的に変化するため自然堆積と考えられる。[壁・底面] 底面は平坦で、壁は内傾して立ち上がる部分があるため、フラスコ状土坑であったものと判断できる。[出土遺物] 1層及び底面付近で土器片が少量出土し、2点を図化した（図95-15・16）。いずれも縄文RLと沈線が施された縄文時代後期初頭の所産である。[時期] 出土遺物から縄文時代後期初頭と考えられる。

第24号土坑（図90）

[位置・確認] 東向きの緩斜面、AR-25グリッドに位置する。表土直下のVI層で黒褐色土の落ち込みを確認した。[規模・形状] 開口部は1.7×1.9mの楕円形、底面は1.8×1.9mのほぼ円形で、確認面からの深さは1.2mである。[堆積土] 堆積の単位は細かく、15層に細分された。2・8両層は混じりのない八戸火山灰の再堆積のため、人為的に埋め戻されたものと考えられる。壁際には崩落土とみられる土が堆積する。[壁・底面] 底面は高館火山灰まで掘り込まれており、若干起伏はあるものの概ね平坦である。壁は崩落している部分が多いが、本来は内傾して立ち上がっていたようフラスコ状土坑と判断できる。[出土遺物] 出土していない。[時期] 出土遺物はないが、周辺土坑と同様、縄文時代後期初頭と考えられる。

第25号土坑（図92・96）

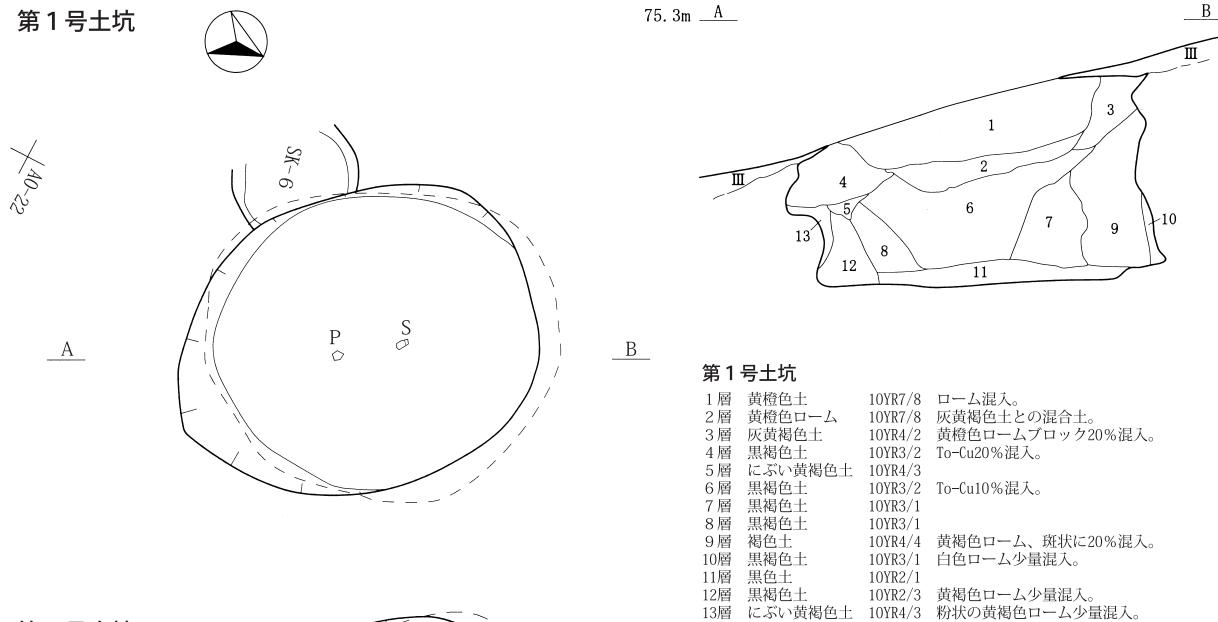
[位置・確認] 東向きの斜面、AS・AT-28・29グリッドに位置する。上部を地滑り後のIV層（中摺浮石層）に覆われており、同層を除去した後、黒褐色土の落ち込みとして確認できた。検出面の出土遺物は遺物集中区5として取り上げたため、その分布範囲も同一の図に示している。**[規模・形状]** 平面は長径4m、短径2.3mの楕円形で、確認面からの深さは55cmである。**[堆積土]** 黒褐色土を主体とし、5層に分けられた。レンズ状の堆積状況から、自然堆積と考えられる。3層の上部に堆積した中摺浮石中に、厚さ1cm程の連続した黒褐色土があり、地滑りの境界層と考えられる。土坑が廃絶し、自然埋没の後に地滑りが起こっている。**[壁・底面]** 底面はほぼ平坦だが、斜面下方の東端でやや傾斜している。壁は斜面下方では確認できず、その他の部分では急角度で立ち上がる。また、底面には2基のピットが掘られており、ともに灰黒色土を覆土とする。**[出土遺物]** 堆積土中及び遺構外を含む周辺で、縄文時代後期初頭の土器片が多く出土した（図96）。遺構外の出土遺物は集中区5として取り上げている。1は小型の鉢の口縁波頂部と思われ、外面に縦方向の刺突と、細沈線による文様が施されている。2は隆帶上に縄文が回転施工された深鉢、3・4は同一個体で磨消縄文が施された深鉢である。5は頸部に隆帯を持つ壺で、胴部には縄文LRが施されている。6は折り返し状の口縁を持つ深鉢で、口唇は面取りされており外面に縄文LRが施される。7は深鉢の底部である。8は全面ナデによる無文の小型壺形土器で、粘土紐の接合痕は外傾である。10は確認面で出土した土製円盤である。外面に沈線文が施される。礫石器は花崗加工閃緑岩を用いた敲石（9）が1点出土した。また、底面出土炭化材の放射性炭素年代測定を行い、3750±30yrBPの年代値を得た（NAKAI-09：第5章第1節）。

[時期] 出土遺物及び炭化材の放射性炭素年代測定結果から、縄文時代後期初頭と考えられる。

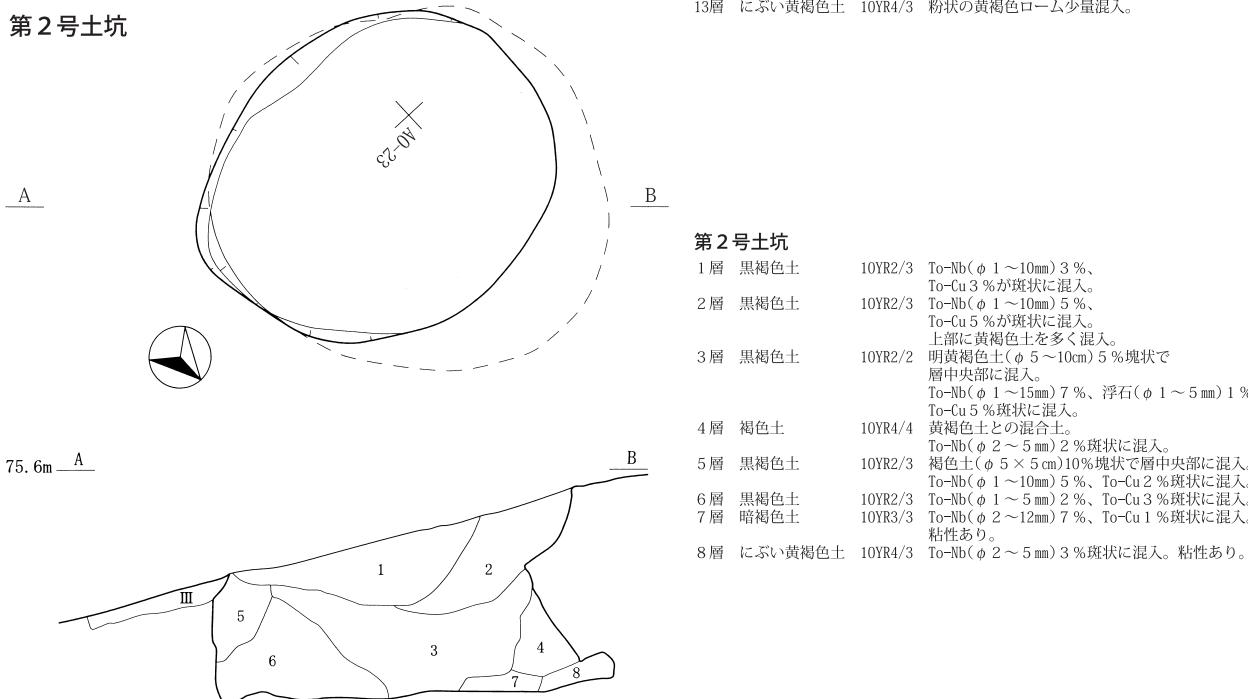
第26号土坑（図92・96）

[位置・確認] 東向きの斜面、AS-29グリッドに位置する。上部を地滑り後のIV層（中摺浮石層）に覆われており、同層を除去した後、黒褐色土の落ち込みとして確認できた。**[規模・形状]** 開口部は1.7×2mの楕円形、底面は2×2.1mのほぼ円形で、確認面からの深さは2mである。**[堆積土]** 堆積の単位は細かく、17層に細分できた。覆土中位の4・7・10層、下位の14層は中摺浮石と黒色または黒褐色土の互層をなしており、これらの堆積状況から人為的な埋め戻しを受けていると判断した。**[壁・底面]** 底面はVI層まで掘り込まれ、平坦につくられている。壁は内傾して立ち上がるため、本来はプラスコ状土坑と考えられる。壁の立ち上がり途中に段差（不整合面）がみられるが、これは埋没後に起った地滑りに起因するものである。**[出土遺物]** 縄文時代後期初頭の所産とみられる土器片が数点出土しており、1点を図化した（図96-11）。外反する口縁を持つ深鉢で、縄文LRが施されている。**[時期]** 出土遺物から縄文時代後期初頭と考えられる。

第1号土坑



第2号土坑



第3号土坑

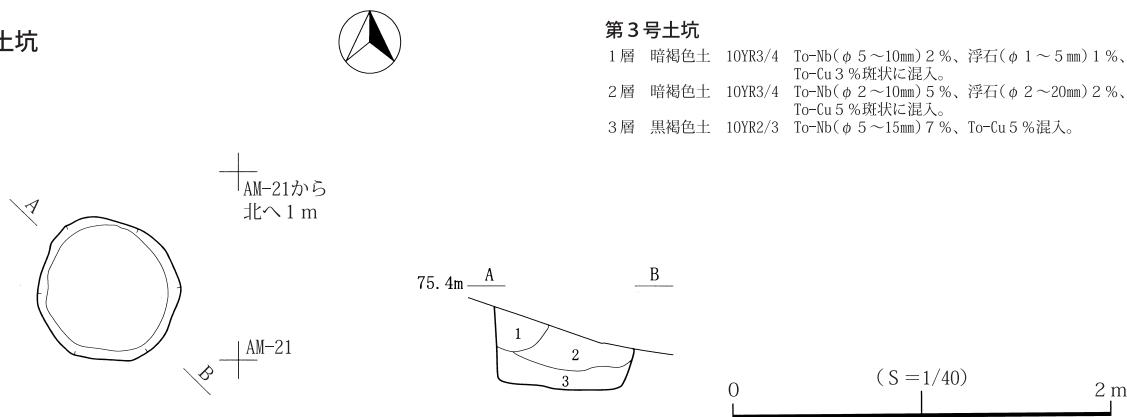
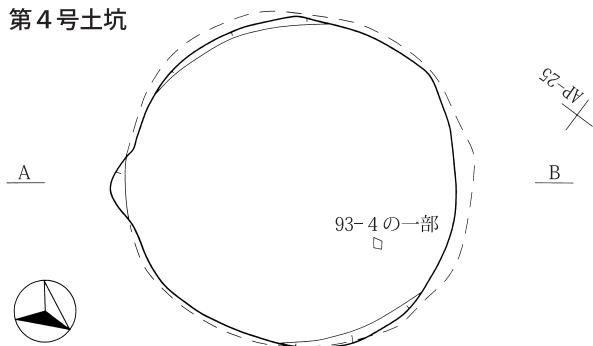
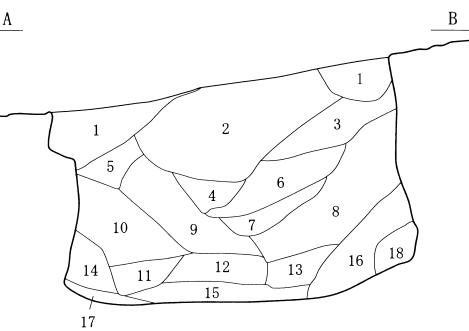


図86 D区 土坑①

第4号土坑



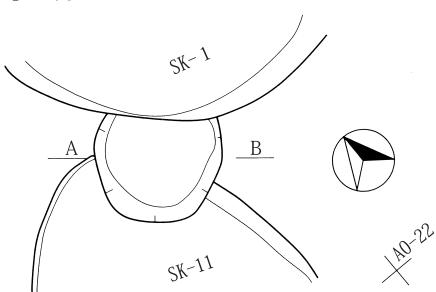
75.7m A



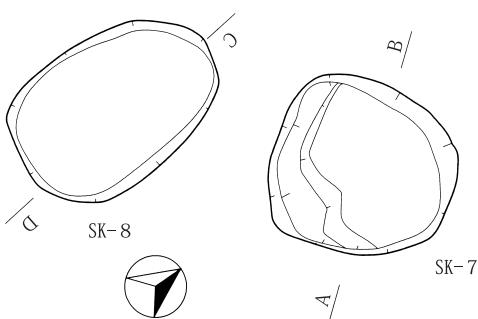
第4号土坑

1層 黄褐色土	10YR5/6	ローム混入。	9層 黒褐色土	10YR3/2	黄褐色ローム混入。
2層 明黄褐色土	10YR6/8	ローム質。	10層 黃褐色土	10YR5/8	黒褐色土混入。
3層 にぶい黄褐色土	10YR5/4		11層 黒褐色土	10YR2/3	黄褐色土混入。
4層 褐色土	10YR4/4		12層 褐色土	10YR4/4	黄色ローム混入。
5層 にぶい黄褐色土	10YR4/3		13層 にぶい黄橙色土	10YR7/2	黒褐色土混入。
6層 褐色土	10YR4/6	白色ローム混入。	14層 にぶい黄橙色土	10YR7/3	
7層 暗褐色土	10YR3/3		15層 褐色土	10YR4/6	
8層 にぶい黄橙色土	10YR6/4	ローム質。	16層 灰白色土	10YR8/2	ローム、八戸火山灰主体。
			17層 褐色土	10YR4/6	
			18層 褐色土	10YR4/6	高館火山灰。

第6号土坑



第7・8号土坑



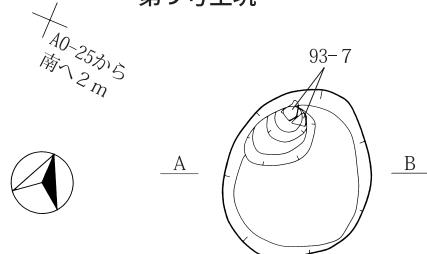
74.9m A B

76.2m A B

76.3m C D



第9号土坑



75.9m A B

第6号土坑

1層 黒褐色土 10YR2/3 To-Nb(φ 1～5mm) 2%、To-Cu 1% 斑状に混入。

第7号土坑

1層 にぶい黄褐色土 10YR5/4 黄褐色ローム 5%、炭化物少量混入。

第8号土坑

1層 暗褐色土 10YR3/3 黄褐色ローム粒 3%、To-Nb 3%、To-Cu 少量混入。

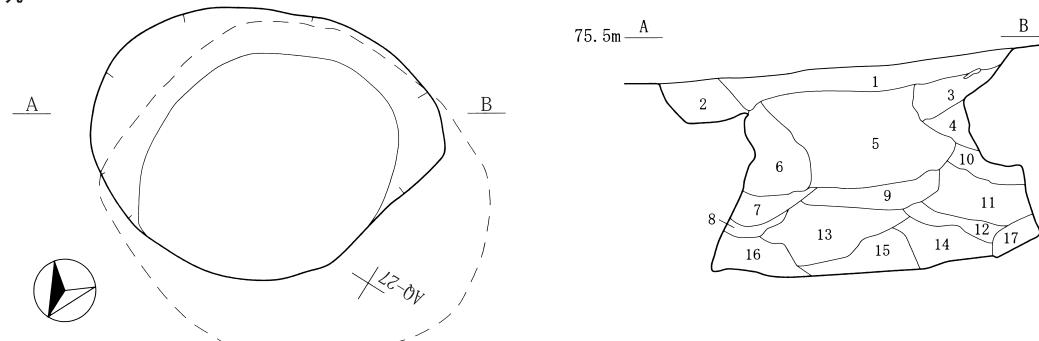
第9号土坑

1層 褐色土 10YR4/4 浮石(φ 5～10mm) 1% 斑状に混入。

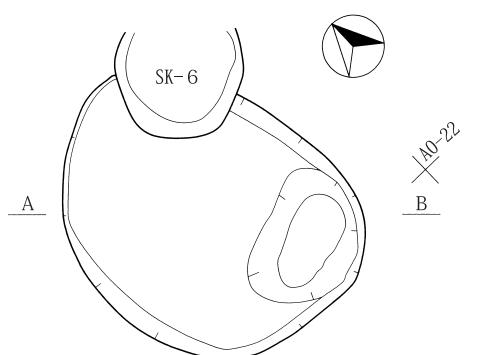
0 (S=1/40) 2m

図87 D区 土坑②

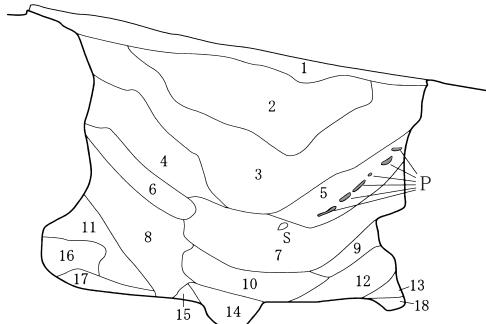
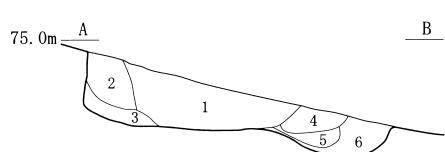
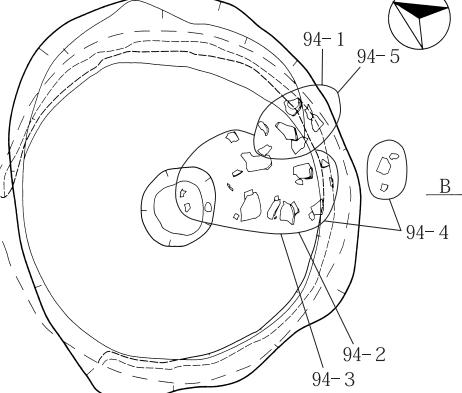
第10号土坑



第11号土坑



第12号土坑



第10号土坑

1層	黒褐色土	10YR2/2
2層	黒褐色土	10YR2/3 黄褐色ローム粒少量混入。
3層	黒褐色土	10YR2/3 黄褐色ローム混入。
4層	黒褐色土	10YR2/2
5層	黒褐色土	10YR2/2
6層	黒色土	10YR2/1 黄褐色ローム少量混入。
7層	黄褐色土	10YR5/6
8層	黒色土	10YR2/1
9層	黒色土	10YR2/1
10層	黒色土	10YR2/1
11層	にぶい黄橙色土	10YR7/3 白色ローム混入。
12層	黒褐色土	10YR2/2
13層	黒色土	10YR1.7/1
14層	黒色土	10YR2/1
15層	黒色土	10YR2/1
16層	黒色土	10YR2/1 黄褐色ローム混入。
17層	にぶい黄褐色土	10YR5/4 黒褐色土混入。

第11号土坑

1層	黒褐色土	10YR2/2	To-Nb(φ 5~10mm) 2%、To-Cu 3% 斑状に混入。
2層	暗褐色土	10YR3/4	To-Nb(φ 1~5 mm) 3%、To-Cu 2% 斑状に混入。
3層	暗褐色土	10YR3/4	To-Nb(φ 1~5 mm) 1%、To-Cu 1% 斑状に混入。
4層	黒褐色土	10YR2/3	黒褐色土(10YR2/2)(φ 5 cm×5 cm)10%、 To-Nb(φ 1~3 mm) 3%、To-Cu 2% 斑状に混入。 しまりあり。が層左側に塊状に混入。
5層	黒褐色土	10YR2/2	To-Nb(φ 1~5 mm) 3%、To-Cu 1% 斑状に混入。 しまりあり。
6層	暗褐色土	10YR3/4	To-Nb(φ 1~5 mm) 5%、To-Cu 2% 斑状に混入。

第12号土坑

1層	暗褐色土	10YR3/3
2層	黄褐色土	10YR5/6
3層	黒褐色土	10YR3/2
4層	黒褐色土	10YR2/3 黄褐色ローム混入。
5層	黒褐色土	10YR2/2
6層	黄褐色土	10YR5/6
7層	黒褐色土	10YR2/3 黄褐色ローム混入。
8層	明黄褐色土	10YR6/6
9層	暗褐色土	10YR3/3
10層	暗褐色土	10YR3/3
11層	にぶい黄橙色土	10YR7/4
12層	黒褐色土	10YR3/2
13層	褐色土	10YR4/4 灰白色ローム混入。
14層	暗褐色土	10YR3/4 To-Nb10%混入。しまりなし。
15層	暗褐色土	10YR3/4
16層	暗褐色土	7.5YR3/4 高館火山灰。 にぶい黄橙色土(10YR7/2)との混合土。
17層	褐色土	7.5YR4/4 To-Cu、To-Nbが混入。
18層	灰黄褐色土	10YR6/2 白色ローム混入。

0 (S = 1/40) 2 m

図88 D区 土坑③

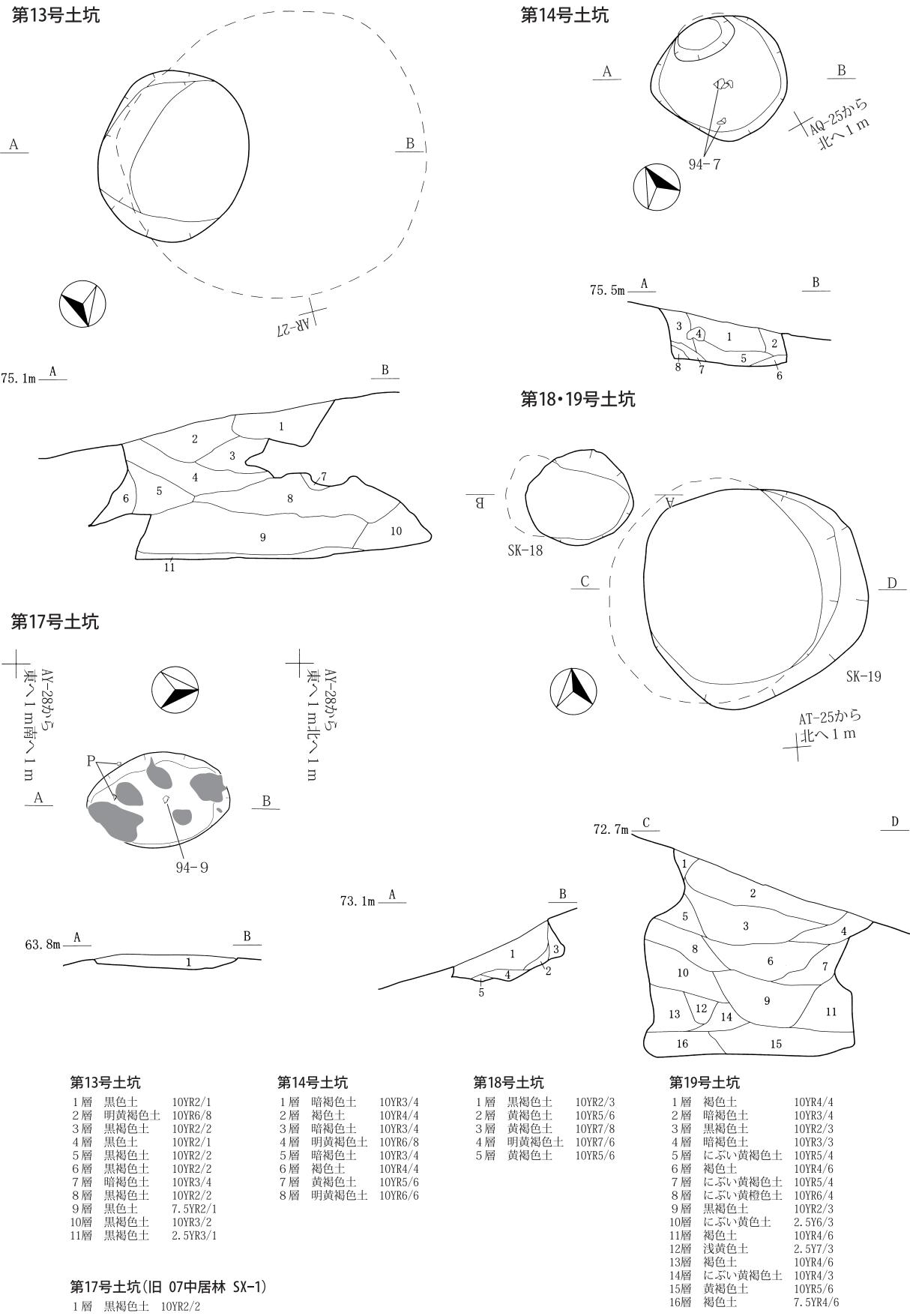
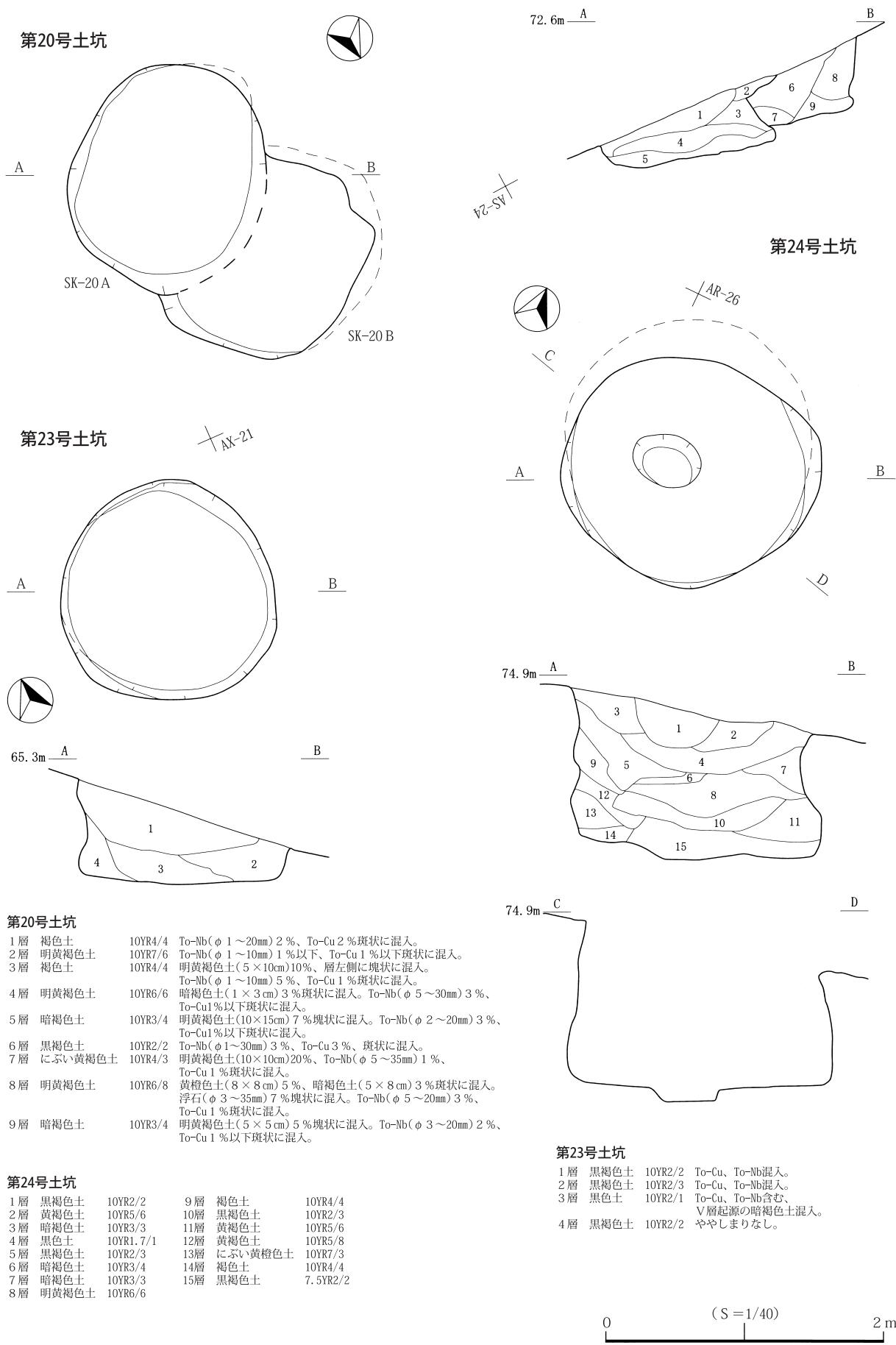
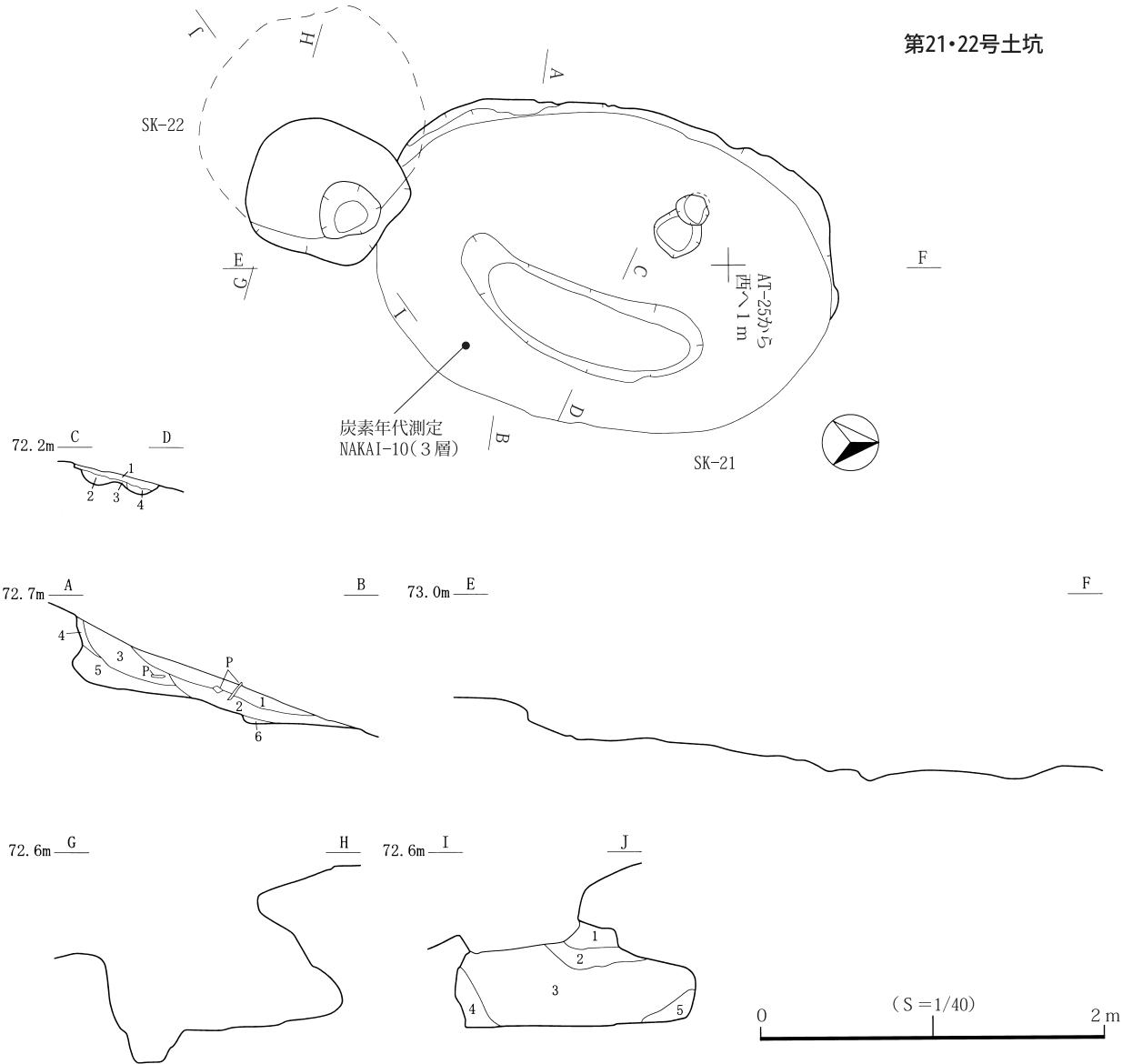
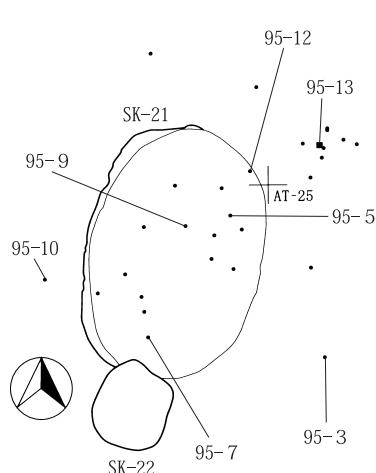


図89 D区 土坑④



**遺物出土状況 (S=1/80)****第21号土坑 A-B**

- 1層 黒褐色土 10YR2/3 明黄褐色土($2 \times 5\text{cm}$)1%塊状に混入。To-Nb($\phi 1 \sim 10\text{mm}$)3%、To-Cu 1%、炭化物粒($\phi 1\text{mm}$ 以下)1%以下斑状に混入。
 2層 暗褐色土 10YR3/4 To-Nb($\phi 1 \sim 20\text{mm}$)3%、To-Cu 1%、炭化物粒($\phi 1 \sim 2\text{mm}$)1%以下斑状に混入。
 3層 黒褐色土 10YR2/2 To-Nb($\phi 2 \sim 40\text{mm}$)5%、To-Cu 1%、炭化物粒($\phi 1 \sim 5\text{mm}$)1%以下斑状に混入。
 4層 黄褐色土 10YR5/8 To-Nb($\phi 2 \sim 10\text{mm}$)3%、To-Cu 1%以下斑状に混入。
 5層 黒褐色土 10YR3/2 黑褐色土(10YR2/3)($4 \times 5\text{cm}$)2%、肩左側に塊状に混入。
 6層 暗褐色土 10YR3/3 褐色土($1 \times 3\text{cm}$)20%塊状に混入。To-Nb($\phi 1 \sim 5\text{mm}$)1%以下斑状に混入。

第21号土坑 C-D

- 1層 暗褐色土 10YR3/3 To-Nb($\phi 1 \sim 10\text{mm}$)3%、To-Cu 1%、炭化物粒($\phi 1 \sim 5\text{mm}$)1%以下斑状に混入。
 2層 褐色土 10YR4/4 明黄褐色土($1 \times 2\text{cm}$)2%塊状に混入。To-Cu 1%以下斑状に混入。
 3層 明黄褐色土 10YR7/6 To-Nb($\phi 1 \sim 10\text{mm}$)2%、To-Cu 1%以下斑状に混入。
 4層 黄褐色土 10YR5/6 To-Nb($\phi 1 \sim 5\text{mm}$)1%、To-Cu 1%以下斑状に混入。

第22号土坑

- 1層 暗褐色土 10YR3/3 黄褐色土($3 \times 5\text{cm}$)10%、肩左側に塊状に混入。To-Nb($\phi 1 \sim 30\text{mm}$)5%、To-Cu 1%以下斑状に混入。
 2層 暗褐色土 10YR3/4 To-Nb($\phi 1 \sim 20\text{mm}$)4%、To-Cu 2%斑状に混入。
 3層 黑褐色土 10YR2/2 To-Nb($\phi 2 \sim 40\text{mm}$)3%、炭化物粒($\phi 1 \sim 20\text{mm}$)2%、To-Cu 1%斑状に混入。
 4層 黑褐色土 10YR2/3 褐色土($3 \times 3\text{cm}$)5%、肩左上に塊状に混入。To-Nb($\phi 1 \sim 10\text{cm}$)2%、To-Cu 1%混入。
 5層 褐色土 10YR4/6 暗褐色土($1 \times 2\text{cm}$)3%層中央に塊状に混入。少ししまりあり。

図91 D区 土坑⑥

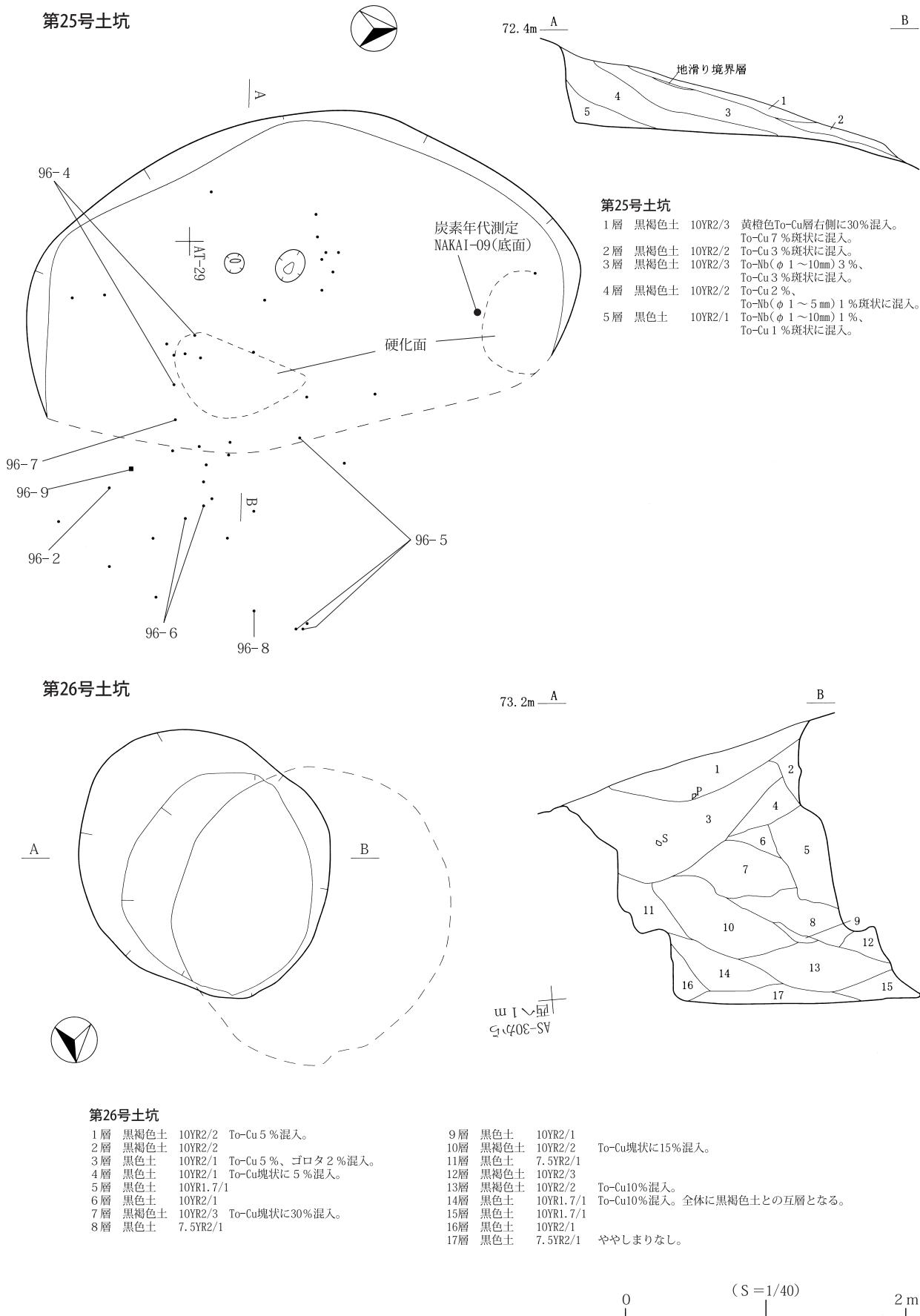
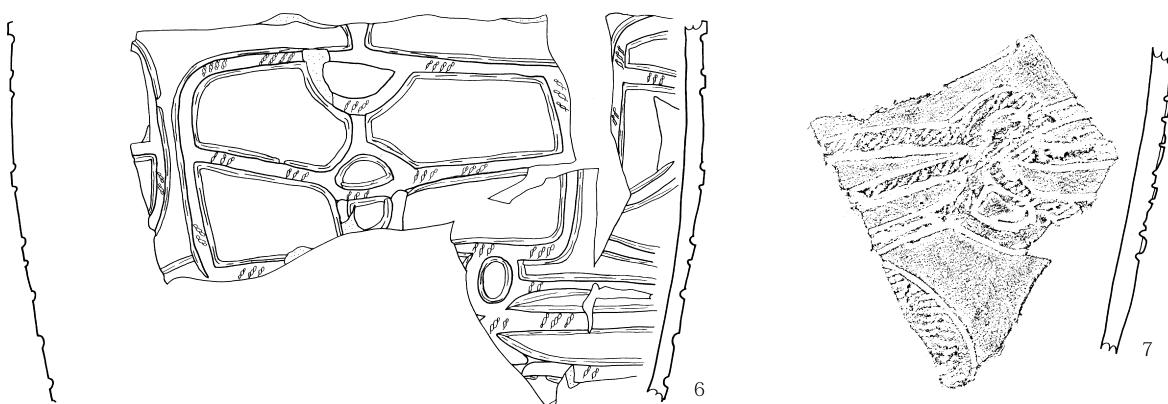
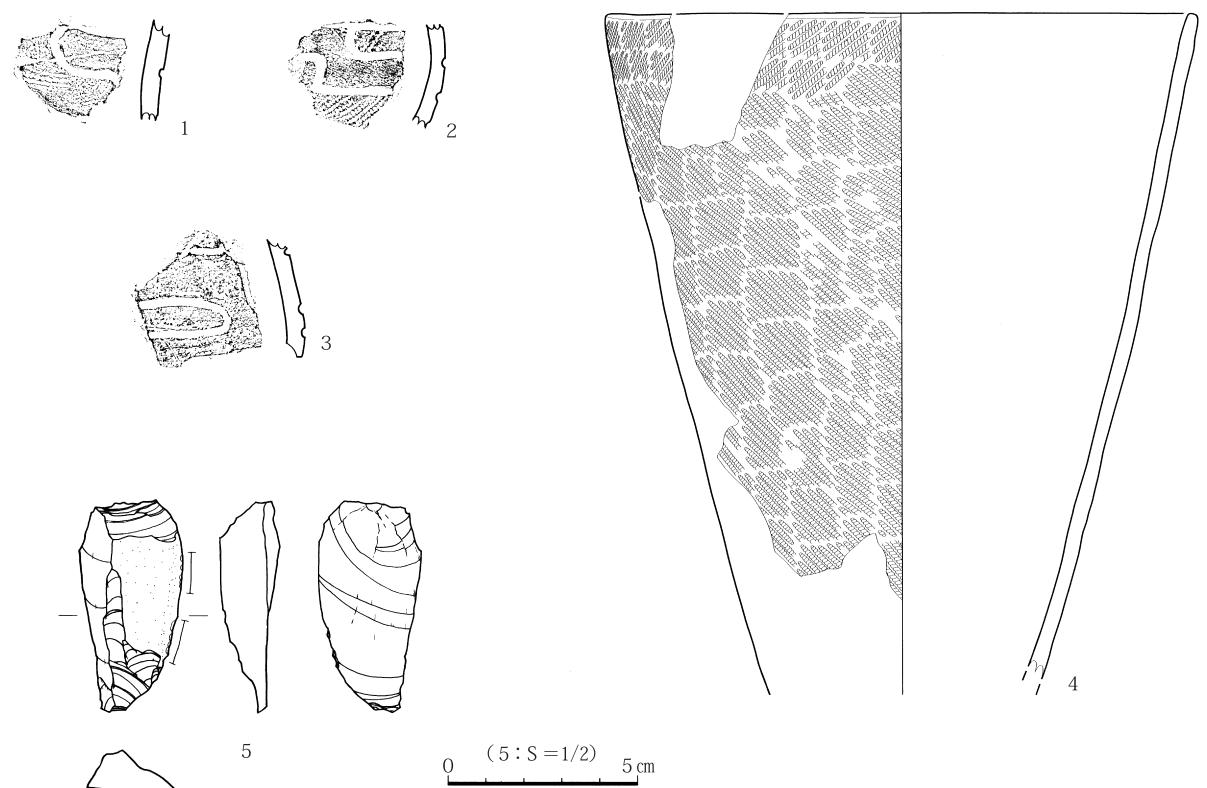


図92 D区 土坑⑦



1・2:SK-1
3:SK-2
4:SK-4
5~7:SK-9

※6の展開図

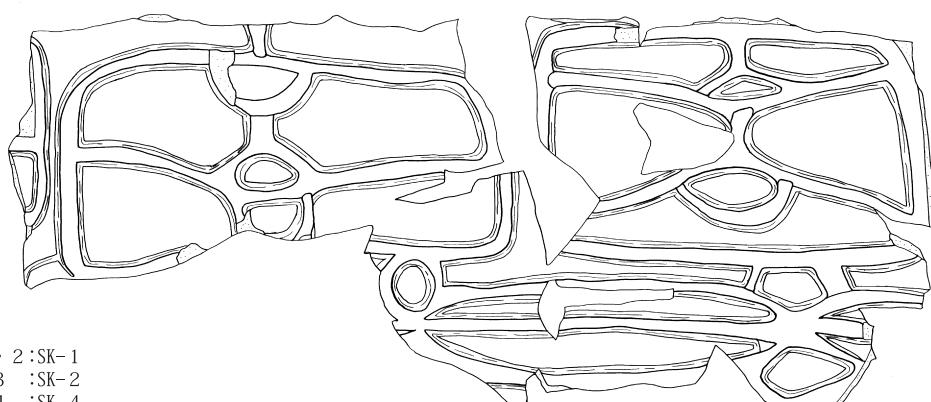


図93 土坑出土遺物①

0 (S = 1/3) 10cm

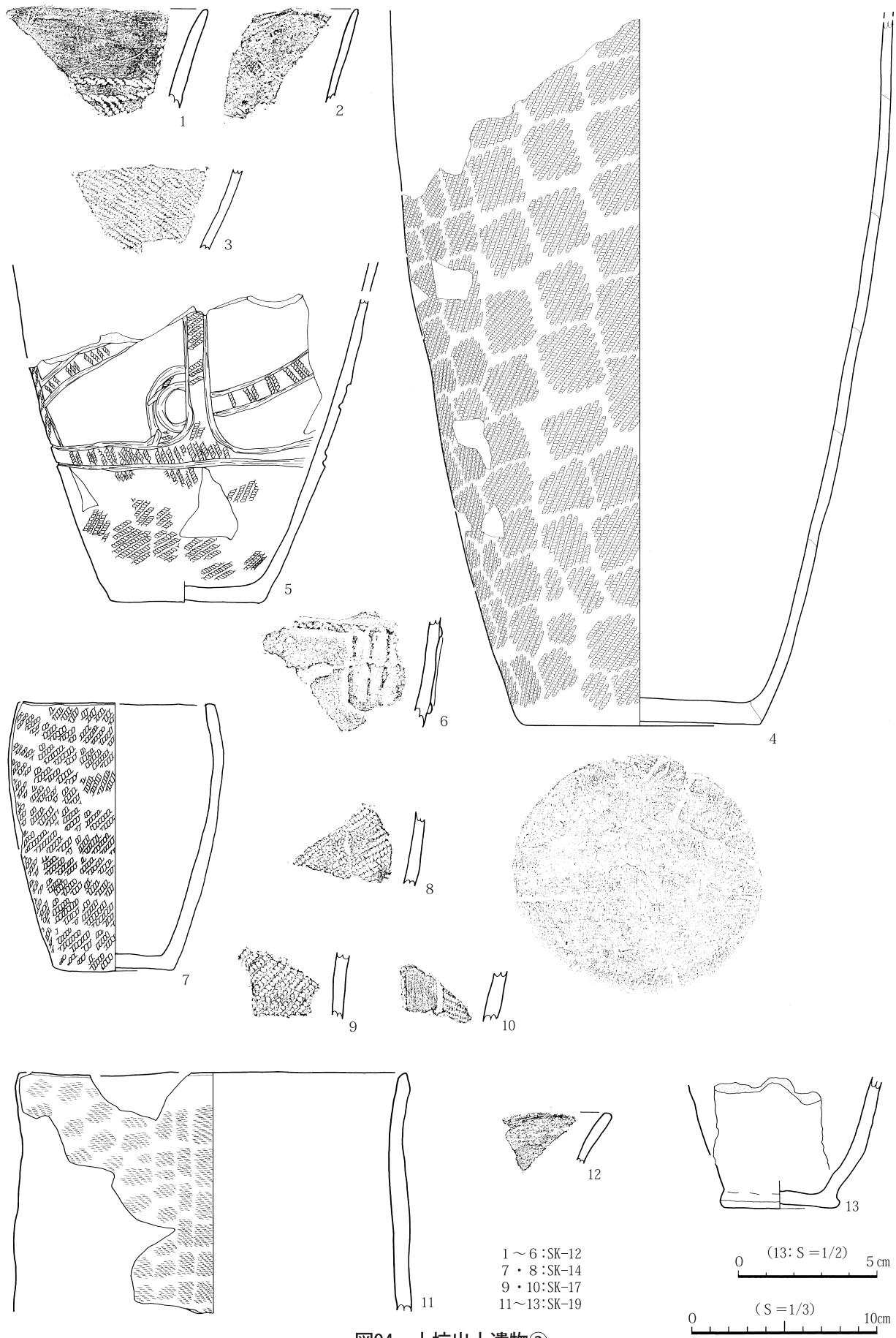


図94 土坑出土遺物②

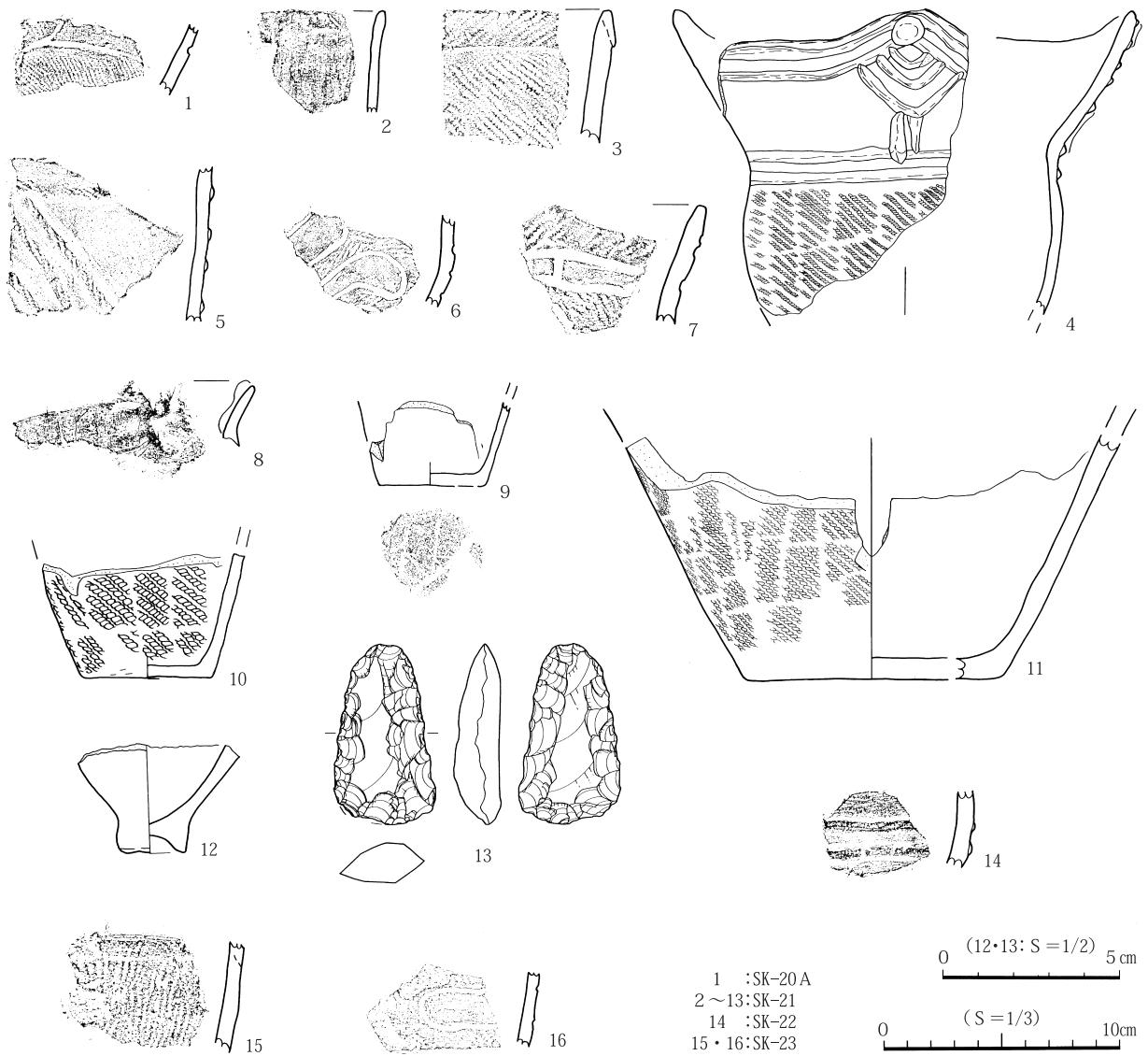


図95 土坑出土遺物③

3 焼土遺構

第1号焼土（図97・100）

[位置・確認] 平坦面AQ-26グリッドに位置する。周辺を含め検出面の上部はⅢa層で覆われており、そこでの出土遺物は遺物集中区1として取り上げたが、本遺構との関連が考えられるため合わせて報告する。焼土を伴う土器埋設炉は遺物散布地の東にあり、Ⅲa層除去後に確認した。**[規模・形状]** 遺物の散布は南北3m、東西1mの範囲に広がる。焼土は40×80cmの範囲に不整形な広がりを持つ。焼土は土器を埋設した浅い掘方の内部に生成したもので、埋設された土器は口縁部を欠くものが2個体、いずれも底面を下として斜めに埋められており、土器埋設炉が作り替えられたものとみる事ができる。炉が屋外に作られたかどうかは現時点では判断できないが、周辺では明確な柱穴は検出されなかった。**[堆積土]** 上位の埋設土器（図100-4）直下の1層及び、下位の埋設土器（図100-5）直上のb層が強く被熱しており、火床面は2面である。c・d層を掘方覆土とする、5の土器を用

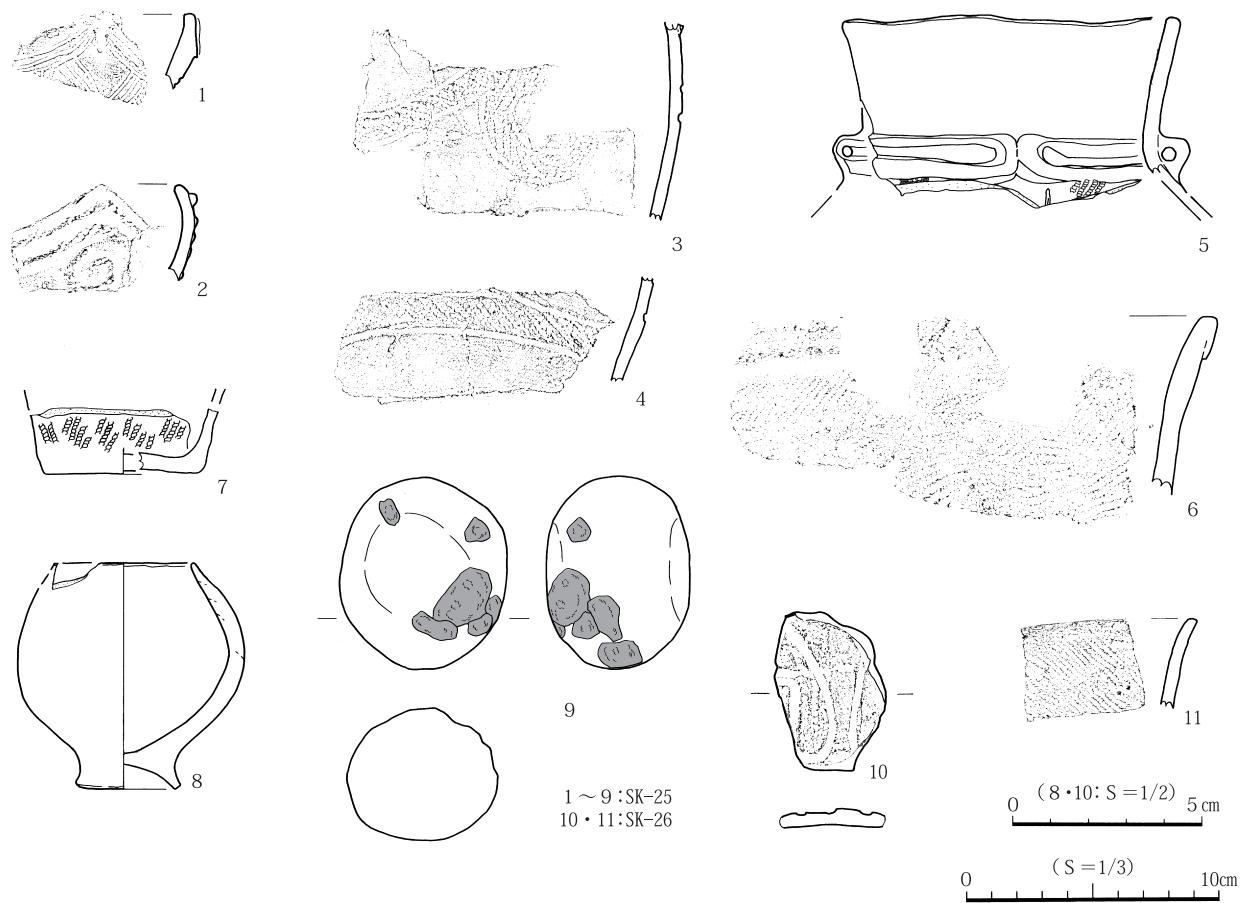


図96 土坑出土遺物④

いた炉が古く、1・2層を掘方とし、4の土器を用いた炉が新しい。【出土遺物】4は埋設土器（新）である。底部から胴部中位が残存し、胴部には縄文Lが施されている。5は埋設土器（旧）である。4とは特徴が似ているが別個体で、底部と胴部下位が残存し、胴部に縄文Lが縦回転で施されている。1は口縁が外反する深鉢で、縄文L Rが縦回転で施される。2は口縁が内湾する深鉢で、口唇と胴部に縄文R Lが回転施文される。3は4・5とは別個体の頸部がくびれる深鉢で、縄文Lが縦回転で施文されている。6は縄文Lが施文された深鉢の胴部片である。7は有茎石鏃で、先端を欠損する。このほか磨石が1点出土している。また、焼土層（1層）の土壤を採取し水洗選別した結果、炭化種実としてイネ及びイネ科各1点、アワ7点を回収した（第5章第4節）。表土に近い場所で採取されたものであり、同じ焼土中で複数の未炭化種実が回収されたことを含めて考えれば、すべてが縄文時代に遡る穀物であるとは言い切れない。【時期】炉及び遺物散布範囲の形成時期は、出土遺物から縄文時代後期初頭と考えられる。

第2号焼土（図97）

【位置・確認】東向きの斜面、AT-25グリッドに位置する。III a層中で焼土を確認した。【規模・形状】平面は30×40cmの楕円形で、深さ5cmの浅い皿状の掘方を持ち、その堆積土に被熱が認められた。【堆積土】にぶい赤褐色焼土を主体とする。【出土遺物】出土していない。【時期】出土遺物がなく詳細は不明だが、周辺遺構の時期から縄文時代後期初頭の可能性がある。

第4号焼土（図97・101）

【位置・確認】南東向きの緩斜面、AO-23グリッドに位置する。第2号土坑の上端に接するように検出された。【規模・形状】40×45cmの不整形をした焼土範囲を検出した。中心部分に被熱のより強い焼土があり、焼土の下部に掘方を伴う。掘方の平面は40×65cmの楕円形で、確認面からの深さは5cm、断面形は浅い皿状である。【堆積土】明赤褐色焼土を主体とする。【出土遺物】101-4は確認面で出土したミニチュア土器である。外面に縄文LRを縦回転で施し、底部は楕円形を呈する。縄文時代後期と考えられる。【時期】出土遺物と周辺遺構の時期から、縄文時代後期初頭と考えられる。

第5号焼土（図98）

【位置・確認】Ⅲ層がテラス状に平坦になったAY-27グリッドに位置する。Ⅲa層中で確認された。【規模・形状】直径40cmの不整な円形に焼土が確認された。焼土の下部に掘方を伴う。掘方は二つに分かれ、平面は15×35cmの楕円形及び最大径60cmの不整形である。確認面からの深さは最大で10cmである。【堆積土】Ⅲ層に由来する黒褐色土を主体とし、明褐色焼土を斑状に含む。【出土遺物】出土していない。【時期】本遺構は包含層出土遺物の項で述べる遺物集中区3の中に形成されている。周辺の出土遺物は縄文時代後期初頭の時期に限られるため、本遺構も同時期と考えられる。

第6号焼土（図98）

【位置・確認】Ⅲ層がテラス状に平坦になったAY-27グリッドに位置する。Ⅲa層中で確認された。【規模・形状】30×40cmの範囲に焼土が検出された。焼土の下部には掘方を伴う。掘方の平面は50×60cmの不整な円形で、深さは10cm、断面形は浅い皿状である。【堆積土】Ⅲ層に由来する黒色土を主体とし、明褐色焼土を斑状に含む。【出土遺物】出土していない。【時期】第5号焼土と同じく、縄文時代後期初頭と考えられる。

第7号焼土（図98）

【位置・確認】Ⅲ層がテラス状に平坦になったAY-28グリッドに位置する。Ⅲa層中で確認された。【規模・形状】ごく狭い範囲に斑状に焼土を確認した。掘方の平面は直径15cmの円形で、確認面からの深さは2cmである。断面形は浅い皿状である。【堆積土】Ⅲa層に由来する黒色土に明黄褐色焼土が斑状に混じり、炭化物小片も含まれる。【出土遺物】出土していない。【時期】第5号焼土と同じく、縄文時代後期初頭と考えられる。

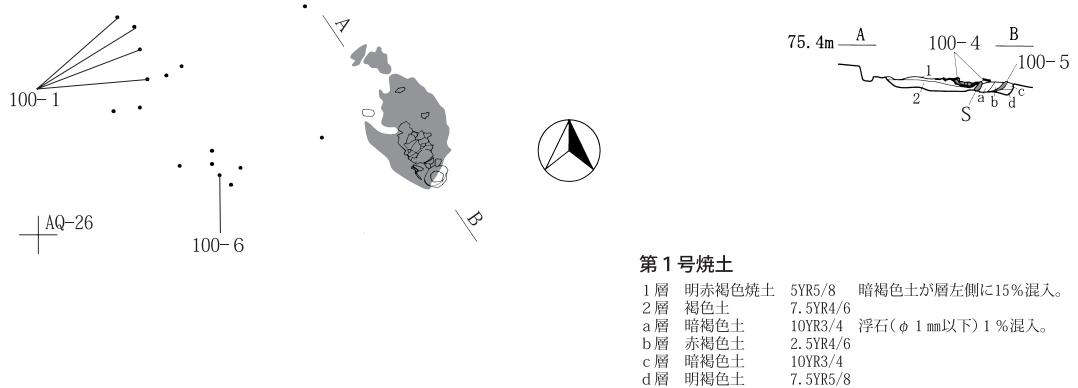
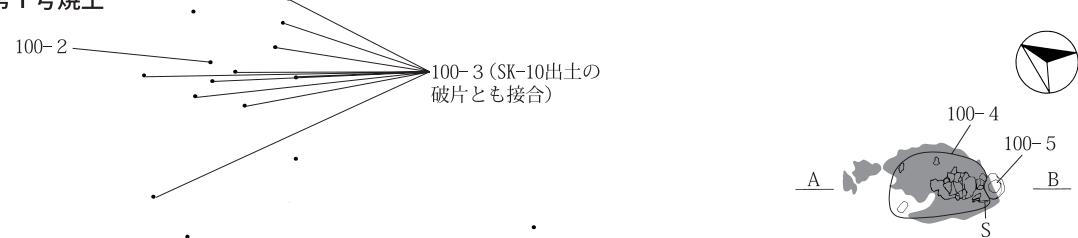
第8号焼土（図98）

【位置・確認】Ⅲ層がテラス状に平坦になったAY-29グリッドに位置する。Ⅲa層中で確認された。【規模・形状】焼土範囲は25×35cmの不整な楕円形の範囲に広がる。被熱の深さは5cmで、明瞭な掘方は確認できなかったためⅢa層が直接被熱した可能性がある。【堆積土】Ⅲa層に明褐色焼土が含まれる。【出土遺物】出土していない。【時期】確認面と同レベルでの出土遺物は縄文時代後期初頭のものに限られるため、本遺構も同時期と考えられる。

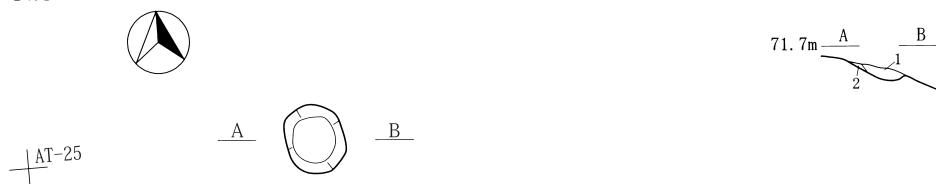
第9号焼土（図98）

【位置・確認】東向きの斜面、AY-23グリッドに位置する。Va層で確認した。【規模・形状】平面は40×70cmの楕円形、深さ15cmの掘方を持つ。掘方の断面は中央が窪み、緩やかに外傾して立ち上がる船底状である。【堆積土】Va層と同質の黒褐色土を主体とした単層で、赤褐色焼土の塊を含む。焼土の混入具合からV層が被熱したものではなく、掘方への堆積土に焼土が混入したものといえる。

第1号焼土



第2号焼土



第2号焼土

1層 にぶい赤褐色焼土 5YR4/4 黒褐色土15%、To-Nb(Φ 1~5mm) 1%混入。
2層 黒褐色土 10YR2/2

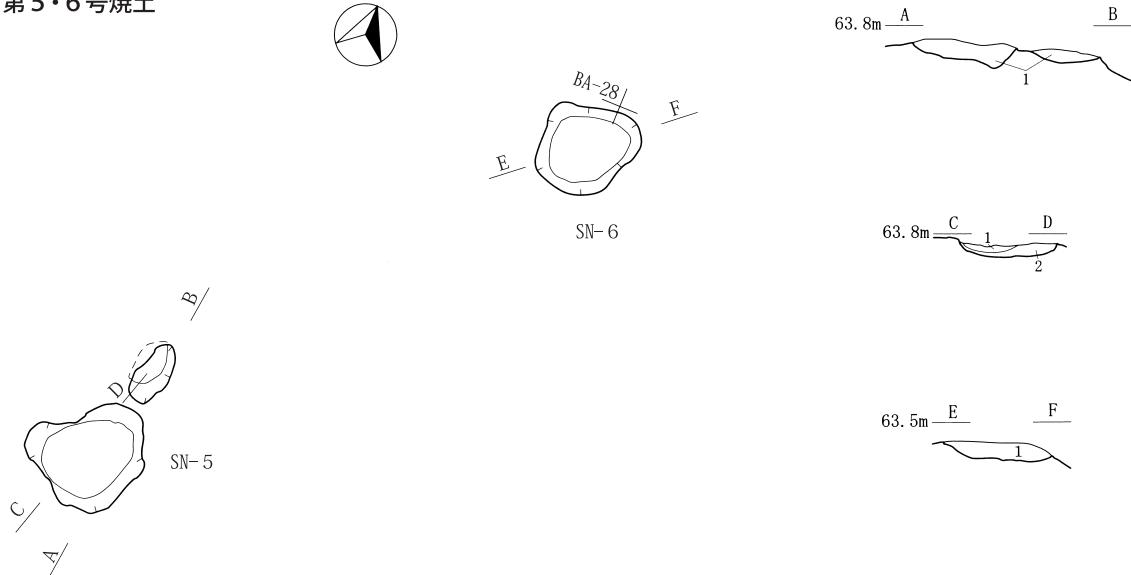
第4号焼土



0 (S = 1/40) 2 m

図97 D区 焼土遺構①

第5・6号焼土



第5号焼土 A-B

1層 黒褐色土 10YR2/2 暗褐色焼土7%、層左側に4×4cm、右側に2×1cmの塊状に混入。
褐色(2×3cm)3%、層左端に塊状に混入。
To-Nb(φ 1～3mm)1%、To-Cu 1%以下斑状に混入。

第6号焼土 E-F

1層 黒色土 10YR2/1 明褐色焼土20%、To-Cu(φ 1～2mm)3%、
To-Nb(φ 3～5mm)1%、炭化物ごく少量混入。

第5号焼土 C-D

1層 明褐色土 7.5YR5/8 To-Cu 1%斑状に混入。
2層 黒褐色土 10YR2/2 To-Nb(φ 1～2mm)1%、To-Cu 1%以下斑状に混入。

第7号焼土

A ○ B



第8号焼土

A B



BA-30+

BA-29

63.7m A B
1

64.3m A B
1

第7号焼土

1層 黒色土 10YR6/8 明黄褐色焼土5%、炭化物(φ 3mm)1%混入。

第8号焼土

1層 黒褐色土 10YR2/2 明褐色焼土30%、To-Cu(φ 1～3mm)1%混入。

第9号焼土

AY-24



A B

70.5m A B
1

第9号焼土

1層 黒褐色土 10YR2/2 To-Nb含む(V層と同質土を主体)。赤褐色焼土を粒状に20%含む。

0 (S=1/40) 2 m

図98 D区 焼土遺構②

[出土遺物] 出土していない。**[時期]** V層で検出されており、中摺浮石降下以前である。周辺の出土土器から縄文時代早期末頃に位置づけられる。

第10号焼土

欠番（第4号竪穴住居跡土器片囲炉）

第11号焼土

欠番（第5号竪穴住居跡土器片敷炉）

第12号焼土（図99）

[位置・確認] 東向きの斜面、AV-28グリッドに位置する。地滑りによって滑落した中摺浮石層（IV層）に上面を覆われており、同層の除去後にⅢ a層で被熱面を確認した。当初IV層が再堆積であることが分からなかったため、同層の除去は重機によって行った。このため上面は削平したものと考えられる。**[規模・形状]** 近接して3箇所のまとまりを持ち、斑状に焼土が検出された。各所で確認面から深さ2cm程の掘方を確認している。掘方の規模は10×15cm、15×25cm、20×30cmで、断面形はいずれもごく浅い皿状である。**[堆積土]** Ⅲ a層に由来する黒色土に、斑状に明褐色焼土が混入している。浅い掘方に焼土が溜まったものである。**[出土遺物]** 出土していない。**[時期]** 遺物を伴わないため詳細は不明である。周辺での出土土器は縄文時代後期初頭の土器に限られるため、本遺構もその時期である可能性がある。

第13号焼土（図99・101）

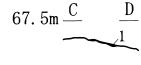
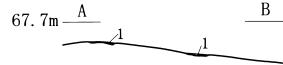
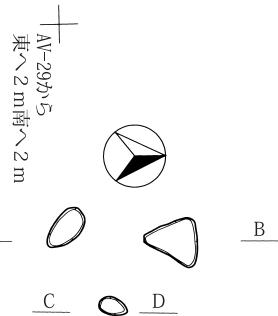
[位置・確認] 東向きの斜面、ST-28・29グリッドに位置する。地滑りによって滑落した中摺浮石層（IV層）に上面を覆われており、同層の除去後にⅢ a層で被熱面を確認した。当初IV層が再堆積であることが分からず、同層の除去は重機によって行っていたため、上面をかなり削平している。重機による掘削中に周辺で1個体の有文深鉢が出土した。**[規模・形状]** 20×30cm及び20×40cmの範囲に焼土の広がりを確認した。被熱の深さは2~3cmと浅い。これは先述のように上面を重機で掘削したためである。**[堆積土]** 焼土は斑状に広がっているが、明瞭な掘方は確認できず、Ⅲ a層が直接被熱したものと考えられる。**[出土遺物]** 101-4は本遺構周辺を重機で掘削中に出土したもので、原位置は確認できていない。土器内に焼土が入っており、本来土器埋設炉であった可能性がある。周辺で他の焼土が確認できていないため、関連する可能性があることから本項で記載する。胴部には隆帯が貼付けられ、隆帶上に縄文L Rが回転施文される。胴部下位には同じくL Rが縦回転で施文されている。また、土器内焼土を採取し水洗選別した結果、炭化したアワ1点を回収した（第5章第4節）。

[時期] 周辺で出土した土器から縄文時代後期初頭の可能性がある。

第14号焼土（図99・101）

[位置・確認] 東向きの斜面、AX-26グリッドに位置する。Ⅲ b層で確認した。**[規模・形状]** 焼土は20×30cmの不整形の範囲に広がる。掘方は平面が35×50cmの楕円形、深さは5cmの浅い皿状である。**[堆積土]** Ⅲ a層に近似した黒褐色土に明褐色の焼土が塊状に混入している。明瞭な掘方も確認しており、地山が直接被熱したものではないようである。**[出土遺物]** 確認面で縄文土器片が2点出土している（図101）。2・3とも縄文L Rが施文された深鉢片である。**[時期]** 出土土器から縄文時代後期に属すると考えられる。

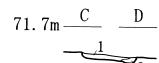
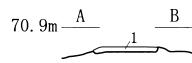
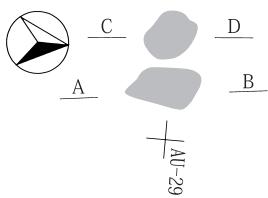
第12号焼土



第12号焼土

1層 黒色土 7.5YR2/1 明褐色焼土20%、To-Nb(φ 1 ~ 2mm) 2 %混入。

第13号焼土



第13号焼土 A-B

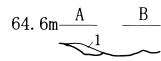
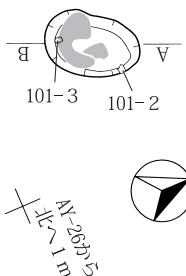
1層 にぶい黄褐色土 10YR5/3 To-Nb(φ 1mm以下) 3 %、橙色焼土少量混入。

第13号焼土 C-D

1層 暗褐色土 10YR3/3 橙色焼土少量混入。

2層 橙色焼土 7.5YR6/8

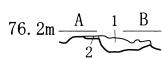
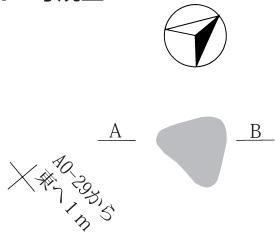
第14号焼土



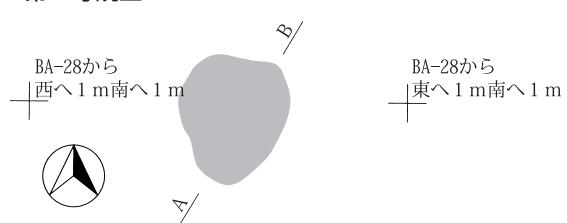
第14号焼土

1層 黒褐色土 10YR2/3 To-Cu(φ 1mm未満) 5 %、明褐色焼土混入。

第15号焼土



第16号焼土



第15号焼土

1層 橙色焼土 5YR6/8 To-Nb(φ 1 ~ 10mm) 3 %、To-Cu 1 %以下混入。
2層 にぶい黄褐色焼土 7.5YR6/4 To-Nb(φ 1 ~ 2mm) 2 %、To-Cu 1 %以下混入。

第16号焼土

1層 暗褐色土 10YR3/4 褐色焼土10%、To-Nb(φ 1 ~ 10mm) 5 %混入。

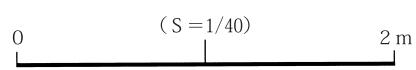


図99 D区 焼土遺構③

第15号焼土 (図99)

[位置・確認] 平坦面AO-29グリッドに位置する。表土直下のV b層で確認した。

[規模・形状] 1辺30cmの隅丸三角形状に被熱範囲が広がる。被熱の深さは最大で10cmである。明瞭な掘方は確認できなかった。**[堆積土]** 掘方が確認できないため、V b層が直接被熱したものと考えられる。**[出土遺物]** 出土していない。**[時期]** 共伴する遺物がないため、詳細は不明である。周辺で検出された遺構の時期から、縄文時代後期頃の可能性がある。

第16号焼土 (図99)

[位置・確認] 東向きの斜面、BA-27グリッドに位置する。V a層で確認した。**[規模・形状]** 55×70cmの不整な楕円形の範囲に焼土が広がる。被熱は確認面から5~10cmの深さに及んでいる。明瞭な掘方は確認できない。**[堆積土]** 焼土の下部が漸移的にV a層に移ることから、焼土が堆積したものではなく、V a層が直接被熱したものと考えられる。**[出土遺物]** 周辺では礫や石器が出土したが、

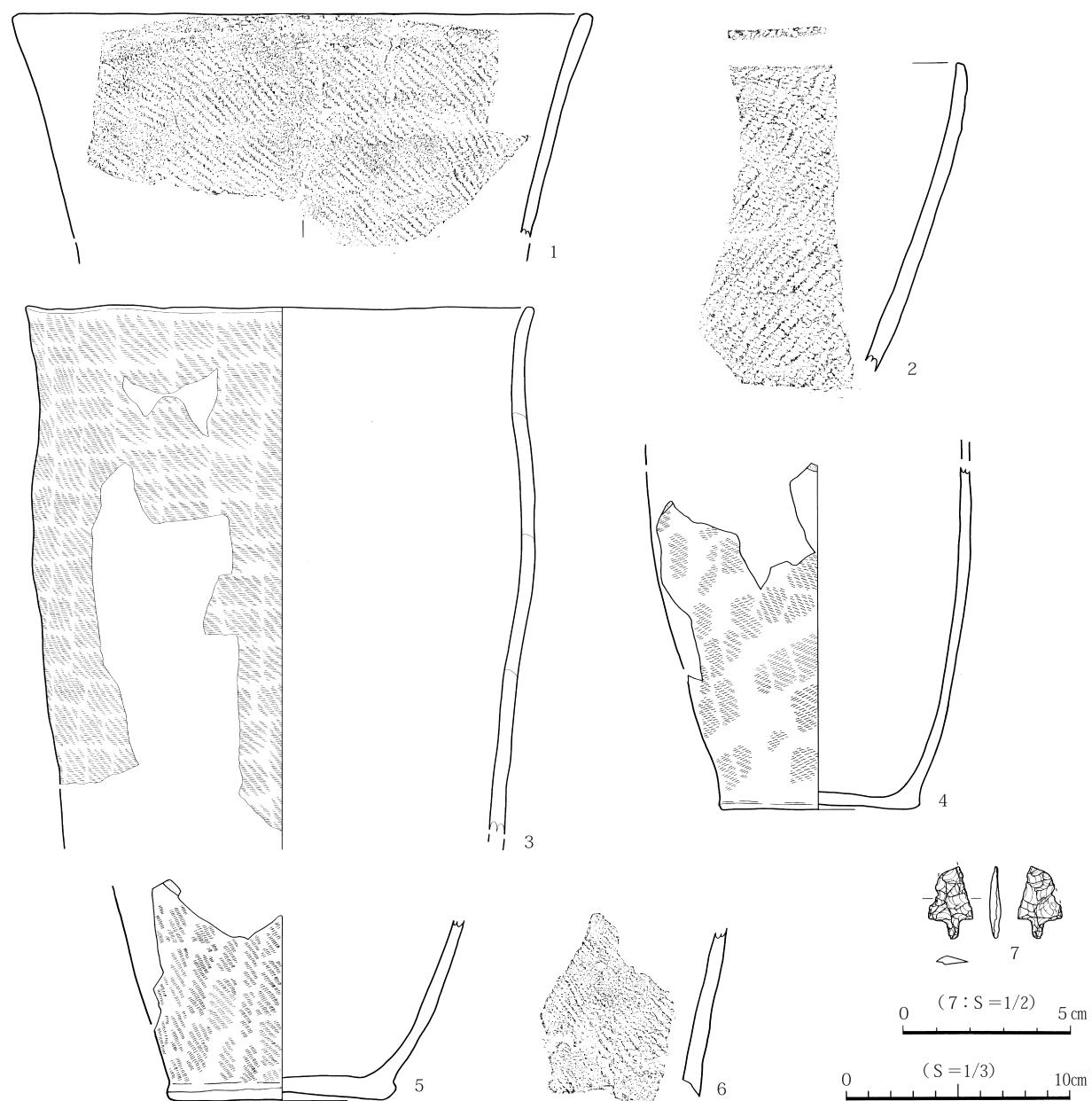


図100 第1号焼土遺構出土遺物

被熱範囲から遺物は出土していない。[時期]確認面がV a層のため、中振浮石降下以前の遺構である。V a層の出土遺物から、縄文時代早期末葉頃と考えられる。

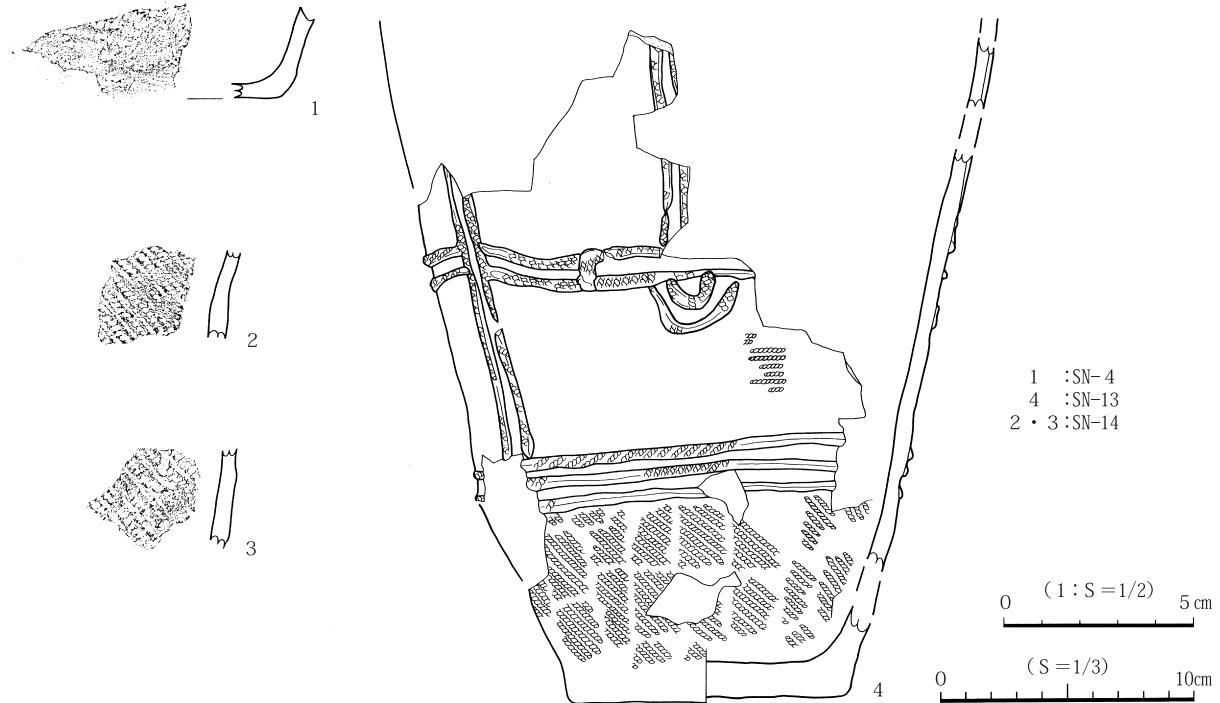


図101 焼土遺構出土遺物

4 配石遺構

第1号配石（図102）

[位置・確認] 東向きの斜面、AU・AV-27グリッドに位置する。III a層中で石の並びを確認した。

[規模・形状] III a層中に長径20~40cm程度の礫を配置した後、上面に長径1m、短径40cmの大きな角礫を配している。各礫を配置するにあたっての掘方は確認できなかったため、III層中に単純に置かれた可能性がある。配石の下部に土坑などの施設は確認できなかった。礫の配された形状に規則性はなく、集石と呼ぶ方がふさわしいかも知れない。

[出土遺物] 配石周辺で縄文土器が数点出土したほか、1・3は配石上面の大礫を取り除いた下部で出土した。1は網目状撚糸文が施された深鉢片である。2は波状口縁の有文深鉢片で、口縁部は肥厚する。3は磨消縄文が施された深鉢片である。なお、配石に用いられた各礫はすべて自然礫で、被熱及び使用痕が認められたものはない。礫質は砂岩またはチャートを主体とし、頁岩・流紋岩・凝灰岩を1点ずつ含む。礫質構成からは新井田川の礫と考えられる旨、松山調査員よりご教示頂いている。地山に含まれる礫ではないため、遺跡外から運ばれた礫が配されたものと考えてよい。

[時期] 出土遺物から縄文時代後期初頭と考えられる。

5 埋設土器

第1号埋設土器（図103）

[位置・確認] 平坦面AO-28グリッドに位置する。III a層掘削中に確認した。

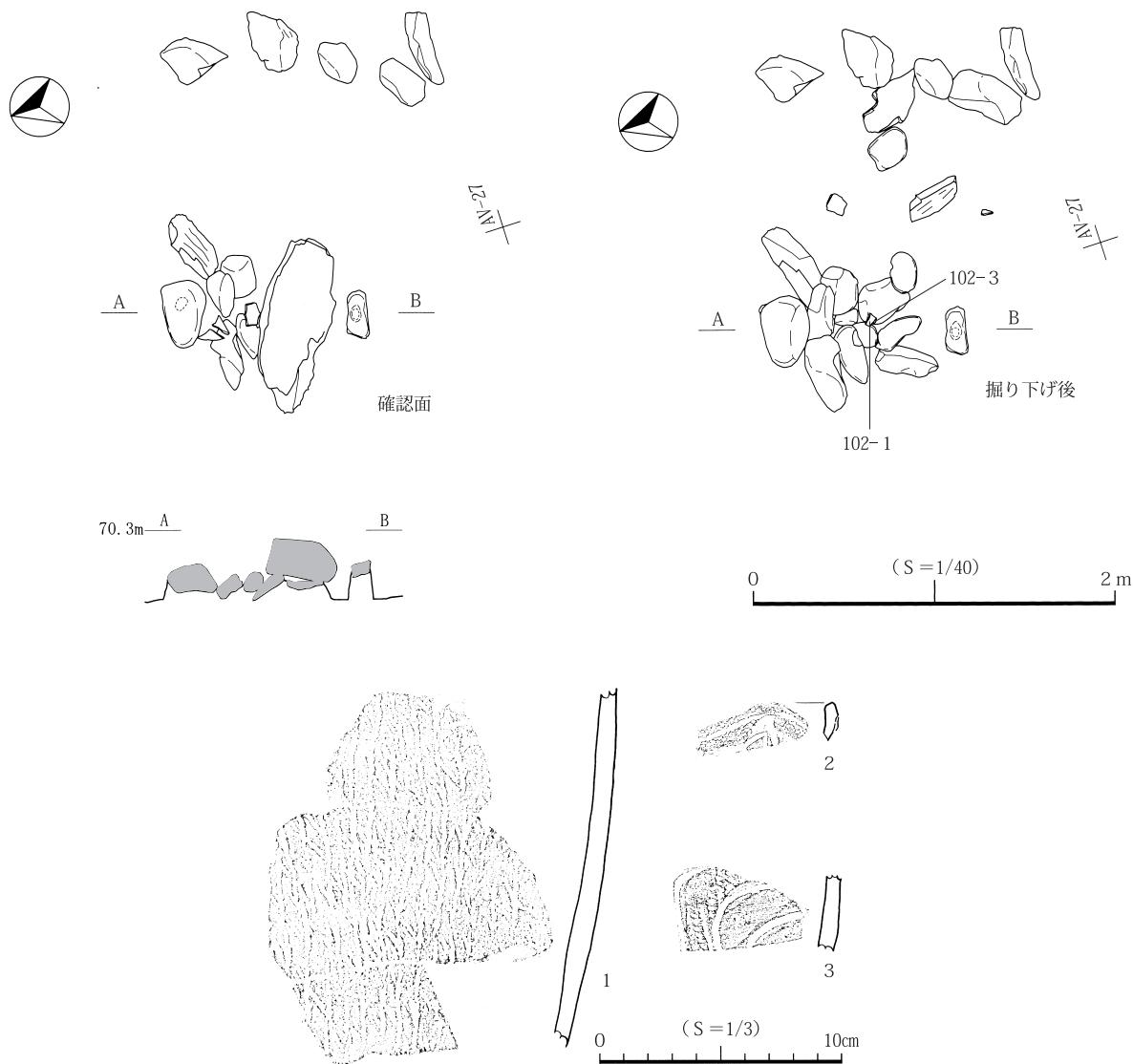


図102 第1号配石遺構

胴部下半と底部を残す土器が、直径25cm、深さ10cmの掘方内に正位で埋設されていた。[堆積土] 堆積土は掘方内・土器内ともに黒褐色土である。[出土遺物] 埋設された土器は1個体で、このほかに遺物は含んでいない。底部及び胴部下位が残存しており、縄文L Rが縦回転で施文されている。底部には網代痕が残る。[時期] 埋設された土器の特徴から、縄文時代後期初頭頃と考えられる。

6 包含層出土遺物

包含層遺物は、出土層位・地区別に把握できた一定のまとまりごとに1)～4)で記載した後、それ以外について5)～9)で種類別に述べる。なお、Ⅲ層で遺物がややまとまって出土した遺物集中区のうち、遺物の分布範囲を考慮して集中区1は第1号焼土遺構、集中区2は第21号土坑、集中区5は第25号土坑との関連が考えられるため、それぞれ当該項で記載した。

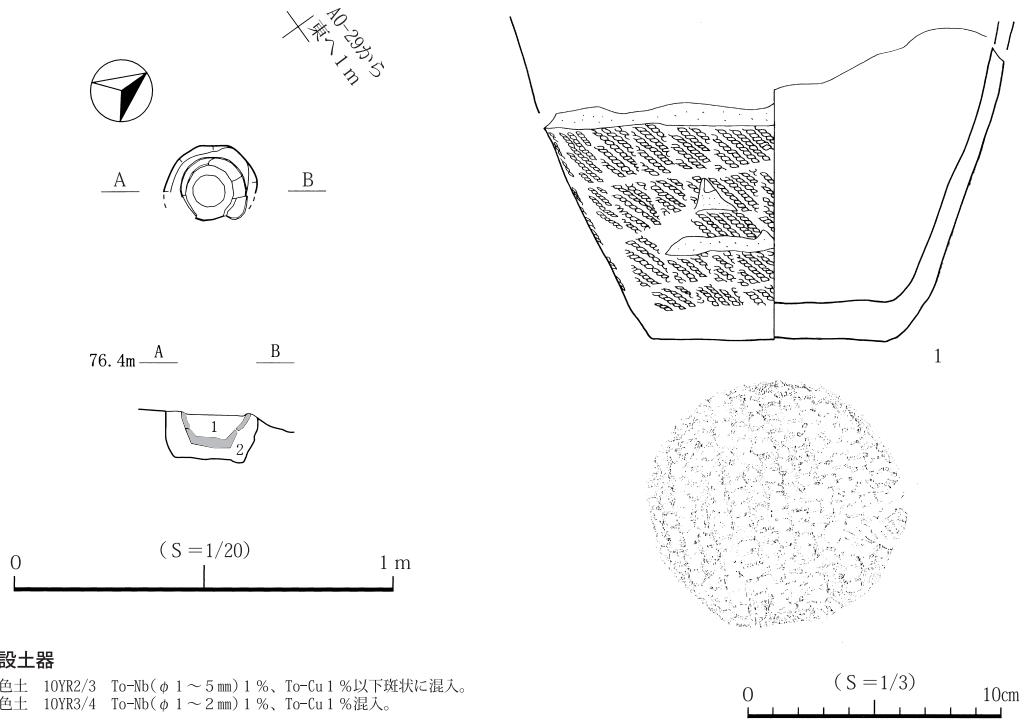


図103 第1号埋設土器

1) V層出土遺物（図104～106）

D区斜面下方では、V層面で少量の遺物が出土した。104-1・2は9m程離れた地点から出土しているが、同一個体の深鉢である。口唇は丸く仕上げられ、口縁直下は強い横ナデによって凹線状に窪み、胴部との境に段を持つ。胴部は縄文LとRを2本組にした単軸絡条体が回転施文され、内面は二枚貝条痕による調整が施される。底部は尖底気味の丸底を呈し、器壁は厚く、胎土に多量の纖維を含んでいる。3は口縁に縄文L Rを押圧し、胴部に縄文LとRを2本組にした単軸絡条体が回転施文される。内面は条痕調整が著しく残る。4は縄文L RとR Lを結束した羽状縄文が、5はL RとR Lが交互に回転施文されている。V層出土土器は、胎土などの特徴から概ね縄文時代早期末葉の早稻田5類に相当すると考えられるが、この時期に2のような丸底の土器が伴うかどうかは検討すべき課題である。

剥片石器は製品のみ掲載した。104-6～8は平基無茎石鏃で、6は裏面の剥離状況から未製品の可能性がある。9は縦型石匙で、背面には顕著な光沢が認められる。10は1辺に連続した剥離があるスクレーパー、11～13は両極剥片である。礫石器は打製石斧1点、磨石6点、敲石2点、石皿1点が出土している。14は流紋岩の石皿で、1面に光沢のある平滑面がある。105-1は安山岩製の打製石斧で、片面に原礫面を残す。2～4は磨石で、いずれも礫の1側面を機能面とする。4は端部に1箇所、軽微な敲き痕を有する。



図104 V層出土遺物①

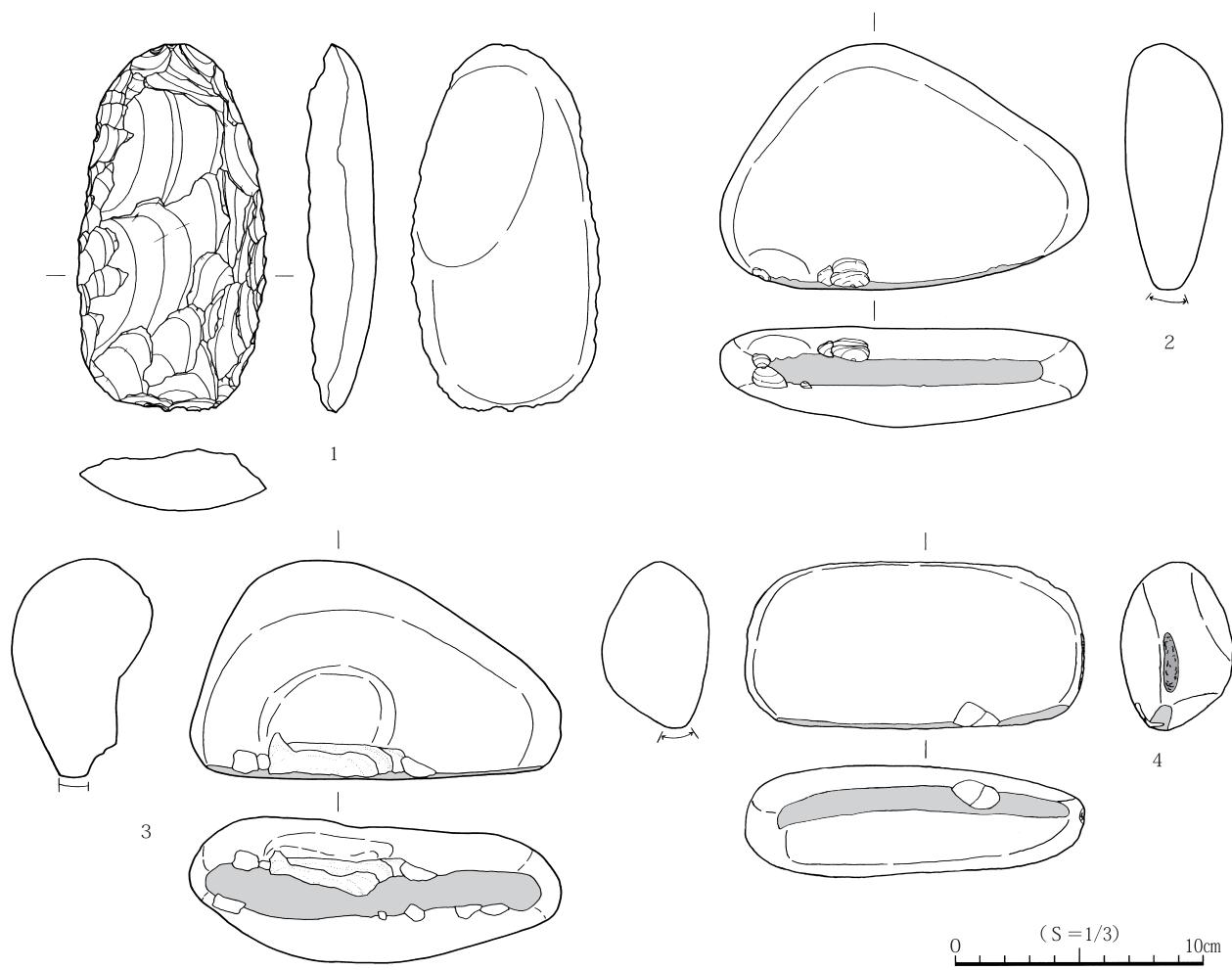


図105 V層出土遺物②

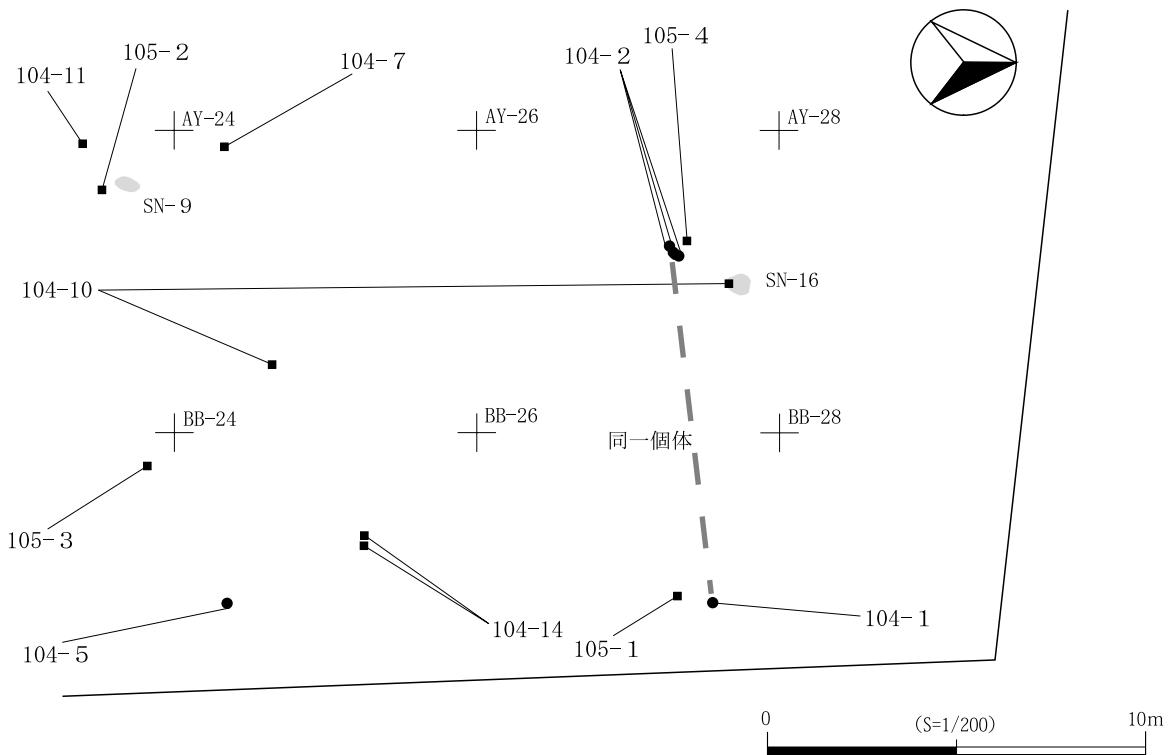


図106 V層遺物出土状況

2) 集中区3出土遺物 (図107~116)

AY・BA・BB・BC-24~29グリッドのⅢ層では、縄文時代後期初頭の遺物が多量に出土したため遺物集中区3として調査し、一部遺物の出土位置を記録して取り上げを行った。Ⅲ層は厚い部分で50cmを超える堆積をみせるが、同一層の上下で遺物の時期が明瞭に分かれるということはない。

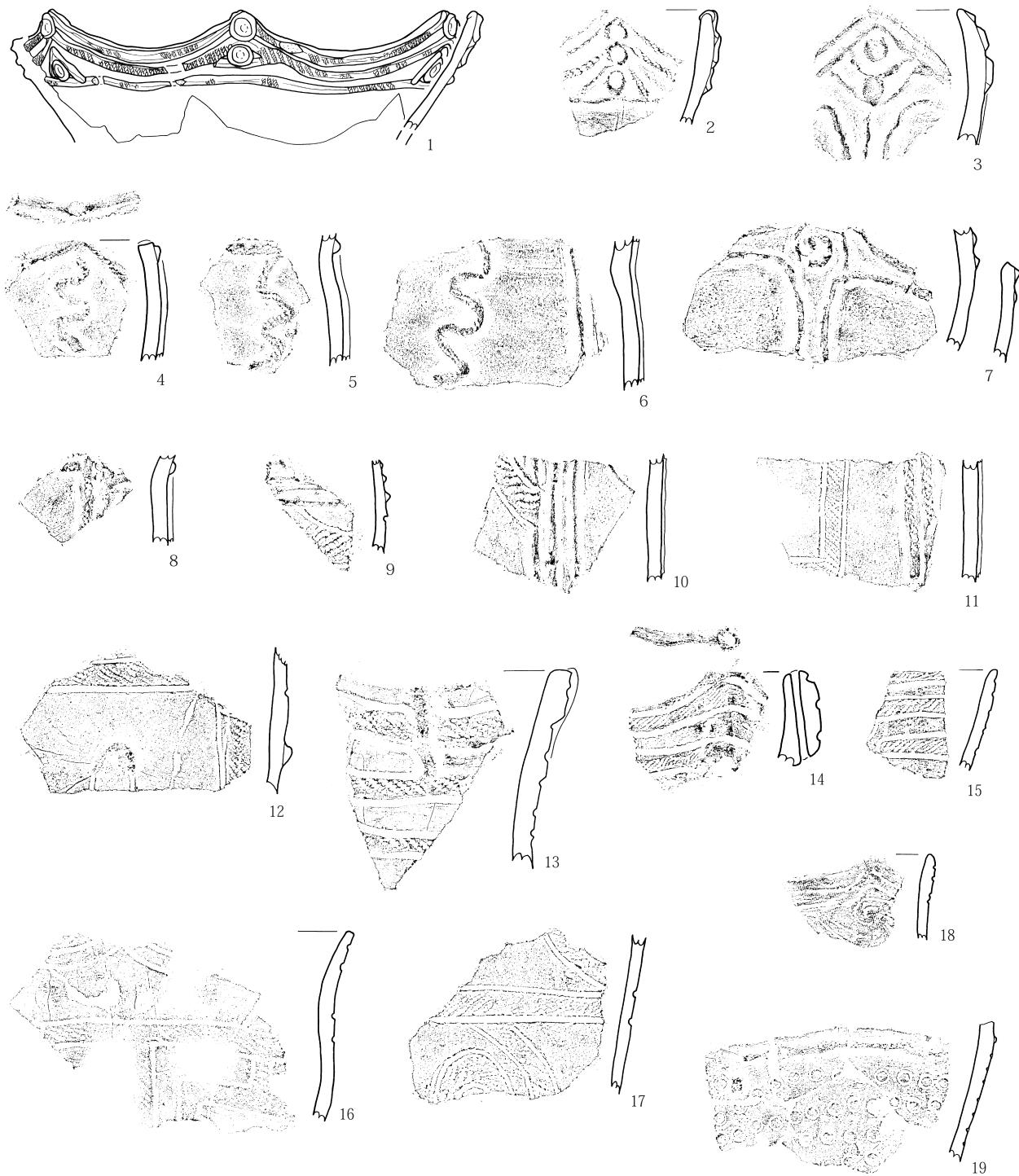


図107 集中区3出土土器①

0 (S=1/3) 10cm

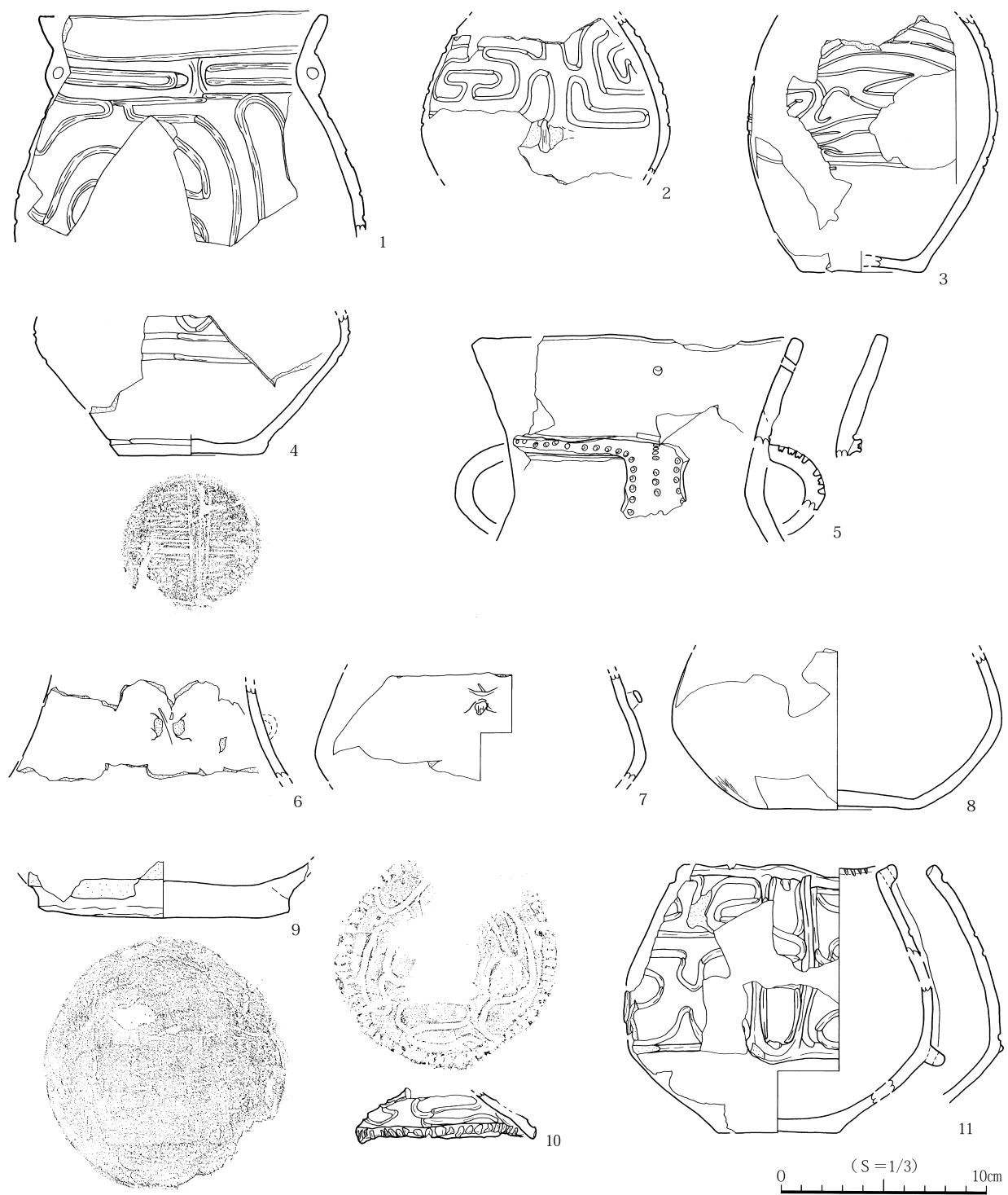


図108 集中区3出土土器②

土器は地文のみのものが多く、有文のものは量が少ないと復元が困難であった。図107は有文の深鉢及び鉢で、いずれも十腰内I式以前の後期初頭に位置づけられる。1～7は口縁部が内湾する波状口縁深鉢である。1～3は隆帯と波頂部の円形貼付文が特徴的で、1・2の隆帶上には縄文RLが回転施文される。4～6は同一個体で、口縁部に横走、胴部には垂下する隆帶が波状に施され、隆帶上には縄文LRが回転施文されている。7は隆帶による区画及び渦巻文が施される。8の隆帶上



図109 集中区3出土土器③

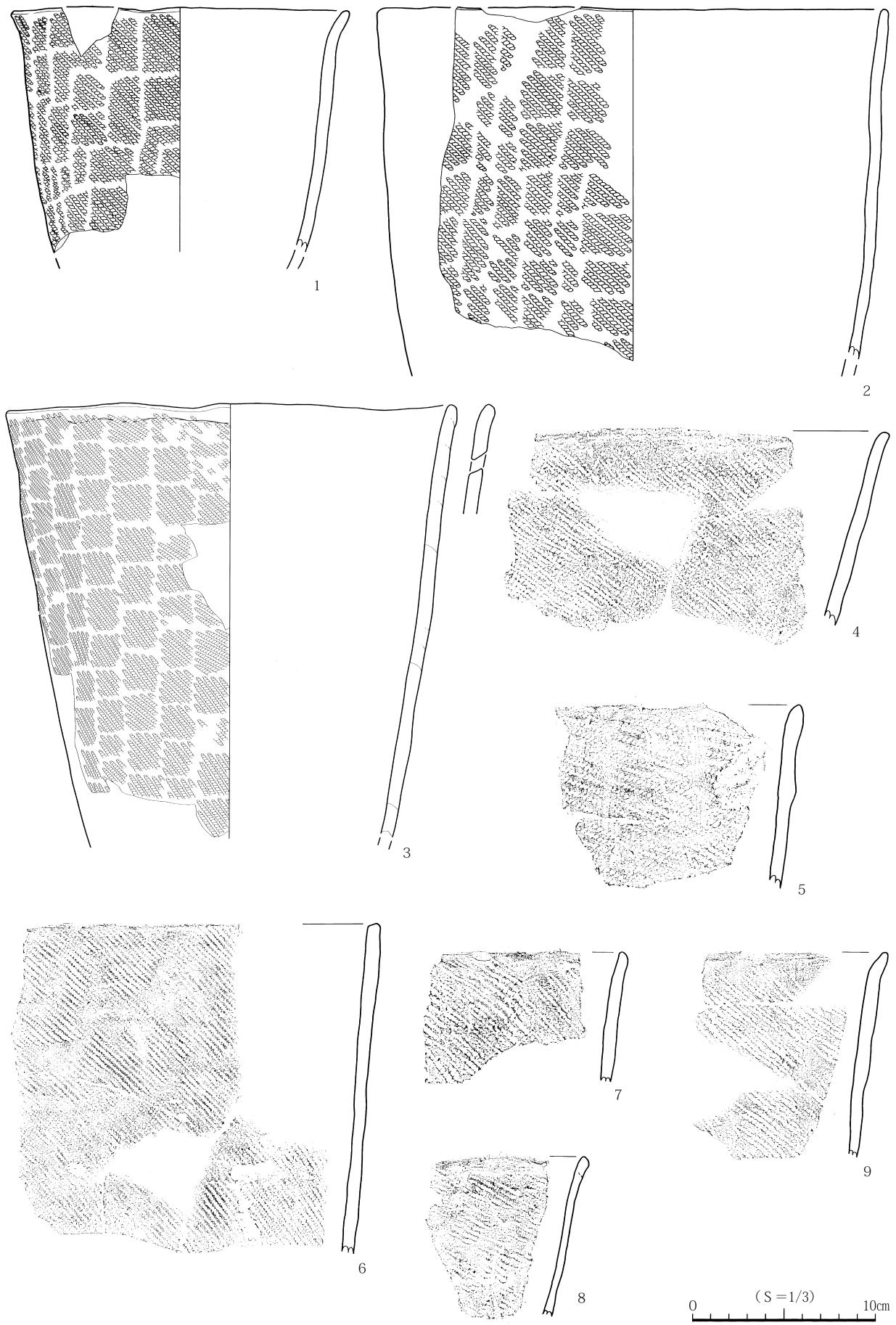


図110 集中区3出土土器④



図111 集中区3出土土器⑤

には縄文R Lが回転施文されている。9～12は隆帯と帶状の磨消縄文が施されており、沈線は鋭い。13・14は波状口縁を呈し、口縁部が肥厚する。15は薄手の作りで鉢と思われる。16は波状口縁で胴部に方形基調の磨消縄文が施されている。17は胴部に細沈線で区画された帶縄文や、弧状の磨消縄文が施されている。18は小型の波状口縁深鉢で、沈線で渦巻文が施される。19は竹管状工具による円形刺突が施され、割れ口に黒色物質が付着している。図108-1～5は有文の壺形土器である。体部文様に磨消縄文手法は用いられず、1・3は入組文、2は方形文が沈線で施されている。4は体部が張る鉢の可能性もあり、底部に笹葉痕が残る。5の頸部には、2ないし4単位の橋状把手が付けら

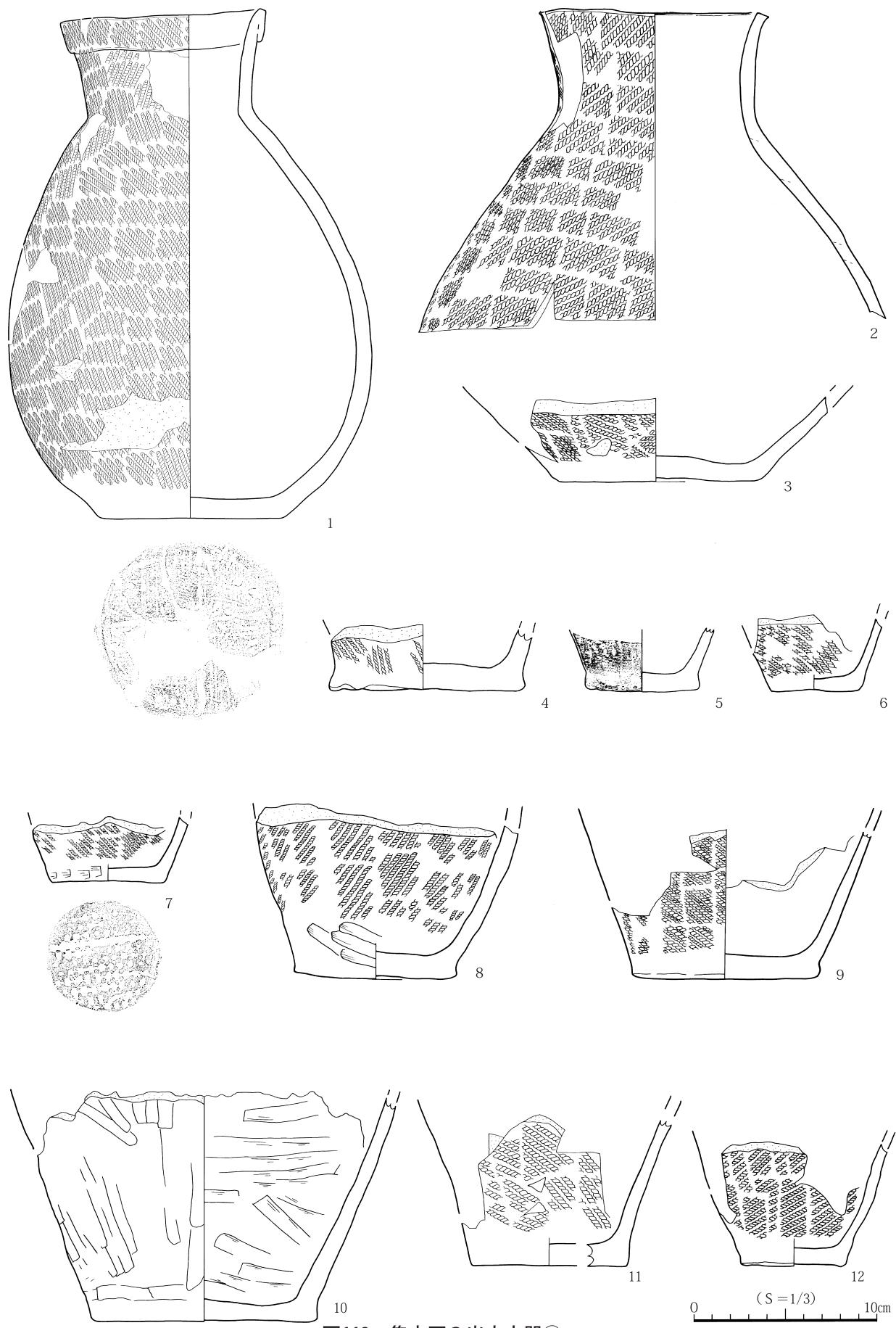


図112 集中区3出土土器⑥

れており、把手上には刺突が施されている。6～8は同一個体と思われる頸部の長い壺形土器で、頸部と体部に貫通孔のある突起が貼付けられており、全面がナデ調整される。器壁は薄く、焼成は良好である。9は高台状に突出した壺の底部で、底面はケズリ調整されている。10・11は切断壺形土器である。ともに体部上半で竹ヒゴ状工具の連続刺突によって切断されており、切断面は無調整のため切断による凹凸が残る。10は沈線で弧状の文様が、11は沈線文と隆帯が施されている。図109～111は無文または地文のみの深鉢である。109-1～3は胴部に膨らみを持ち、頸部がくびれて口縁が外反する器形を有する。すべて縄文LRの縦回転によって施文されている。2は口唇を強く面取りすることにより口縁が折り返し状に突出している。4・5・110-1・111-1は口縁が外反する器形を有し、縄文LRが縦回転施文される。なお、2・4・5の施文原体は縄文LRにRが1本付加されたもので、5は条の末端が解けないよう結ばれており胴部上半にはその圧痕がみられる。110-2～9は胴部から口縁にかけて直線的に立ち上がる深鉢で、縄文LRが縦回転施文されている。3の口縁部には補修孔が開けられている。4・7・9は縄文LRにLが1本付加された原体を用いている。111-2～4は口縁がやや内湾する器形を有する深鉢である。2は波状口縁を呈し、2・3の口縁部には縄文原体が押圧されている。5は小型の深鉢である。底部は安定の悪い平底で、器表にはスス・コゲが付着している。6も小型の深鉢で、口縁は波状を呈し器壁は肥厚する。胴部には単軸絡条体が回転施文されている。7は厚い器壁を持つ無文の深鉢である。112-1～3は地文のみが施された大型の壺形土器である。深鉢の多くは縄文を縦回転により施文しているが、1・2は横回転施文である。1は折り返し状口縁で、底部に木葉痕を残す。112-4～12・113-1～3は深鉢の底部である。深鉢底部はナデ調整されるものが多いが、7・2は網代痕、3は笹葉痕が残る。1は底面の外周にヘラ状工具による鋭い筋が認められ、底部中央に焼成後穿孔が施されている。

剥片石器は製品のみ掲載した（図114）。1・2の無茎石鏃は、下部のV層出土の石鏃と特徴が一致するため、縄文時代早期末葉の所産である可能性もある。3は黒曜石製の凹基無茎石鏃で、基部の抉りが深く、側縁が基部に近いところで大きく外側に張り出す。黒曜石の原産地分析は行っていないが、石質は良質で非常に透明度が高い。なお、外に張り出した長い脚部を持つこの形状の無茎鏃は岩手県大迫町立石遺跡などで多く出土しているようで、縄文時代後期に位置づけられている（鈴木1991）。4～8は有茎鏃の破損品または未成品である。9・10はつまみのある石錐、11～14は石匙で、13・14はともに縦長の剥片を素材とする。11・12はつまみがはっきりしない小型品で両面に丁寧な押圧剥離を施しており、刃部の形状は石鎚に近い。15はスクレーパーである。16～20は質の悪いチャートを用いた楔形石器で、表面がやや風化している。楔形石器はいずれも取り上げ層位がⅢ層下位だが、同質の剥片はV層で多く出土しているため本来下部のV層に含まれていた縄文時代早期末葉の製品である可能性が高い。21は石核で、打面の転移が顕著である。

礫石器は磨製石斧2点、磨石5点、敲石3点、台石・石皿類5点が出土しており、その一部を図化した（図115）。1は緑色凝灰岩製の磨製石斧で、全面を敲打整形の後、刃部を研磨する。2は閃綠岩製磨製石斧の基部である。全面が丁寧に研磨され、側面の稜は明瞭である。3は礫両面の中央に敲打による窪みを持つ敲石である。4～6は磨石である。7は側縁を有する凝灰岩製の石皿で、機能面全体に擦痕が認められる。8は台石で、中央に擦痕が顕著な平滑面を有し、その周囲に多くの敲打痕がある。9は平滑面と敲打痕を併せもつ台石である。敲打痕の内部及び周囲に赤色顔料が付着して

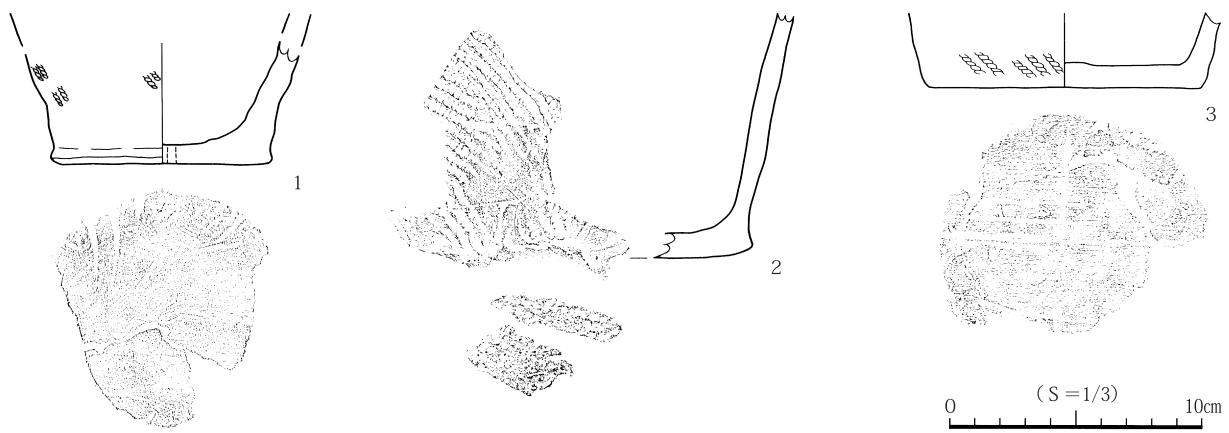


図113 集中区3出土土器⑦

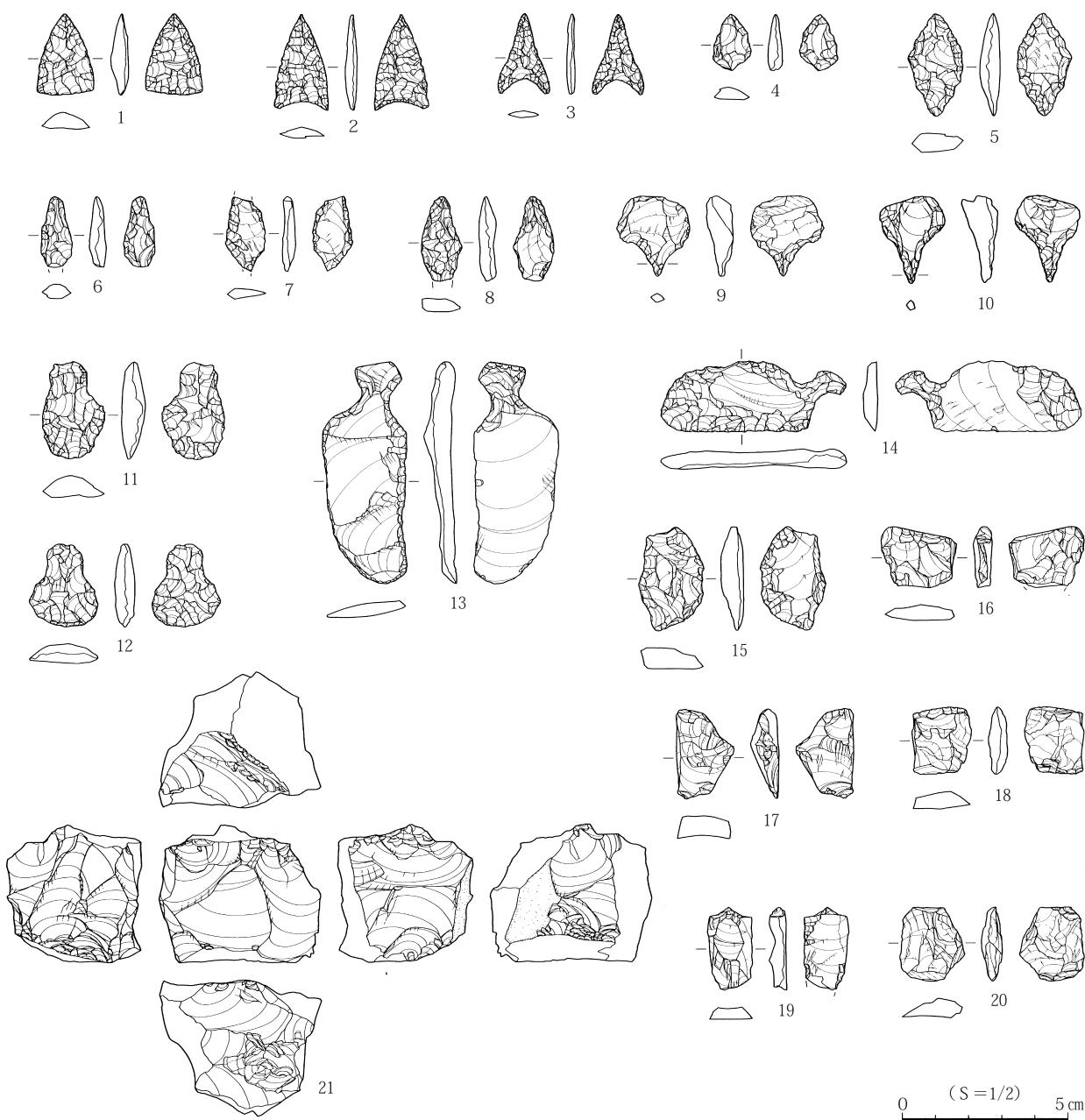
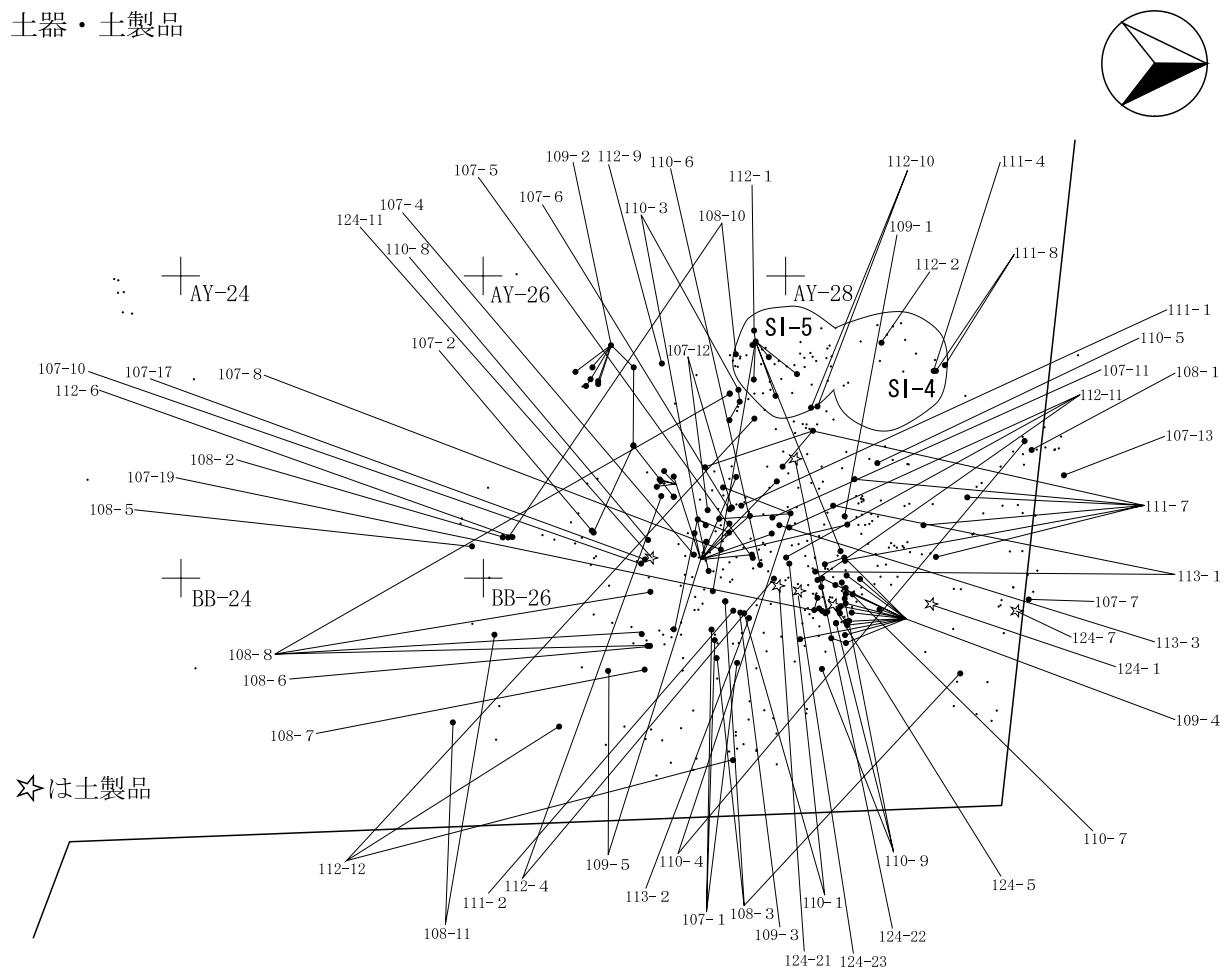


図114 集中区3出土剥片石器



図115 集中区3出土礫石器

土器・土製品



石器・コハク

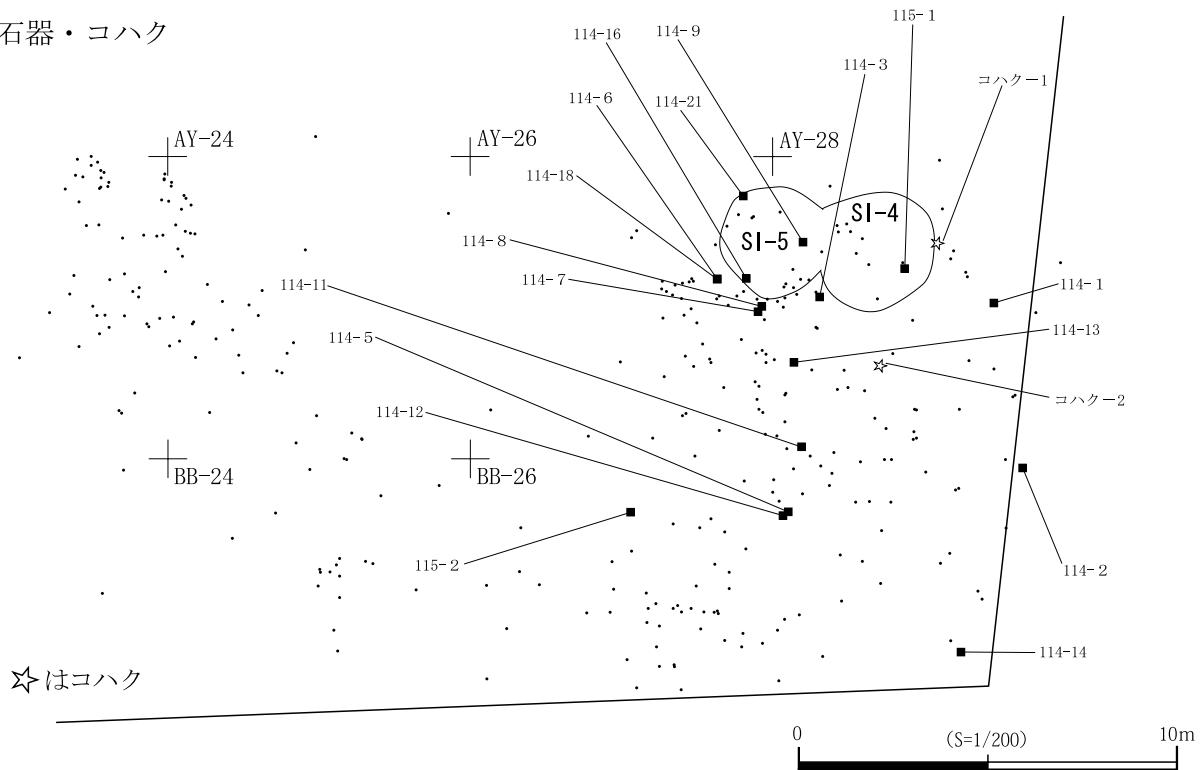


図116 集中区3遺物出土状況

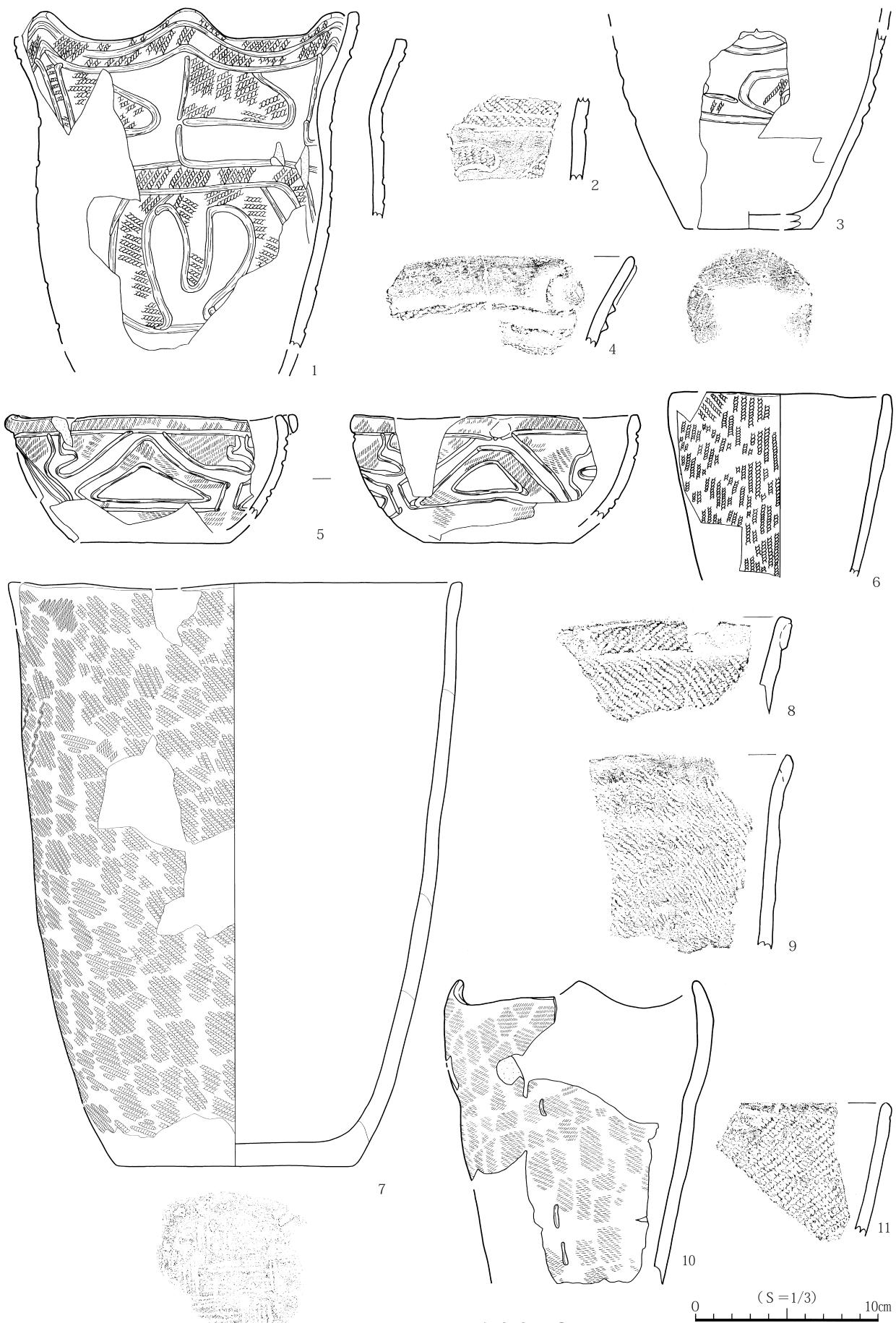


図117 AW-24周辺出土土器①

おり（図の黒塗り部分）、赤鉄鉱の粉碎に用いられたものと考えられる。

コハクは2箇所で出土しており、いずれも質が悪く特に加工があったようにはみられない。長径1～4mmの碎片で出土し（写真図版51下段右）、重量は合わせて1.2gである。なお、土製品については7)でまとめて記載した。

3) AW-24周辺出土土器（図117・118）

AW-24とその隣接グリッドでは、集中の程度は弱いが縄文時代後期初頭の土器がややまとまって出土した。出土位置は記録しておらず一括性を保証するには躊躇を覚えるが、当該グリッド出土土器のうち主なものについて本項で記した。117-1～4は有文の深鉢である。1は6単位の波状口縁をなし、口縁部は肥厚する。口縁部・頸部・胴部にそれぞれ沈線と縄文LRによって文様が描かれている。5は浅鉢である。口縁は平縁で肥厚しており、2箇所に貫通孔が施された突起を持つ。体部には縄文Lを用いた三角形文が磨消縄文手法によって描かれている。6～11・118-1は地文のみの深鉢である。口縁は直線的に外傾し、縄文の施工方向は縦回転が多い。8の口縁は粘土帯を貼付け折り返し状を作ったもので、9は粘土紐の最終段をやや厚目にすることで口縁を肥厚させている。10は波状口縁を呈し、口縁部が内湾する器形である。胴部には数箇所、押引状の刺突が認められる。118-2は切断壺形土器の上部で、頸部より上を欠いている。貫通孔のある突起が2箇所に貼付けられ、沈線でコ字状文が施される。切断面には竹ヒゴ状工具による切断の痕跡部分的に残す。3は壺である。体部に沈線文が施され、外面の一部に漆の可能性がある黒色物質が付着している。

4) 集中区4出土遺物（図119・120）

AT・AU-17・18グリッドで遺物の散布が密に認められたため、集中区4として調査した。遺物は後期初頭の土器が主体で小片が多く、有文土器は少ない。1～3は有文の深鉢である。1・3は同一個体と思われ、1は集中区4の斜面上方にある106トレンチで出土したものである。口唇は面取りされ、口縁部と胴部にキザミを施した2条の隆帯が貼付けられる。頸部及び胴部下半には磨消縄文が施文される。4・5は地文のみが施された深鉢で、4のように網目状撚糸文が施文されたものもある。

剥片石器は少量の剥片と石槍（6）が出土した。石槍は珪質頁岩を素材とし、表面に原礫面を残す。側縁の剥離は粗いが、背面には細かな押圧剥離が施された部分もある。礫石器は石皿2点が出土した。7・8とも平滑な機能面を有する。

5) 土器（図121・122）

1)～3)で取り上げなかったグリッドで出土した土器をまとめる。

121-1は縄文時代中期の円筒上層a式の深鉢である。今回の調査で出土した円筒土器はこの1点のみである。2～23は縄文時代後期の有文深鉢である。2～22は十腰内式以前の後期初頭に位置

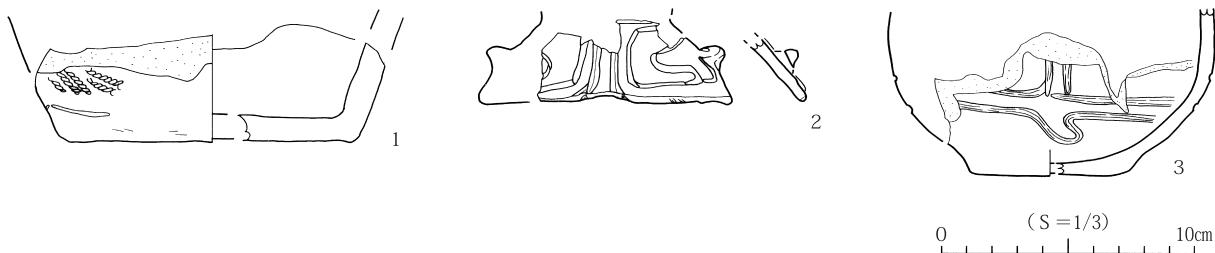


図118 AW-24周辺出土土器②

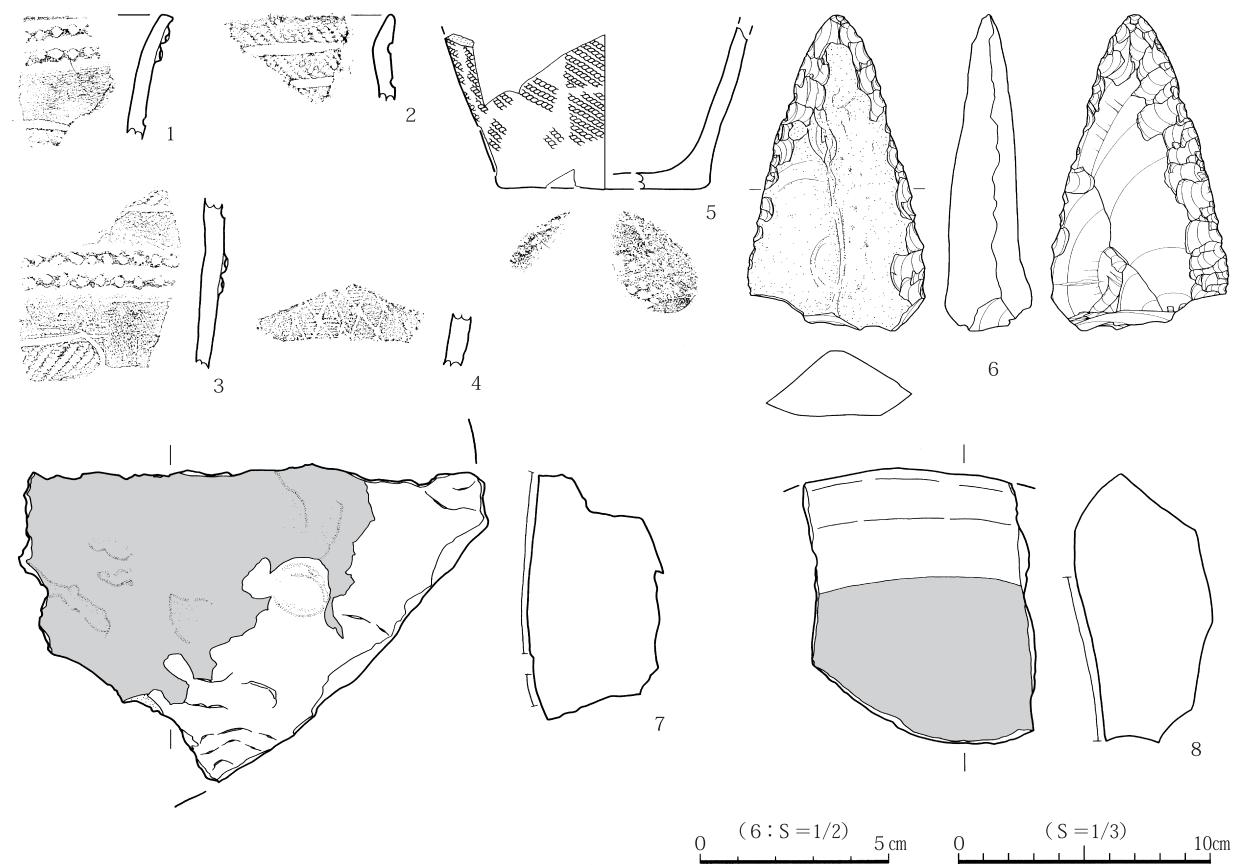


図119 集中区4出土遺物

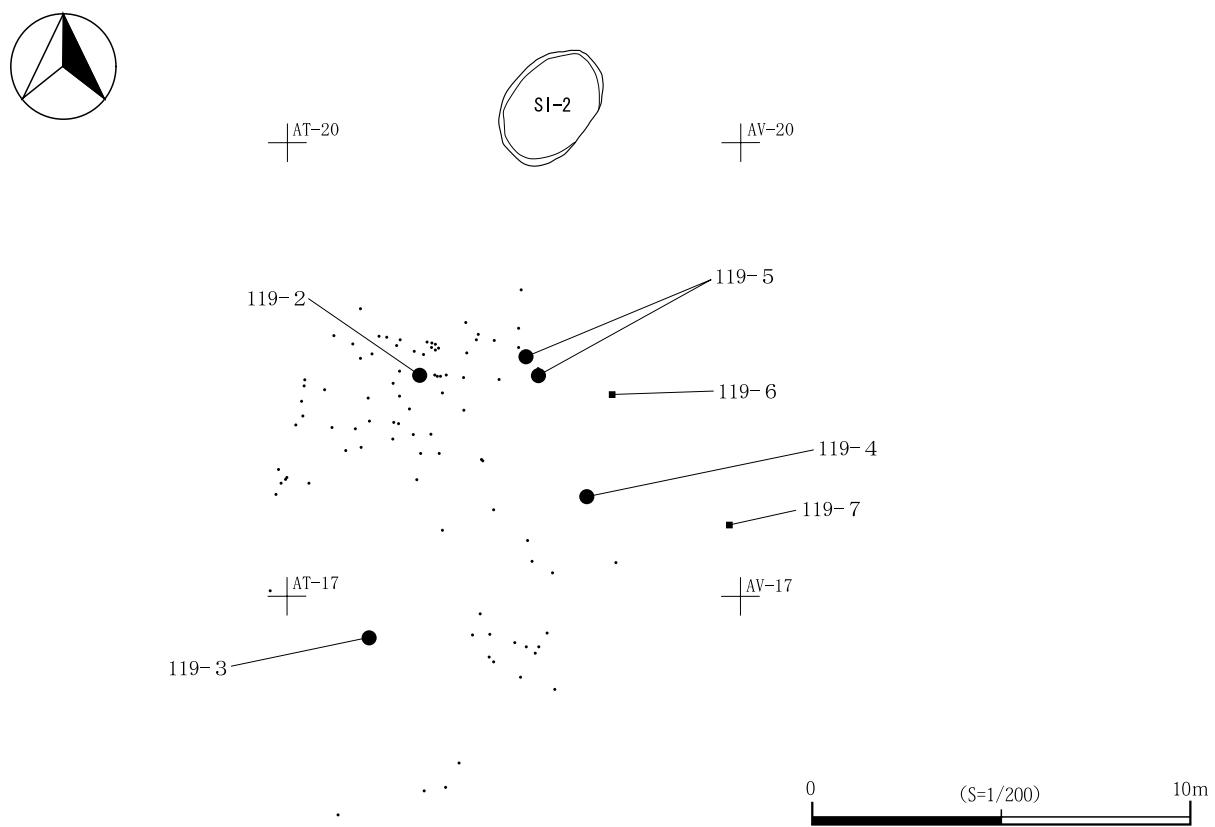


図120 集中区4遺物出土状況

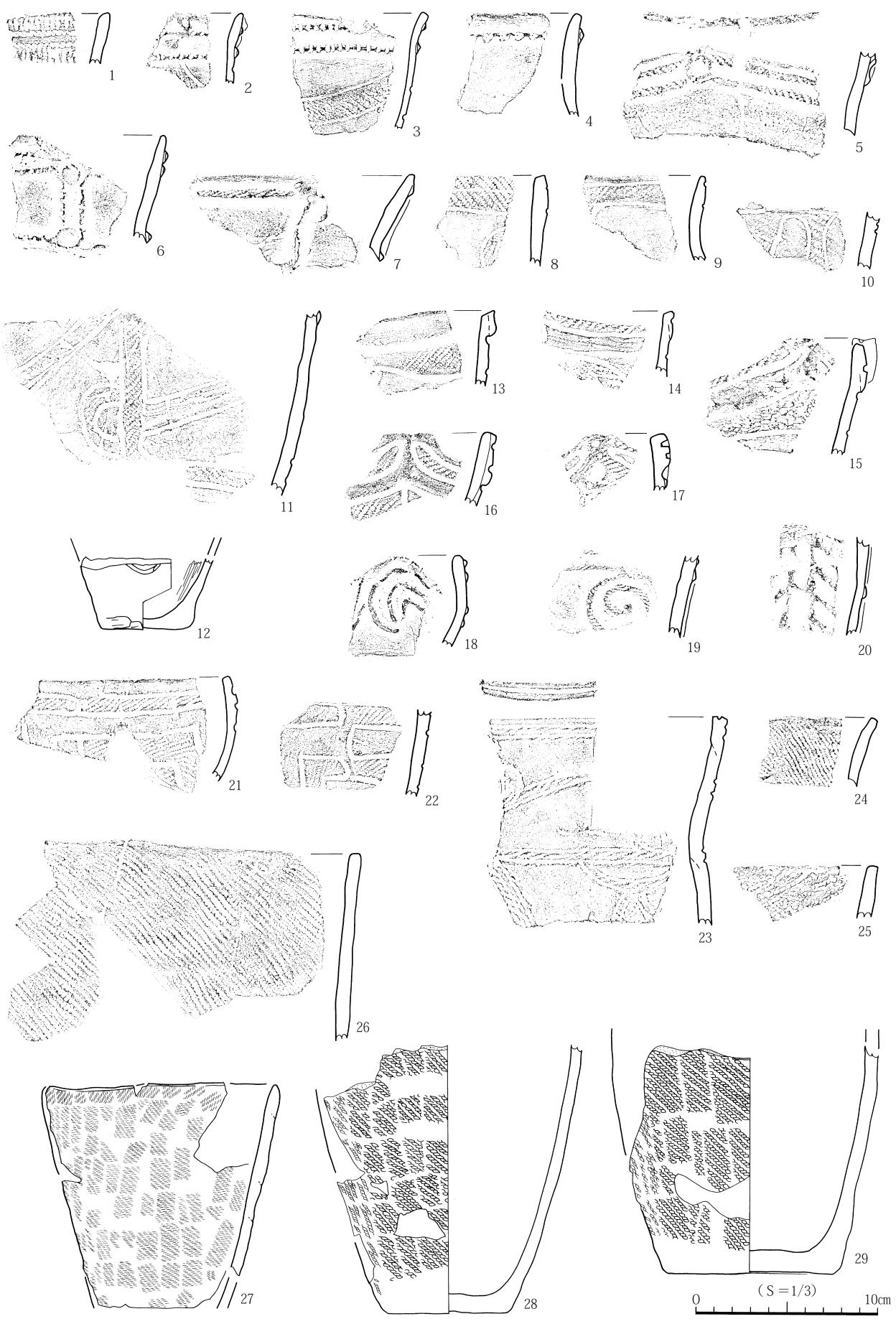


図121 D区出土土器①

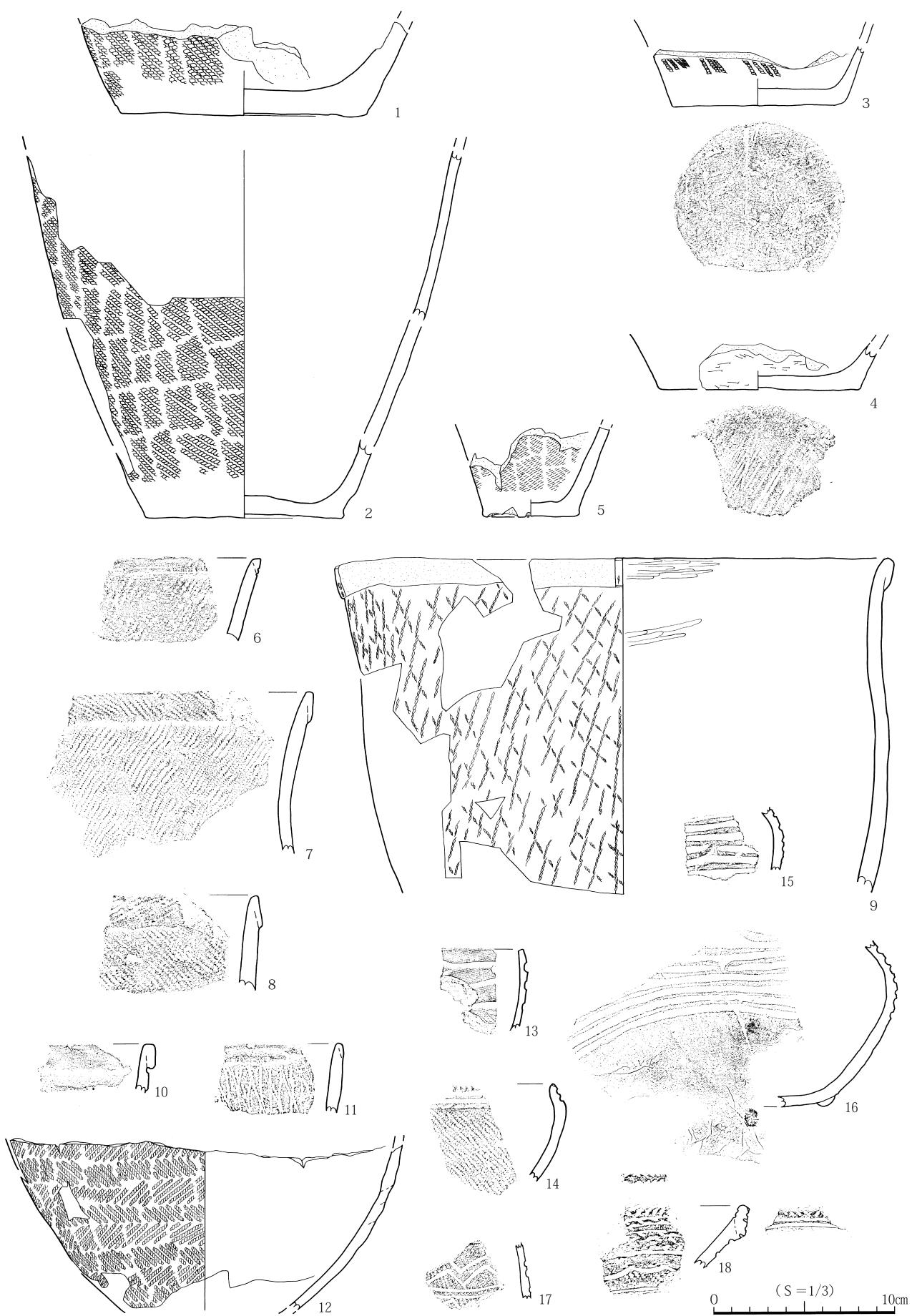


図122 D区出土土器②

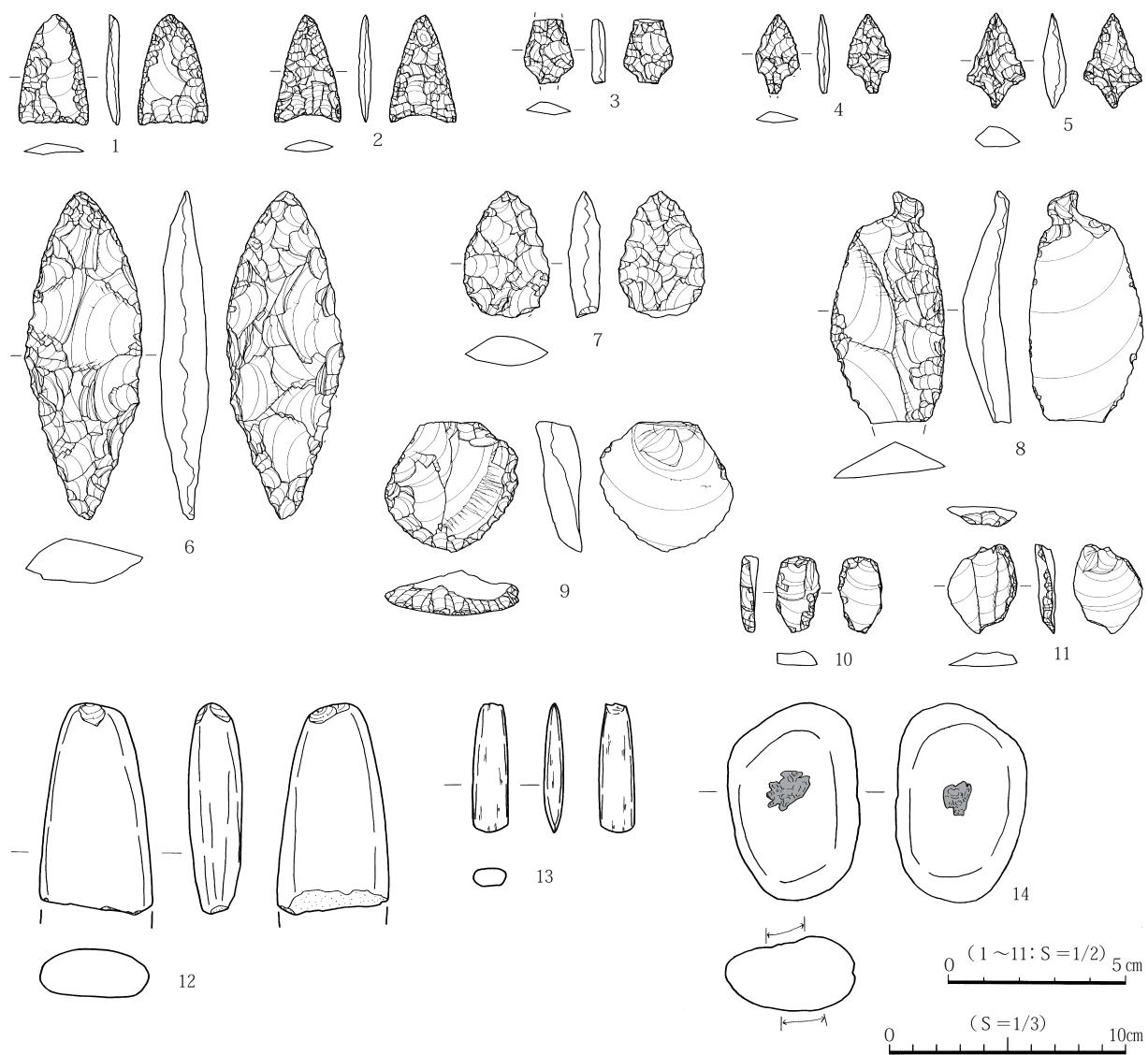


図123 D区出土石器

づけられ、23は十腰内 I a式である。今回の調査では十腰内式の出土量は少ない。24~29・122-1~11は地文のみが施された深鉢で、縄文時代後期に属するものと考えられる。縄文L Rが縦回転で施されるものが多く、9・11のように網目状撚糸文が一定量伴う。口縁は単口縁のものが多いが、7~10のように折り返し状口縁となるものを伴う。6・11の口縁は肥厚しないが、口縁部にあたる粘土紐積み上げの最終段を丁寧に調整しないという作り方から考えて、折り返し状口縁を意識していると考えられる。12は縄文時代後期中~後葉の壺形土器で、縄文L RとR Lを結束せずに交互施文することにより羽状縄文を表現している。該期の土器はこの1点のみが出土している。13は縄文時代晚期前葉の浅鉢である。器壁は薄く丁寧な作りで、入組三叉文が施されている。14は縄文時代晚期中葉の鉢である。15・16は同一個体で、縄文時代晚期後葉の壺形土器である。体部上半には工字文が施され、底部に突起を持つ。晚期の土器は丘陵頂部と調査区南側で少量出土した。17は弥生時代中期の甕で、胴部に沈線で鋸歯状文を施している。18は弥生時代後期の壺と思われ、肥厚した口縁部に交互刺突を施している。D区で出土した弥生土器はこの2点である。



図124 D区出土土製品

6) 石器（図123）

剥片石器は一部の製品を図化した。1・2は無茎石鏸、3～5は有茎石鏸、6・7は石槍である。8は縦型の石匙で1片に刃部を作出する。9はラウンドスクレーパーで、打面を除く縁辺に押圧剥離を施す。10・11は二次加工のある剥片で、両極剥片の縁辺に部分的な押圧剥離が施されている。礫石器は磨製石斧・磨石・敲石各2点、砥石1点が出土している。12は粗粒玄武岩製の磨製石斧で、刃部を欠損し、基部に加撃による剥離を伴う。13は安山岩製の小型磨製石斧で、研磨による擦痕が全面にみられる。14は敲石で、両面の中央に軽微な使用痕が認められる。

7) 土製品（図124・写真図版51）

土製品は集中区3を含め包含層出土品を一括した。1・3～7・17・19～23が集中区3で出土したものである。すべてⅢ層で出土しており、包含層土器のあり方から考えても、全点縄文時代後期初頭の所産として大方の誤りはないであろう。土偶は4点出土しておりいずれも別個体であるが、色調は明るい褐色を呈し、体部が薄く扁平な板状で外面に細かい刺突が施されるといった共通の特徴を持つ。1は頭部で、土面状の顔が前に突き出し、頭頂部は平坦で上面觀は扇形に後方に張り出す。目・鼻孔・口は円形の刺突により表現されている。顔面には十字の、顔側面・首・後頭部には列状の刺突が細かいヘラ状工具によって施される。2は右腕部で両面に細沈線と円形刺突が施される。肩部に貫通孔を有し、腕部の上下側面にも細かい円形刺突がみられる。3は左腕部で肩部に貫通孔、表裏にヘラ状工具による細かい刺突を有する。4は右腕部で表裏に刺突が施される。5は2箇所の焼成前穿孔が施された扁平な三角形土版で、表裏面はナデ調整される。6は土器片加工ではない円形土製品で、表裏・側面ともナデ調整される。7は破損しているが中実・無孔の球状土製品で、外面はナデ調整され数箇所にヘラ状の工具によりキザミが付けられる。3単位に割れて出土したため、いくつかの粘土塊を組み合わせて成形していると考えられる。8は全面無調製の、焼成粘土紐様の土製品である。9・10は小型の壺形土器の口縁部で、切断壺形土器の可能性がある。いずれも沈線のみで文様が施され、後期初頭の所産とみられる。11～13は台付のミニチュア土器である。全面にナデまたは板状工具によるナデが施される。土器片加工の土製円盤は10点（14～23）出土しており、18は底部破片を、その他は深鉢胴部破片を加工したものである。

8) 陶磁器（写真図版52）

13は102トレンチで出土した肥前産の染付磁器猪口で、18世紀後半の製品である。蛇の目凹形高台を有し、見込に五弁花、縁内に四方禪文が描かれている。口径6.2cm、底径5.8cm、器高6.2cmで、口縁は輪花である。D区で出土した江戸時代の陶磁器はこの1点のみである。

9) 銭貨（写真図版51）

無文の銅銭が2点出土しており、1点を写真図版51に掲載した。銭5は109トレンチで出土し、計測値は外径23mm、内径19.5mm、重量1.7gである。

第4節 市道付替部の確認調査

本発掘調査区域北側で、市道のルート変更に伴う付替工事箇所の確認調査を行った。対象区域は延長130m、幅は平均7m程で、面積は1,360m²である。確認調査トレンチはA～Iの9箇所を設定し、実際の発掘調査面積は計46m²であった。

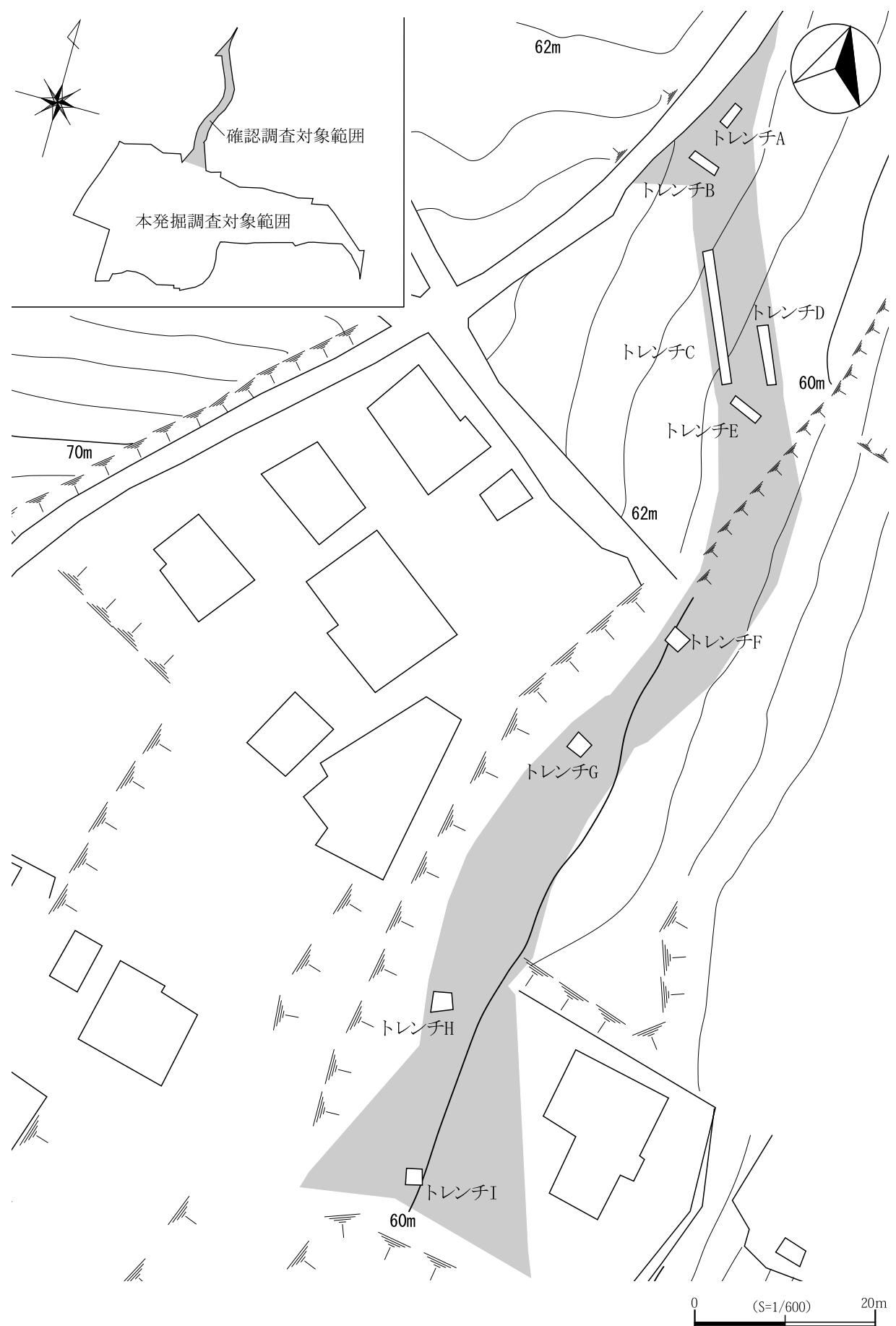


図125 確認調査位置図

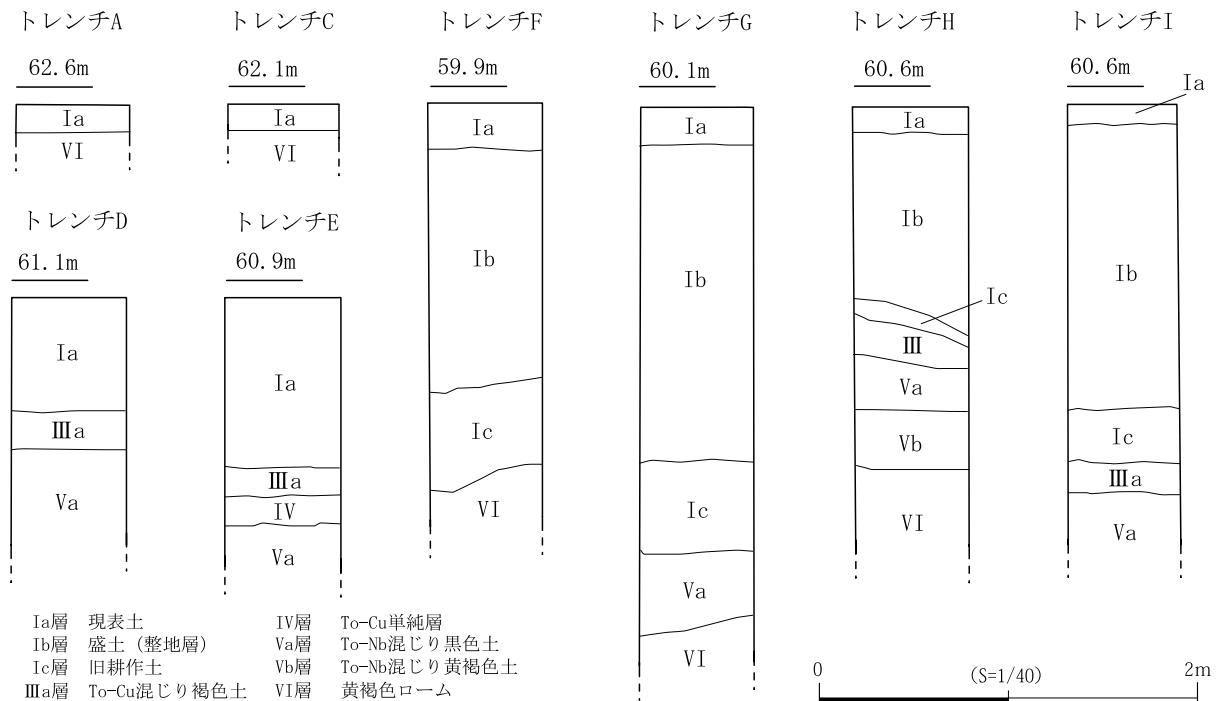


図126 確認調査トレンチ土層

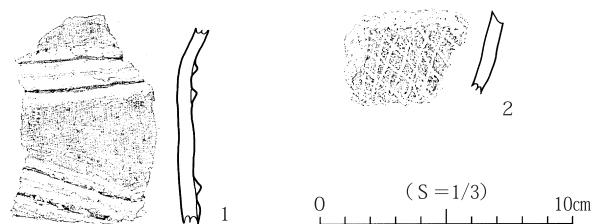


図127 トレンチI 出土土器



トレンチH 調査状況



トレンチC 完掘(東より)



トレンチF 土層(南壁)

図126に各トレンチの土層堆積状況を示した（トレンチA・Bはほぼ同様のため、Bを割愛）。トレンチA～C及びDの北半は表土直下が地山となり、削平が激しい。Dの南半では旧地表であるⅢa層が残存している。EではⅢa層の下にⅣ層があり、旧来は起伏のある台地であったことが窺われる。F～Iでは、現表土下に厚さ90cm～1.7mの、地山ブロックを多く含む盛土（I b層）が認められた。I c層はしまりのない黒褐色土で、旧耕作土とみられる。Hの断面で顕著であるが、I c層上部に傾斜がみられ、盛土がなされる以前は傾斜地であったことが分かる。D・E・H・Iで確認された層厚10～20cmのⅢa層では遺物は出土せず、遺構も検出されないため本発掘調査は不要と判断した。図127はトレンチIのI c層出土土器で、確認調査で出土した遺物はこの2点のみである。1は縄文時代後期初頭の深鉢で頸部と胴部に細い隆帯が貼付けられている。2は網目状燃糸文が施された縄文時代後期の深鉢である。

なお、A～E区を設定した畑の耕作者の話では、この周辺は以前「ダンナシロ」と呼ばれており、戦時中から終戦後には広く畑として利用されていたようである。また、平成18年度に発掘調査した丘陵西側は「ウシロヤマ」と呼ばれる場所で、中居林地区の住民が畑として利用していたらしい。付近に古くから住む人びとには、本丘陵のいずれかに中居林氏の居城があったとする伝承が広く信じられているようで、調査中にも「堀は出ないか」などの問い合わせを幾度か頂いたが、先述のように遺構は発見できなかった。

第5節 調査のまとめ

1 調査成果の概要

平成19年度は8,600m²の本発掘調査と、46m²（対象面積は1,360m²）の確認調査が行われた。検出された遺構は、縄文時代早期末葉の焼土遺構2基（SN-9・16）、縄文時代後期初頭の竪穴住居跡3軒（SI-2・4・5）・土坑19基（SK-1・2・4・9～14・17・19・20A・20B・21～26）・焼土遺構11基（SN-1・2・4～8・12～15）・配石遺構1基・埋設土器1基、縄文時代と考えられるが詳細な時期は不明の土坑6基（SK-3・5～8・18）、弥生時代中期の竪穴住居跡2軒（SI-1・3）、時代不明の土坑2基（SK-15・16）・焼土遺構1基（SN-3）・ピット2基である。このほか、縄文時代後期初頭の捨て場がD区で2箇所（集中区3・4）確認された。

包含層出土遺物の主体は縄文時代後期初頭と弥生時代中期で、竪穴住居が営まれた時期と重なる。また、早稻田5類の時期に相当する縄文時代早期末葉の遺物が、遺物集中区3として調査した地点の下位で若干量出土した。この地点では居住施設は未発見ながら2基の焼土遺構を伴っており、小規模な集落が形成されていたと考えられる。今回の発掘調査では古代の遺構・遺物は発見されておらず、弥生時代遺構の土地利用の痕跡は中世まで途絶える。中世の遺構は未発見であるが、B区では永楽通寶や16世紀末頃の製品とみられる瀬戸焼の菊皿のほか、暦年較正で14～15世紀の年代が与えられた炭化米（出土地点は弥生時代中期の竪穴住居跡であるSI-3床面）など、少量の遺物が出土している。近世についても遺構は確認できていないが、B区を中心に17世紀後半から19世紀半ば（幕末期）までの陶磁器や、暦年較正で19世紀の年代が与えられた炭化オオムギ（出土地点は炭化米同様にSI-3床面）が出土した。明らかに明治期以降に下る陶磁器の出土量は少ない。なお、本年度の発掘調査を受けて、平成20年度以降の発掘調査対象面積は約10,000m²となった。

2 縄文時代後期初頭の集落跡と出土遺物

D区と呼称した丘陵頂部から東斜面にかけては、縄文時代後期初頭の遺構が分布する。第3節では炉跡を伴うものを住居跡とし、SI-2・4・5の3軒を確認した旨を述べたが、斜面に営まれた第21・25号土坑は平面が橢円形で規模も第2号竪穴住居跡に近似しており、竪穴住居跡に準ずる居住施設の可能性が高い。また、第1号焼土遺構は新旧2基の土器埋設炉であり、周辺で柱穴は未発見ながら同じ場所に炉を作り替えていたことから、ここにも居住施設があったと考えるのが自然と思われる。炉を伴うSI-2・4・5では、それぞれ土器埋設炉・土器片廻炉・土器片敷炉が床面中央または床面中央と壁を結ぶ線の中間付近に作られていた。平成18年度調査で発見された、同じく縄文時代後期初頭と考えられる丘陵西斜面の土坑群との関連は判然としないが、中居林遺跡D区では当該期に小型の竪穴住居（または炉を持たない竪穴遺構）と食糧貯蔵穴としてのプラスコ状土坑を主体とし、焼土遺構として確認した若干の屋外炉を伴う集落が営まれていたことが明らかとなった。居住施設と考えられるSI-2・4・5・SK-21・25・SN-1の配置状況をみるとSI-4・5が重複するのみで、その他は別々の場所に営まれており計画性は窺えないことから、集落規模は小さいものであったと考えられる。同集落では時として土器埋設遺構（SR-1）や配石遺構（第1号配石）が作られることもあり、赤色顔料の付着した台石（図115-9）の存在から、土器などに塗彩する赤色顔料の加工も行われていたようである。また、集落で使用され不要となった道具類は、集中区3・4と呼称した場所やAW-24グリッドなど、居住域の近くに形成された捨て場に廃棄されたものと考えられる。

遺構内及び捨て場出土土器は大木10式の可能性がある1点（SI-4堆積土出土；図84-1）を除き、十腰内I式以前に属するものである。県内の土器編年では牛ヶ沢（3）-沖附（2）-弥栄平（2）式（成田1989）や、上村-牛ヶ沢-葦窪-螢沢-馬立-薬師前式（鈴木2001）とされている部分に相当するが、今回の調査における出土遺物から各々の型式内容を明らかにするには至らなかった。

縄文時代後期初頭と考えられる遺構から出土した炭化物のうち3点の放射性炭素年代測定を行った結果、SI-4では $3,820 \pm 30$ yrBP、SK-21では $3,780 \pm 30$ yrBP、SK-25では $3,750 \pm 30$ yrBPの年代が得られている。この年代値は、縄文時代中期末葉の大木10式併行期でも新しい段階の八戸市南郷区田代遺跡で得られた4,080~3,820yrBP（青森県教育委員会2006b）や、本遺跡西斜面の06SK-30で得られた $3,870 \pm 40$ yrBP（青森県教育委員会2008）に後続するものである。SN-1・13及びSI-4の炉（SN-10）では採取した焼土からフローテーション法により炭化種実が回収され、SN-1でイネ・アワ、SN-10・13でアワがそれぞれ同定されている。後述する弥生時代のSI-3床面で出土したイネは放射性炭素年代測定の結果中世の年代を示しており、これら同定された穀物のすべてが縄文時代後期初頭に遡る資料とは言い切れないが、各々別地点に営まれた3遺構で共通してアワが確認された意義は大きく、縄文時代後期初頭におけるアワの利用は考えられてよいのではないだろうか。今後は炉内堆積土にとどまらず、炉の周囲や床面直上の堆積土を少量ずつ採取してフローテーション法により炭化種実を回収していく作業が必要である。

3 弥生時代中期前半の集落跡と出土遺物

八戸市内では弥生時代前期中葉の砂沢式期に是川中居・八幡の両遺跡で竪穴住居跡などが発見されている。前期後葉の馬場野II式期には牛ヶ沢（4）・風張（1）・田面木平（1）・根城跡・弥次郎窪・田

向冷水遺跡などで竪穴住居跡が発見されており、遺跡数は増加する。今回検出されたSI-1・3では、馬場野Ⅱ式期にみられない磨消縄文が施文された鉢（図55-4・59-5）を伴うことからそれに後続する弥生時代中期前半の大石平VI式（工藤2005）に併行する時期に位置づけられよう。当該期の集落跡は八戸市域ではこれまで明らかでなく、わずか2軒の竪穴住居跡が発見されただけとはいえ、本遺跡が県内の弥生時代研究の進展に果たす役割は大きい。

SI-1・3は平面が円形または楕円形を呈する点、斜面上方の壁沿いに壁柱が巡るが斜面下方では確認できない点、壁からやや中央に寄ったところに主柱穴らしきピットが数基確認できるという点で共通した構造を持つと考えられる。また、SI-3では床面中央付近に土器埋設炉が設置されている。馬場野Ⅱ式期の竪穴住居跡では周囲に石囲いを伴う土器埋設炉が床面中央に設置され、主柱穴は4基で壁柱を伴う周溝が円形または楕円形に巡り、中央の炉以外に地床炉が設置される例が多いことが指摘されている（八戸市教育委員会2006）。SI-1・3では周溝及び壁柱が住居跡外周を全周せず、土器埋設炉の周囲が石で囲われていたかどうか明瞭でないという違いはあるものの、平面が円形または楕円形の住居形態や床面中央に設置された炉、炉の周囲の主柱穴など住居構築にあたっての基本的な要素は前代から引き継がれているようである。なお、住居の部材と考えられるSI-3出土炭化材の樹種同定結果からは、建築材としてコナラ属コナラ節が主に利用されていたことが明らかとなった。

中期前半と考えられる土器群は、甕・壺・鉢・浅鉢（台付）・蓋で構成される。甕は頸部が強く屈曲し、口縁部が外反するものが多い。口頸部は有文・無文の両者があり、沈線などが施文される例が多い。有文土器には磨消縄文手法が用いられ、王字文に類似した文様（55-4）・長方形の区画文（59-5）・山形文（71-22・23）などが描かれる。このほか沈線による工字文系の文様（59-1・2、60-2・9・10など）は二枚橋式の系譜にあると考えられるが、これが中期に下る資料か否かは類例の増加を待つて判断する必要がある。また、図72-12の壺に描かれた錨形文は東北南部の中期中葉（舟形団式）に、図61-5の壺にみられる連繫菱形文は津軽地域の中期中葉（田舎館Ⅱ群）にそれぞれ特徴的な文様であり、本遺跡出土の中期前半の土器は概ね大石平VI式（工藤2005）に併行するものと思われるが、やや前後に幅を持つ一群であることを示唆する。

石器は石鏃・敲石などが出土しており縄文時代との明瞭な差異を見出し難いが、SI-3で出土した大型蛤刃石斧が注目される。また、両極剥片や石核を含む質の悪いチャートの剥片がBF-9グリッドで集中して出土しており、剥片石器に珪質頁岩以外の素材を用いようとした意図が窺われる。

SI-3の堆積土上位では、十和田b降下火山灰（To-b）が検出された。その降下時期はこれまで縄文時代晩期直後とされ（青森県立郷土館1988）、年代については松山文献（1983）に2200±100yrBPの値が引用されている。SI-3では、To-bより下層で出土した炭化材で2280~2180±20yrBPの値が得られており、火山灰直下の炭素年代は松山が引用した値と整合する。本遺跡の基本層序Ⅱ層に含まれるTo-bは少量の粒状軽石であるため、同竪穴住居跡への密な堆積は二次的なものとはいえ降下時期に近いことが推定される。これまでTo-bは縄文時代晩期末葉の包含層を覆うように検出されることが数例知られていたために、降下時期は縄文時代晩期末葉から弥生時代前期と考えられてきたが、SI-3での検出状況から弥生時代中期以降へ下方修正される可能性もあることを述べておきたい。なお、八戸市南郷区に所在する田代遺跡では、弥生時代中～後期の第45号竪穴住居跡を覆うようにTo-bが検出されている（青森県教育委員会2007）。

（岡本）

第5章 理化学分析

第1節 出土木炭の放射性炭素年代測定（AMS測定）

(株)加速器分析研究所

1 測定対象試料

中居林遺跡は、青森県八戸市大字中居林字中居林36-15（北緯 $40^{\circ}29'07''$ 、東経 $141^{\circ}29'50''$ ）に所在する。測定対象試料は、第3号竪穴住居跡の3層から出土した木炭4点（NAKAI-01～04：IAAA-71854～71857）、第3号竪穴住居跡ピット1の1層から出土した木炭（NAKAI-05：IAAA-71858）、第1号竪穴住居跡の4層から出土した木炭（NAKAI-06：IAAA-80660）、掘方底面付近から出土した木炭（NAKAI-07：IAAA-80661）、第4号竪穴住居跡土器片囲炉検出面から出土した木炭（NAKAI-08：IAAA-80662）、第25号土坑底面から出土した木炭（NAKAI-09：IAAA-80663）、第21号土坑の3層から出土した木炭（NAKAI-10：IAAA-80664）、合計10点である。

2 測定の意義

遺構が営まれた実年代を知る手掛かりを得る。

3 化学処理工程

- (1) メス・ピンセットを使い、根・土等の表面的な不純物を取り除く。
- (2) 酸処理、アルカリ処理、酸処理（AAA：Acid Alkali Acid）により内面的な不純物を取り除く。
最初の酸処理では1Nの塩酸（80°C）を用いて数時間処理する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。アルカリ処理では1Nの水酸化ナトリウム水溶液（80°C）を用いて数時間処理する。なお、AAA処理において、アルカリ濃度が1N未満の場合、表中にAaAと記載する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。最後の酸処理では1Nの塩酸（80°C）を用いて数時間処理した後、超純水で中性になるまで希釈し、90°Cで乾燥する。希釈の際には、遠心分離機を使用する。
- (3) 試料を酸化銅と共に石英管に詰め、真空下で封じ切り、500°Cで30分、850°Cで2時間加熱する。
- (4) 液体窒素とエタノール・ドライアイスの温度差を利用し、真空ラインで二酸化炭素（CO₂）を精製する。
- (5) 精製した二酸化炭素から鉄を触媒として炭素のみを抽出（水素で還元）し、グラファイトを作製する。
- (6) グラファイトを内径1mmのカソードに詰め、それをホイールにはめ込み、加速器に装着する。

4 測定方法

測定機器は、加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置を使用する。測定では、米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOx II）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

5 算出方法

- (1) 年代値の算出には、Libbyの半減期（5568年）を使用する（Stuiver and Polash 1977）。
- (2) ¹⁴C年代（Libby Age：yrBP）は、過去の大気中¹⁴C濃度が一定であったと仮定して測定され、

1950年を基準年(0yrBP)として遡る年代である。この値は、 $\delta^{13}\text{C}$ によって補正された値である。 ^{14}C 年代と誤差は、1桁目を四捨五入して10年単位で表示される。また、 ^{14}C 年代の誤差($\pm 1\sigma$)は、試料の ^{14}C 年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。

- (3) $\delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素の ^{13}C 濃度($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)を測定し、基準試料からのはずれを示した値である。同位体比は、いずれも基準値からのずれを千分偏差(‰)で表される。測定には質量分析計あるいは加速器を用いる。加速器により $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ を測定した場合には表中に(AMS)と注記する。
- (4) pMC(percent Modern Carbon)は、標準現代炭素に対する試料炭素の ^{14}C 濃度の割合である。
- (5) 暦年較正年代とは、年代が既知の試料の ^{14}C 濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の ^{14}C 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、 ^{14}C 年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1標準偏差($1\sigma=68.2\%$)あるいは2標準偏差($2\sigma=95.4\%$)で表示される。暦年較正プログラムに入力される値は、下一桁を四捨五入しない ^{14}C 年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal04データベース(Reimer et al 2004)を用い、OxCalv4.0較正プログラム(Bronk Ramsey 1995 Bronk Ramsey 2001 Bronk Ramsey, van der Plicht and Weninger 2001)を使用した。

6 測定結果

第3号竪穴住居跡の3層から出土した木炭の ^{14}C 年代は、 $2180 \pm 30\text{yrBP}$ (NAKAI-01:IAAA-71854)、 $2210 \pm 30\text{yrBP}$ (NAKAI-02:IAAA-71855)、 $2280 \pm 30\text{yrBP}$ (NAKAI-03:IAAA-71856)、 $2250 \pm 30\text{yrBP}$ (NAKAI-04:IAAA-71857)である。第3号竪穴住居跡ピット1から出土した木炭は $2270 \pm 30\text{yrBP}$ (NAKAI-05:IAAA-71858)である。また、第1号竪穴住居跡の4層から出土した木炭の ^{14}C 年代は、 $2160 \pm 30\text{yrBP}$ 、掘方底面付近から出土した木炭が $2150 \pm 30\text{yrBP}$ であった。同一遺構から出土しており、その年代はほぼ一致する。第4号竪穴住居跡土器窯炉の検出面から出土した木炭の ^{14}C 年代は $3820 \pm 30\text{yrBP}$ 、第25号土坑底面から出土した木炭が $3750 \pm 30\text{yrBP}$ 、第21号土坑の3層から出土した木炭が $3780 \pm 30\text{yrBP}$ であった。これらは近似した年代値である。

炭素含有率は全ての試料が65%前後であり、化学処理および測定内容にも問題は無く、妥当な年代と考えられる。

参考文献

- Stuiver M. and Polash H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data, *Radiocarbon* 19, 355–363
- Bronk Ramsey C. 1995 Radiocarbon calibration and analysis of stratigraphy: the OxCal Program, *Radiocarbon* 37 (2), 425–430
- Bronk Ramsey C. 2001 Development of the Radiocarbon Program OxCal, *Radiocarbon* 43 (2A), 355–363
- Bronk Ramsey C., van der Plicht J. and Weninger B. 2001 'Wiggle Matching' radiocarbon dates, *Radiocarbon* 43 (2A), 381–389
- Reimer, P.J. et al. 2004 IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0–26cal kyr BP, *Radiocarbon* 46, 1029–1058